

ウルトラマンヒーロー

ホルンでござーます

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウルトラマンメビウスが地球に現れ30年……

ある少年はヒーローに憧れていた……

そして、自分も人を守るヒーローに、弱い自分もなりたかった……

月日は経ち、少年は青年になった

ヒーローになることは叶わぬ夢だと、青年は平凡な毎日を過ごしていた……

夢を諦めていた青年の名前は日野護

そんな青年の前に青い身体のウルトラマンが現れる!!

護はすべてを護る、ヒーローへとなれるのか……？

これはヒーローになることに憧れた、青い身体のウルトラマン……

朝日ヒロと……

同じくヒーローになることを憧れた青年……日野護……

2人の物語である

目次

序章―ウルトラマンヒーロー―

ヒーローとの出会い―負思念体ベムラー登場― | 1

獲物と青―負思念体ツインテール・古代怪獣グドン登場― | 9

優しき青1―月光怪獣エレキング登場― | 16

優しき青2―月光怪獣エレキング登場― | 23

登場人物や各種設定 | 30

黒い感情1―負思念集合体サイコダーク登場― | 33

黒い感情2―負思念体サイコダーク登場― | 38

大地と海の攻防1―地底怪獣グモース登場― | 43

大地と海の攻防2―地底怪獣グモース登場― | 46

父親の宝1―負思念体ゴモラ登場― | 53

父親の宝2―負思念体ゴモラ登場― | 58

光の国―負思念体サイコダーク・負思念体サイコダークII登場―

66

復讐の捕食者1―再生同化怪獣ボガール・古代怪獣グドン登場―

72

復讐の捕食者2―再生同化怪獣ボガール登場― | 79

復讐の捕食者3―再生同化怪獣ボガール登場― | 84

G U Y Sよ、誇りを胸に1―マケット怪獣デットン?・負思念体キ

ングジョー登場― | 89

説明回―読まなくても問題はありません― | 93

G U Y Sよ、誇りを胸に2―マケット怪獣デットン?・負思念体キ

ングジョー登場― | 95

人が大好きな怪獣1―巨大犬怪獣ドグファン登場― | 101

	人が大好きな怪獣2―巨大犬怪獣ドグファン登場―	104
	愛と愛1―負思念体ラゴン・再生同化怪獣ボガール登場―	112
	愛と愛2―負思念体ラゴン・再生同化怪獣ボガール登場―	122
132	思い出のヒーロー／メビウス1―負思念体ティノゾール登場―	
136	思い出のヒーロー／メビウス2―負思念体ティノゾール登場―	
141	思い出のヒーロー／メビウス3―負思念体ティノゾール登場―	
	少年はウルトラマン1―負思念体ニセウルトラマンヒーロー登場	145
	少年はウルトラマン2―負思念体ニセウルトラマンヒーロー登場	153
	少年はウルトラマン3―負思念体ニセウルトラマンヒーロー登場	159
	大研究!! GUY'Sの今とこれからの敵!!	168
	炎に忍ぶ者達1―負思念体ジェロニモン・宇宙忍者バルタン星人登	173
場	炎に忍ぶ者達2―負思念体ジェロニモン・宇宙忍者バルタン星人登	176
場	炎に忍ぶ者達3―負思念体ジェロニモン・宇宙忍者バルタン星人登	179
186	決断と別れ1―ラビオル星人・再生同化怪獣ボガール登場―	
	決断と別れ2―ラビオル星人・再生同化怪獣ボガール登場―	

前に進む者たち1

200

前に進む者たち2

204

第1章―人とウルトラマン―

新たな翼と、新たなヒーロー1―再生同化怪獣ボガール・再生同化

怪獣ボガールモンス登場―

211

新たな翼と、新たなヒーロー2―再生同化怪獣ボガール・再生同化

怪獣ボガールモンス登場―

218

いろいろな説明

225

大研究その2!! G U Y Sとウルトラマンヒーローに迫る!! 1―負

思念集合体サイコダーク登場―

230

大研究その2!! G U Y Sとウルトラマンヒーローに迫る!! 2―負

思念集合体サイコダーク登場―

235

大研究その2!! G U Y Sとウルトラマンヒーローに迫る!! 3―負

思念集合体サイコダーク登場―

239

G U Y Sの怪獣博士1―透明怪獣ネロンガ登場―

245

G U Y Sの怪獣博士2―透明怪獣ネロンガ登場―

251

青天のドックファイト―負思念体アリゲラ・超空洞人ヴオイド人登

場―

257

晴天のドッグファイト2―負思念体アリゲラ・超空洞人ヴオイド人

登場―

261

青天のドッグファイト3―負思念体アリゲラ・超空洞人ヴオイド人

登場―

265

アメイジングトリプルを撃て1―負思念体デイガル―グ登場―

	アメイジングトリプルを撃て2―負思念体デイガルーグ登場―	
279	アメイジングトリプルを撃て3―負思念体デイガルーグ搭乗―	
286	護のジレンマ1―不思念体デイガルーグ登場―	296
	護のジレンマ2―負思念体デイガルーグ登場―	304
	護のジレンマ3―負思念体デイガルーグ登場―	312
	救いの後で1―負思念体インペライザー・負思念機械生命体ジ―	324
	エンド登場―	
	救いの後で2―負思念体インペライザー・負思念機械生命体ジ―	329
	エンド登場―	
	救いの後で3―負思念体インペライザー・負思念機械生命体ジ―	335
	エンド登場―	
	最悪の日1―負思念機械生命体ジ―	342
	最悪の日2―負思念機械生命体ジ―	348
	最悪の日3―負思念機械生命体ジ―	352
	全力の激闘1―負思念機械生命体ジ―	357
	全力の激闘2―負思念機械生命体ジ―	363
	全力の激闘3―負思念機械生命体ジ―	369
	超空洞の宇宙人―負思念体ベムスター・超空洞人ヴォイド人登場―	376
	超空洞の宇宙人―負思念体ベムスター・超空洞人ヴォイド人登場―	381

序章―ウルトラマンヒーロー―
ヒーローとの出会い―負思念体ベムラー登場―

「また落ちた……」

履歴書と不採用通知を片手に、青年はため息をついた。

「やっぱり、今じゃ資格として役には立たないのかなあ……」

青年のもう片手にはGUYSLICENSEカードと呼ばれるものがあつた。

青年はベッドに横になるとすぐに眠りに入った。

夢の中、子供の頃の青年は、子供たちに囲まれ虐められていた。
殴り、蹴られ、髪を引っ張られている。

「助けて!!ウルトラマン!!」

助けを呼ぶと、大きな巨人、ウルトラマンメビウスがやってきた。
メビウスはいじめっ子たちをその手で払うと少年を手に乗せる。

『大丈夫だったかい?』

夢の中のメビウスは少年へそう語りかけた。

「うん!ありがとうウルトラマンメビウス!」

少年の笑顔には曇りはなかった。

そこで青年の夢が覚めた。

「はあ……嫌な夢だな……、助けになんて来ないのにな……」

ウルトラマンメビウスが最後に地球に来たのは30年前、

この時、青年はまだ生まれてすらいなかった。

ウルトラマンメビウスを生まれた後、テレビで知り、一度会ってみ
たい。

ウルトラマンのようにヒーローになつてみたい……。

子供の時、この青年は思っていた。

しかし、その30年で人々の意識は変わっていた。

ウルトラマンみたいなヒーローになるのが夢です、と小学校の自己紹介で言った途端、そのクラスの男の子たちは彼を虐めたのである。

『まだウルトラマンなんて言ってるよ』

最初のうちは言葉で、そのうち言葉からただの暴力に変わった。何度も助けてほしいと願った。

一番好きなウルトラマン、ウルトラマンメビウスに……。

しかし、ウルトラマンは現れなかった。

時は流れ、少年は大人になった。

青年は諦めきれず、大人になってもウルトラマンの様なヒーローになる夢は捨てられなかった。

その夢を叶える為に、必死にGUY Sのライセンスは取っていたが、

30年前からGUY SのライセンスのみではGUY Sに入ること難しくなっていた。

今となつては、アルバイトをしながら就職先を探している毎日である。

「ヒーローなんて……もう、要らないのかなあ」

コップの水を飲み干して、ため息をついた時だった。

凄まじい爆音が外から響き、机に置いたコップが床に落ち、割れる。

「な、なんだよ!!」

地震の揺れとは違うことを察した青年は、窓の外を見る。

そこには一体どこから現れたのか、怪獣が居た。

「べ、ベムラー!?なんでこんな所に!!……違う!!逃げなきゃ!!」

青年は防災バックとスマートフォンを持って外に飛び出す。

アパートの階段を必死に降りようとするが、街の惨状に足が止まった。街の道路は逃げ惑う人々で一杯だったのだ。

悲鳴が飛び交う中、青年はベムラーを見る。

ベムラーは逃げる人々に反応してか、向かって歩き出していた。

「不味くないかこれ!!」

ベムラーが自分達に狙いを定めていることを知った青年は、急いで逃げようとしたが、不意に目がある場所で止まった。

それはベムラーが歩いている近くの公園、そこには泣いてうずくまってる子供が居た。

「だ、誰も近くにいらないのか!?なんで!？」

必死に公園の周りを見る青年だが、青年の周りにいる人達は子供に気づくことなく逃がっている。

「お、俺しか気づいてないのか……?畜生……!!」

全力で階段を下りる、最後の段を踏み外し転げまわるが、痛みを無視し、公園に急ぐ。

ベムラーから逃げてくる人たちの流れに逆らい走る青年は、色んな人たちとぶつかりながら前に進む。

何とか公園にたどり着いた青年は、子供に駆け寄った。

「大丈夫か!!早く逃げるよ!!」

しかし、その子供は青年の声に反応しない。

「どうしたんだ!!早くいかないと!!あいつが!!」

しゃがんで、その子の顔を見ると……、その子の顔が黒い靄で覆われていることが分かった。

驚いて後ろに倒れこむ青年。

「お兄ちゃんも私の顔を変って言うの?」

その黒い靄が掛かった女の子は青年に近づく。

青年はおかしくなりそうだった、すぐそばには怪獣ベムラーが、目の前には黒い靄がかかった女の子。

どうすれば良いか分からず、声を掛ける。

「君には見えないのか!!あの怪獣が!!」

「怪獣?あれはウルトラマンだよ!私を虐める子を倒してくれるの!」

「何言って……あれは怪獣ベムラーだ!!君はなんなんだ!!なんで顔が見えないんだ!!」

女の子は今度は答えず、その場でまたうずくまってしまった。

「ああ!!もう!!」

青年は女の子を抱えると、人々が逃げる方向とは違う方へ逃げ出

す。

しかし、それに気付いたのか、ベムラーが何故か大勢の人々ではなく、青年が走っていく方向に進路を向けた。

青年もそれに気付き、逃げる足を早める。

その時、ベムラーは青年に向けて口を開くと、光が集まる。

光線が来る……、青年はそのことに気付き、逃げられないと悟った。

そして、女の子を庇うように身を屈め叫んだ。

「ウルトラマン!!」

爆発音が響き、死を悟った青年だったが、いつまでも痛みが来ないことを不思議に思い、ベムラーの居た方を見る。

そこには子供の頃、呼んでも来なかつたウルトラマンが……、青い巨人が居た。

「ウルトラマン……ヒーローが、来てくれた……のか!!」

安心と感動も束の間、現状を理解した青年は女の子を抱え、走り出す。

『ティアツ!!』

青いウルトラマンと怪獣ベムラーが対峙する。

ベムラーが口から光線を放つと、ウルトラマンはそれを素早い動きで避けた。

当然、光線はウルトラマンの後ろにある建物……。

青年の走っている直ぐ横のビルに命中してしまった。

光線により破壊されたビルの破片が、走っていた青年と女の子を襲う。

「あああああッ!!」

叫び声と共に、破片が地面に落ち、砕けちった。

破片が落ち切り、奇跡的に自分が無傷であること、

抱えていた女の子も無傷であることに安堵した青年。

青年の背後で戦っていたウルトラマンを見ると、ベムラーの攻撃を避け続けている。

避ける度に、建物が壊れていき、人々の悲鳴も聞こえた。

「クソ……何がウルトラマンだ!!何がヒーローだ!!」

青年は叫んだ。

「ふぎげんなよ!!お前はヒーローなんだろ!!だったらヒーローらしく人を救えよ!!」

不意に、ウルトラマンが青年の方へ振り返った。

目が合う理由はないはずだが、青年とウルトラマンはお互いを見つ合っていた。

まるで時間が止まったかの様な静寂の中、ウルトラマンの右手が青年へ伸びてくる。

すると、ウルトラマンは青年を右手でつかんだ。

不可解な行動に、その場に女の子を置いてしまった青年だったが、自分の置かれた状況に気付き、声を上げる。

「何すんだよ!!放せえ!!」

ジタバタと暴れる青年だったが、その力は人と巨人ではあまりにも弱かった。

胸の光り輝く球体へと、青年を掴んだ右手を押し付けると、ウルトラマンは光り輝いた。

『な、なんだ?何が?』

青年が目を開けると、目の前に自分と同じサイズのベムラーが現れていた。

『なんだよこれ!?!うわ高っ!?!』

下を見ると、先程の公園が足元にあった。

青年は周りの物が小さく、いや自身の体が大きくなったことに気付いた。

そして、ビルに反射した自身の姿が、先程のウルトラマンが赤く変わった姿をしていることに気付いた。

『戦え……人々のために、私を知るものとして……』

『た、戦え?』

青年の頭で、誰かの声が響く。

その言葉の意味に疑問を思っていると、ベムラーが青年へ向かい、走って来ていた。

『わ、わかったよ!!俺が!!ヒーローになってやる!!俺が守ってやる!!』
青年は、向かってくるベムラーに向けて構えをとった。

右手を握りしめ、左手を平手に開き、高々にあげた。

それは自然に取った構えであった、青年が子供の頃、テレビで見て真似たウルトラマンメビウスの構えである。

『サアーン!!』

激しい格闘戦が繰り広げられる。

その光景は30年前、ウルトラマンメビウスの戦いを思わせる戦いだった。

赤く光る右手をベムラーに叩き込み、終始圧倒を続けるが、1分持たずに胸のカラータイマーが赤く点滅する。

『なんでだ!?まだ3分も経ってないはずじゃ!?!』

青年は過去に地球に現れたウルトラマンが、戦える時間が短いということを知っていた。

しかし、あまりに短すぎる。

その動揺の隙をベムラーが見逃さず、頭突きをする仕掛けて来る。頭突きで後ろによるめくが、その後も、何度も頭突きをしてくるベムラー。

青年が何かに気付き後ろを見ると、あの女の子が、ウルトラマンとなった青年を見つめ、立っていた。

もう顔にはあの靄はなく、その顔には目の前の現実恐怖した表情があった。

その表情を見た青年はベムラーへと視線を戻すと、自分を鼓舞した。

『負けられるか!!あの日から夢見たヒーローに!!』

右手が一際煌きを起こす。

その拳をベムラーの体へ叩きつけると、その巨体を大きく吹き飛ばした。

『憧れのヒーローになったんだ!!負けるもんか!!』

腰の両側に握り拳を引き、その後、右腕だけ右に伸ばした。右拳に赤い光の渦が小さく溜まっていくと、そこから過去現れたウルトラマン達が取ったスペシウム光線の形に構えを取った。赤い光線が右手から送り、ベムラーの胴体を貫く。ベムラーはビルの間へと、体を横に倒し、爆発した。『倒した……やったんだ俺、俺……!!』

青年が感動していると、意識が朦朧になってくる。遂にはその場に倒れる感覚の後、青年の意識は途切れた。

目が覚めるといつものベットに寝ていた青年。

「夢……？」

ぽつりとつぶやくが、青年はその身の震えが歓喜に満ちていたことに気付く。

「そうだ!!」

青年は外に出た、既に日が落ち、少ない街灯と救助隊の物だろうサーチライトで照らされた被害の現場が残っていた。

ベムラーを倒した歓喜の気持ちと、この光景が、先程のことが夢ではないことの何よりの証拠であった。

「あ……」

改めて外の状況に悲しみを覚えたが、それ以上に自分が人々を守ったこと、

人々を守ったことに喜びが青年の中にはあった。

青年は自分のズボンのポケットをあさり、中にあるものを取り出した

「夢は、叶えられるんだ!!」

日野 護（ひのまもる）青年の名前の書かれたGUY Sライセンス

カードを月の光にかざして。

獲物と青―負思念体ツインテール・古代怪獣グドン登場―

ウルトラマンとベムラー戦った日から、一週間が経過していた。被害を受けたビルや道路は未だに立ち入り禁止になっており、未だ爪痕は深い。

護の住んでいたアパートも基礎の部分に損傷があり、立ち退きが必要になっていた。

護はいつものようにベッドに横になっていた。

元より物の少ない部屋で、立ち退きを言われた日にはもう部屋の片付けを終わらせていた。

護はベッドに投げ出した手の中のスマートフォン画面を見る。

『G U Y S 部隊員特別募集のお知らせ』と書かれているホームページの画面だった。

「通常は年に一回のG U Y Sクルーの募集ですが、怪獣の出現に伴い、急遽G U Y Sクルーの募集をいたします。」

しかし、今回募集するのはG U Y S ジャパンのみとなっています。

G U Y S オーシャン、G U Y S スペーシー、G U Y S アンタクテイカは通常通りの募集日時となっています。

「ご注意ください……来週の金曜日か……」

護はこのG U Y Sジャパンのクルー募集に行こうと考えていた。

しかし、護は以前にもG U Y Sジャパンに入隊しようとしていたが、そのすべてで不採用になっていた。

では何故、今回の募集で行こうと思いつたのか……。

それは、自分がウルトラマンとなって怪獣を倒したことで、自信を取り戻したためである。

ウルトラマンにもうなれずとも、G U Y Sクルーになり、人を守ろうと考えていた。

「でも、怪獣なんて現れないのが一番だよな……」

時を同じくして、小学生の男の子2人がとある学校の校舎裏で言い争っていた。

「どうして助けてくれなかったんだよ!!」

「僕には関係ないだろ!!」

「友達だろ!!助けてくれてもいいじゃん!!」

「知らないよ!!」

「もういいよ!!お前なんか友達じゃないからな!!」

人であるなら珍しくもない喧嘩の風景であった。

しかし、その光景の中で、似つかわしくない物が現れた。

それは黒い霧だった、黒い霧は男の子たちをずっと上から見ていたのだ。

霧は救いを求めていた男の子の顔に張り付く。

異質な物を目の前で見てしまったもう1人の男の子は、驚きで尻もちをついてしまう。

霧の奥からくぐもった声で、男の子は言った。

「ウルトラマン……こいつを……」

最後の言葉は目の前の男の子には聞こえなかった。

それと同時に、学校に巨大な霧が現れ、1つの形を取った。

寝ていた護は、周囲の悲鳴で目覚めた。

悲鳴の中の『怪獣』その一言に体が反射し飛び起きたのである。

家を飛び出ると、周りではこの前ほどではなかったが、人々が道路を埋め尽くしていた。

人の数が以前より少ないのは、ベムラーの被害でこの周辺からは、

一定数の人が別の場所へ避難していたからだ。

護は駆けていく人々の逆を見る、遠くではその巨体がある場所で存在を示していた。

「あれは……ツインテールか!!……まで、あそこって小学校じゃ……」
ツインテールの巨体のせいで感覚が掴めない護だったが、頭の中にある地図上では、ツインテールのいる場所は小学校であると察していた。

そのことに気付くと、護の足はツインテールの元へと走りだしていった。

『G U Y S は 一 体 何 を し て る ん だ !!』
『 役 立 た ず !! 』

護が学校に向かっていく最中、その様な言葉がたびたび聞こえた。以前、ベムラーが現れたとき、G U Y S はベムラーの存在を通報があるまで感知できなかったと会見をした。

どこの国よりも最新鋭のレーダーなどを持っているはずのG U Y S が、怪獣の存在を確認できなかったとはメディアや政府も考えられず、レーダーの故障が疑われていた。

今もツインテールが表れているにも関わらず、まだ出動しないということは今回も現れない可能性がある。

思ったよりも危険な状況だと護は考えていた。

走っていると、逃げ惑う人々のなかに、この前助けた女の子が転んで倒れたのが見えた。

「大丈夫か!？」

駆け寄る護だったが、おかしいことに距離が縮まらない。

それどころか離れていつている。

止まっている女の子へ駆けているはずなのに、離れている現実には恐怖する。

「なんでだ!？」

そして突如、自分がまるで空に浮いているような感覚に襲われる。

地面を見ると、それは浮遊感などではなく、本当に飛んでいた。

「え、なに? 怖い! 怖い! 怖い! 怖い! 怖い!」

みるみるうちに護と女の子がいた地面と遠ざかっていく。
高いビルの中程まで浮くと、青い色をした巨大な手に掴まれる。
護はこの光景に見覚えがあった。

首だけを後ろに向けるとあの青いウルトラマンだった。

「ウルトラマン……また驚掴み……う？」

ウルトラマンはゆっくり頷いた。

「あああああああッ!!」

護が胸の球体へ押し付けられ、ウルトラマンの中に吸収される。

護が目を開けると、自分の体がウルトラマンになっていた。

以前になった、左手だけが青の赤いウルトラマンだ。

『ハッ!?!』

護がツインテールに気付く、護の存在に気付き、何らかの行動を
するかと思われたが、ツインテールは何かを探すように学校から動かな
い。

護はその場で跳躍し、体を回転させツインテールの側に着地する。
しかし。その瞬間、ツインテールの尻尾の鞭攻撃が飛んでくる。

ツインテールの尻尾による素早い攻撃のせいで、拳を喰らわせる動
きを止められてしまう。

護は素早く後方にバク転で距離を取った。

ツインテールは尻尾を振り回し、護のことを威嚇をしていた。

護にはその尻尾を避けてツインテールに攻撃する手段が無かった。

『このままじゃ……!』

攻めあぐねていると、護の頭に声が響いた。

『僕に任せてくれないか?』

ツインテールの動きを見つつ、響いた声の主を考える。

『変わってくれ、僕に……』

もう1度、声が響いた。

『わかった……お前は……ウルトラマンか!!』

護は今の状況から、1番あり得る答えを見つけた。
ウルトラマンは言葉も使える、それを護は知った。

護は腰の両側に握り拳を引き、左腕だけ左に伸ばした。

青い左手が、青い光の渦を起こし、体に刻むように色が変わる。

それは左手が青く赤い体のウルトラマンではなく、対称の色の姿であった。

そのウルトラマンは青……しかし、右手だけが赤いウルトラマンであった。

『ティアツ!!』

青のウルトラマンが構えを取る、その構えはウルトラマンメビウスに酷似していた。

ウルトラマンの両手から青い渦が広がり、ツインテールに滑りながら近づく。

ツインテールの尻尾の届かない低さから近づき、ツインテールの頭に滑りながら蹴りを入れる。

ツインテールはひっくり返り、簡単に行動不能になってしまった。

青いウルトラマンは倒れているツインテールに攻撃を行おうと、両手を光らせ、光線を放とうとするが、背中から鞭が飛んできた。

しかし、それは目の前のツインテールの尻尾ではない。

地中から伸びていた白い鞭だった。

白い鞭が出てきた地面が盛り上がり、足を取られた青いウルトラマンはうつ伏せに倒れる。

地面から出てきたのは白い体に黒い斑点のような模様をした怪獣、グドンだった。

『グドン!?まさか、ツインテールを……!!』

『二体……!!しかも強そう……!!』

『ウルトラマン!!気を付けて!!』

『……!!』

護がウルトラマンへ警戒するよう言うが……その時、ウルトラマンの姿が赤く変わった。

そう、護がウルトラマンとしての身体に変わったのだ。

『えっ？』

突然のことに驚き、自分の状況を確認する護だったが、その隙を突かれ、グドンの両腕の鞭で叩かれ、その場に倒れてしまう。

そして、ダメージからか、胸のカラータイマーが赤く点滅し始める。護は何か立ち上がるうとするが、立ち上がる前にグドンの尻尾による一撃が背中に落とされる。

もはや、立ち上がる気力すらなくなったとき、グドンは護を無視しツインテールへ向かって歩き始めた。

しかし、グドンはツインテールの目の前にまで来ると、突如興味を無くしたかのように踵を返し、回転しながら地面に潜って戻って行った。

しかし、今度はツインテールがその巨体を飛びあがらせ、護の背中に飛び乗る。

何度も背中で飛び跳ね、護の体力を奪っていく。

もはやこれまでかと護が思った瞬間。

何かの音がしたと思うと、ツインテールの背の部分に何か爆ぜた。

護が上空を見ると、二機の戦闘機が飛んでいるのがわかった。

GYUSの戦闘機、オオルリとレッドスパロウだ。

再度、二機から攻撃を受けたツインテールは横に倒れる。

その隙にローリングでツインテールから距離を取る護。

護は腰の両側に握り拳を引き、右腕を右に伸ばす。

右手に赤い光の渦が小さく溜まっていく、そしてその渦をまるで野球のピッチャーのように相手に投げる。

赤い渦のボールがツインテールにあたり、ツインテールはそのまま倒れ爆発した。

護は苦戦しながらも怪獣との勝負に勝利した。

護のウルトラマンである身体が光り輝き、その光が無くなると、そこにはウルトラマンはいなかった。

『ウルトラマンは消失、相手の怪獣は爆発した、これより帰還する』
レッドスパロウに乗っているGYUSクルー、篠崎力（しのぎきつ

とむ）は自分の隊長である橘薫（たちばななおる）に報告した。

『了解、後の対処はほかの人員がやる、気をつけて帰って来い』

『GIG!』

通信が切れた作戦室で、橘は自身のコンピュータのコンソールを操作した。

「さて、来るのだろうか……？君は……？」

そこにはウルトラマンから人間に戻る瞬間の日野護の映像が映っていた。

優しき青1―月光怪獣エレキング登場―

護は大学の入学式以来のスーツに身を包み、とある会場まで来ていた

看板にはG U Y S ジャパン入隊会場と書かれていた

護はG U Y Sに入るためにここに来たのだった

すでに会場には沢山の人の列が出来ていた

護もその列に入ろうとしたが、G U Y Sの制服を着ている女性に止められた

「え、なんですか?」

「えっと、貴方は開発班に入りたいんですか?」

よく見てみると、列の一番前に開発班と書かれている

「あ、えっと……戦闘とか実戦班の列は?」

「案内しますよ、こちらです」

その女性に連れられ、会場の中を通る

すると、人気のない通路にやってきた

「あの、戦闘班の会場は?」

「はいよ」

周りを見回すが、部屋すらなく、通路だけである

「あの、どういう……」

瞬間、護の右頬に衝撃が走る

護が殴られたと判断したのは床に倒れてから2秒ほどした時だった

「あら、吃驚するほど弱くないかしら」

「い、いきなりなんです!?殴るなんて!!」

「今まで確認された怪獣や宇宙人には、人の大きさのものもいるのよ?」

クルーの中でも一番弱い私を倒せるぐらいじゃないと」

「くそ!!なんでこんな……!!」

護は右拳を振るが簡単にいなされる

「私が女性だからって手加減してない?イラつくんですけど」

腹に膝蹴り2発、右左と交互に拳を食らう

「ほらほら、G U Y Sに入りたいんでしょ？私を倒してみなさいよ」

護は力の入らない膝を手をつきながらも立ち上がる

「ああああああああ!!サアーツ!!」

渾身の力を込めた筈の拳は女性に簡単にいなされ、顔にカウンターの裏拳が当たる

しかし、護は女性の右腕を掴んで抱きかかえた

「くっ、離しなさい!!」

容赦なく右膝が護の背中に当たり、追撃に左肘による攻撃も加わった

「殴れないん……!!だったら、殴らず……勝てばいい……!!」

「だったら!!」

一発、二発……十発、二十と背中に攻撃を当てるが、護は腕を放さなかった

「はあ……!!はあ……!!いい加減に!!」

もう一発、左肘を打ち込もうとした時

「そこまで!!」

男性の声が通路に響いた

女性は今まで続けていた攻撃をやめ、護も腕を放し、床に倒れこんだ

「隊長……、私はまだやられてません!!」

「いいんだよ、力なんて後から付いてくるものさ」

力よりも大切なのは心!!いつも言ってるだろ?」

女性は男性に対し一瞥をして、通路を進んでいった

「いやあ、すまないね」

彼女はいろいろ気難しいんだ、ようこそG U Y Sへ、日野護くん」

男性が倒れている護に手を差し出し、護を立ち上がらせる

「……あれ?なんでおれの名前を?」

「さあ?何でだろうね?私は橘薫、G U Y S日本の隊長だ」

薫は護と握手を交わした

「え？GUY Sの基地って、ここがですか？」

「うん、前のGUY Sジャンプの基地だと目立ちすぎたのだからこのドームの地下に基地を作っている、だから彼女が言ったことも間違っているんじゃないんだよ？」

二人が歩いていると、一つのエレベーターの前まで来た
「ここが入口だ」

エレベーターを開かせるとそのまま地下へ、十秒後には目的地に着いた

扉が開かれ、大きな部屋が出てきた

「ようこそ私たちの帰る家へ」

護が見渡すと、さっきの女性が腕を組みながらカップの飲み物を飲んでいる

女性は護をみるとすぐに顔をそむけた

「集合ー」

薫が集合をかけると部屋にいた全員が集まってきた

男性が2人、女性が2人、そして薫と護が今この場にいる

「紹介しよう、いちばん左から篠崎力、うちのエースパイロットだ」

「篠崎だ、よろしく！乗る機体はレッドスパロウだ」

「その右にいるのが垣山真司（かきやましんじ）」

「垣山真司、こう見えても一児の父でね、君たちよりか人生経験が豊富だから、

何か悩みがあったら相談してくれよ？」

「次が三原愛（みはらあい）、オオルリのパイロットだ」

「よろしくー」

「最後に、さつき君と組合をした屋久島だ」

「……屋久島朱里（やくしまじゆり）、GUY Sに入るからには最低でも私を倒せるくらいにはなってるね」

それぞれと握手を交わす

「屋久島さん、いつかは倒します」

最後に屋久島と握手する時に護はそういった

瞬間、握られてた手が強く握られた

「痛たたたたたたたたッ!!」

「ははははは、元気でよろしい

早速だが、護君には新型の兵器に乗ってもらおうと思うのだが」

その時だった

部屋に取り付けてあるランプが点灯し、警報が流れる

三原がコンピュータのコンソールを叩き、情報を伝える

「エリアJ-2に異常熱源!!」

「モニターに出力」

「G I G!!」

部屋に取り付けてある大型モニターに日本地図が現れ、東京の上部が拡大される

「アナライズ」

「アナライズ!!映像でます!!」

そこには建物を倒しながら進む怪獣エレキングの姿があった

「今回はレーザーに映ったか……」

「怪獣はレジストコード、エレキング!これは、電力発電所に向かっているっ!」

モニターには縮小された地図に進路予想図が出ていた

主な建物の中には確かに電力発電所が存在する

「狙いはどうであれ、このままだと被害が拡散する

G U Y S !! s a i l l y g o !!」

『G I G!!』

全員がエレベーターとは反対側の扉に走り出て行った

「護くん君もだよ」

「え、でもあの二機の搭乗員数は」

「返事は!!」

「G、G I G!!」

護も遅れて部屋を出て行った

「ふう、隊長というのもいろいろ難しいな」

橘はそういうと自分のデスクに置いてあるふやけてしまっている

シリアルを食べ始めた

しかし、エレベーターのほうからノックの音が聞こえる

エレベーターはそのまま扉が開き、中が見えるようになった

「君は？」

「ここに来た人を知りませんか？僕、その人の所に行かなきゃならないんです」

「……どうやってはいってきたんだ？電子ロックがあつたはず……」

「あの、ここに来てるはずなんですけど……あ！スーツを着てた人です！」

「君は……一体……」

「なんですかこれは」

「何って車だよ」

護はオオルリ、レッドスパロウのある整備庫に来ていたが、その両方のおどちらでもなく、

四人に背中を押され、目の前の車の前に立たされた

「ナンダって名前の新兵器だ、強いぞ？」

「強いとか以前に車ですよ!?!戦闘機じゃないんですか!?!」

「あつちはおれたちが乗るんだ、新隊員はこつちを乗ってな、落ちねえからよ」

「じゃあ、真司さん、私たちオオルリでスタンバイしますからね」

「ああ、わかった……たくつ、車に乗って走るだけだろ?簡単だよ

力、乗せてやれ」

「わかりましたお父さん」

「冗談でもお父さんって呼ぶのはやめろよ、本当だけどさ」

「そういい、護を運転席にまで押す

「ちゃんとベルと閉めろよ」

ボタンと扉が閉められ、篠崎と垣山が離れていく

「…………くそ、やってやるよ!!車で!!」

『こちら愛、オオルリのドッキング準備完了』

『レッドスパロウ、了解』

『ドッキング』

オオルリ、レッドスパロウがドッキングをする、オオルリの後方が二つに分かれ、

レッドスパロウの前方、そして左右にくつつく、その姿はこの状態の名前のモデルのようであった

『ケツアール!!テイクオフ!!』

二機分の推力で爆発的な速度で空へ飛び立っていった

『こちらナンダ!!俺も出ます!!』

『了解、ゲートBから出る』

『行くぞ!!』

護がアクセル踏もうとしたとき、ドアがノックされる

そこにはG U Y Sの制服を着た男性が立っていた

護が気づくと、男性は喜びの顔を浮かべ、助手席のドアを開け、座つた

「さあ!!行きましょう!!」

「え、あ、はい」

いきなり知らない人が来たことに驚きながらもアクセルを踏み、ゲートAにナンダを走らせた

『護隊員!!そっちは!!』

結果、ナンダに乗った護と男性は空中に車ごと投げ出された

「うおおおおお!!」

自然落下を始めるナンダの運転席で、護は今までの記憶を呼び覚ましそうになった瞬間

「えっと、このレバーか」

男性がレバーを操作すると、ナンダが下部に設置してあるバーニアをふかし、浮き上がった

「はあ……はあ……ありがとうございます」

「いえ、当然ですよ、行きましようか怪獣のもとに」

ナンダはそのまま後方に設置してあるバーニアも吹かし、

遅いながらも最短距離でエレキングの下に向かった

優しき青2―月光怪獣エレキング登場―

そのころ、電力発電所付近は騒然となっていた

怪獣がここに来るという予想がなされているなか、逃げ惑う人々や発電を止め、被害を最小限にしようとするものもいる

しかし、発電所の傍の木陰に何らかの機械が置いてあることには彼らは気付けなかった

『ケツアールからGUY'Sジャパンへ、こちら篠崎、目標のエレキングを目視』

目標から1キロメートルを維持し待機中』

『GUY'Sジャパンからケツアールへ、橘だ、まだ電力発電所には人がいる』

エレキングの進行スピードから、退避が間に合わない可能性が出てきた

攻撃を許可する、何としてもエレキングの侵攻を阻止せよ』

『G I G !!三原、セパレートいくぞ!!』

『G I G !!ケツアール、セパレート!!』

ケツアールのオオルリが加速、レッドスパロウが減速し連結部が切り離され元の二機に戻る

「お父さん!!火器は任せませ!!」

「だからお父さんっていうなよ!!」

「朱里、任せたわ」

「そつちも操縦は任せるわ」

オオルリはエレキングの右後方から、レッドスパロウは左後方から近づく

「M9グレネード弾!!ファイア!!」

オオルリとレッドスパロウの両翼からM9グレネード弾が発射さ

れる

それぞれ2発ずつ、二機合わせて8発がエレキングに命中する
背中で8発の弾が爆ぜる、その衝撃からか、エレキングは悲鳴のよ
うな雄たけびを上げる

「M9グレネード弾全弾命中!!」

『三原!!こっちはエレキングの前に出る!!そっちはしつぽによる攻撃
を注意しつつ弾を打ち込め!!』

篠崎はレッドスパロウの両翼に設置してあるライトを点滅させ、

ホバリングモードでエレキングの前方に回った

『任せたわ、こっちはこっちのお仕事しつかりやるからね』

三原もホバリングモードでエレキングのしつぽによる攻撃が当た
らない位置で攻撃を始める

M9グレネード弾や、光粒子エネルギー砲がエレキングに確実にダ
メージを与えていく

よもやこのまま勝てるのではという考えさえ浮かんだその時だ

『こちらレッドスパロウ!!計器にトラブルが!!』

『こちらオオルリ!!こちらもトラブル発生!!』

そのことを聞き、本部に残っている橘が驚く

「ありえない!!二機共にトラブルなど!!」

橘のもとに整備班の通信が入る

『橘隊長!!これは整備によるトラブルではありません!!』

両機に何らかの音波が発射されています!!それが計器に異常を

……』

「発信源は!？」

『……あ!!出ました!!これは電力発電所の傍です!!』

「電力発電所!?まさか……両機!!動けるか!!」

『回避運動が限界です!!とても向こうまで行けるほど余裕が……!!』

『私たちが行きます!!』

今、エレキングは二機による連携で動きが取れない状態だ

しかし、ここでどっちか片方がいなくなれば相手をしているほうが
最悪落とされる危険性がある

メテオールという必殺の手段も機体にトラブルが発生している今、使用をするわけにもいかない

八方塞がりか……？

そう橘が思いかけた時

『こちらナンダ!!電力発電所に到着!!ヒロと一緒にその音波の原因を調べます!!』

この吉報を知らせたのは今日入隊したばかりの新人、護だった

「よ、よし!!ヒロと護は至急、原因の解明を急いでくれ!!」

この吉報は戦闘をしている篠崎や三原たちにも届いていた

「あいつら戦闘機の俺たちを追いぬかして発電所に向かったのか!?!」

「ショートカットしたとしても、すごいスピード……流石新兵器……」

『オオルリ!!レッドスパロウは発電所にエレキングが向かわないよう援護しろ!!』

『G I G!!』

救いがあるとわかった二機は発電所にいる護とヒロという誰かを信じた

「でも本当になんでわかったんだ?ここに何かあるって」

護はナンダのなかで知り合ったヒロ名乗る自分より年下であろう

青年に話しかけた

「僕、耳がいいんですよ……だからじゃないですか?」

「へえ、俺はそんな自慢できることないからなあ……」

強いて言うなら自転車がうまいとか……」

軽い雑談をしていると

『おい!!いくらそつちがまだ安全だといっても回避しているこっちは辛いんだよ!!』

早くしてくれ!!』

「そうだった!!電波電波!!」

電波?電波!?電波ってどうやって探すんだよ!!」

護が八つ当たり気味にラジオのようなものを蹴っ飛ばしてしまっ
たときだ

「あ、それ」

「え?これ?」

ラジオのような機械から不協和音のノイズが走ると、軽い爆発を起
こした

「壊れましたね」

「壊れたな」

「えつと、こちら護です!!そつちに何か変化はありますか?」

『ああ!!システムがグリーンになった!!助かったぜ!!』

「よし!!ヒロ、ナンダに戻るぞ!!」

「いえ、まだやる必要があります」

「え?もう俺たちにできることなんて」

「戦いましょう」

「どつちにしろナンダにのらねえと」

護がナンダに乘ろうと駆け出したとき、背後から光と温かさを感じ
た

振り返るとヒロの身体が光り輝いていた

その光に目を瞑り、再び開くとそこにはヒロではなく青いウルトラ
マンがいた

「ウルトラマン……まさか……」

ウルトラマンは右手を護に近付ける

「まて!!さすがに三回目はやめろ!!」

ウルトラマンはのぼしていた右手を止め、少し考える雰囲気を出し
胸のカラータイマーから光る何かを護の目の前に落とした

「これは……おもちゃか?」

護がそれをつかむとその使い方が頭に入ってくる

「フュージョミッション……行くぞ!!」

フュージョミッションを右手でつかみ、胸の前に持ってくる

底の部分を平手で抑える

光がフュージョミッションに集まり、それを上に掲げる

「ヒーローツ!!」

護が光に包まれ、カラータイマーに入り、ウルトラマンの色が変わる

全身が赤く、左手が青い、護のウルトラマンに……

『サーツ!!』

護は力強く地面を蹴りだし、エレキングに向かって飛んだ

『両機!!そちらに何かに向かって!!気をつけろ!!』

橘の注意に対し、回避に徹している篠崎が悪態をつく

『くそ、この忙しい時なんだよ!!』

『こつちで目視するわ……確認!!あれは……赤い……ウルトラマン』

護は飛んできた速度のままエレキングに飛びつき、エレキングを投げ飛ばす

『サーツ!!』

『両機、ウルトラマンを援護しエレキングを撃破せよ』

『『『G I G!!』』』

『篠崎!!M9は残弾なしだ!!』

『構わんぜ!!隊長!!メテオールの使用許可を!!』

『よし、メテオールの使用を許可する!!しかし、音波による影響を考え、使用は一分半から一分に変更!!』

『行くぜ三原あ!!レッドスパロウ!!マニユーバモード!!オン!!』

『声が大きい!!オオルリ!!マニユーバモード、オン!!』

二機の機体の翼が複数に分かれ、金色に輝く

二機はマニユーバモードになったことで高速機動や複雑な動きができるようになったのだ

『お父さん!!』

『お父さんじゃない!!メテオールエネルギー砲!!連続発射!!』

レッドスパロウの底面に収納されていた砲首からエネルギー弾が連続で発射される

『朱里!!』

『メテオールエネルギー砲!!集束発射!!』

オオルリからは機体前方にエネルギーが集まり、球の形でエレキングに飛んでいく

護はその隙に前回決めたパワーボムを決めようとするが、

『まってくれ!!』

護の耳にヒロの声が響く

『エレキングはもともとおとなしい怪獣なんだ!!僕に代わってくれ!!』

『大丈夫なのか?』

『お願いだ!!変わってくれ!!』

護はうなずくと右腕を腰に、左腕を左に伸ばし、モードチェンジをした

ウルトラマンの色は青くなる

『ウルトラマンの色が青くなりやがった……あいつで戦えるのかよ』

周りを考えず戦うやつだぞ?』

青い色に変わったウルトラマンに対し篠崎が悪態をつく

篠崎は青いウルトラマンのいままでを見ていたのだ

その中で、青いウルトラマンは周りを考えないと考えていた

『くそ!!おれたちで倒すぞ!!』

そんな中、ヒロのウルトラマンはウルトラマンメビウスに似た構えをとった

『ティアツ!!』

エレキングの口から光線が放たれるが、ヒロは両手で青い粒子のシールドを張って防ぐ

次は尻尾による鞭のような攻撃が来るが、これもシールドを張り、防ぐ

『僕は……!!もう逃げはしない!!』

両拳を腰に、その後左腕だけを左に伸ばす

青い粒子の渦が左手に集まる

その状態から両腕を胸の前で回転させ、青いシールドを作ると、それを縮小させ、

エレキングの角めがけて投げる
まるでウルトラスラッシュのようにエレキングの右の角を切る
すると、エレキングは先ほどまでの暴れる様子はなく、ただただ
立っていた

『今なら止めを!!』

レッドスパロウとオオルリが攻撃をしようとしたとき、その目の前
にヒロが手を出し、制止を促した

ヒロはエレキングに話し始める

『君は誰かに操られていたんだね、もう大丈夫だ

さあ、早くお帰り』

エレキングはお辞儀のような動作をした後、宇宙へと帰って行った

『……呆けている場合じゃ……!!追撃を!!』

『もう無理よ、タイムリミットよ』

篠崎が見るとメテオール使用のタイムが既に三秒だった

時間が切れ、金色の輝きが無くなり、もとの機体に戻る

『まあ、良いんじゃない?被害はほぼゼロなんだから』

『……ああ、そうだな』

ウルトラマンは二機にサムズアップをし、そのまま空へ飛んで行っ
た

ヒロと護はナンダの目の前に落ちた

「痛て、どうにかなったか?」

「ありがとうございます」

「ああ、ところで、お前……一体……」

「え?何回か会ってますし、ご存知ですよね?」

この人間の名前は朝日ヒロ、ウルトラマンヒーローです!!」

護が本当にウルトラマンと出会った日になった

登場人物や各種設定

日野 護（ひのまもる） 20歳 男性

ヒーローになることを夢に見る青年

フュージョミッションを使いウルトラマンヒーローと融合することにより

ウルトラマンヒーロー・モードレッドに変身する

全ての乗り物の運転、操縦ができるという特技がある

朝日 ヒロ（あさひひろ） 20歳程度 男性

護の前に現れた青のウルトラマン、全身青と銀の通常モードと

護と融合状態することで右手が赤い、モードブルーに変身できる

ウルトラ戦士としてはまだまだ未熟な面が……

橘薫（たちばななおる） 32歳 男性

GUYSジャパンの隊長、シリアルが大の好物

ウルトラマンメビウスを直接見たことのある人物

勘が鋭いが、自分でそれを気付くことができない

食べるシリアルの状態によって一日がどのようなようになるか、周りが判断できる

ミルクが多い―平和

シリアルそのまんま―何らかの危機がある

食べてない―すぐ傍に何かが来ている

篠崎力（しのぎきつとむ） 22歳 男性

GUYSジャパンの中でも一番戦闘機の扱いに長けるエース

熱い心の中に優しい一面もある

人の悩みなどによく気づくが、自身の悩みを打ち明けられない不器用さもある

実は気になる女性もおり、現在恋の悩みがある

垣山真司（かきやましんじ） 30歳 男性

GUYSジャパンの中で唯一の既婚者、小学生の娘がいるお父さん

根っからの仕事人間で、GUYSという仕事に誇りを持つ一方

家庭のことを二の次にしてしまうことがある

妻には理解はされているが、娘には理解されていないようだ

三原愛（みはらあい）22歳 女性

優れた視力と繊細な機体操縦テクニックを持っており屋久島朱里と昔からの親友

何かと朱里の事を気にかけており、G U Y Sに入る朱里を追って自身もG U Y Sに入った

性格上、大胆な行動が苦手だが、いざという時想像もできないような大胆さを見せる

屋久島朱里（やくしまじゆり）23歳 女性

クールな一面、実はウルトラマンが大好きな女性、ちなみに一番好きなのはレオらしい

愛を信頼しているが、愛の過保護な面を気にしている

子供のころ色々あったようで、女性を理由に何かを言われるのが嫌い

レッドスパロウ

G U Y Sガンウインガーの後継機であり、メテオールが使用できない場合でも強力な弾頭を使うことができる

G U Y Sガンウインガーのようにマニューバモードが使用できる

マニューバモードのエネルギーを収束させることにより、メテオールエネルギー砲を放つ

名前にガンが付かないのは作ったのがG U Y Sではないためである

オオール

G U Y Sガンローダーの後継機であり、メテオールが使用できない場合でも強力な弾頭を使うことができる

G U Y Sガンローダーのようにのようにマニューバモードが使用できる

マニューバモードのエネルギーを収束させることにより、メテオールエネルギー砲を放つ

名前にガンが付かないのは作ったのがG U Y Sではないためである

ほかの機体と違い、機体カラーが青である
ケツアール

レッドスパロウ、オオルリが合体することにより完成する合体メカ
基本はメテオールを使用せず目的地に高速で移動するためだが、メ
テオールを使用すると

オオルリがスペシウムマイナスエネルギー、レッドスパロウがスペ
シウムプラスエネルギーを行き来させ

スペシウム光線を放つことができるが、この装置ははまだ使用許可
が下りていない

実在する鳥のケツアールにイメージが似ている

フュージョミツシヨン

ウルトラマンヒーローと融合するためのアイテム

護自身の光を為、そのエネルギーで自身を光に変換し、

ヒーローのカラータイマーに入ること融合することができる

光をそのまま放ち、ぶつける事で攻撃に使用もできる

世界観の説明

ウルトラマンメビウスが地球に最後に現れてから30年後

再び現れた怪獣に新たに現れたウルトラマン、ウルトラマンヒー

ロー

ヒーローに憧れていた護と融合し共に怪獣を倒す

GUY'Sに入る二人だったが、なぜ再び怪獣が現れたのか

ウルトラマンヒーローが現れたのはその怪獣を倒すためなのか

その謎は光の国に異変が起きていたのが原因だった

黒い感情1―負思念集合体サイコダーク登場―

エレキングとの戦いから数時間後の夜10時

すべての天文台で異常が起こっていた

「おい、星が消えちまったぞ!?!」

「あん?星が急に消えるわけないだろう?」

「ほんとなんだって、爆発して無くなったわけでもなんでもなし、きえたんだ!!」

「嘘だったら飲み物おごれよ?どれどれ?ああ……まじかあ」

「これ報告しないとまずいだろ?」

同日夜10時30分には、世界各地のすべての天体観測局から星が見えないという異常が伝えられる

同時にエレキングを補足していたGUYSSペーシーからもエレキングが突如消えたという報告を行った

この事態にGUYSSは総員の緊急会議を行った

ブリーフィングルームには護、ヒロ、橘、篠崎、垣山、三原、屋久島がいる

「状況は今説明した通りだ、今は専門家がこの現象について調べている」

橘から現状についての説明を聞いたみんなだったが、護とヒロ以外の4人はそれよりも知りたいことがあった

「隊長、質問があるんですが」

「なんだ篠崎」

「こいつ誰です?」

4人の視線はヒロに固定されていた

「お前ら、こいつとは失礼だな……いいか?この方はな?」

そう言っただ橘はヒロの後ろに周ると両肩に手を置き、言った

「この方は、ウルトラマンだ」

この言葉に護とヒロが驚き、他4名は橘に対し疑いのまなざしを向けた

「……冗談だ、護と同じ日に入った、新人の朝日ヒロだ

これでも私よりも戦い方が上手いから期待のルーキーだぞ」

その言葉に屋久島が橘の目の前まで歩き、確認を取る

「橘隊長に本当に勝ったんですか……?」

「疑うのであれば今度試合でも申し込めばいい、まあ、負けるだろうがね

このことについてはまた今度だ、今はあの現象について考えるぞ」

「それは俺たちの仕事ですかねえ……」

「篠崎、これは俺たちにも関係するかもしれないぞ？」

現にエレキングがどこかに消えた、次はどんなことが起きるか俺たちも考える必要が……」

「ああ……お父さん、説教はまた今度で」

「だから篠崎……、お父さんと言わない、君のお父さんではないんだぞ」

「あの、親子喧嘩はいいんで、そろそろま・じ・め・に!!考えましょうよ」

「愛がそろそろ怒る頃ですよ」

「うーん、と言われてもなあ……どうして星が見えないのかわからない」

「天文学なんて知らないなあ……」

全員が頭を悩ましている時

「ダークエフェクト……」

ヒロの口からその言葉が出てきた

「ヒロ、何か知っているのか？」

「うん、確認したいことがあるんだ」

ヒロはコンピュータの前に座り、あるものを出した

しばらく操作すると、モニターに映像が現れる

「太陽だな」

「太陽」

「太陽……か」

「太陽ですね」

「太陽です」

モニターには太陽のライブ映像が出ていた

「太陽が見えるってことはやっぱり……」

月も見える、けど……」

そしてこの時になって橘が気づいた

「フィルター……？」

「そうです、このダークエフェクトは太陽の光以外をすべて遮断しているフィルターなんです

だから、エレキングが消えたんです」

モニターにはエレキングが消えた瞬間が表示されていた

エレキングが地球から離れていてると、頭から徐々に消えているのがわかる

「ただ、なんで太陽と月だけ……」

「……ダークエフェクトでも防げないほどの光だからです」

「てか、何でそんなこと知ってんだよ」

「キング……んツ!!お爺ちゃんに聞いた昔話で……!!」

「いまキングで」

「ジツハボクオウジダツタンデスヨ」

「そうか、どこの？」

ヒロは周りを見渡し偶然見つけた書類に書いてあるとある言葉を

言った

「……インドの」

「絶対ウソだろ」

ヒロはもう何も言わなかった

「どこで知ったかはどうあれ、あれがどんな代物かは、隊長として聞いておきたい」

「王子の説明が聞きたいなあ?」

「篠崎さんは人を愛称でしか呼べないんですね」

「お? 新人、お前はにわとりだからな」

「なんでにわとり……?」

「落ちたからだ」

「あの、説明しても?」

「ああ、すまんあいつらは無視しろ、説明してくれ」

「はい、じゃあ説明します」

ヒロはまたコンピュータを操作し始めた

モニターには地球、月、太陽などの位置が描かれている図が出ている

「ダークエフェクトが人に認識されないのは、あれ自身が生物の思念だからです

人は心を感じることができても、それも見たりすることはできません

それは機械でも同じです

いま、ダークエフェクトは地球とほかの星を隔てるように覆っていると思います

太陽と月以外の星が見えませんが、またこのダークエフェクトのま

ずい特徴は……」

そこまで行った時である

ブリーフィングルーム内に警報が鳴る

「GUYSスピーシーからです!!」

ヒロが送られてきた映像をモニターに表示する

そこには何もない宇宙の空間から黒い怪獣の頭が現れた

「特徴は……ダークエフェクト自身が怪獣を生み出すことです」

黒い感情2―負思念体サイコダーク登場―

「ダークエフェクトは人の負の感情をエネルギーに怪獣を生み出すんです

ダークエフェクトを消滅させる方法は1つしかありません
……ダークエフェクトから生まれる怪獣を倒すことです」

ケツアールに合体したオオルリとレッドスパロウ、そして、ケツアールの底部に接続されているナンダは、サイコダークが降下してくるだろう予測ポイントに向かっていた

「あの怪獣を知ってるってことは、倒し方も知っているのか?」

ケツアールに接続されており、特にすることがない護はヒロに聞いていたが、ヒロの様子がおかしいことに気付いた

「どうしたんだ? ヒロ?」

ヒロは自身の胸に手を当て苦しそうに言った

「怖いんです……僕……」

「怖い? サイコダークがか? そんなの誰だって……」

「違います!!」

「……じゃあ、何が? 何が怖いんだ?」

「自分の心が怖いんです……僕は前にあの怪獣を恐れ、逃げてしまっ
たんです……」

ウルトラ戦士なのに……おかしいですよね」

「……おかしいな、確かに

ただ、今ヒロはそいつを倒そうと戦おうとしている、それは成長つてやつじゃないのか?」

それに、ヒロは地球を守ってくれている……

それに、一人じゃないだろ? ヒロも、俺も……」

「ありがとうございます……僕はもう逃げないと誓いました、
だから、自分の気持ちからも、過去からも、もう逃げません」

『おいにわとりに王子、ポイントに到着、切り離すぞ
作戦通り、地上からの攻撃を頼む』

「了解、セパレーションスタート!!」

ケツアールからナンダの接続部が切り離され、ナンダはホバーを噴射し、道路に着陸した

「こちらヒロです、ポイントに無事着陸、待機します」

「とにかく、今はこっちに来るサイコダークのことを考えよう」

「わかりました、僕の予想だとサイコダークはすぐに……」

その時だった、青空から黒い球体が現われた

「護さん!!来ました!!」

「おいおい!!あれ落下速度が速すぎないか!?!」

「隊長!!メテオールを!!」

『メテオール解禁!!人々を守れ!!』

『G I G!!』

「皆行くぞ!!ケツアール!!マニユーバ、オン!!」

ケツアールの両翼が複数に展開し金色の粒子を身にまとう

「捕獲ネット弾発射!!」

ケツアールの底部に装備されていた大型弾頭を発射、大型弾頭は空中で制止、カバーが外れ、電子ネットが展開する

「エネルギー充填開始!!」

ケツアールのエネルギー砲塔からエネルギーが照射されネットは光り輝き始める

「来ます!!」

サイコダークが地表めがけて落ちてきていた

本来なら落下した瞬間周辺に多大な被害が出るはずだが、サイコダークが地面に落ちる前にネットに落ちる

ネットは落下速度がかなり速かったサイコダークの勢いをほぼ0にした

「ネットで捕獲している今だ!!総攻撃開始!!」

「朱里!!」

「スペシウム弾頭!!ファイア!!」

「お父さん!!」

「M9グレネード弾発射!!」

ケツアールから複数の砲弾が捕獲されているサイコダークに衝突する

「ナンダ、砲撃開始します」

「スペシウム反応砲!!ファイア!!」

ナンダの後部に搭載されている砲塔が上空にいるサイコダークに狙いを定め、カチンという立てたあと、

レーザーがサイコダークの体表面を貫く

瞬間、周囲に金属音が響き渡る

黒い球体から赤い目のようなものが覗く

そして、ネットの網の隙間を通り抜けるように地面に着地した

「ウソだろ?あれはただのネットってわけじゃないんだぞ……?」

そして再び金属音が響き渡る

サイコダークはその球状の姿から怪獣のそれへと姿を変形させた

「サイコダークの形状が変化!!」

「砲撃を続けるんだ!!」

再び砲撃が始まり、すべての砲弾がサイコダークのサイコキネシスにより周りの建物に衝突する

サイコダークの目が厭らしく歪む

その行動に護が怒りを露わにした

「あいつ!!」

「このままじゃ……護さん!!」

護が手をみるとフュージョミッションが握られていた

二人はナンダを降り、護はヒロを見る

「覚悟は……出来てます!!」

「力を……貸すぜ!!」

フュージョミッションに光が満ち、フュージョミッションを空へ掲げる

ヒロは体を光らせウルトラマンヒーローへと変身する

護は光になり、ウルトラマンヒーローのカラータイマー入り、ヒー

ローの体が赤に染まる

『サアローアアア!!』

そして、サイコダークと相対する

金属音を発生させ、まるで喜んでるように体を荒ぶらせる

ヒーローはサイコダークに走り出し、ジャンプからのパンチをサイコダークの体に叩き込む

サイコダークは攻撃を喰らいながらも、その巨体をヒーローにぶつける

後ろに後退していくヒーローに、サイコダークはその赤く、禍々しく光る両目からサイコビームを放つ

ヒーローへまっすぐ放たれたビームをヒーローは右手で受け止め続け、後ろに滑るように下がる

サイコビームは止まり、再度発射されようと目が光る瞬間、

ヒーローは左腕を横に伸ばしブルーへとモードをチェンジする

ビームを発射した瞬間、ヒーローはエフェクトシールドを作り、ビームを遮断しようとする

しかし、サイコダークはビームを曲げ、シールドが張られていない側面からビームを当てようとする

シールドを張っていた両腕を拳握り胸の横に持つてくると、

シールドはヒーローの全身を守るように形状を変える

サイコダークは攻撃の手を緩めず、再度サイコビームを放とうとするが、

ヒーローはシールドを回転させながら縮小させ、頭部にエネルギーの乗った右手を乗せ、まるでウルトラセブンのアイストラッガーのように、エフェクトストラッガーをサイコダークの目に放つ

サイコダークの目にあたったエフェクトストラッガーはサイコダークの目から赤い光を弱くした

「すごい……」

ケツアールに乗っていた三原がそう呟いたとき、篠崎がはっと気がつく

「馬鹿!!なに見とれてんだ!!できる援護をするぞ!!」

その声のほかのクルーも気づく

『GIG!!』

ヒーローは右腕を横に伸ばし、レッドへとモードを変え、そのまま必殺技、レッドパワー・シユートを放とうと腕をゆつくりと動かす。その時を待っていたとばかりにサイコダークが今まで放ったなかでも特に強い光を目から放つ

「キャプチャーキューブ!!」

が、その攻撃はキャプチャーキューブによるバリアで防がれる

そして、ビームが途切れた瞬間

「解除!!」

『サァーシューッ!!』

キャプチャーキューブの解除と同時にスペシウムと同じ構えから放たれる光線、

レッドパワー・シユートがサイコダークに直撃し、サイコダークは金属音を出しながら霧散していった

「勝ったのか?」

「篠崎君、冗談でもそういうことは言わない」

「そうよ篠崎君、勝ったってことにしておきましょう」

「でも、油断はできないわ、周辺を確認」

「そうだけ、本当に倒したかはわからねえじゃねえか」

「そういえばあの二人は?」

「さあな、大方、ウルトラマンの戦いに見とれてたんじゃねえのか?」

「……帰ったら絞めようかしら」

「また始まったわ、朱里の面倒見」

「違うわよ、注意しろってことを……」

「はいはい」

ヒーローは両腕を上にあげ飛び去った

サイコダークは倒した、しかしまだほかの怪獣やサイコダークは襲ってくるだろう

頑張れ、戦え、ウルトラマンヒーロー!!

大地と海の攻防1―地底怪獣グモース登場―

ある日、日本の近くの無人島で謎の地震が発生した

震源は浅く、また地震はその無人島のみで起こったものだった

それは地底に住む怪獣が起こした地震だったのだ

翌日、G U Y S本部にて、緊急の会議が行われた

「朝早くからすまない、実は見てもらいたいものがある」

そういうと橘はモニターに映像を出力した

そこにはとある島らしき映像ではあったが、島の中央に大きな穴が開いていた

「隊長、これはいったい?」

「でけえ穴だな、何か爆発したわけでもねえし……何か、這い出たのか?」

「そうだ、この穴の中に怪獣が住んでいたんだ

今まで存在は確認されていたが、まったく動かず暴れる要因もなかったから無人島にして放置していたんだ」

「皆さんはこの怪獣のこと知らなかったんですか?」

「知ってるも何も、教えてもらってないわよ

G U Y Sの上層部は今隠していること結構多いのよ、昔と違ってね」

「昔を知るほど朱里も年取ってないだろう?」

「お父さんもまだ30でしょ」

「私たち若い人たち多いんですよ」

「一番年が若いのはニワトリ王子の二人か」

「いい加減ニワトリっていうのやめてください、そろそろ怒りますよ?」

「お?戦闘機に乗れるようにはなったのか?ええ?

滑走路で離陸事故起こすような奴だもんな」

「シミュレーションだからいいんです」

「いや、よくはないだろ」

「大丈夫ですよ護さん!!ナンダがあるじゃないですか!!」

「シミュレーションじゃなくて本物乗って練習してるくせに……」

周りが騒がしくしていると、橘が手をたたいた

「はいはい、仲がいいのは知ってるから会議の最中は静かにしてくれ」
橘に言われ、周りは静かにする

護は篠崎を見つめているが……

「で、次にこれを見てくれ」

続いて表示されたものを見ると世界地図が表示され、日本近海が大きく表示された

「ここがさっきの無人島、そしてこの赤い線だが……」

「まさか、怪獣が!？」

「そうだ、すでにG U Y Sオーシャンが対応しているが、海中の海底を進み、

G U Y Sオーシャンの兵器では効果も薄かったそうだ」

「つまりはその怪獣の対応がうちになると」

「そうだ、進路先は日本だ、よって、G U Y S J a p a nが担当を持つ、

そしてG U Y S オーシャンと共同で撃退もしくは駆逐をする」

橘の言葉に隊員たちも驚きを隠せなかった

「協同作戦ですか？これまた難しそうですね」

「指揮系統をうちが持つて、それにG U Y S オーシャンが協力……
ですかね？」

「そうだ、海中に潜られたら私たちは対応が難しい、

撃退するまではG U Y S オーシャンのホワイトホットが援護する

私たちは怪獣が本土に侵入しすぎないように防衛する、これが任務だ」

そして、任務内容を伝え、5分程度したとき、部屋のブザーとランプが点灯した

橘と隊員たちが立ち上がり、橘が大きく声を上げた

「G U Y S!! s a i l y g o!!」

それに答えるために隊員たちも声を上げた

大地と海の攻防2―地底怪獣グモース登場―

「こちらオオルリ、指定ポイントに待機完了しました」

「愛、今日もよろしくね」

「こつちも準備は完了ッ!!」

「力、狙いやすく操縦してくれよ?今回は撃退が第一目標だからね」

「お父さんはいつも注文が多いんだよなあ……」

「ヒロと護、ナンダにて防衛ライン上にて待機中です」

「護さん」

「ん?」

「今回は初めて見る怪獣かもしれませんが、

GUYSのデータベースにもないとすると油断しているとやられてしまうかもしれません」

「わかった、気を付ける」

『GUYS オーシャンから作戦開始の合図!!』

ヒロと護がオオルリやレッドスパロウのいる方角に目を向けると、

水しぶきをあげながら茶色の怪獣が現れた

現れたと同時に通信で橘が作戦を指示する

『GUYS Japan、GUYS オーシャン、怪獣を撃退するのが

第一目標だ……油断はするな!!攻撃開始ッ!!』

『GIG!!』

「レーザー砲!!連続発射!!」

「電子ビーム砲!!照射開始!!」

二機が脚部と胴体に攻撃を与えるが、少し体制を崩す程度で怪獣は足を止めない

しかし、少し進もうと足を前に出そうとした瞬間、足を置こうとした部分が爆発した

たまらず、足を後ろに戻し、後退し始める

「そうだ、島に戻るんだ……!!お前はまだ何もしていない……!!」

「ヒロ……」

その爆発は、ナンダに積んである水陸両用感知式爆弾だった

後ろに下がり、足が海中についたとき、さらに爆発が起こった

『こちらホワイトホット、援護感謝する海中はこつちにまかせろ』

「海男達の魚雷かなんかか!?こつちの状況わからねえくせによくやるな」

「んッ!?力!!回避運動!!」

怪獣は地面を蹴り、上空へ飛んだ

そのまま隠していた爪を伸ばし、レッドスパロウへ振りかぶったのだ

間一髪のところまで避け、そこにオオルリからの援護が入る

しかし、海から離れたため、ホワイトホットからの援護がしづらくなかった

『海側へ押し出すわよ!!』

「わかってらあッ!!」

再度攻撃を始めるが、攻撃が通らない、さらには放たれた攻撃を少しずつだが避け始めている

「隊長!!M9グレネードの使用許可を!!」

『……M9グレネードは殺傷能力が高い、まだこの怪獣を殺すほどの危険性は認められない』

「!?……G I G!!」

『隊長さんよ?俺たちが海上に出て誘導してみましようかい?』
「できるか?」

『G I G』

「よし、頼む」

海の中から黒と白に塗られたレッドスパロウ……G U Y S オーシャンの主力機であるホワイトホットである

「奴の上をとるぜ」

「おうよ」

ホワイトホットは怪獣の背面の上空に急接近し、瞬間的に停止、

瞬間、魚雷を怪獣の背中に落とし、急速に離れる

背中に魚雷がぶつかった瞬間大きな爆発が起こった

怪獣がホワイトホットの方を向いた

「さあ、いい子だからついておいで」

そして、上空でホバリングしているホワイトホットに足を踏み出し口から黄色の液体を吹いた

回避しようとしたホワイトホットだが、左翼にその液体が当たった当たった部分にあったはずの翼はまるでなかったかのように溶け始める

「ちくしょうめ!!なんなんだよこれは!!」

『こちらオオルリ!!そっちは動ける!?!』

「男としてこのくらいと言いたいが……相棒が無理だとアラート出しゃがる!!」

すまねえ!!これ以上は厳しい!!」

『たった今より、怪獣に対しメテオールまでの使用を解禁する

メテオールの使用時間は1分30秒までとする』

「朱里!!行くよ!!」

「マニユーバモード、オン!!」

「お父さんよろしく!!」

「はいはい!!起動!!」

二機の機体の各部が展開し、金色の粒子があふれ出す、残像を出しながら動く2機は先ほどとは違い、

怪獣を翻弄し、攻撃では有効打を与えていく

「ッ!!」

それを見ていたヒロはナンダを飛び降りた

「お、おい!!ヒロ!!」

同じくヒロのもとに向かうためナンダを飛び出す護

護がヒロの腕をつかむとヒロが腕を振り払い、護に言う

「止めなきゃならないんです!!」

「止めるったって……」

「あの怪獣は何もしていないんです!!」

「でも……じゃあなんであの怪獣はここに来たんだ?」

「あの怪獣はおそらく、この星で生まれた怪獣なんです、

ただ、島から出ただけなんです、だから止めなくちゃいけないんで

す!!」

ヒロからの言葉を、目を瞑り少し考える

そして、目を開いた

「……わかった、どうやって止める?」

「どうやっても!!」

「……分かった、行こうぜ」

護はフュージョミツシオンを手にし、自身の光を込めた

ヒロは光り輝き青き巨人、ウルトラマンへと姿を変える

「ヒーローツ!!」

フュージョミツシオンを空へ向け光となってヒーローに同化する

右手から赤く体が変わり、優しき左手のみ青の色に……

メビウスの構えをとり、ヒーローは吠えた

『サア……ッ!!』

「ウルトラマン?」

「愛?どうしたの?」

「ウルトラマンが……」

屋久島が周りを確認すると、背後にヒーローがいるのが分かった

そして、ヒーローはレッドスパロウが射撃している間に割り込んだ

M9 グレネード弾やレーザー砲を受け、よろめきながらも怪獣と

レッドスパロウの間に居続けた

「おいおい!!打つなつてのか!?!」

「間に入られたら打てないわこりや」

ヒーローへ怪獣が口からまた黄色の液体を吐こうと口を開いた瞬

間、

ヒーローは右手の掌底を顎に当て口を閉じさせる

怪獣の口から黄色い液体があふれ、怪獣は海に飛び込む

引き返した……と思われたが、海中から口だけを出し、黄色い液体

をヒーローめがけて吐き出した

右手を前に出し、液体を防ぐが、右手に当たった瞬間、液体が炸裂

した

堪らず、手を引っ込める、その隙を狙い、もう一発液体が放たれ、胴

体に直撃する

今度は後方に飛ばされるヒーロー、そのまま倒れるもがく

怪獣が吠え、もう一度液体を吐きだそうとしているときである

「朱里、残り時間が!!」

オオルリ、レッドスパロウ共に残り30秒を切っている

行動をするなら今しかない、そう考えた三原と屋久島は海中にいる怪獣に接近する

「三原!!迂闊に近づきすぎるな!!」

篠崎の制止を無視し、怪獣に急接近したとき、怪獣がちょうど液体を吐きだした

近づきすぎたせいか、回避運動をしたとしても直撃は免れない

——はずだった——

青い円盤のようなものが液体とオオルリの間割り込み液体は一滴もオオルリに当たらなかった

全員が、怪獣がその円盤が来ただろうと思われる方に目を向ける

片膝を付いたままヒーローは青く輝いており、色が青に変わる、力強き右手だけ赤に……

『ティーツ!!』

片膝を付いたままメビウスの構えとは左右逆の構えをとる

同時にメテオール限界時間に達し、三原と屋久島はその場から離れた

怪獣は海中に潜り、ヒーローは上空高く飛び、怪獣がいた場所より

も大きく沖の方に飛び入る

ヒーローが着水した音で背後にいることが分かり体を回転させ、ヒーローの方に向く

水中ではあの液体が使えず、爪による攻撃を仕掛けてくるが、水中で素早く動けるヒーローと、その巨体ゆえに水中では動きが遅くなる相手では攻撃は当たりもしなかった

しばらく回避され、怪獣はさらに動きが鈍ってきていた、島から日本まで泳ぎ、なおかつGUY Sとの戦闘

疲れていないはずもなかった

しかし、ヒーローにも時間がなかった、既に胸のカラータイマーが赤く点滅し始めた

互いにぎりぎりの状態だった

ヒーローは構えを解き、静かに回転を始めた

回転は次第に速くなり、海中には高い音が響き渡っていた

その状況に怪獣はなにも行動を起こせず、機会を疑っていると、ヒーローは怪獣の真上に移動し、

その体からまるでチェーンのようなものがいくつも落とされ、キヤッチリングで怪獣の体と口を拘束したのだ

拘束が終わると、素早く赤のヒーローになり、怪獣を持ち上げようとするが

怪獣の体が重く持ち上がらない

時間も迫っており、このままではさつきまでの行為の意味がなくなる

『サア……アアア……ッ!!』

ヒーローの体が赤く輝き、さつきまで持ち上がらなかった怪獣を持ち上げた

そのまま海を出て、島まで飛んでいく

必死に飛び続け、島が見えてきたが、残り時間はあとわずか……

ヒーローは最後の力を振り絞り、怪獣を元居た穴の中へ投げた

穴の中へ少しづつかりながらも怪獣はすっぽりと入った

左手の掌の上を右の掌でスラッシュユさせ放つ、パワーショットを穴

の周りの岩などに放ち、穴を埋めた

怪獣は少なくともしばらくは島から出てくることはないだろう

ヒーローはそのまま飛びだっていった

三原たちはその様子を近くで見っていた

「流石はウルトラマンだけ、俺たちができないことをやってのけるんだからよ」

「まあ、撃破しか考えてはなかったからだけど……」

それより二人とも、注意はしてたからちゃんと聞いときなさい

新人の二人はちゃんと防衛ラインを動かなかったんだから」

三原と屋久島は落ち込んでいた、特に普段は冷静に動く愛は落ち込み具合は大きかった

「G I G……」

「……………」。

そして、当の二人はというと、ナンダの中で疲れ切っていた

「ひやひやしたし……右手痛いし……もう無理……」

「……ありがとうございます、無茶なことをさせてしまつて」

「いいよ別に……楽ではなかったけど、俺は納得できたから」

「納得ですか……？」

「うん……俺の中のヒーローってやつと、お前のヒーローがな」

ナンダの通信機に任務完了の報告が来た

父親の宝——負思念体ゴモラ登場——

ある日、護と垣山は対人型宇宙人を想定しての稽古をしていた。護は相手が垣山なのを気にして殴りも蹴りもせず、垣山の蹴り、殴りを時に受け止め、時にはいなしていた。

模擬戦闘の終了のブザーが鳴り終わると、二人とも荒い息を整えた。「ふう……、まさかここまで防がれるなんてね」

「すみません、訓練なのに、一回も攻撃しなくて……」

「いやいや、十分だよ、まだまだ訓練が足りないなと思ったよ

……だけど、信じられないな」

「何がですか？」

「君がG U Y Sに入る前、朱里ちゃんと試験したって聞いたけど、

その時より強くなってるんじゃないか？」

「んー……そんなことないんじゃないですか？」

俺一回も垣山さんに攻撃できませんでしたし……」

「でも、判断が早かったじゃないか、避けられるものは避けて、避けられないものは防ぎきっている……」

本当にこの間まで何もしていなかったのか？」

「アルバイトくらいなら……」

実のところ、護自身も自身の体について疑問を持っていた

よく目が見えるようになったり、力も付いてきた

ただ単に実力が良くなったのではないか？とも思ったが、そこまで訓練もこなしてはいない

では才能があったのか？とも考えた

才能があり、開花したのであれば喜ばしいのだが、才能では片づけられないものもある

と、するならば、考えたくはなかったのだが1つある

ウルトラマンと同化し闘っている事実だ

ウルトラマンとして戦ったことが、護の才能を開花させたか

……護を、人ならざるものにし始めているのかもしれない

それが、ウルトラマンであれ、怪獣であれ、人として生きられなく

なるのだとしたら……

護は人を守れば構わないと心の中で決めていた

例え、人ならざるものになり、自分で無くなろうとも……

その恐怖を、護は心の内に仕舞った、今はみんなを、人を地球を守るために

2人が汗を流しにシャワーを浴び、みんながいる部屋へ戻った時である

「パパ!!」

扉を開け、部屋に入ったとき、可愛らしい女の子が垣山に駆け寄ってきた

護は何事だ?と思ったが、それよりも驚くことに気付いた

少し前、公園で俯いていた少女の声だ

顔は見えなかったが、確かにあの時間いた少女の声であることに気づいた

そして少女は垣山の足にしがみ付いた、垣山も驚いているようで

「玲奈(れな)!!?どうしてここに……」

垣山が周囲を見ると紙袋をもった女性がいることもわかった

「お前……」

そこに、笑顔のヒロが垣山に言った

「垣山さん!!幸せですね、お嫁さんの真礼(まれい)さんと娘の怜奈ちゃんが垣山さんに届け物を……」

そこまで言って、垣山が声を上げた

「何で来たんだツ!!」

それはここにいる中でヒロと護だけが知らない垣山の声だった

「いつも言っているだろう、なにかあるかもしれない場所なんだ!!危ないからここに来るんじゃない!!」

「でも、貴方にこれを渡したくて……それに、怜奈も……私も、貴方に会いたいから……」

「だめだ、今すぐ帰りなさい!!」

いつもならほかの隊員が何かを言うであろう状況だが、誰も口を開けずにいた

あの熱血漢の篠崎でも、ばつの悪い顔をしているだけだった

「玲奈……おいで……」

怜奈は何度も垣山と真礼を見て、さびしそうな顔と足取りで母親の手を握った

真礼は、持っていた紙袋を机の上にそつと置き、頭を下げ、部屋から出て行った

「ごめんな……みんな、いつもこんなになってしまつて」

「いつもでしょ？もうわかっているから良いのよ」

「わかっていますから……」

「お父さんだしな……」

隊長の橘とヒロ、護は何も言わなかった

垣山は、机に置かれた紙袋を手にも、自分の部屋へ向かった

「あの……」

「ニワトリ、お父さんにはお父さんなりの考えがある
気にすんなって言ってもあれだが……気にすんな」

「垣山さんなりの考え……ですか？」

「ここにはG U Y Sクルーの親族で理由がちゃんとあればG U Y Sクルーじゃなくても入れはするが、

ここは侵略者の宇宙人からすれば潰したい拠点だ、そこに家族が来てみる？」

「ああ……なるほど」

「でも!!家族にあの言い方はだめだと思えます!!」

「それはお父さんが一番分かっていることよ

たぶん今頃、来てくれたことを嬉しがつてると思うわ」

「え?…どういうことですか?」

自室に戻った垣山は紙袋の中を見て、涙を流していた

紙袋の中には、怜奈と真礼の記念写真、垣山宛の手紙、私服……

そして、おそらく怜奈が描いたであろう絵が入っていた

「玲奈……大きくなったな……分かつてる、わかっているんだ俺も会いたかったよ」

「そんなに会いたかったなら、目の前で喜んであげたらどうですか？」
本来聞こえないはずの声が自室に聞こえていた

垣山がその声のほうに振り向くと、そこにはヒロの姿があった

垣山は急いで顔に流れていた涙を拭いて聞いた

「の、ノックした？」

「いえ、してませんでした」

「いや、ノックしてよ」

「どうしてるか気になったので、次はちゃんとします」

「あ……いや、そうじゃない、ごめんな、気にしないでくれ」

ヒロは垣山が座っているベッドに向き合うように、垣山のデスク
チェアを借り、座った

「垣山さんは、今をどう思っていますか？」

「今……悪いつて思っているよ、父親としてちゃんと家族と居られないなんて、父親としてはだめだとね」

「……不思議ですよね、人って……」

「どうして？」

「悪いものだと、やってはいけないものだと分かってても、やらなきゃならないことがある」

僕には、できないものです」

「一応でも親だからね、守らなきゃならないものがあるんだ」

「ごめんなさい、少し僕は怒りますね」

ヒロの言った一言に垣山が拍子ぬけた声を出す

「垣山さんは家族を守りたいからG.U.Y.Sに入ったんじゃないんですか？」

貴方は家族じゃなくて、人を守るために戦っています」

「何か……違うのかい？」

「違います!!あなたが愛する家族遠ざけてでも、家族を想い、守りたいと願うのなら!!」

どんなことから守り切ってみせる努力をしてください!!」

父親というのはそういうものです!!」

「分かってる……!!だから僕は父親として失格だと……」

「言わないでください!!冗談でも、父親になつたんならそんな言葉を言わないでください!!」

それに、分かつてる?分かつてないです!!あの人たちが、何を望んでいるのか……分かつてあげてください!!」

しばらくの沈黙が流れ、垣山が口を開く

「……説教なんて、されたのは久しぶりだ……」

大人になつても、わからないことだらけなのに、自分で考えなきやならない……

たまに思うよ、みんなと過ごしていると、家族って簡単なものじゃない……だけど、幸せなことなんだ」

「垣山さん……」

「うん、ありがとう……まだまだだけど、説教されて吹っ切れたよ

……今は、ただ家族に会いたい」

垣山が手を差し出し、ヒロに握手を求めてきた

ヒロはその手に応え、握手をした

その時、アラートが鳴り響いた

「怪物が……行くよ!!ヒロ君!!」

「はい!!」

とあるマンションの一室で男性が膝をついていた

「あはは、ははは……どうして、どうしてなんだ?愛していた家族が僕を見捨てるなんて……」

ビジネススーツを着ている男性の顔には黒い靄のようなものが掛かっていた

彼の手には家族で遊園地に遊びに行った時の家族の写真

幸せそうな彼と、彼の妻、そして娘の写真だった

黒い靄は彼の顔から写真に零れ落ち、写真についた

靄は彼だけを残し、彼の家族を消した……

父親の宝2―負思念体ゴモラ登場―

「あの怪獣は流石に有名すぎるな」

「ゴモラ……ですね」

「今回もリーダーに映らなかった、何か理由があるのか……」

「!!レッドスパロウが発進してます」

「何?まだ出撃の許可は出してないぞ!!」

「隊長!!オオルリで愛と出撃します!!」

「頼む、篠崎と日野はナンダで出撃、周辺の住民を避難させ、地上から援護しろ!!」

G U Y S !! s a i l l y g o !!」

『G I G !!』

それぞれがオオルリ、ナンダがある格納庫に向かっていく最中、篠崎が護に言った

「俺が砲手をやる、操縦は任せたぞ」

「分かりました」

その様子を見ていた三原と屋久島がクスクスと笑っていた

「なんだよ、なんか文句あんのか?」

「ないわ、車も運転できないパイロットさん」

「え?篠崎さん、車運転できないんですか?」

「ちげえよ!!」

「未だに仮免許すら持ってないんですけど?」

「え、うそでしょ?」

「良いんだよ!!戦闘機のほうがカッコいいじゃねえか!!車より!!」

「いや、車を運転できないのはカッコ悪いとおもいますけど……」

「うるせえ!!運転すりゃいいんだろ!!」

「いや、免許持ってないならやめてください!!」

そのころ、レッドスパロウに乗っている垣山とヒロは、ゴモラを人のいない場所へ誘導しようとしていた

レーザー砲を掠らせ、人々から注意をそらし、ゴモラにレッドスパロウを追わせている

「良いのかい？こんなこととして、僕だけじゃなくて、君も処罰を受けるよ？」

「良いですよ、言い出したのは僕ですし、誰かを守りたいっていう行為を手伝っているだけです」

「でも、迂闊だったな……玲奈と真礼が危ないって考えただけで、体が勝手に動いていたよ

やっぱり、父親つてもものはなってみるものだ」

「ツ!!来ますよ!!」

あまりにも煩わしかったのか、ゴモラは歩行ではなく、力強く走りこんできた

レッドスパロウは急速に上空へ上昇し、突進を回避する

しかし、今まで人から遠ざけるために人とは反対方向へ飛行し続けていたが、今は立ち位置が逆だ

レッドスパロウが人々がいる方向におり、ゴモラはレッドスパロウのいる方へ体を向けた

その時、二人が知っているゴモラとは考えられない行為をし始めた
ゴモラの三日月のような角が発光し、三日月型の光線を発射したのだ

レッドスパロウめがけて発射された光線を避けると、後ろの高層ビルに光線が直撃する

高層ビルが破壊され、その破片が逃げ惑う人々に襲い掛かった

「まずい!!」

「こっち向いてくれ!!」

ゴモラの後方へ回り込み、今度はかすめるのではなくレーザー砲を直撃させる

しかし、あまり効果が無いようで、人々の悲鳴のする方へ、ゴモラ

は足を進め始める

ゴモラの背後に近づきすぎたレッドスパロウも、その近づき過ぎたがために、

ゴモラの尻尾による鞭のような攻撃に対応が遅れた

回避運動を何とかとれたものの、機体からはアラートが鳴り響いている

もしかしたら、飛んでいるだけでも墜落してしまうかもしれない、すぐに墜落しないように着陸すべきだ

しかし、運命というべきか、父親の垣山は逃げ惑う人々の波の中に娘である玲奈、そして妻である真礼を見た

機体は墜落寸前、怪獣は人々を狙っているこの状況、絶望に等しいものであった

垣山は一瞬ですら考えず、機体のコントロールを自分に変え、機体をゴモラへ飛ばす

愛する妻のため、そして自分たちの何より守りたい宝……自分の子を守るため

「垣山さんッ!!」

「あとを頼む」

垣山は緊急脱出用のレバーを引き、ヒロだけを外へ強制的に脱出させた

空中に飛ばされたヒロは、すべてを見ていた

角へエネルギーを溜めていたゴモラが、光線を人々へ向け放ったの

を……

光線へ突っ込む、垣山の乗るレッドスパロウを……

「駄目だああああああ!!」

青い光がヒロを包み、光の速さで光線の射線上に割り込んだ

レッドスパロウの機内に振動が走る

覚悟をしていた垣山の目が開かれると、自分が生きていることに驚いた

そして、ウルトラマンヒーローが自分を、自分の家族を守ってくれたことが分かった

「……ウルトラマン」

青いヒーローは、その声が聞こえたのか、頷いたそこに、ゴモラは光線をヒーローの背中へ撃った。シールドを張れないヒーローに光線は何度も当たるとしてもヒーローは、守り続けた。今までで一番の輝きを放つ光線を放とうとするゴモラに何かがかさく裂した。

「命中、篠崎さんお見事です」

「おう、引き離すぞ!!三原!!援護しろ!!」

「朱里、いくよ」

「借りを返しにきたわ……ウルトラマン」

「マニニューバモード、オン!!」

金色の粒子をまとい、ゴモラの体の周りを飛び、威力の高い電子ビーム砲を当て続ける。

ゴモラは対処するため、ヒーローから視線を外した。

ヒーローは攻撃が止んだ隙に、レッドスパロウを地面へ置いた。

「よし!!今だ、助けに行くぞ!!」

「篠崎さんあとお願いします!!」

「はあ!?!お前、俺、車……!!」

「空飛べばいいです!!」

降車した護はホバーのスイッチを押した。

「うおおおおおお!!」

空を飛ぶのなら平気な用で、とても上手く空を飛ぶ篠崎だった。

物陰に隠れた護は、手にフュージョミッションを取り出し、自分の光を溜めた。

今は、恐怖を忘れ、人を守るために

「ヒーローツ!!」

光に包まれ、膝をついているヒーローのカラータイマーの入り、同化する。

赤い色が右手から体を色付け、赤いヒーローになった。

ゴモラのいる方へ振り向き、構える。

『サアーーーーッ!!』

後ろにいる人達や、レッドスパロウにいる垣山たちのため、ヒーローはその場からジャンプし、

ゴモラを飛び越え、ひねりを加えて、再度、ゴモラに向き合う

ヒーローの横にオオルリが飛行してきた

「頼むわよウルトラマン」

ヒーローは構えながら頷き、ゴモラと戦闘し始めた

『サアッ!!』

腰の入った右拳をゴモラにぶつける、後ずさりしながらもゴモラが反撃をするも、

ヒーローはゴモラの攻撃を受けきる

ゴモラの背後からオオルリがM9グレネードをぶつける

ダメージで緩んだ隙に、再度攻撃を加える

そして、背後から攻撃を加えようとするオオルリに再び、尻尾による攻撃が迫るが、

メテオールによる高速移動で避けられる

しかし、このままで落ちが明かない

近接戦闘をしているヒーローに当たったら危険なペシウム弾頭は使えない

M9グレネードでは威力が足りない

屋久島は一か八か、声を出した

「いったん離れてッ!!」

ヒーローの耳にはきちんと聞こえていたようで、ゴモラの胴体に足を当て、跳躍し離れた

「朱里!!今!!」

「スペシウム弾頭!!ファイア!!」

それは本能からか、背後から迫るスペシウム弾頭に対し尻尾を当てて迎撃しようとしたが、

尻尾はスペシウム弾頭の威力の前に吹き飛んでしまう

あたり一帯にゴモラの悲痛な叫びが響く

「躲された!?!」

ゴモラはオオルリに対し、腕からも光線を連続で発射し始めた
高速で避け続けるオオルリだが、あまりに数が多すぎる

何より最悪なのが、メテオールのタイムリミットも近づいていたことだ

『今助けます!!』

ヒーローがゴモラへ駆けだそうとしたとき、ヒーローのカラータイマが赤く点滅し始めていた

早くどうにかしないと……そう思うとヒーローの青い左手が青く光り始めた

『僕のを、使ってください!!』

ヒーローはレットパワー・シユートの溜めの構えをとった

右手に赤いエネルギーの渦がたまり、左手には少しだが、青いエネルギーが溜まる

そのまま腕を胸の前で交差させる、エネルギーの渦が、両腕の全体に集まる

両腕を上下に引き伸ばし、三日月型のエネルギーの刃を生み出した
小さかった三日月の刃はゴモラへ向かいつつ、次第に大きくなった
その刃に、切り落とされたゴモラの尻尾が突如勝手に動き出し、盾
になったが

盾の意味を成さず、さらに切り飛ばされ、ゴモラの体にあたる

先ほどまでの切れ味はなかったが、ゴモラの体に深い傷を作った

『今だ!!』

ヒーローは再びレットパワー・シユートの溜めを始め、

その隙をオオルリがさつき作られた傷口に電子ビーム砲を当てる
ことで埋めた

ゴモラが気づいた時には、チャージが終わっていた

『サァーッ!!』

スペシウム光線と同じ構えから繰り出される赤い光線を直撃で食らい、

ゴモラは叫び声を挙げ爆発した

ヒーローはやることを終え、空へ帰った

「で？勝手な行動をしたお父さんは今謹慎ねえ……」

「でも、ここじゃなくて自宅謹慎なんて……」

「ま、良いんじゃないやねえの？意地でも仕事したがるお父さんが家に帰ったんだからよ」

「え？垣山さん、謹慎処分だったんですか？」

「どういうことだよニワトリ」

「だって、隊長の机に垣山さんの特別休暇の許可証が……」

全員が橘の机に集まった

そこには、GUY Sの隊員として、人を守ろうとした行動に対し、特別な待遇として、休暇を与えると書かれていた

「ん？みんなどうしたんだ？」

その時、橘が休憩を終えたのか部屋に入ってきた

橘に一人、また一人と歩み寄っていった

「私たちには休暇なんてないのに……」

「なんでお父さんだけなんだよ……」

「シヨツピングとか行きたいなあ……？」

「な、なんだ!?私は垣山には謹慎処分を……!!」

「えつと、隊長……ばれてます」

護は特別休暇の紙を遠くから橘に見せていた

「隊長……」

「隊長……」

「隊長……？」

「あ、あはははは……」

その時、垣山は家族とともにとある場所に來ていた

「久しぶりね、あなたと一緒に一日を過ごさせるのも……」

「ごめんな、玲奈もお前も……寂しい思いをさせたよ」

二人腕を組みながら歩く、そこは遊園地だった

人々の楽し気な声や、音楽があふれかえっていた

「パパあ!!ママあ!!」

前から、先を歩いていた玲奈が垣山と真礼に向かい走ってきた

玲奈は垣山と真礼の、二人の間に入り、手を握りあう

二人は、玲奈のやりたいことが分かった

二人は玲奈を持ち上げ、前へ、後ろへと体を揺らしてあげた

玲奈は今までできなかった家族という時間を楽しく過ごしていた

歩いていると、別の親子が前からこっちに向かってきていた

「お父さん!!次はメリーゴーランドがいい!!」

「分かった分かった、ほらお母さんも行くぞ?」

「もう、調子いいんだから」

その家族もほかの家族に負けなくらい楽しく家族という時間を

過ごしていた

光の国―負思念体サイコダーク・負思念体サイコダークⅡ登場―

これは、まだウルトラマンヒーローが光の国、またはウルトラの星と呼ばれるところに居たお話し……

彼はこのとき7000歳、ウルトラマンメビウスが地球に始めてやってきた時よりも年上だった

そんな彼は、1人、修行と技の開発に励んでいた

青い体の彼は、周りからこう言われた

「なぜ体を鍛えるのか？」

何故なら彼は光の国の中ではソコソコではあるが、他の人々より研究が得意だったからである

では、彼が研究ではなく、体を鍛えている理由は？それは自分自身の哀れみだ

彼は自分の弱さが嫌いだった

いつも、強く、憧れの的であるウルトラ戦士になりたかった

しかし、彼が宇宙警備隊に入るには実力も心も弱かった

それは彼の身体の青さ故の問題ではなかった

当然彼はウルトラ警備隊には入隊できなかった

悔しい、そんな気持ちと同時に悲しみも覚え、その心は彼の身体の色のように青くなった

ある時、彼がめげず修行を続けていたときである

その様子をずっと昔から見ていたものがいた

彼らウルトラ戦士たちから神のような存在と崇められているもの

……

他のウルトラ戦士たちとは明らかに違う風貌のものは『ウルトラマンキング』と呼ばれている

ウルトラマンキングは、常に欠かさず体を鍛える彼をウルトラマンキングにしか感じえない何かで見抜いていた

ウルトラマンキングは彼を宇宙警備隊に入隊させるようウルトラ

の父に言葉を送った

しかし、特殊な条件で……

彼は宇宙警備隊の隊員ではなく、見習いとして宇宙警備隊に入ったのだ

見習いとして宇宙警備隊に入るといのは過去、例を見ないものであったが……

見習いとしての経験は、彼を育んでいった

臆病だった彼は少しずつだが、心を強くしていったと、彼自身感じたのだ

しかし、暫くして問題が起きた

彼には様々な隊員を就け、実力だけではなく、戦士としての心構えも教えたかったのだが……

彼の気持ち、心と合う隊員が居なかったのだ

彼の心は、ウルトラ戦士としては優しすぎ、また臆病で隊員として向いていなかった

様々な隊員のもとに就かせるが、その隊員と性格が合わなかったのだ

何とか、偶然彼に就いたウルトラマンタロウが、その時は一番性格が合ったのだ

ウルトラマンタロウはウルトラマンメビウスに様々なことを教えつつ、時折、彼の面倒を見ていた

その後暫くして、彼の教官はウルトラマンタロウから、ウルトラマンメビウスへと変わる

彼の教官であるウルトラマンタロウも彼に付きつきりではいられなくなつたのだ

「メビウス、彼を頼むぞ

お前なら他の誰よりも彼を立派な戦士に育てられる」

「はい!!分かりました、タロウ教官!!」

地球を救ったばかりの宇宙警備隊員、ウルトラマンメビウスの純粋な心は、

優しすぎ、臆病な彼の心と相性は抜群だった

彼と、ウルトラマンメビウスの特訓が始まった

その特訓は彼だけではなく、弟子という存在を持ったウルトラマンメビウスにとっても有意義なものであった

ウルトラマンメビウスは、自分の偉大なるウルトラ兄弟に頼み込み、いろいろなことを学ばせていた

そして自らも、教えられることのすべてを彼に教えていた

彼らはまさに、師弟という言葉が相応しかった

そんなある時、見習いとして最低限の見回りの仕事をしていた彼の目の前に、とあるものが現れた

それはただひたすらに負であった

彼が知る限り、それはダークエフェクトの作り出した怪獣だ

彼は戦おうとした、教えられた構えをとろうと腕を動かそうとしたしかし、身体が動かない

何故？彼は考えた

あの怪獣が何らかの攻撃で身動きを取れなくしているのか？

そう考えたが……答えは直ぐにわかった

彼の身体は彼の故郷から離れていったからだ

何を……している？そう考えた時には答えが出た

自分が恐怖したことを、逃げ出したことを……

自分は強くなどなってはいなかった

偉大なウルトラ戦士たちに鍛えてもらっていたというのに……

後ろを見れば先程の怪獣が姿を人型に変え、さらに悍ましくなり、自分の故郷を襲っているというのに

聞こえてくる悲鳴に、恐怖を感じた

相対し、負と戦うウルトラ戦士達に、何とも言えない感情が彼を襲った

その中には彼の上官であったウルトラマンタロウやウルトラマンメビウスもいた

彼は教えてもらった技を逃げるためだけに使ったもう、愛する故郷に帰れないことを知ったからだ

彼は両腕からエネルギーを集中させ、時空の穴を開き、そこに飛び込んだ

もちろん、その様子を他のウルトラ戦士達は見ていた

その中には当然ウルトラマンタロウや、ウルトラマンメビウスも含まれる

早速、宇宙警備隊員による会議が行われた

光の国を襲った複数の怪獣……ダークエフェクトにより産み出されたサイコダークについてはもちろん

見習いとはいえ、故郷を見捨てた彼の処分もだ

彼は宇宙警備隊員により、搜索、そして、処罰が与えられるという話になった

この場合、処罰というのは宇宙警備隊員見習いの取り消しと、今後、宇宙警備隊に入隊ができないというものだ

これに待ったを掛けたのはウルトラマンメビウスであった

何か理由があるはず、とほかの宇宙警備隊員に訴えるが、誰がどう見ても敵前逃亡にしか見えなかった

そして、彼の処分が決まろうとした時である

会議の際、姿を見せなかった宇宙警備隊隊長であるウルトラマンゾフィー

そして宇宙警備隊大隊長……ウルトラの父が姿を現した

「彼の処分は引き伸ばさせてもらう」

ウルトラの父からの言葉に、隊員一同がざわめく

大隊長であるウルトラの父にただ一人、ウルトラマンメビウスが真意を聞いた

「彼の処分を……引き伸ばす……？」

今度は父ではなくゾフィーが声を出した

「彼がたった今、地球で怪獣と戦い、人々を守ったからだ」

「彼が怪獣と戦ったんですかッ!!」

「落ち着けメビウス……ああ、丁度太陽系の警備隊員が変わる瞬間を狙われたものだった」

もし、彼が地球に行っていないなかったら……地球の被害はもつと大きなものだったかもしれん」

「その功績を無下にはできん、ただ、皆の気持ちも同じく否定はできんだからこそ、処分を引き伸ばしにするのだ」

静まり返った議会、光の国と地球が同時に襲われる事態、想定外の出来事である

確かに、今は彼の処分についてではなく、現状の確認が最優先の事項であった

少し時間は戻り、ウルトラマンゾフィーとウルトラの父は会議に向こうとしていた

敵前逃亡……この行為をしてしまったウルトラ戦士はいなかったわけではない

ウルトラマンゾフィーもウルトラの父も、思い当たる処分は功績の取り下げと宇宙警備隊からの除籍のみだ

その二人の前に、ウルトラマンキングが降り立った

「ウルトラマンキング……!!」

彼が下りてくるといふのは只事ではない……

少し前に彼を宇宙警備隊に入れろと言われた時でさえ、何事かと思っただけだから

「彼は今、地球で戦っている」

ウルトラマンキングは彼の持つ秘具で、空中に彼が地球で地球人と共に怪獣を倒す映像をモニターに出した

「次に、彼がこの星に帰ってくる時まで、彼に地球を託す……

処分はその時に行うがよい」

二人はほかでもないウルトラマンキングに礼をした
顔を上げると、そこにはすでにウルトラマンキングは居なくなつて
いた

しかし、代わりにあるビジョンと音色が聞こえた

三つの炎、そして忘れもしない鐘の音である

二人は互いに見合つた

「まさか、あれを……」

二人の考えていることは同じであつた、ビジョンと音……これだけで
全てを理解できるのは

ウルトラマンキングの底知れぬ不思議な力おかげであろう

彼の処分は決して功績の取り下げや、宇宙警備隊の除籍なんかでは
ない

それは、処分というべきものでもない……それは……

復讐の捕食者Ⅰ―再生同化怪獣ボガール・古代怪獣グドン登場―

ある日、隊長である橘が、隊員全員を呼んでの会議を行った

「先日のごモラがレーダーに映らなかつたわけが分かつた」

橘がモニターにあるものを映した、それはこの間ヒロがダークエフェクトと呼んだものだった

「レーダーに映らない怪獣が出現したときだけ、ダークエフェクトが一部、薄くなる

現段階の調査では、ダークエフェクトが怪獣を生み出し、

また、レーダーに映らないようにしていると判断した」

三原が挙手し、意見を言った

「じゃあ、ダークエフェクトで生み出された怪獣はどうかやって探知するんですか?」

「それについては、全国の天体観測局に協力を頼んである、もちろん各GUY Sも観測し、異常が起こり次第、

警戒態勢を敷くことにしている」

次に垣山が挙手、当然意見を聞いた

「今までの怪獣も攻撃が通じたように、こっちのダークエフェクトには攻撃は通じないんですか?」

「ふむ、どうやら霧のようなものでこっちの攻撃はすり抜けてるみたいなんだ、

でも向こう側に人も機械も通り抜けられないんだ

GUY S スペーシーがいろいろ手を尽くしているんだが、まだ何も成果はあまり期待できない

さらに困った事態も発生している」

橘がモニターの映像を変えると、そこにはこの前ツインテールと同時に出現したグドンの姿だった

地中から出てきたグドンはしばらく歩行を続けていたが、その映像に何かが通った

途端、グドンの姿が消えたのだ

「この映像は後に解析に回された結果、ある怪獣の存在が確認された」
橘は解析された後の映像を流す

先ほどの映像のスロー映像であったが、そのスロー映像の中を高速で動き、体全体でグドンを捕食する怪獣がいた

その怪獣の名は……

「ボガール……!?!」

護の口から怪獣の名前がこぼれ出た

自身の好きなウルトラマンメビウスと戦った怪獣だからこそ、その名は知っていた

「この怪獣、ボガールは30年前のウルトラマンメビウスと交戦した同種族の別個体と断定された

ボガールの取り込んだ怪獣のエネルギーにより、奴の死亡時、爆発範囲が広がる特性を考慮し、

早期の駆逐が決定された

ボガールが取り込んだのはまだグドン一体のみだが、GUY Sが確認できたのは一体だけだ

今日より以後、ボガールが発見された場合、このポイントにやつを誘導する」

次に表示されたのは、木々の生えていない島であった

「30年前、ボガールの強化形態とされるボガールモンスをここに誘導した島だ

ここにボガールを誘導し、電磁フィールドで隔離し、設置されている各種兵器で攻撃をし、駆除する」

垣山が拳手し、質問をした

「もし、誘導できなかつたら?」

全員がその答えを知りたく、橘へ視線を向ける
出された答えは非情なものだった

「最悪……最悪なケースだが、周辺の民間人避難が完了せずとも、GUY S Japanはボガールを攻撃せよ……

とのことだ」

この答えにはメンバー全員が驚いた、言った本人である橘も苦しいのである

「えッ!？」

「民間人を巻き込むんですかッ!!」

「何バカげたこと言ってるんだ……」

「うそでしょ……」

「……なるほど」

護は一人、何かを理解したかのような振る舞いを見せた

「後々の被害を考えたんですね」

「そうだ、これは各GUY Sの隊長、各GUY S総監督、総本部の上層部達の総意だ

ただ、何も彼らが民間人を何とも思っていないわけではない

全員、苦渋の決断だ……ボガールは放置すればエネルギーを蓄え、被害はさらに拡大する

どうしようもなくなった時に、被害を抑えるためだ

今でも上の人たちはどうかしようと頑張っているよ」

会議は終わり、護は外を歩いていた

基地を飛び出した……というわけではなく、買出しをしに町まで来ていたのだ

「せめて徒歩はやめてほしいよ」

ナンダは戦闘用の車両であるため、出撃命令が下されてないため、乗ってこれなかった

しばらく歩いていると、何か音がすることに気づいた

音がするであろう方に目を向けると、白杖を持った若い女性がいた
護はいつもならすぐに買い出しのために再び歩き出すのだが……

その場から動けずにいた

護はその女性の綺麗な目に虜になっていた
また、女性もその場から動かなかつた
なぜなら、彼女は護に会いに来たのだから

「あの……ウルトラマンさん？」

「……え？」

護は言われたことが分からなかつた

いきなり正体がバレたこともそうだが、女性に見とれていて何も聞
いていなかつたからだ

「ウルトラマン……の人ですよ？」

「あ、ああ!!そうか!!はい、GUY Sの人ですけど……よくわかりまし
たね」

女性の言葉であなたはウルトラマンですか?からGUY Sの方で
すか?であると思つた護は焦りながらも答えた

「ふふ……GUY Sの方なんですか?覚えておきます」

「え?何？」

「ふふ……私、目が見えないんですよ?GUY Sの皆さんは隊服を
着ていらつしやるそうですけど……」

私には見えませんから……言葉どおりですよ、ウルトラマン……で
しょう?」

護の顔に冷や汗が流れ始める

なぜウルトラマンであるとバレているのか、焦つて言葉が出てこな
い

護はこれ以上このひとと居るのはまずいと思い、その場を離れよう
とした

不思議なことに、目が見えないはずの彼女は、目が見えないと思つ
ている護が、

自分から離れていくのを目で追っているのだ

彼女は白杖を地面につきながら、ゆっくり護のほうへ歩いて行く

「えッ!？」

「どうしたんですか?」

「見えてるんですか……?」

女性は口元に手を持って行き、クスリと笑った

「いいえ、貴方がどんな顔をしているのかも、どんな服を着ているのかも……私は見えませんよ」

なら何故？と護は考えたが、どう考えても目が見えているとしか考えられない

試しに手を顔の前で振ってみると、手を最初目で追いかけた後ろに回ってみると後ろを振り向いた

護はついに首をかしげた

少しすると、護と彼女の元に、二人の男性が近寄ってきた

女性が勢いよく、顔を動かし、二人を見ると、護の背中に隠れるように抱きついた

「え、ちよつと……」

戸惑う護だったがそこに二人の男性が目の前までやってきた

「えつと、彼氏さん？」

「え？違いますけど……？」

「ああ、よかった!!俺達、その人マークしてたんだ」

マーク？一体何のことだ？と思った護だったが、すぐに理由がなかった

「おねえさん、ちよつと隠れてないで遊び行きましょ？」

「変なことしないし、ファミレスとか行くだけだから……僕たちおねえさんと仲良くなりたいたんだよ」

二人の男性が声をかけるが

「嫌ッ!!」

バツサリと断った

「いや、ほんとに何もしないんだけど……」

「流石に傷ついたわ……」

すると、一人は彼女を、一人は護に組みつく

「おい!!お前ら!!何しよう……!!」

護は声をあげるが、もう一人は女性を連れてどこかへ行こうとする
これはもうただの犯罪だ

「おい、早く連れてけ!!」

「させるかって!!」

護が男性を突き飛ばした時だ、男性は軽く10m程吹き飛んだ

「あれ?」

「はあ!」

その後、道を激しく転がっていく男性

護はその力に驚いたが、すぐに女性のことを思い出し、今こっちを向いて驚いてるもう一人の男性の元に駆け付けた

男性は急いで自分のポケットの中から何かを取り出そうとするが、その前にその腕を護が掴んだ

「いいいいッ!?痛い!!痛い!!痛い!!」

とても護の腕からは想像もできない握力で、男性はたまらず、その場にしゃがみ込む

「放せッ!!放せよーッ!!」

護が手を離すと、男性はその場に伏せていたが、先ほど突き飛ばされた男性とともにどこかへ去って行った

「え?」

護はまたもや首をかしげた

その時、後ろからあの女性が体を抱きしめてきた

護が顔だけを後ろに向けると彼女は体を震わせ、眼から涙を流していた

よほど怖かったのだろう

護はどう言葉をかけたらいいのかも分からず背中を貸していた

女性の目には見えていた

先天盲である彼女には色というものも形というものも見たことはない

しかし、彼女には幼いころからとあるものが見えていた
それは光だ

ただ、普通の光というのなら、数多くいる視力のない人たちでも明
暗を知覚することはできる

しかし、彼女が見る光は太陽光などではない
彼女見るのは命の光であった

命あるものが持つ、心の光を彼女は見る事ができた

復讐の捕食者2―再生同化怪獣ボガール登場―

その日、護は女性を家まで送り、買い出しをしてGUY'S基地に戻った

遅いと全員に叱られてはいたが、訳を説明すると褒められた

翌日、昨日護が買ってきた茶葉で紅茶をみんなで飲んでいた時にそれは起こった

「ん？エレベーター前に誰かいるな？」

橘がそういうと、警備カメラを拡大する、そこには昨日護があった女性と垣山の妻、垣山真礼と娘の怜奈がいた

怜奈と女性は手を繋いでおり、女性は赤い薔薇の花束を持っていた
3人は、エレベーターについているコンソールパネルを操作してエレベーターに乗った

しばらくすると、橘たちのいる部屋へ入ってきた

「真礼、怜奈、よく来たな……その方は？」

垣山は怜奈の手を握っている女性のことを二人に聞いた

「道中で偶然、会いたいかたが居たってお願いしてきたの」

「偶然？その人はGUY'Sのライセンス持っているのか？」

真礼はしばらく考えた後、両手を合わせて垣山に謝った

「大丈夫です、私を知っている人に会いに来ただけですから」

女性は頭を下げた謝り、また会いに来た人物を探るように、周りを見渡していた

「あの、あの人は……」

「……あの人？」

今この場にいない人物は、ヒロと護の二人だが、そのどつちかはわからない

すると、女性は壁のほうへ歩き出した

「お姉ちゃん、そっち壁だよ？」

怜奈に連れられるまま、扉の前まで移動する

扉が開くと、そこには訓練を終えたヒロと護が部屋に入ろうとして

いた

護は、女性を見ると驚くと、女性はいきなり護に抱きついた

「エエツ!!」

ヒロやほかの隊員たちも驚いたが、この中で一番驚いているのは護本人である

「あ、あの……なんでここに?」

「あなたに会いに来たの」

女性は少し離れ、手に持っていたバラの花束を渡した

「この前のと、あの時のお礼です」

護はそのバラの花束を受け取った

「別にお礼なんて……」

「では、お礼を言いに来ただけなので……」

女性はわざわざここまで着たにもかかわらず、すぐに帰ってしまうようだ

「あら、坂牧さんもういいんですか?」

「はい、また来れますし大丈夫です」

真礼も垣山に渡すものを渡せたので、一緒に帰るようだ

3人は今通ってきた扉を開けて、部屋から出て行った

「いったいなんだったんだ?」

まるで嵐だったなどと、篠崎が護を見ながら言った

「にしてもロマンチックじゃない?きれいな女性からバラの贈り物なんて」

「朱里にも私からバラの花束送ったことあるじゃない」

「異性からの贈り物の話よ」

三原と屋久島は昔のことを懐かしんでいたが、三原があることに気付いた

「ん?1…2…って、12本?」

「どうかしたんですか」

愛は頬に手を当て、黄色い声を上げるだけで、訳を教えるはくれなかつた

護は訳を教えてもらうため、もらった花束を机に置こうとしたが、

そこにひとつの黒い花が置かれていた

「ん？なんだこれ？」

護はその花を手に持ち、周りを見渡すが、誰もこの部屋に花を持ち込まない人たちであった

「あ……クロユリ!!キヤー!!ロマンチック!!」

「今日の三原はテンションがおかしいな……」

「護君!!きつときつきの女の人が忘れちゃったんだよ!!持って行ってあげなよ!!」

きつと喜んでキスとかされちゃうかもよ!!」

「エエツ!!いやいや、そんななかでもないですよ!!」

「男でしょ!!いいからそれ持って……いつてー!!」

三原は護の背中を押し、扉にぶつけながらも女性を追いかけさせた
三原は額の汗を腕で拭った

「ふうー、幸せ……」

「屋久島、三原ってあんな奴だっけ……?」

「ほら、愛つて少女漫画とか好きだから……そういうのが好きで……」
そんな中、ヒロは机に置かれたバラの花に必死に鼻を近づけにおいをかいでいた

「何やってんだよお前」

「この花、なんかおかしいんですよ、花の匂いがなくて……」

「これは造花、フェイクフラワーという本物の花を模して作ったものなんだ」

橘は花束から一本バラの花を取り出し、ヒロに教えてあげた

「へえ……匂いがしないのはそのせいなんですか……」

「ヒロ君、植物に興味があるなら今度一緒に植物園にでも?」

「え!!いいんですか?」

「隊長?また私たちの休暇はなしですか?」

「いや、今度は正式に休暇を取ろうかなあ……って」

「ふーん?」

橘の額には冷や汗が流れていた

「待ってください!!」

そのころ、護は三人のもとに追いつき、女性にクロユリを差し出していた

「これ、忘れ物です……」

それを見た女性は、苑花を受け取ると、そのまま手を握り続けていました

「あの……何でしょう?」

護もその女性の目に見とれていた

「自己紹介は……まだでしたね、坂牧由依です

あなたの名前は?」

「あ、日野護です」

由依は手を引き寄せ、そのまま唇を重ねた

「お母さん!!チューしてる!!」

怜奈はその様子を見て先ほどの三原と同じようにテンションをあげており、

また、母の真礼も昔を思い出しているのか、羨ましく二人を見ている

唇が離れ、由依は再び護に抱きついた

幸せそうに吐息を出し、暫くしてそつと離れた

「また来ます、護さん」

そう言つて、護の唇に指を滑らせてから、振り向き、今度こそ三人は家に帰って行った

一人残された護は、一体なんだったのか理解できず高鳴る心臓の音もよくわからず、

結局、十数分間そのままそこに立ちつくし、様子を見に来たヒロと三原に回収させられた

その日の夜、G U Y S J a p a nの秘密基地の近くで基地のある場所……護の居住地点を見つめている何者かが居た

夜の月の光に照らし出されたそいつは、自身の唇に舌を這わせた

「ウルトラマン……ウルトラマンを食べることこそ、至高喜び……ま
ずい怪獣なんていらぬ……」

食べさせてもらうぞ？私を殺した代わりにッ……!!」

黒い霧が周りを囲み、基地のすぐ前に、ある怪獣が姿を現した

その怪獣の名は、ボガールだった

復讐の捕食者3―再生同化怪獣ボガール登場―

ボガールが現れる少し前、G U Y S基地ではちよつとした事件が起きていた

突然、護が基地内で倒れ、まったく動けないほどの高熱を出した。何も体調が急に崩れることは珍しくはないが、護の場合、つい先ほどまで体調が崩れる兆候も何もなかったのだ。

ヒロと仲良く話していたらいきなり倒れるというのは、

何らかの持病が疑われたが、護の健康診断では持病はない。

ただ、診察に来た救護班の診察員の話では

「ホントに突然の発熱なんですか？ 40度越える突然の発熱なんて……しかも何らかの感染症でもないなんて……」

現状は様子を見るしかできません、水分を取らせて様子が変化したらすぐに呼んでくださいね」

原因不明の発熱ということだった

護は自室のベッドに寝かせられ、ヒロが面倒をみることになった

「護さん、大丈夫かな……」

「おいヒロ、一番近くにいるはずのお前がなんてなっさけない事言つてんだよ」

ヒロには気が気ではなかった、ウルトラマンである彼ら自身病気になることもあるが、

そのほとんどは外敵によるもの

地球の医療機関の粹があるG U Y Sの医療班でも分からないということは、

外敵からの攻撃、怪獣や宇宙人たちの……

しかし、ピンポイントで護が狙われた理由が分からず、またその時間……

そこまで考え、ヒロには一人の人物を思い浮かべた……

その時、ヒロは突然立ち上がった、自身に向けられているおぞましい悪意を察知したからだ

同時に基地内に警戒音が鳴る

『ボガールが出現!!場所は……え!?基地の東1キロ!!』

あまりに基地に近すぎる、この場所は極力極秘にされており、親族や関係者にしか知られていないはずである

まさか、偶然基地の近くにボガールが現れたということでもない
情報が漏れたと考えるのが妥当である

ヒロは護をみた

未だに高熱に苦しみ、警戒音のうるさい音でも起きれないほどだ
このままウルトラマンに変身したら、もしかすれば死んでしまうかもしれない

ヒロは護の部屋を出た

「おい!!早く出撃させるぞ!!俺達整備班が手間取っちゃ篠崎達が出られねえだろ!!」

基地内は混乱の最中だった

当然だ、今までは遠くにいる怪獣が今では目と鼻の先にいるのだ

しかも、狙われたのはレッドスパロウ、オオルリ、ナンダの整備時間中だった

メテオールという人智を超える兵器を積むこの3機には繊細な整備が必要、

そのため整備を中断して急に出撃させるとどうなるかは分からないのだ

そんな時、ヒロのメモリーディスプレイに通信が入った

『緊急事態の為、歩兵戦での対応する!!基地からも援護はするが、決して無理をするな!!』

歩兵戦、それは現時点でのGUYスクールの全員が行ったことのないものだ

それだけ、ビークルが優秀だったということでもあったが

ヒロはトライガーショットを確認し、一番近い外への通路から外へ向かった

すでに、ボガールは基地のすぐ近くに来ている

基地からはシンクロトロン砲が発射されているが、避けられる、または防がれている

すでに篠崎達もトライガーショットで応戦しているが、効果が薄い
「このままじゃみんなと基地が……でも……」

一人で倒せるのか……?」

護はいない、今まで怪獣を追い払えたのも倒せたのも、護の存在があつたからだ

今は、護がおらず、レッドスパロウ、オオルリもない

すると、ボガールが人間であつたら口に値する部分から、光弾を発射した

光弾は篠崎たちのいる大地をめぐり、吹き飛ばした

「……やるしかないんだツ!! 僕だけでも……弱くてもツ!! 戦うんだ!!」

ヒロの身体から光が溢れ、その体をウルトラマンへと変えた

青い身体 of ウルトラマン、ウルトラマンヒーロー、赤い色のないスタンダードな姿だ

『ティア!!』

ヒロは構え、ボガールと向き合う、ボガールは現れたヒーローに対し、テレパシーを送った

『現れたな……ウルトラマン!! 私が……喰う!!』

すると、ボガールは今までの遅い動きから一変、素早くヒーローをリアアットの要領で倒した

ヒーローは起き上がりざま、手のひらをスラッシュユキさせ放つエフェクト・ショットを放つが、

ボガールは何ともないような様子で受け止めてしまう

ヒロはボガールに向かい走り出す

その時、何かを察知した感のように、護は部屋で起きた

激しい頭痛、熱い身体が護の動きを鈍くさせる

扉の前で倒れるが、謎の予感から今倒れてはいけな……そう

思っていた

部屋を出て、壁伝いに一步ずつ外へ向かう通路内に謎の振動が起き、再び倒れる

耳に雑音も聞こえる……その時、耳に頭に、声が聞こえた

『……………』

雑音とも違う声は、声といってもいいのか分からないくらい小さくさであつたが、

護にはそれがヒロのものだと分かつた

「ヒロ……戦っているのか……？」

護は外に一步、また一步、足を進める

護が外に着いた時には、そこには胸のカラータイマーが赤く点滅しているヒーローと

追い打ちをかけるボガール、遠くで必死に援護をするGUYスクルーたちだつた

護はフュージョミツシヨンを取りだすが、光が溜まらない

「くそっ!!あああッ!!」

その時、さらに鋭い頭痛が護を襲つた

フュージョミツシヨンは護から転がり、遠くに行つた

護にはもう目の前に何があるかが分からなくなつた、目が霞み、頭は割れそうで、身体は棒のようだ

それでも、ヒロの為、みんなの為に、変身をしようとフュージョミツシヨンを取ろうとしたが

護が手に取つたのは別のものだつた

あいまいな手の感触だつたが、その形はトライガーシヨットと瓜二つだつた

護は、霞む目で灰色の蠢く怪獣に狙いをつける

腕が震え、ぶれる

引き金を引く、一発目は狙いがそれ、明後日のほうへ飛んで行つた
「ヒロを……助けるんだ!!」

一瞬だけ、目の前がクリアになる、その時に引き金を引く
弾丸はまっすぐボガールの身体に当たる

今まで、どんな攻撃をされても怯みもしなかったボガールが後ずさるほどの威力を發揮した

ヒロは、攻撃がやんだことに違和感を感じ、弾丸が飛んできた方を見る

そこには優しい微笑みをした護がいた

護はそのまま後ろに倒れた

ヒロはありがとうと心でお礼を言い、ボガールに向き直る

『ボガール!! そうだ、僕は一人じゃない!! だから負けない!!』

ボガールは光弾を複数ヒーローに放つ

ヒーローはエフェクト・シールドに似たものを展開した

ボガールの光弾はシールドにぶつかりそのまま渦のように回転し始めた

『ティ……アアアアア!!』

その渦の塊を自身で逆方向で回転させ放つ、エフェクト・ブルーリアクトを決めた

青の渦はボガールの身体をえぐるように回転しながら空中へと飛ばした

ボガールは苦しみ、黒い霧になって消えた

今、ヒーローは護の思いに答え、ウルトラ戦士としてまた一つ成長したのだった

後日、整備班に対しなぜ、同じ時間で全機のメンテナンスを行ったのかを調査されたが、

計画書にそう書いてあったとされ、上層部がそう計画したと判明されたが、

上層部の人たちはそんな計画を出してはいないと判明

この謎は謎のまま終わるのだった

G U Y S よ、誇りを胸に1ーマーケット怪獣デットン
?・負思念体キンググジョー登場―

ボガールが現れた次の日、あらゆるメディアで、ある記事が公開された

『G U Y S J a p a n !! 基地を襲撃される!?!』

その記事は日本だけではなく、世界中で公開された

当初は混乱を避けるため、情報の統制を敷いていたが、

まるで統制なんて無かったかのように、情報が公開されてしまった

基地の場所が民間に公開された場所と違うところを追及され、異星人らに襲撃されないように、

基地を別の場所に設置していたことを公表すると、なぜそこを襲撃されたのかと追及される

ついには翌日に書かれた記事がG U Y S 存亡の危機を引き起こすほどだった

『ウルトラマンがいないと何もできないG U Y S 』

G U Y S J a p a n の中では、テレビの出来事を知っているためか、全員が意気消沈していた

無能と言われればその理由も分かる

そして、その無能といわれているのを一番痛感しているのも彼らなのだ

もしウルトラマンがいなかったらどうなっていたのだろうかというも心の中で考えていたのだから

そんな中、司令室に隊長の橘が暗い顔で入ってきた

「みんな、おっはよう」

途端明るい顔に戻った

「なんだよ隊長、明るくなれることなんてなんもないだろ」

「いやね? いいニュースがいくつかあってね、さすがに落ち込んではいらんなくてね

まず、一つ目、護君の体調が回復したよ」

「本当ですか!!」

「ヒロ君、本当の事だよ

まあ、それもいいことなんだが、封印処理されていたマケット怪獣が使えるようになった

今日はその試験も行う、これによって戦力が上がるはずだ

そして、一番のビックニュースで、実は仲間が一人増える」

これには流石にみんな驚いた

誰が新しく入るのかということではなく、年二回の募集は終わっているはず

「もしかしてほかの部署からの移動ですか?」

「いや、昨日新しく私がスカウトした、入ってくれ」

扉が開くとそこには白杖を持った女性、坂牧由依がいた

「新しくGUYSSクルーとして入隊した坂牧由依です、戦闘はできませんが、どうかよろしくお願いします」

「彼女は盲目で目が見えないが、ちょっと特別だね……とある事をしてもらう」

これから私たちはマケット怪獣の試運転をしに出かけるぞ」

『G I G !!』

各隊員が準備を進める中、ヒロは坂牧を見つめていた

『この人が……護さんを……だとしたらどうにかしないと……!!』

山に囲まれたとある場所、30年前にもマケット怪獣を試験するために使用された場所だ

「で、隊長、どのマケット怪獣ですか?ミクラスですか?ウインダムですか?エレキング?」

「いや、それが分かってなくてね、封印処理されてるものから適当に渡されてるからね」

「それってどうなんです……?」

「まあ、使ってみればわかるさ……ところでヒロ君と由依君は?」

「あれ？いない……いつの間に」

ヒロと坂牧がいなくなつた時、二人はほかの隊員の見えない木々の中にいた

「どうしたんですか？私も試験を受けなきゃいけないんですけど……」

「少しだけお話が……」

「お話……ですか？」

「はい、この前基地に来た時、護さんに何かしましたか？」

ヒロは真剣な顔で

「……しましたけど？」

「やっぱり……!!あなたは!!」

ヒロが坂牧の肩をつかもうとしたとき

「おい二人ともこんなところで何してんだ？」

二人を捜しにきた篠崎が声をかけてきた

「おいおい、なんか揉め事かよ……」

その時、三人のメモリーディスプレイに通信が入る

『緊急事態だ!!早く戻ってきてくれ!!』

三人はとりあえず、テントの張つてある場所に戻つた

「一体どうしたんですか!？」

「どうしたもこうしたも見ればわかる」

ヒロ達があたりを見渡すと、黒い霧……ダークエフェクトが集まり始めていた

「まさか!!」

霧は少しずつ形を作つていき、そこにはロボットが現れた

橘はそのロボット……怪物に覚えがあつた

「あれはドキュメントUGにあつたキングジョーか!？」

「どうするんです!?!試験だからってレッドスパロウも何も……」

慌てる隊員たちに、垣山が何かに気づいた

「あのマケット怪獣の試験できるのでは？」

「この一言には全員が目を点にした」

「ほら、ちょうど敵の怪獣がほしいなあって皆さん言ってたじゃないですか」

「チャンスですよ。」

「でも、あのマケット怪獣がなんなのかさえ分からないんだぞ!」

「橘は慌てるが、そこにナイトビジョンゴーグルのようなものを持った坂牧が言った」

「いいんじゃないですか？私もこれの試験できますし、サポートします」

すると、先ほどまで全員で慌てた雰囲気はどこかへ飛んでいったかのように、明るい顔になっていった

「新入隊員の同じ女性に負けてはられないからね……愛、私たちの意地、見せに行こう」

「うん、GUY Sはこうでなくちゃ!!」

「ほら、女性陣に負けてるぞ」

「あああもう!!男の戦いってやつを見せてやる!!」

「何それ？私たちが女だからって馬鹿にしてる？」

「してねえからさっさとあいつ片づけるぞ」

「じゃあ、言い出しっぺのお父さんがマケット怪獣使ってね」
「え」

「ヒロ君は目の見えない由依さんと一緒ね」

「エエエツ!?!」

彼らの心には、世間からの批判などの不満も残ってはいなかったただ、彼らが決して軽い心の持ち主だからではない

彼らの心には受け継がれている炎があるからだ

決して彼ら以外のだれもが彼らを信じなくなっても、彼らは人々を守るために戦う

彼らの心にGUY Sの誇りがある限り

「GUY S!!:s a i l y g o o!!」

『G I G I!!』

説明回―読まなくても問題はありません―

本来はあとがきに書くようなことですが、書ききれなかったものや今さらな設定、

人によつては読まない方や、説明回を最初に見ている方が多そうなので、書いてみます

どちらかというところ、列伝のような説明のほうが好きですが、そのうち列伝風に書きますのでこの回は簡略化します

メテオールの封印処置とは

30年前の最後の戦いの数年後、怪獣の出現が収まったと判断したため、

必要最低限のメテオールを残し、新たなメテオールの開発を禁止、危険なメテオールは、上層部がとある場所で封印処置をしている封印処置されたものの中にはマケツト怪獣も含まれている

ウルトラマンヒーローの形態について

ウルトラマンヒーローにはいくつかの形態が存在し、

ヒロが単体で変身する、ウルトラマンヒーロー・モードスタンダー

ト

護と融合し、赤い身体に左手が青い形態のモードレッド

反対に、青い身体に右手が赤い形態のモードブルー

この3つが存在している

青の身体だと、シールドの能力が高く、またそのシールドを変形させる能力もある

赤い身体は青い体よりもパワーが高く、タフネスな形態、光線技は威力が高い

ダークエフェクトとヒロのエフェクト？

ダークエフェクトとヒロの使うエフェクトという技、色が違うだけでその存在は同じなのだろうか

名前が同じな点も気になるどころだ

ちなみに護の技はエフェクトを使っているが、ほぼサポートの域

で自身のエネルギーを使っている

このため、モードブルーは低燃費の技ばかりである

研究員ヒロ

光の国ではそれなりの立場だったヒロ

何かを研究していたのだが、何を研究していたかは不明

ものを作る技術も高く、実はフュージョミッションはヒロの開発したものだもの

正体を詐称するウルトラマン

ヒロがどうやってG U Y Sのライセンスを持っているかだが、実はライセンスをほかの人物から複製したものだ

いろんな技を教えてもらったウルトラマン

光の国での修行時、いろんなウルトラ戦士に教えてもらった技を再現度は低いがすべて覚えている

しかし、護がバーチカルギロチンをまねられたのは教えられたものではなく、護が知っていただけの技である

ちなみに技は時と場合を選んで有効に使いましょう

実はレオの弟子？

ウルトラマンヒーローがエネルギーをためる際の構えはレオやアストラの構えに酷似している

ただ、それは本当の偶然だけでレオやアストラとのかかわりはない

当然、背面バリエーションもない、のちに生まれるゼロの兄弟子というわけではないです

まあ、こんな感じでいいと妥協してみます

本格的に説明するときには列伝みたく書きますので、よろしくお願います

時間的に次回は明日の朝ぐらいには書いて投稿します
では

G U Y S よ、誇りを胸に2ーマケツト怪獣デットン
？・負思念体キングジョー登場ー

キングジョーが現れた瞬間、篠崎と垣山はキングジョーのよく見える山の中腹へ向かい

屋久島、三原、坂牧、ヒロは狙われにくい、木々の生い茂るふもとの方へ向かった

垣山はメモリーディスプレイを使用し、橘と連絡を取った

「隊長!!マケツト怪獣はもう使っていないんですか!？」

「ああ、許可する!!マケツト怪獣は戦闘機と違って1分しか使えない、気をつけろ!!」

G U Y S に配備されている戦闘機のメテオールは30年の年月で使用時間が延ばされているが、

マケツト怪獣はチャージされているマケツト分子の容量の問題で1分の制限になっているのだ

垣山はメモリーディスプレイにマケツト怪獣の入ったカプセルを装着する

ディスプレイにはとある怪獣が表示された

「これは……まさか!？」

垣山はキングジョーめがけ、トリガーを引いた

『リアライズ』

「いけ!!ゼットン!!」

垣山はディスプレイでゼットンの姿が表示されていたのを見ていたのだ

カプセルは外見では中身が分からないようになっていたので最初はミクラスかと思っていた垣山

垣山自身はウインダムが出てほしかったが、怪獣の中では最強と言われているゼットンだったのだ

確かにゼットンの実体化した、初代ウルトラマンを倒したと言われる最強の怪獣のデータが……

高らかにゼットンと言った垣山だが、隣にいた篠崎から言葉がこぼれた

「ゼットン……?」

「ん?……あれ?」

それは二人だけが抱いた疑問ではなかった

橘や屋久島、三原も最初は驚いていたが、その後がっかりしたような、落胆した顔に変わった

そう、何かが違ったのだ

ゼットンではある、ゼットンではあるのだ

ただ、可愛らしい……凶体だなあとその場にいた全員が思ったことだった

その正体はウルトラマンジャックが地球にやってきたときに襲いかかったゼットンと非常に似ていた

「どうすんだよお父さん……」

まさかこんなことになるうとは思わなかった垣山だったが、

使用時間が1秒、また1秒と減っていつていることに気づき、ふつきれた

「ゼットン!!」

「ゼットンだよ」

「……ゼットン!! やってしまえ!!」

その様子は30年前のとある日にとても似ていた

ゼットンは両腕を前に突き出し、キングジョーに突っ込んだ

その様子は最初に確認されたゼットンからは予想もつかないほどのアグレッシブさである

代わりに恐怖やミステリアスさはないと言えるが

しかし、見た目に反し、ゼットンはキングジョーにぶつかると、キングジョーを跳ね飛ばした

「よし!! 先手必勝だ!!」

その時、ふもと近くにいるヒロと坂牧だが、目の見えないという割に、

補助もなしにすすいと前に進む坂牧にヒロはより一層坂牧を怪

しんだ

「ここら辺ですね、さてと」

坂牧は、左手に持っていた装置を被ると、キングジョーのいる方へ眼を向け、装置のスイッチを複数回押した

「何をしているんですか？」

「マーカーをつけているの、ダークエフェクトの弱点をこの装置でしるしつける……」

メモリーディスプレイで見えるはずです、確認してみてください」
ヒロがメモリーディスプレイを見るとキングジョーの身体にいくつかの赤い点が付けられているのが分かる

主に、キングジョーの腹部に集中している

「目が見えないんじゃないんですか？」

「光は見えるの、心の光も、命の光も……」

だから、命あるものは見えるの……だから、あなたもウルトラマンであることは知っているの

安心してください、護さんの為にも何も言いませんよ？

私は護さんを守るためにG U Y Sに入ったんです、そのために協力します

だから、安心してください……私は敵ではありませんよ？」

「信じられません……あなたが来てから護さんは体調を崩しました、それと同時に怪獣が現れた

今回も、同じ場所にキングジョーが現れた……」

「……それって、もしかして今日言ってた何かしたかって質問ですか？」

「そうです!!」

坂牧はスコープを頭に上げ、笑っていた

「恥ずかしいことを言わせようとするんですね……護さんから聞けばいいんじゃないですか？」

坂牧はメモリーディスプレイを取りだし、橘に仕事が終わったことを伝えた

「では私は戻ります、ウルトラマンさん

護さんももうすぐ来ますし、がんばってくださいね?」

そう言い、一人でテントまで帰ろうとする坂牧

流石にヒロは止めた

「一人で帰るなんて無茶です!!」

坂牧の手をつかむが、坂牧に優しく手を払われた

「さっきまで疑ってた人をほおって置けないなんて、やっぱり優しい方ですね」

「え……?」

「大丈夫ですよ、一人で行けます」

坂牧はそのまままっすぐテントへとむかった

『坂牧君がキングジョーの弱点を教えてくれた!! 奴の弱点は腹部だ!!』

橘が通信で状況を知らせると、全員が動いた

「愛!!」

「はいはい!!」

二人が、トライガーショットを使い、アキュートアローを腹部に向けて放つ

が、ゼットンと戦闘をしているため、はずれ、山に当たる

「お父さん!!」

『すまん!! 抑える!! ゼットン!!』

ゼットンは垣山の命令通り、キングジョーを後ろから抑え込んだ
若干動いてはいるが、狙うなら今のうちだろう

キングジョーの腹部にめがけて撃つ、撃つ、撃つ

キングジョーは倒れ、動きが鈍くなる

しかし、倒れているキングジョーを叩くゼットンは容赦がなかった
しかし、優勢な状況だったが、時間が来てしまった

『バニッシュ』

そう、マケット怪獣ゼットンの使用限界時間だった

こうなると、トライガーショットしかもっていないGUYは不利になる

再び、腹部にアキュートアローを放つが、急所を外されてしまう

その時、青い光とともに、ウルトラマンヒーローが現れた

この間と同じ、青い身体のみのもードスタンダードだ

『ティアー!!』

ヒーローはキングジョーを抑えに行くが、ゼットンとは力が違いますがたため、抑えきれない

橘はその様子をみて、援護が必要なことを察し、通信で全員に通達した

「ウルトラマンを援護しろ!!間違えても当てるなよ!!」

『G I G!!』

全員がアキュートアローをキングジョーに当てる

大した効果がないのは分かってはいるが、黙ってみてはられない何としても隙を作り上げたかったのだ

その時、一つの光が、ヒーローのカラータイマーに吸い込まれた赤い光がヒーローを包み込み、光が収まらぬまま、キングジョーを突き飛ばした

ヒーローは赤い身体の形態、モードレッドにモードチェンジしたのだ

『護さん!!来たんですね!!』

『大急ぎで来てやったらこれだ……久々の戦いだ、いくぞヒロ!!』

『はい!!』

ヒーローは構えを取ると同時に声をあげた

『サアアーッ!!』

その構えはいつもよりも力強くなっていた

キングジョーはふらつきながらも、ヒーローに対して身体をぶつけてきた

しかし、跳ね飛ばすような動きではなく、その巨体の重さで押しつぶすつもりようだ

しかし、ヒーローは右手でキングジョーの突進を、後ろに身体が滑

りながらもその動きを止めてしまった

キングジョーも足に力を入れ前に進もうとするが、ヒーローの足が地面にめり込むだけで少しも進まない

「ヒーローは身体全体に力を込める

身体が赤く輝き始める、その輝きが強くなるにつれ、キングジョーが押されているように見える

『サァー……ッ!!』

光が一気に強くなった時、キングジョーはついに跳ね飛ばされた

そのまま、倒れこんでいるうちに、ヒーローはエネルギーをためる赤い粒子は前見たものよりも多く集まっているかに見えた

ヒーローはそのままレッドパワー・ボムをキングジョーに炸裂させた

キングジョーは、蓄積していたダメージにとどめの一撃をくらい、爆散した

結局、この日もGUY'Sだけで怪獣は倒せなかったが、それでも成長している

いつかウルトラマンと肩を並べられるその日まで、GUY'Sはあきらめない

いつかウルトラマンと一緒に戦えるまで

今は小さな喜びをみんなで祝っていた

人が大好きな怪獣1―巨大犬怪獣ドグフアン登場―

まだ、ウルトラマンヒーローが地球にやってくる前の話
一つの家族の犬の話だ

まだ子供の捨て犬であり、偶然とある家族の子供に拾われた
その子犬はふぁんと名付けられ、立派に育てていった

ふぁんは自分を拾ってくれた子供のことをとても好いていた
いつもふぁんはその子供と時を共に過ごしていた

しかし、それもある日突然崩れる日々だった

ふぁんにとってはいつもの散歩の日、家族全員で少し遠くまで行く
ことになった

ふぁんはとても楽しみだった、他ならない大好きな人と散歩に行け
るのだっから

だが、散歩に出かけて少し経ったとき、ふぁんは何かを感じ取った
ここにいたら駄目だ、ふぁんは自分の首にかけているリードを
引っ張り、早くここから移動しようとした

何度も吠え、大好きな家族へ訴えもするが、言葉が理解できない家
族は、

軽く注意するだけでそこから移動しなかった

そして、その時はやってきた

町中に突如現れた怪獣ベムラー、ベムラーは驚く人々を余所に、町
を破壊し始めた

逃げる人々、その波に流されふぁんも家族と離れ離れになる

ただ、ふぁんの耳には大好きな子供の自分を呼ぶ声が聞こえていた
ふぁんは人々の波にぶつかり、傷つきながらもその声に向かって
走った

その子供も親の手を振りほどき、ふぁんを探していた

人の波が少なくなったとき、互いにその姿を見つけた

駆け寄る二つの存在だが、その理由は違っていた

大好きなふぁんを見つけた駆け寄る子供

そこにはは危ないことを知り、なんとか助けようとするふぁん

子供の頭上には破壊された建物の破片が落ちてきていた

子供になんとか追いついた親だったが、子供を庇い、その子供ごと破片に押しつぶされていなくなった

ふあんには何ができただろう

その瓦礫を除ける力も何もない

ただただ、無事を祈って吠えるだけだった

ウルトラマンヒーローが現れ、ベムラーを倒すまでふあんは吠え続けていた

その後、ベムラーにより破壊されたものを片付けるために現れた業者が発見したものは

瓦礫の上で何かを守ろうとしている犬の姿だった

とても衰弱をしていた犬は特に抵抗もなく捕らえられた

赤い首輪にはふあんの文字と住所が書かれていた

その後、いろいろな調べが終わり、ふあんの家族は全員死亡していることが分かった

ふあんは一応の保護期間を過ぎたら他の犬たちとの殺処分が決定した

ふあんは出された食べ物を食べようとはしなかった

点滴で栄養を与えているが、その体は痩せていっているのが誰の目にも明らかだった

保護期間を過ぎ、とうとうふあんも殺処分の時が来た

ふあんの仲間たちははこれから何が起こるのかが不安なもの、聞こえた鳴き声からそれを察してあきらめたもの

さまざまな考えの仲間がいたが、ふあんはこんなときでも家族のこと、大好きな子供のことを想っていた

職員がガスの噴射ボタンを押す、その職員もやりたくはないことだが仕方がないことと自分に言い聞かせる

押すたびに自信の心を苦しませているのに……

ガスによって少しずつ弱っていく

ふあんもその中の数に含まれていた

その時、ふあんを中心に光の粒子が集まった

他の仲間たちからも光の粒子がふぁんに集まり、その体は消えた
光の粒子はかつてベムラーが現れた場所に集まり、一体の怪獣が現
れた

ふぁんの仲間たちの無念の思いとふぁんの想いが一体の怪獣、巨大
犬怪獣ドグファンを生み出した

人が大好きな怪獣2―巨大犬怪獣ドグファン登場―

G U Y Sの基地内にアラートが鳴り響く、ドグファンが現れたことによる警報だ

すでに緊急出撃の命令が下されており、全員が戦闘機に乗り込む……が、

ここで一つ問題が起きた

護がナンダの運転席に瞬間に、助手席にヒロではなく、坂牧が乗り込んでしまったのだ

「あ、あれ？ちよっと……僕乗ってないですって!!」

ヒロがドアを開けようとしたときにはもう遅く、坂牧はすでにロツクをかけていた

その様子を見ていた護は何も言わなかったが、さすがに苦笑いだっ
た

護はヒロに自身の後ろ、後部座席を指差した

坂牧もそれを真似してか、優しく微笑みながら後部座席を指差した
ヒロはささやかな仕返しのもりなのか、右側でも左側でもなく、

中央に座った

もちろんシートベルトは着けているが

ナンダはレッドスパロウとオオルリの二機が合体したケツアールの
底部に付いて基地から発進した

そしてドグファンのいる場所まで急行していったが……

ナンダの中では坂牧とヒロによる言い争いが起こっていた

「なんであなたが助手席に座っているんですか?」

「護さんの隣にいたいと思っってはダメですか?」

「助手席にも操作すべき機械はあるんです!!あなたは補助できるん
ですか!!」

「できますよ?」

あまりに即答だったもので、呆気にとられるヒロだったが、盲目と
いう彼女が機械を操作できるはずはない

「本当にできるんですか?」

「だって作ったのお父さんですから、システムから何まで覚えています」

「GUYSの関係者だったんですか？」

「一応は……それに名前を付けたの私なんです」

「レッドスパロウとかオオルリもですか？」

「いえ、ナンダを……」

しばらく時間が経ち、全員が目視でドグフアンを確認できる位置に着いた

篠崎はナンダの接続を解除しようと確認を取ろうとしたが、

いまだに言い争いが続く3人をひとまず止めようとした

「おい、目的地に着いたぞ!! いい加減醜い争い止めろよ!!」

『ナンダです!!』

『鳥系の名前にしたほうがカッコいいじゃないですか!!』

『次からどうにかしようこの状況』

『護さんも前に坂牧さんといったい何をしたんですか!?!』

『……なにも』

『恥ずかしがってるんですか?』

『なんで隠すんですか!?!』

『お父さん、ナンダの接続解除して』

『はいはい』

ナンダとケツアールの接続部が切り離され、重力に従って地面に向かって加速し始める

その時、坂牧はホバーのスイッチを入れ減速、緩やかに地面に着地した

「篠崎さん!! 下ろす時は下すって聞いてくださいよ!!」

『いやあ、ニワトリを高いところから手を離したら飛ぶんじやないかなって、意外と飛んだ』

「今度篠崎さんの教習所付き合っつてビデオ撮っつてあげます」

『ちよつと男たち、そろそろ仕事してくれって隊長がうるさいから仕事して』

『とくにブーブーに乗ってる3人ね』

ナンダに乗っている3人は全員に謝った

「ところであの怪獣はなんでうごかねえんだ？」

篠崎はいまだにピクリとも動かないドグファンを見つめそうだった

その時機内の音声を聞いていた橘から説明がはいった

『あの怪獣は現れてから一步も動かないらしい、現状では被害は交通面だけだ』

坂牧くん、ダークエフェクトの怪獣か？』

『いえ、ダークエフェクトじゃないです……どつちかというと、もつときれいな存在です』

たぶん、何もしなければ安全だと思います』

その言葉に篠崎が坂牧に聞いた

「どうしてわかんだよ、安全って？」

『……澄んだ心が見えるんですよ、そういうことにしておいてください』

『全機は経過を観察しつつ警戒、民間人が被害を受けない場所まで避難が完了したら捕獲を試みる』

『隊長、捕獲するんですか？』

『まだ人的被害は大きくはない、無害な怪獣だったら命を奪う必要はない』

GUYSは何も怪獣を倒すだけが仕事ではないだろ？』

『GIG!!』

ケツアールはホバリングで空中に静止、

ナンダはエンジンを一応止め、3人とも外に出てドグファンを見つめていた

しかし、この場所で護はあたりをきよろきよろしているのをヒロが気付いた

「護さん、どうしたんですかきよろきよろして」

「いや、ここは俺が住んでいた場所の近くだったんだ」

「そういえば……初めてあった場所の近くですね……」

「護さんのお家ですか!？」

「いや、仮住まいだったから実家は別だけど……あの怪獣、なんかここに
あるのか?」

その時、ドグフアンは目を開き、まるで犬の遠吠えのような声を発
した

『なんか、悲しい声……』

『犬の遠吠えよね……』

『ちっ……扱いづれえ』

『なんか……うん、悲しみだね』

『この声は……』

『心が悲しんでる』

『この声……ふあん?』

ドグフアンの声にふあんという反応をした護

「この声、うちの近くにいた犬の声ですよ!!」

『お前犬の泣き声なんてわかんのかよ』

「いや、そんなことできないですけど……ふあんの声だなんて」

ドグフアンは護のほうにむき、顔を近づけた

ドグフアンの鼻息が風のように3人を襲ったが、飛ばされるような
勢いはない

ドグフアンは護に対しまるで喜んでるように尻尾を振り始めた

「なんか好かれてますよ護さん、私たちの家族にでもしますか?」

「さすがに大きいよ」

そんな時、メモリーディスプレイから橘ではない誰かの声が命令を
飛ばした

『G U Y S J a p a nのクルーへ、町に出現した怪獣、ドグフアンを
倒せ』

本部からの命令である、拒否する場合、G U Y S J a p a nに対
し相応の処分を下す』

「なんだこれ!？」

「これは……隊長さん？」

「いえ、これは……」

護はメモリーディスプレイを操作し、その音声がどこから来るのかを確認していた

「これはニューヨークのGUY'S総本部から送られたものではありません!!」

「ごく近くにこれを発信しているものが……!!」

『こちらレッドスパロウ!!計器にトラブル!!畜生!!この前とおんなじ感じだ!!』

『オオリリ!!同じくトラブルが!!』

全員が橘に状況を説明するが、橘との通信は一向に開かれない

「もしかして、この前の事件の原因ってこれなんじゃ……」

「可能性はあるけど、これはまずいんじゃない……」

その時、ドグファンに向かって黒い霧が取り付いた

ドグファンは苦しみ、鳴き声を上げている

「あれは!!ダークエフェクトです!!あの子の体に入っていきます!!」

ダークエフェクトはドグファンの精神を凶暴な存在へと変えた

ドグファンは頭を押さえながら、抵抗するようなしぐさをしながらも、周りを破壊し始めた

『まずいぞ、隊長と通信が繋がらなかったらメテオールも使えねえ……』

捕獲すんのか、倒すのかも……』

『でも、このままほっておいたら周りが……!!』

ケツアールは制御が難しい、その状態で戦闘することも一応可能だが、極めて危険だ

「……倒しません、僕たちは橘隊長に命令されたんです!!倒さないでやってくれって!!」

「ヒロ……そうだな、そうでなくちゃな」

「垣山さん!!指揮をお願いします!!」

『任せてくれヒロ君、ヒロ君たちは?』

「僕たちには、僕たちにしかできないことをします!!」

そういうと、ヒロはナンダに坂牧を乗せ、ナンダのオートパイロット（ドライバー）のシステムを起動した

「坂牧さんはとりあえず、離れてください」

「……ナンダなしで大丈夫なんですか？」

「僕の正体を知っている人らしくない言葉ですね」

「冗談です、助けてあげてくださいね」

ドアを閉めると、ナンダは起動音とともに移動した

「お父さん、現状の指揮はお父さんだから、指示出してくれ

俺たちは何をすればいい？」

「お父さんじゃない、臨時隊長と読んでほしいな」

「……お父さん隊長!! 指示を!!」

「うーんこのバカ、セパレートしてレーザー誘導で注意を引くぞ

この分だと何を撃つても間違いがありそうだからな」

「G I G!! 女子組!! 聞こえたか!!」

『その呼び方やめて男子、お父さん隊長、了解です』

『G I G、お父さん隊長』

ケツアールはレッドスパロウとオオルリに分離し先端部分についているレーザー誘導光を照射した

レーザー誘導光は座標を出す場合や、ケツアールになる際に、正しい位置で合体できるためのレーザーだ

しかし、目に見えるほどのレーザーなので、若干の破壊力を持つ、ただ、それは人などに当てた場合である

ドグファンにとっては弱い攻撃だが、その攻撃を放つほうにドグファンは身体を向けた

レッドスパロウが背後にまわり、レーザー誘導光を放つ、身体を瞬間にオオルリがまたレーザー誘導光を放ち、

挑発する

ドグファンは攻撃しようとした瞬間に背後の機体に攻撃され、思うように動けない

「護さん、行きましよう」

「ああ、行こう」

二人は構えると、光に包まれ、その姿をウルトラマンへと変えた
赤いウルトラマン、モードレッドの姿だ

『サアーツ!!』

ヒーローは構え、ドグファンと向き合う

ドグファンは犬の鳴き声を出し、ヒーローへ走り出した

その走り出したスピードに、護は対応できず、突き飛ばされる
倒れるヒーローにそのまま頭を突っ込み走り続ける

建物を崩しながらも後ろにへと突き飛ばされるヒーロー

レッドスパロウとオオルリも、高速で動くドグファンにレーザー誘
導光をあてるが、

そんなものをなかったかのように進み続ける

ドグファンは頭でヒーローを上空へと突き飛ばし、そのままヒー
ローは地面へと叩きつけられた

『護さん!!僕に代わって下さい!!』

ヒーローは左腕を横に伸ばし、モードチェンジの構えをとった
身体の色が変わり、ヒーローはモードブルーに変わった

再び、高速で走ってくるドグファンを回転しながら飛ぶことで回避
し、

その後ろからエフェクト・ショットをかすめるように当てる

ドグファンは動きを止め、すぐさまヒーローに向き合う

この時、護は何か気がついた

『ヒロ!!あのビルは使える!!』

『でも!!』

『大丈夫だ!!逆に壊してやれ!!』

ヒーローはビルの目の前に移動し、ドグファンが突っ込むのを待っ
た

ドグファンは再び、そのスピードで、突っ込んできたところをヒロ
に回避させられた

怪獣も急には止まれない、ドグファンはビルに突っ込み、身体が
嵌ってしまい身動きが取れなくなった

ビルから頭を出しているドグファンに対し、ヒロはエフェクトでは

なく、自身の技を繰り出す

腕を前に伸ばし、手を合わせ、頭上に挙げ、手を合わせたまま左腰にもっていき、

エフエクト・シヨットのように手をスラツシユさせて放つ、青色鎮静効果弾だ

ドグファンの身体に当たった光弾はドグファンの身体を浸透して淡く青く光った

ドグファンの身体から黒い霧が噴出し、霧散した

のちにドグファンは、機体を修理したレッドスパロウやオオルリによつて、人への影響のない無人島へと移された

ドグファンはそれまでの間、付近の住民たちから本当に怪獣なのか？というほど大人しかった

特に子供たちの人気は凄かったものだった

なお一部には酔っ払いの大人も含まれている

なぜ、こんなことになったのか

ドグファンとであう人々はみな、帰りを待っていてくれるように感じたと言つたらしい

ドグファンは今は地球の人々が家族なんだと感じてくれたんだ

愛と愛——負思念体ラゴン・再生同化怪獣ボガール登場——

その後、先日の謎の通信はニューヨークの本部から送られたものではないと調べがたった

各G U Y Sではこの通信に対する処置として、送信した相手かわからない命令に対しては実行しなくてもよい

また、その後担当する上司に通信ができない場合、その直前までの命令や任務を継続し、

再度連絡があるまで経過を記録することとなった

現在、この謎の通信は各G U Y Sにて確認されているが、どれもその時上官が下した命令の逆をいうもの、
ということのみ判明した

この特性のため、怪獣が出現した際にこの通信が送られた際には隊員たちに混乱を招く恐れがあるため、

G U Y Sは現在、この謎の通信の発信元、および原因を探っている

G U Y S J a p a nでも同じく謎の通信を研究している最中だ

一人を除いて……

「なんで愛が休暇申請通って私が通らないのよ……」

「さすがに一気に二人は無理だ、すまんが理解してくれ……」

屋久島はコンソールを操作しつつ、隊長の橘に文句を言った

「別にお前らいつも一緒だし、たまには良いだろ？こっちの仕事も進めねえと大変なんだしよ」

「私、力のこと嫌いだわあ……」

「別に間違ったこと言っていないだろ!」

護はA 4用紙に出力された資料を纏めながら、篠崎と屋久島の話聞いていた

G U Y Sに入ってからもう聞きなれた会話だった

「でも確かに、いつも一緒ですよね？何時からの付き合いなんですか

「？」

ふと気になり、護は好奇心で屋久島に聞いた

「ああ……私と愛は中学からの付き合いよ正確には中学3年生ね……」

「えつと、中学3年っていうと……何年前だ？」

「約8年前だよ、護君」

護は8年前だと自分は中学1年生ぐらいの話かと考え、その時の自分を思い出していた

同時に8年前のことを屋久島も思い出していた

その時、三原は久々の休暇をあまり楽しめずにいた

理由は単純で、どう過ごしているかわからなかったのだ

何をしようと考えていたが、町を歩いているだけでお店に入るわけでもなく、ただ時間を消費していた

そんな時、三原の目に一人の女の子が目に入った

女の子は制服を着ており、時間的には学校帰りであろう

女の子は歩きとしてはかなり早く歩いている

顔は俯いており、顔は見えない

ただ、三原は何か気づいたようで、女の子を呼び止めた

普通なら声は掛けないだろう、だが三原の悪い癖が働いてしまったのだ

「ねえ!!ちよつと待って!!」

女の子は足を止め、顔を伏せ気味に三原を見た

三原は気づいたことが正解だとわかったようで、その女の子に近づき、小声で聞いた

「なにか……あつたの？」

少しかがんで見た女の子の顔は、涙の跡と、赤く腫れた頬だった

「大丈夫です、ごめんなさい……」

そう言つて、女の子は頭を少し下げて歩き去ろうとした

「まっつて、大丈夫じゃないよ……話しづらいなら場所変えるからそこで話そう?」

「痛っ!!」

三原は女の子の手をつかんで止めようとしたが、手をつかむと、女の子は手を掴んだだけの痛みがりとしては大袈裟な痛みがり方をした

「ご、ごめんね……大丈夫?」

「……はい大丈夫ですから、もう帰ります」

「……ちよつと一緒にそこのお店でごはん食べない?」

「え?」

女の子は三原の言葉に驚き、顔をあげた

「ほら、その顔じゃお家に帰れないでしょ?」

女の子はまた俯くと、小さく頷き

「お願いします」

と小さく言った

近くの寿司のチェーン店を咄嗟に指差した三原だったが、心の中では高くなつたらどうしようと考えていた

実は三原の一家は寿司というコンベアで運ばない、カウンターや大人数が座れるような席のある寿司屋しか経験のないものだった

なので少し歩いて近場のファミリールレストランに誘えばよかつたと考えていた

「お二人様でお待ちの三原様」

「は、はい!!」

「お席へご案内します、お客様8番テーブルにご案内します」

家族用の席へ案内され、持ち合わせの心配をしていた三原だったが、

メニューを見るとかなり安かつたことに安心した

「……あ、好きな頼んでよ!!これでも稼いでるからね!!」

と言つても、女の子は困った顔をするだけで何も言わなかった

「じゃあ私が頼むけど……嫌いなものとかある?」

「……いくらと脂の乗ってるものとかは……」

「うん、じゃあ頼むね」

そう言つて三原はあたりをきよきよと見始めた

「あの……」

「あ、ごめんね店員さん忙しそうだからちよつと待つてね」

「注文はパネル使えばいいんですよ……?」

三原はレーンの上部に取り付けられてるパネルを見る

確かにパネルはタッチすることで押せるようだ

「あ、あはは……ごめんね」

三原は何皿かの寿司を注文した

それでもきよきよとする三原に女の子は少しだけ微笑み言った

「お茶は……ですよ」

三原は恥ずかしいのか顔を机に埋めた

暫く経ち、頼んだ寿司も流れてるレーンとは別のレーンに乗つて

やつてきた

これについても三原は驚いていたが、三原と女の子はとりあえず

やつてきた寿司を食べた

頼んだ寿司を食べ終わり、追加の注文をする前に、三原は女の子に

話を聞いた

「……ところで、何があつたの?付き合つてた男の子に振られたつて

わけでもなさそうだし……」

さっきの様子見てると……友達と喧嘩したつてわけでも……意地

悪でもされたの?」

「……はい、友達と喧嘩したんです」

「そう……でも私は友達の利き手をけがさせるのを友達とは呼ばない

かな……」

女の子は少し驚いた顔をした後、少し目に涙を浮かべた

「……違います、左手が利き手なんです」

「そう？お箸の使い方が慣れてなきそうだし、その割にはお行儀良いけど……逆に机に手は出そうとしなかったから」

女の子は俯いて、静かに涙を流し始めた

「手……見せてみて？」

女の子はゆっくりと手を見せると、その手首は青く痣になっていた

「これは……病院に」

「大丈夫ですから!!」

病院という言葉に反応したのか、大きな声をあげた女の子に周りの席の客は女の子を見たが、

少し見て再び食事を再開した

「ごめんなさい……」

「いいえ、こつちこそごめんなさい……いけないよね……」

「はい……」

「でも、痛くない？」

「もう痛くはないです……数日もすれば治りますから……」

「うん、わかった……でも教えて？何があったの？」

「……クラスの、皆から、いじめを受けて……」

「先生や、家族の人には？……家族の人には伝えてないか……」

「……先生には言ったんです……でも、少ししたらまた……」

「うん……」

「親には言えませんし……先生に言っても解決しないし……でも学校には行かないといけないし……」

女の子は嗚咽する声を抑えながら話し始めた

まるでせき止められた水が一気に流れ出るように、これまでのことを初対面であるはずの三原に話し始めたのだ

始まりは突然訪れたらしい、気が付いたらいじめられていた

理由に心当たりはなく、それまでは特に何もなく学生生活を過ごしていた

ただ、女の子には友達はいなかった……それがいじめの原因になったかもしれないと女の子は語った

授業中に教師に気付かれないようにいじめられる、授業で使うことのないはずのコンパスの針で刺される

消しゴムのかけらをぶつけられる

休憩時間には友人同士で喧嘩しているように見せかけ、

わざわざ女の子の席の近くで喧嘩を始め、女の子の髪を引っ張り、殴り、蹴った

給食時には量が減る、具材が机に少量入れられる

放課後は遊びと言い、暴力を振るわれる

とある日には室内履きが片方ないと思ったら燃えた靴が自宅近くにあったこともあった

丁寧に名前や特定できるような箇所を燃やしていた

「……クラスの皆は？見てるだけだったの？」

「だって……助けてくれるわけないじゃないですか……!!」

女の子の顔はすでにぐちゃぐちゃだった

座った席が端の席だったからこそ、大声は聞こえても顔は見えずに済んだ

ついには顔を伏せてしまい、先ほどとは違い三原に聞こえるくらいには鳴き声を出し始めた

「苦労してたんだね……苦しかったんだね……悲しいし、悔しいよね……」

そんな女の子の髪を梳いてあげ、頭をなでてあげた

これが悪かったのか、それとも良かったのか……大きな声で鳴き始めてしまった

周りの客がその声に反応したため、三原は女の子にハンカチを渡し、一緒にお店を出た

会計が安かったことにまたもや驚いた

三原と女の子は人気のない公園に移動した

ベンチに腰掛け、近くにあった自販機からお茶を購入し、女の子に渡した

「大丈夫？」

「はい……ありがとうございます……」

「お礼なんていいよ!!全然安いし!!」

「いえ……話を聞いてもらえて……その、嬉しかったです」

「あ、そっちなか……ごめんね、私は貴女みたいにいじめられた事はないから、」

「分かった気になって失礼だと思っただけ……」

「そんなことないです!!……話を聞いてもらうだけでも、気が軽くなりましたから……」

でも、家族でも先生でも気付かなかったのに……どうして気付いたんですか?」

三原は少し悩み、言った

「実は、私の親友が貴女みたいにいじめにあつてね……」

学年が上がってから知り合ったから、その時初めて見たんだけどね……」

最初は私も見てるだけだったけど、

ある日、クラスの皆で叩いてたから近くにあった花瓶で、そのうちの一人殴っちゃったんだ」

女の子は黙って三原の話を聞いていた

「まあ、私の先生に怒られたんだけど、説明したらいじめていた子たちは皆その日からいじめなくなったんだ

まあ、話しかけてもくれなくなったけど……」

「なんか……ずるいです」

女の子はいきなりそう言った

「ずるい?」

「その、友達がいるのが……」

「じゃあ友達になる?」

「え……」

女の子は消え入りそうな声で驚いた

「私の携帯番号教えるよ、仕事の関係で何時もつながるわけじゃないけど……」

夕方にも何時でも話を聞いてあげる」

「本当ですか!?わ、ちよつと待って……!!今携帯出しますから!!」

そう言つて女の子の学生靴から出てきたのは画面に罅が入っている以外は新品同様なスマートフォンだった

「あ……」

「大丈夫ですっ!!まだ使えますから……」

三原は苦笑いになりつつも、電話番号を言った

「あの……聞き忘れてましたけど、お名前は？」

そういえば互いに名前を知らなかったと今更気付いた二人であった

「えーと、三原愛です、これからよろしくね？」

「愛さん……？」

「ん？どうしたの？」

「私も愛つて言うんです……辻本愛（つじもとあい）です!!」

「わあ!!すごい偶然!!よろしくね愛ちゃん!!」

「はい!!」

その後、電話帳に情報を入力して、二人は別れた

辻本愛は、スマートフォンを大事なもののように抱きしめ、笑顔で帰ろうとしていた

愛の目の前に数人の女の子が、帰ろうとする愛を阻んだ

「愛ちゃん？さっき振りだね？何やってんの、ねえ？」

「な、なにも」

愛はスマートフォンをばれない様にそつとスカートのポケットにしまった

「実は今日は一緒に遊ぼうかなあつて思つて愛ちゃんみてたんだよ、お寿司はおいしかった？」

「いいよねえ、ただでお寿司食べれてさ」

二人が周りを見渡し、公園の人の目が通らない公衆トイレの方へ愛を連れていく

愛は握られた右手の痛みを我慢しながら声をだした

「いや!!止めてよっ!!」

「うっさいな……!!」

愛の顔を殴り、公衆トイレの近くに來ると、愛を地面に倒し、

一人は両腕を抱え、一人は両足をもった

「いや!!放して!!」

「そう言えばまだスマホ壊れてなかったんだっけ？」

スカートのポケットに手をつ込み、画面のひび割れたスマートフォンを取り出すと、

公衆トイレの壁めがけてスマートフォンを投げた

壁にぶつかり、鈍い音を出して地面に落ちたスマートフォンだったが女の子がそれを拾うと

「まだ壊れてないし……あ、このまま水につけても大丈夫かやってみよう!!」

「どうなるかやったことないんだよね!!」

女の子は女子トイレの手洗い場に歩くと、蛇口の下にスマートフォンを置いた

「止めて!!それは止めて!!」

「んー？お友達の携帯番号が入ってるから？」

愛は頷いた

「だからじゃん、ばーか」

水が流れた

「んー、やっぱり壊れたわ、次買う時防水の皆買おうよ!!」

こ・わ・れ・た・ら、たいへんだしねー!!」

女の子たちはすでに愛を放していた、愛は急いでスマートフォンを拭き、中の水を出そうと振り、

電源ボタンを押すが、電源はつかなくなっていた

すでにただのゴミになってしまったものを抱きしめ泣いていた

「じゃあ、あそんだし帰ろうか、愛ちゃんまた明日ー」

そう言い、女の子たちは公園を後にした

「ころす」

と思ったが、愛のほうからそんな言葉が聞こえた

「んー？愛ちゃん？今なんていった？」

女の子が威圧感のある声を出し、後ろを振り向くとそこには愛はいなかった

代わりにいたのは顔が黒い霧で見えない愛のような姿をしたなにかと、

女子トイレの個室からドアを開けて出てきた緑色の化けものだった

公園で女の子の悲鳴が響いた

愛と愛2―負思念体ラゴン・再生同化怪獣ボガール登場―

G U Y S J a p a n 基地は怪獣出現の速報から一気に慌ただしくなった

橘はG U Y S 隊員の一人と話していた

「レーダーに映らなかったタイプだな？」

「はい、おそらくダークエフェクトの影響によるものだと思われます、一部の天体観測局からはダークエフェクトの一部の消失を報告しています」

「分かった、引き続き観測を頼む」

通信を終え、指令室に入ると、すでに準備を終え、出撃許可を待っている隊員がいた

ただ、屋久島はどこか心配そうな顔をしていたが……

「三原君は？」

「それが……まだ戻ってないんです」

橘は少しだけ考え、言い放った

「三原の代わりに垣山がオオルりに搭乗!!日野はレッドスパロウの火器制御を担当!!

直ちに出撃し、出現した怪獣を排除しろ!!

現状を持って、メテオールの任意起動を許可する!!

ただし、例の通信が来てからのメテオールの起動は禁止する!!

G U Y S !! s a i l y g o !!」

『G I G I !』

格納へ全員が急ぐ中、いまだに屋久島の顔には不安が残っていた

その時、三原が居た町は大混乱に陥っていた

いきなり人の大きさの怪獣が現れたと思ったら公園にいる女子中

学生を行動不能にしてみました

その後、その怪獣は急激に巨大化し、一人の女子中学生を肩に乗せ、町を歩きだした

ただ、普通の怪獣と違うと思われるのは、中学生程度の男女がすべて昏睡状態に陥るといふ点だ

大人たちは昏睡状態に陥ってしまった子供を助けようと逆に怪獣の近くに近寄らなければならぬ

結局、大人たちは中学生たちに近付けずにいた

そんな中、三原愛は一人ずつ、中学生たちを助けていた

それを見てちらほらと助けに行くものたちも増えたが、その様子を怪獣が見ると、

怒り狂ったかのようなしぐさを出した

ついに建物を破壊し、その破片で人を押しつぶそうとした

しかし、その破片で人はけがを負わなかった

そのこともあり、人々はその怪獣は本当に悪いやつか判断がつかなかった

三原は何が何だか分からなかった

自分にしか聞こえない愛の音がしているからだ

頭に響いて残る声は叫び、悲しみの声だ

『どうして私ばかり……』

『あの子たちがいじめられればいいのに……』

『しんじやえ、ころしてやる……』

『関係ない人たちが……くるな』

『私だけ救われないのはおかしいよね……』

ずっと、そんな言葉が頭に響き渡っていた

どうにかなってしまいたいそうだった

『だれか……愛さん……たすけて……』

怪獣は今でも町を、人を襲っている

ただ、三原にはその姿が怪獣ではなく、ついさっきまで泣いていた愛にしか見えなかった

そこへ、ナンダとケツァールが到着した

「おい、なんで暴れてる怪獣のそばに人が居るんだよ……」

「篠崎さん、子供が!!」

「分かってるって!!だけどこんなに人が近くにいたら何もできねえぞ!!」

『力!!愛から通信が入って、あの怪獣を誘導するって……』

「ああ!?!どうやんだよあんな状況で!!」

三原は既に走っていた

彼女にはトライガーショットも何も持っていない、すぐそこにいる人々と同じただの人間だ

もし怪獣に何らかの攻撃をされたら、ひとたまりもないだろう

彼女が走る理由はただ友達だからというものだった

それは義務でも同情でもない、ついさつき知り合っただけの友達を救うために走っている

「こっちにおいで!!」

怪獣は三原の声に反応し、三原のいる方へと歩きだした

「おいおい!!あれじゃあ踏みつぶすんじゃ!!」

「不味い!!」

怪獣が道に倒れている中学生を踏み歩くと思い、目を反射的に瞑ったが、

目を開けてみると、悲惨な姿はなく、いつの間にか通り過ぎていた

「どう言うことだよ……?」

『あの怪獣、人を避けて歩いてる?』

『そうみたいだ、周りを見ても建物の破壊以外特に影響は出てはないけど……』

坂牧さん、ダークエフェクトの反応は?』

『はい、既にポイントはつけ終わってますが……緊急事態です』

あの怪獣の左肩辺りに、人がいます』

『人だって!?!』

怪獣の前に移動し、左肩を見ると確かに、女性が一人居た

「なんであんなところに!!」

『でも、あの子にもポイントが付いているが……これはもしかして

……』

『これに関してはヒロさんが仮説を立ててくれています』

『あの女の子は、宿主ですわ……』

『ちよつと待って、何かがあの子に寄生でもしてるの!?!』

『はい、ダークエフェクトが寄生しているとみていいでしょう、ただの霧のような存在がどうしてこれまで地球に現れた怪獣と同じ姿を取れるのか……、人の意識を借りて、体を構成するために必要な複雑な器官を構成する、けど、すべての人が怪獣すべてを知っているわけではないはずです、つまりはダークエフェクトは人間の思考を借りると同時に自身の知っている知識を与えるのかもしれませんが、けれどもそれでは現れる怪獣はすべて同じ姿のほずです、つまりは人の思考、いやどちらかというど感情と言った方が近いかもしれませんが、その人の感情の形、いやその負の感情や思念が怪獣の形をかたどっているのかもしれない、つまりダークエフェクトによって作られる怪獣は怪獣ではなく、いや怪獣ですけど怪獣という名称で呼ばず、負の思念体と呼ぶのが……』

「ああー!!んなわけわからんことわかんない!!」

とりあえず、ダークエフェクトが人を借りて怪獣を生み出すんだろ!?!」

あまりに長い仮説とやらを言うヒロに篠崎は耐え切れなくなった

『篠崎さん、ここまでそんな難しい話は……』

「うるせえ!!いんだよ難しいことは!!子供とか理解できねえだろ!?!」

人にとり憑いて怪獣生み出す!!はい終わり!!」

『でもちゃんと説明しないと』

「ヒロ……」

『護さん!!護さんもこういうのはちゃんと説明しなきゃですよね!?!』

「うん、ややこしい」

『護さん、ヒロさんがふてくされちゃいました』

とりあえず、今はその説明はややこしいからしないでくれと、

全員が同じ思いだったのでだれもヒロの事はフォローしなかった
「でも、まずあの子を何とかしなくちゃな」

「戦闘機じゃあ無理だな、おいヒロ!! 出番だぞ!!」

『あ、じゃあ帰ったら篠崎さんだけ講義をしますから』

「いいからささっとやってくれ」

ふてくされていたヒロはナンダとケツアールの接続が切り離されると同時にホバーで左肩に移動する

常にナンダを操作しながら、三原へ歩む怪獣と距離を合わせていかなければならない

これだけでも操縦の難しさは高いのだが、もし怪獣が何らかの予測できない動きをした瞬間、墜落の恐れもある

『墜落するなよ王子さんよ』

「車だから墜落しないって言ってましたよね……!?!」

『今は飛んでるから』

ヒロは何とか距離をほぼゼロに調整し、左手でハンドルを動かしながら、右手で愛を掴もうとする

手を掴むその瞬間、ヒロと愛の手がスパークしたように光った咄嗟に手を放し、ハンドルを切る

同時に怪獣が暴れだした、怪獣はその口から光線をナンダめがけて吐き出した

直前に離れていたために、何とか避けることができた

しかし、暴れる怪獣に対し、近づくのはもう危険だ

「ヒロ!! キャプチャーキューブ使えないか!?!」

『考え方としてはいいかも知れませんが、この状況は無理です!!』

その時、ついに三原の足が止まった、いくら鍛えているとはいえ、緊張状態で走り続け、肩で息をしている状態だ

そもそも、よくここまで持ったところだ

怪獣はそのまま立ち止まってしまっている三原を捕まえようとしている

「まずい!! 篠崎さんセパレーションしますよ!!」

「まで!! 勝手に操作するな!!」

篠崎の言葉を見殺しして、護はレッドスパロウとオオルリの接続を切った

そのまま地面に着陸するように操作したところ派手に怪獣と激突した

「バカヤロオオオオ!!」

「ごめんなさいーなー!!」

底部に取り付けられているスラストーを使い、勢いを抑えていくが、怪獣の近くに落ちる

それを見たナンダに乗っているヒロは人に見られないだろう物陰にナンダを止めた

隣には坂牧が居るが、すでに正体はばれている、遠慮をする必要はない

ヒロはいつでも変身できるように時を待つ

護は墜落してからキャノピーを開け、篠崎を見るが、篠崎は当たり所が悪かったようで気絶していた

「篠崎さんごめんなさい、ナイス気絶ッ!!」

事情を知らない篠崎が聞いたら確実に喧嘩になるだろう一言を残して、外に飛び出し、キャノピーを閉めた

「ブルーチェンバー!!キャプチャーキューブ!!」

護はとりあえず狙われている三原にトライガーショットの機能の一つ、シリンドーをブルーチェンバーに変え、

標準で装備されているキャプチャーキューブを三原に放った

三原を掴もうとしていた怪獣は三原に触れることなく青いバリアに阻まれた

それに対し、再び怒り始めた怪獣

「屋久島さん!!垣山さん!!すみませんけど援護お願いします!!」

『もう戦闘機乗らないでね?』

「次はもつと練習します!!」

オオルリがホバー移動で怪獣の目の前に移動した

怪獣は邪魔だと言わんばかりに光線を発射するが、またもや青いバリアに防がれる

「お父さん隊長ナイスです」

「おう、隊長じゃないから、お父さんでもないからいやおとうさんだ

よ」

オオルリが気を引いている間に、護はそそくさと物陰に移動し、メモリーディスプレイでヒロと通信をした

「ヒロいけるぞ!!」

「はい!!分かりました!!」

ヒロは車の外に出る、ヒーローへなる構えをとり、光に包まれその体は青い巨人へと変わる

同時に、護も自身を光に変え、ヒーローのカラータイマーに同化する

ウルトラマンヒーローの右手が赤く変化した

ウルトラマンヒーロー、モードブルーだ

『ティア!!』

怪獣はヒーローを見ると一目散に突っ込んできた

ヒーローはその身軽さを生かして突進を回避する、まだ左肩には女の子が居る

下手に衝撃は与えられない

「お父さん、ウルトラマンを援護するよ」

「はいはい、G I G」

オオルリがヒーローの横に着く、ヒーローは頷くと構えをとった

ヒーローは青い渦を素早く左手に溜めるとそれを両手に分け、光の輪を怪獣に投げた

輪は四つに分かれ、切断するのではなく、両腕、両足を拘束した

直後に怪獣からの光線が来るが、オオルリのキャプチャーキューブによりその光線はシャットアウトされる

光線技を使った後、暫くの間光線技を使わないとみたヒーローは今のうちに女の子を救おうと懐に近づき、

左肩に居る女の子を優しく掴もうとした

しかし、ヒロがそうなったように、ウルトラマンになっている時でさえ、

謎のスパークが発生し、ヒーローは後ろに倒れる

「え!?どうしたの!?!」

「何かがあの子を守っているんだ」

「あの子を助け出さなきゃゼットンも攻撃もできないじゃない!!」

そう、いまの怪獣の状態は人質を取っている状態、うかつに攻撃はできない

どうする!?ウルトラマンヒーロー!!彼に残された時間ももう残り少ない!!

『ちくしょう、どうすれば……!!』

『まだ何かあるはずです!!諦めないでください!!』

『分かってるよ!!』

そんな時、かすれた声で、ヒーローを呼ぶ声がした

「ウルトラマン……!!私を……!!」

声のする方を見ると、そこには三原が居た

「私を!!愛ちゃんの近くにいッ……!!」

『駄目だ!!危険すぎる!!』

護は三原の身を案じてか、断ろうとしていたが……

『……護さん、三原さんを、彼女のもとに送りましょう』

『どう言うことだよ、ヒロ!!』

『このままでは僕らの変身も解けます!!』

それに、あの子の知り合いなら……:ダークエフェクトの力が弱まる
かもしれません!!』

『だからって!!』

ヒロは護の言葉を聞かず、三原の前に手を置いた

三原はその手に乗り、女の子のいる高さまで持ち上げられた

すでに、光の輪の拘束は解かれる寸前だった

しかし、怪獣が三原の姿を見ると、すぐに溶けるはずの拘束を解こ
うとはしなかった

「愛ちゃん、聞こえてる?」

「愛……さん……」

「そのまま聞いて……これから私、謝るから」

三原は既に声がかすれるほどの疲れを見せているはずだったが、思
いっきり頭を下げると

「ごめんなさいッ!!」

そう言った

「私……!! 貴女の友達なのに!! なったはずなのに!! 貴女を……守、れなくてえ……」

ホントツ……!! ごめんなさい……!!」

「違う、貴方のせいじゃない!! あなたじゃない!!」

黒い霧の掛った顔から大声が聞こえる

確かに、ダークエフェクトの原因は三原ではない

だが、三原は謝りたかったのだ

「私だよ!! 気付いたのに守れなくて……!!」

それは義務のようなものかもしれないし、同情かも知れない、だが、そうだとしても

守れなかった、そう三原は感じたのだ

愛と出会ったときから、守りたいと思ったのだから

「止めて!! 謝らないで!!」

「ごめんなさい!!」

「大丈夫!! もう大丈夫だから……!! 謝ら……な……」

彼女の顔から黒い霧が薄れていき、元の素顔が表れると、さつきまでと違い、前のめりに地面に落ちて行った

「愛ちゃんッ!!」

落下先に光の網が現れ、動きを減速させていった

ヒーローはその下に手を置くと、網は消え、愛は手に収まった

光の網を出したのは、頭を押さえている篠崎だった

咄嗟のことで反応できなかったヒーローにとっては危ない一瞬を助けてくれた

ヒロはその場でしゃがみ、二人を地面に下ろした

三原は、横に倒れている愛に駆け出す、三原は愛を抱き起こし、名前を呼んだ

「愛ちゃん!! 愛ちゃん!!」

すると、愛はゆっくりと目を開ける

「愛………さん?」

「良かった!!無事で……!!」

愛を抱きしめる三原、それをオオルリに乗っている屋久島は少しだけ不機嫌そうに見ていた

「んー?どうしたの?愛しの愛ちゃんが取られてやきもちでも焼いているのか?」

「お父さん嫌い」

「はいはい……」

ヒーローのカラータイマーが明滅し始めた

しかし、ヒロはいまだに消えない怪獣に疑問を抱いた

『なんでまだ消えないんだ?』

『なんでって、そんな自然に消えるものでもないだろ!』

すると、怪獣は元のラゴンの姿から黒い腫瘍のようなものを体にいくつも作り、暴れ始めた

ヒーローはすぐさま、エフェクト・シールドを作り、三原と愛を守つた

光線をでたらめに放ち、体を振りまわし、暴れる怪獣……

ヒーローは一瞬の隙をつき、エフェクト・ブルーリアクトを放とうとした時、

ラゴンの姿が顔だけしか見えなくなった

ラゴンの顔から下は謎の皮膜のようなもので包まれていた

あまりの変化に技を解除してしまうヒーロー

ラゴンは顔さえもその皮膜に取り込まれていった

そこにいたのは以前倒したはずのボガールであった

ボガールは体の一部を黒く変色させたのち、目の前から消えていなくなつた

暫く、そのままだったヒーローはその場で光り、消えていった

思い出のヒーロー／メビウスー負思念体デイン ゾール登場ー

「ヒロと護が喧嘩している?」

橘は味の付いていないミルクたつぷりのプレーンシリアルを食べべ
つつ、

三原の相談を聞いていた

「いや、喧嘩をしている訳ではないんですけど……」

二人とも余所余所しくなったというか……」

「他のみんなは原因を知らないのか?」

「坂牧さんは知っているらしんですけど……」

あの手の話は本人たちに解決させないといけないって……」

「まあ、作戦行動に支障がないならいいが、そうでない場合は私が動か
ないとならない

これでも隊長だからな……ボガールもまた現れたしなあ……」

そういえば愛ちゃんとやらとはどうなんだ?」

「愛ちゃんですか?んー、生活は良好らしいです、で……」

ライセンスを取得に頑張っているらしいです」

「ん? GUY S に入りたいのか?」

「はい、メカニックとしてのライセンスを取るらしいです」

「そうか、GUY S に入ろうとライセンスを取る人はあんまりいない
から楽しみだよ」

噂をすればなんとやら、護とヒロが司令室に入ってきた

ただ、普段であれば、

何らかの会話をしているのが当たり前だった二人の口は閉じたま
まだった

ただ、張りつめた雰囲気というわけでもなく、居心地の悪そうな感
じだった

それを見ていた篠崎はヒロと護を見たあと、護に声をかけた

「おい、ニワトリ……ちよっと訓練に付き合え」

「あ、はい……」

篠崎は護の肩を掴み、半ば強引に護を訓練室に連れて行った

ヒロは護たちを見送り、姿が見えなくなると、溜息を吐いた

同じく、自分の席で護を見送っていた坂牧はその様子を見て微笑んだ

「ヒロさん、ちよつと施設の構造を理解したいので、散歩に付き合ってくださいませんか？」

「え、いいですけど……」

そしてヒロも坂牧と一緒に部屋を退出した

「……あれ？坂牧は自分たちで解決とかいつてなかったか？」

「いや、普通に散歩じゃ……」

「うーん……」

部屋を出たヒロと坂牧だったが、基地の構造を覚えたいと言う坂牧は、

白杖で床を鳴らしつつ前へ進んでいった

それは特には問題はなかったが、目が見えない彼女が、

楽々と基地を歩いていることにヒロは疑念を覚えた

「あの……僕より先に歩いて大丈夫ですか？」

「はい、この基地の構造は覚えてますから」

「え、じゃあさっきの言葉は……」

「嘘です」

「嘘!？」

ヒロは生涯自分から嘘などついたことはなかった

そんなヒロは坂牧の先程の言葉が嘘であると聞いた途端、

自分が嘘を吐かれたと衝撃を受けた

「……どうして嘘を？」

ヒロはとりあえず、嘘を吐いた理由を聞いた

坂牧はその場に止まり、ヒロの方に振り返った

「だって、護さん自身に成長して欲しいじゃないですか」
坂牧の言葉はヒロにはよくわからなかった

その頃、篠崎と訓練室にやって来ていた護

既に組み手を行っており、二人の頬には汗が伝っていた
篠崎が仕掛け、護が受け止める……

ここ最近の護のスタンスである

暫くして、二人は組み手を止め、篠崎は護に聞いた

「お前、なに悩んでんだよ」

直球とも言える発言に護も困惑の声を漏らしたあとに、

護も頬を人差し指で掻きつつ、言った

「この前、ウルトラマンがなんで、あんなことをしたのか……」

もし、あのままラゴンが暴れたら三原さんは大変な事になってたか
もしれないのに……

でも……ヒロはあれは人間を信じたから……それで……」

それを聞いた篠崎は呆気にとられていたが、訓練室に響く大声で笑
い、言った

「お前、そんなことで悩んでたのかよ!?!」

「そんな事って……俺は真面目に!!」

「ウルトラマンが好きの割には全然分かってないんだな……」

「え……?」

「だってよ、今まで地球に現れたウルトラマンは、

地球人を信じて戦ってくれたんだぜ?

俺達もそんなウルトラマンを信じて戦ったんだ」

護は大好きなヒーロー……30年前に地球に現れたウルトラマン
メビウスも、

人々を信じて戦っていたことを思い出した

なんで、そんな事すら忘れていたのだろうか、護は自分を心の中で
責めた

「俺だって最初はあのウルトラマンを信じてはなかったけどよ

良いんじゃないかねえのか？あれをヒーローだって認めてよ」

その言葉に護は何かに気付き、篠崎に礼をし、訓練室を後にした

「……ああああ!!何格好つけてんだ俺!!」

ニワトリの野郎……今度焼肉奢りだな……」

自分の行動をらしくないと、勝手に奢りの約束をつけてしまう篠崎であった

その時、日本のとある場所で、

リュックサックにポストンバッグを持った男性が駅を降りた

日本だと若者が数多く歩くこの街で、その風貌はとても浮いている

彼は、旅人と言うには自分探しの旅をしているわけでもない

どちらかと言えば根無し草や放浪者に近いところがあるだろう

北へ、東へ、西へ、南へ……彼は次々と居場所を変えていた

彼がなぜ、居場所を変えるのか……

実は彼も、ウルトラマンではないが、変わらないくらいのヒーローであった

まだ若い頃に人を助けて以来、彼は人を助けることを生き甲斐にしていたのだ

迷子から人命救助まで……

ウルトラマンでなくても人に出来ることがあると信じ、過ごしてきた

そんな彼を射ぬかんとばかりに、赤色の瞳が見つめていた

その瞳を持つものは、その手から黒い霧を出すと、彼に向けて放った

数分後、突如街中で怪獣が現れたと通報が入った

思い出のヒーロー／メビウス2―負思念体デイン ゾール登場―

突如怪獣デインゾールが現れたことで街もG U Y S基地も混乱が生じていた

各天体観測局がダークエフェクトの変化を報告を上げておらず、再確認をしているが、

やはりダークエフェクトの変化を認められなかった

橘はモニターに映し出されている状況確認をしているクルーに聞いた

「つまり突如出現したにも拘らず、あのデインゾールはダークエフェクトの怪獣ではない……」

そう言いたいのか？」

『はい、そのはずですよ!!しかしデインゾールが現れた地点に宇宙船の反応もありません

あり得るとしたら……ダークエフェクトによる新型の怪獣だとか……!!』

「わかった、何か分かり次第報告してくれ」

『G I G!!』

橘は通信を切った

その時、橘に篠崎の怒声が響いた

「隊長!!どうして出撃の許可が下りないんですツ!!」

「さつきも説明したが、本部から出撃の停止を命じられている、偽物の通信ではない、確認も取れている」

「じゃあ街はどうするんです!!あの怪獣が暴れているだけじゃないですか!!」

「気持ちはわかる、確かにこのままだと被害は拡大する、だがあの街は高い建物が密集している

もしデインゾールを攻撃し奴を刺激してみる、少し暴れただけでこちらのビルが倒壊するんだ、

本格的に暴れていない今しか、民間人が避難する余裕がない、

……一人でも多くの民間人が避難するために今は耐えるんだ!!」

「……クソツ!!」

篠崎はその行き場のない怒りや悔しさを近くの机に拳を叩きつけることでしかごまかすことができなかつた

その時、三原の机のディスプレイに報告が入る

「えっ!? た、橘隊長!!」

「どうした三原」

「ナンダが出撃してます!!」

「なんだって!？」

全員が周りを見渡すが、さつきまでそこにいた護とヒロがいない
「いつの間に……あいつら……」

篠崎がさつきまでの怒りよりも驚きの声を出した」

橘はメモリーディスプレイで護を呼び出す

「護!! まだ出撃許可は出してない!!」

今出撃したらどうなるのか考えているのかツ!？」

『はい、刺激したら大変なことになるってわかってます』

『だったら早く戻れ!! 民間人が避難してからでも遅くはない!!』

『でも、やり方はいくらでもあります、俺は……一人でも助けられるように……』

今、この瞬間にも助けを求める人がいるなら、助けに行きたいんです!!

GUYSとして!!』

「……駄目だ、出撃許可は出していない、戻れ」

橘は少しだけ悩んだが、GUYS Japanの隊長として命令した

『謹慎処分でも除隊でも後なら受けます、あ!! ヒロは俺が無理やり連れて行っただけなんで!! では!!』

護はメモリーディスプレイの通信を一方的に切った

「橘隊長、本部から戦闘車両の出撃について、通信が来てます」

屋久島が橘に通信をつなぎますか? と確認を取った

橘は頷き、指令室の大型ディスプレイに sound only と表示され、音声の流れる

『出撃の許可は出していない、どういふことか』
「……………」

『橘君、もう一度言う、戦闘車両の出撃、本部は出撃するなど命令を出した』

なぜ、出撃をしている』

「それは……………」

橘の体は静かに震えていた……………しかし、橘は俯いた後、息を大きく吐いた

「できることをしに行かせました」

『何?』

「私たちは GUY S として、GUY S の誇りに恥じない行為をしなくてはなりません」

『君はその行為が被害を拡大させることにつながるとも報告したはずだが』

「はい、ですから本部の言うとおり、一人でも多くの人々を救える選択を取りました」

『橘君、どうなるか、待っていたまえ』

「もう……………まで来たなら何も怖くはないですよ」

橘は振り返った、そこにはすでに命令を待つ 4 人が立って待っていた

「過去にウルトラマン以外に怪獣に立ち向かえたものは、私たち人間しかない

だからこそ、戦える私たちが一人でも多く……………いや、助けを求める全ての人を助けるために頑張らなくちゃな

護とヒロを援護できる位置で、サポートしてやってくれ

……………GUY S!! s a l l y g o!!」

『G I G I!!』

街ではデインゾールが街をゆつくりと街を移動し、被害を大きくしていた

逃げまどう人々の中に違いはない

それをデインゾールは楽しむように、心に傷をつけるように歩き続けた

そこに一台の空飛ぶ車、ナンダがデインゾールの視線を塞ぐように顔の前に停止した

「やるぞヒロ」

「はい」

ナンダはデインゾールの体を中心にゆつくりと回り始めた、

さらに首が下を向かないように、高度を少し上げ回った

ナンダを顔で追うデインゾール、ナンダはゆつくりと、避難経路の反対へと移動し、

デインゾールに自身を追わせることに成功した

「うまくいったな」

「はい!!」

「ただヒロ、この音だけはどうしようもないのか?」

『バックします……バックします……』

ナンダから発生しているバック音に護は少しだけ不快を示した

「しようがないじゃないですか、車ですから、ちゃんと音を出さないと」

「この音は自動車じゃなくてトラックだろ……」

デインゾールの注意がそれている内に、避難を進める人々だったが、

このままうまくことはなかった

デインゾールのが大きく開いた、咄嗟にナンダの高度の上昇と、

右にハンドルを切り、何かから回避しようとするが、

デインゾールの口から放たれる何か、ナンダの車体を切った

ナンダの車体の後部が切られ、完全に制御が利かなくなったナンダは地面に落下していく

避難していた人々はその様子をみて悲鳴を上げた

どんとんと地面に近づくナンダ

揺れる車内で、護はフュージヨミツションを取りだし、ヒロは自分を見る護に頷き、光り輝いた

護も自身を光に変え、ナンダから飛び出した

「ヒーローオーツ!!」

フュージヨミツションを前に突き出し、ヒロの光に合わせり、ナンダを包み、光からウルトラマンへと姿を変える

青い体のウルトラマンが現れ……

一瞬の光とともに、赤い体のウルトラマンに変わり、ナンダを左手に持って着地した

護は近くにナンダを下す、人々の歓声が響いた

ヒーローはデイノゾールへ構えた

『サアオーツ!!』

思い出のヒーロー／メビウス3―負思念体デイン ゾール登場―

ヒーローとデインゾールの両者は互いを見つめていた

攻撃のチャンスをうかがい、その時が来れば状況は攻撃を当てたものに動く

先に動いたのはデインゾールだった

デインゾールはその口から長く細い舌を動かし、カマイタチのように空間を切る

ウルトラマンになった護は口から舌を出した瞬間に回避行動をとる

デインゾールの舌はヒーローではなく何もない場所を切り裂き、辺りには空気を切った音が響く

その隙を逃すまいと、転がりからの起き上がりざまにパワーショットを放ち、

その光弾をデインゾールの口内に当てようとした

しかし、パワーショットはデインゾールの顔の前で爆発した

デインゾールの舌がパワーショットが入る前に切り裂いたのだ

そのまま舌はヒーローの体を切り裂かんとばかりにヒーローの体を切った

ヒーローの体は炸裂し、後ろに吹き飛ばされる

ヒーローはすぐに体を起こし、左拳を横に伸ばす

体の色が赤から青に変わる、モードブルーにモードチェンジした

デインゾールは、今度はその体から液体の砲弾を放った

『ティアツ!!』

ヒロはエフエクト・シールドを前面に張り、砲弾を防ぎ続けるが、シールドに罅が入り、その罅が大きくなっていく

ついにはシールドに穴が開き、砲弾はヒロの体にぶつかり、スパークする

砲弾や舌の攻撃を避ければこちらの攻撃は当たる、しかし被害が広

がり、逃げ遅れた人が犠牲になるかもしれない

だからこそ、ヒロと護は被害を拡大させる避け方は取らない

しかし、舌の攻撃は避けなければ大ダメージを負い、砲撃はシールドを破壊するまで放たれる

こちらの攻撃を当てるためには隙を突くしかない

デインゾールが再び砲撃を開始し、ヒロは身構えた

その時、砲弾は空中で何かとぶつかり、炸裂した

いったい何とぶつかったのか、それはヒーローの背後に現れた護とヒロの仲間を見れば明らかであった

そこにはケツアールが既にマニユールモードでキャプチャーキューブを放っていた

「坂牧!! 本当であればデインゾールじゃないんだな!？」

篠崎は本来は屋久島がいるはずのシートに座っている坂牧に聞いた

『はい、あれはデインゾールではなくでーくエフェクトの怪獣です。』

ですから過去に起こった極性を反転させることはないはずです』

坂牧はポインタスコップを操作し、ダークエフェクトの怪獣の特徴である、

ダークエフェクトの弱点のを指定していく、

指定されたポイントはケツアールの照準器にロックできるようになった

ケツアールはレーザーをポイントに直撃させ、デインゾールは動きを鈍らせる

その隙を逃さず、ヒーローはレッドにモードチェンジし、デインゾールの目の前まで体を回転させながら飛び、

デインゾールの顔の下に潜り込んだ

ケツアールもとても戦闘機とは思えない物理学的法則を無視した動きで背後と側面からレーザーを放つ

ヒーローは真下からディノゾールの顔を殴り続ける
ディノゾールは顔の下にいるヒーローの位置が正確にわからず、また周囲からの攻撃で確実に弱っていく

その時、ヒーローのカラータイマーが点滅する、ヒーローが地球にいられる制限時間がもうすぐ尽きる

ヒーローは勝負を決めるため、あえてディノゾールから離れた

素早くレッドパワー・シュートを繰り出した

ディノゾールも下をヒーローに繰り出す、

が、口元でケツアールの放ったスペシウム弾頭が爆発し、舌の軌道が逸れる

ヒーローのレッドパワー・シュートがディノゾールの頭に直撃する
ディノゾールはその体から黒い霧を放出し、姿を消した……

ヒーローはそれを見届けると、空へ向かって飛んで行った

人に戻った護と人間態に戻ったヒロ

二人で勝利に笑顔を浮かべ、ナンダを置いた場所に歩みを進めていた

朝では不仲だった二人は、そんな不安をどこかへ捨てたようだった
ナンダが二人の目に見える位置に見えた

その時、ナンダの中から誰かが降りてきた

護とヒロはその姿を見た瞬間、頬に雫が伝った

「……ちよつと遅いんじゃない?」

そこには、顔をまるで鬼のようにした屋久島朱里が立っていた

「緊急通信で呼んでも応答なし、戦闘車両の放置……危険な場所だったのはわかるけど、流石に酷いんじゃない?」

「えつと……避難誘導を……」

「高級焼肉」

「え?」

「高級焼肉を奢ってくれたらナンダを置いてったこと、黙っててあげ

る」

「な、なら僕も払います!!」

それに対し、ヒロも声をあげるが

「え？ヒロ君は関係ないでしょ？無理やり連れてこられたんだっけ？」

「あ……」

こうして護は屋久島、篠崎、そしてのちに処罰を言い渡される橋に焼き肉を奢る羽目になるのだった

道端で目を覚ましたとある男性、男性はなぜ自分がここにいるのか全く分からなかった

駅に降り立ったことまでは覚えている、目的も覚えている

しかし、ここはどこだ？そう思っていた

彼の近くには川が流れていた、川に設置されていた橋を歩き、川を見つめる

水の流れがなぜだか汚く感じてしまう、木々も、動物の声も、何もかも……

自分でもわからないが、すべてが汚く感じてしまった

そんな時、川に何かが流れてくる

興味など、もってはないが、何やらうるさい、目を向ける男性だった

そこには川で溺れかけている子犬がいた

うまく泳げず、泣き声を上げていた

男性は助けに行かなくては!!と思った時、同時に、見なかったことにしようと考えた

男性は振り返り、その場を去った

見捨てたことに対し、胸に痛みを感じながら

少年はウルトラマン1―負思念体ニセウルトラマン ヒーロー登場―

至って普通の家庭の小学生の男の子が、自分の部屋で、まるでウルトラマンヒーローのように、

レッドパワー・シユートの構えを取ったり、何かから身を守るように、目の前に見えない何かを張る

「やー!!やー!!」

それは子供では至って普通の遊びだった、好きなヒーローものの番組のまねごとというのは、

少年だけでなく、大人も、夢を見られるものだ

少年の部屋が突然開けられ、少年の母親が扉から顔を出し、少年を叱った

「光（ひかる）!!もう遅いから寝なさいって言ったじゃない!!」

時計は少年の部屋でも確認することができる、間違いがなければ、現在の時刻はもうすぐで22時になるところだ

「ごめんなさい……」

「全く……これで朝はちゃんと起きるんだから……」

母親は困った顔をしながら扉を閉める前にもう一度寝ることを言い、自分の寝室へ戻った

少年は部屋の電気を消し、

自分のベッドの枕側の物置に置いてある紙粘土製の人形を手に取り、ベッドに寝転んだ

「お休み、ウルトラマン」

その人形はヒーローに似ていた

朝、6時30分……一般的に早起きとされる子供の中では早すぎはしないが早い時間である

自分の親より早く起きていた少年、光はコップに牛乳を注ぎ、テレビのニュースを見ていた

平日のこの時間であれば、ニュースではなく、

子供用の番組も数多く放送されているが、光が見るのは決まってニュースだ

もちろん、光がいつもこうであったわけではない

光はウルトラマンヒーローが現れてからのウルトラマンが好きな少年だ

だからこそ、ウルトラマンが出現した場合、情報の早い朝のニュースを見るため早起きを始めた

わざわざヒーローが出るニュースを録画し、何回も見直すほどだ

テレビでは丁度、ヒーローのことについてニュースが取り上げられていた

『昨日の正午に現れた怪獣、ディノゾールが同じく現れたウルトラマンとG U Y Sの活躍により、

撃退されたニュースの続報です。

入ってきた情報によりますと、確認されている被害は建物が数棟以外に軽傷者16名、

重傷者3名、行方不明者0人という……いやあ、これはどう思いますか怪獣研究家の近藤さん』

『いやあ、私もここまで被害が小さいのはもう奇跡というしかないね。

前にディノゾールが地球に来た時は被害はもっと大きかったからね、

ディノゾールを誘導したG U Y Sも被害が出ないように戦ったウルトラマンもそうだけど、

なにより避難を素早く行えた人たちの努力もこの数字に表れていると思うよ』

『私もそう思います、その映像が届いているようです……こちらです……映ってますか?』

テレビには映像に対する注意文がテロップで出され、避難する人々が映されていた

しかし、光は画面の大部分を占める、逃げる人々ではなく、小さく写っているヒーローを見つめていた

人々を守るため、劣勢な状況でも戦うヒーローが光の好きなヒーローだ

その後、光の父親、母親がリビングへ入り、母親は朝食を、父親はいつもの言葉を口にした

「光は本当にニュース……違うな、ウルトラマンが好きだな。

アニメとかは見ないのか？ほら……最近流行ってる……」

「ウルトラマンはカッコいいよ？手から光線出るし!!」

「ああ、うん、好きならいいんだ」

父親はまた長くなる話だと察し、話を切った

丁度、朝食を乗せたプレートを持った母親がテーブルに着いた頃だ

「いただきます」

『いただきます』

父親のいただきますに合わせ、光と母親もいただきますを言った

「ひとつ、はらぺこのまま学校にいかないこと!!」

光は加えて、そう言い、トーストを食べ始めた

両親はそれに対して苦笑い浮かべたが、自分たちの息子がすすくと育っているならと、

何も心配せず食事を始めた

少年が隠し続けている感情に気付かず

少年は昼休み、クラスのいじめっ子らに殴られていた

彼らの口ぐちからは、ウルトラマンパンチやウルトラマンキックと適当に名前を付けた暴力が光を襲う

いつからこうなったのか、それは光にもわからない

いつの間にか自分がウルトラマンが好きだとクラス中に知れ渡っており、それが原因か、

ウルトラマンが好きなんだろう？とリーダー格の少年が始めたことだ

光は教室でウルトラマンの話題を出したことはない

どちらかといえば他の子達の方が話していた

それなのに、自分だけがいじめの対象に選ばれていた

先生にも相談し、相談室にも相談に行き、結局は親に連絡はされず、生徒間の謝罪だけで終わっている

それも3日もすればまたいじめが始まる

ただ、少年は家族には言わなかった、余計な迷惑をかけると思い、いじめられて泣いていても、

家に帰るまでには涙を止めた

家は光の唯一の安心できる場所だった

誰にもいじめられない、ウルトラマンが観れる、ただそれだけだが、光の心にはそれだけでも充分だった

今日もいじめられて帰ってきた光

その体にはクラスで育てている畑の土が所々ついていて払い切れ
ていなかった

光の頭の中は、畑へ蹴りいれられた様子を遠くから見ていた生徒たち
の悲しそうな困った顔でいっぱいだった

なんで助けてくれないんだろう……そう思った

鍵を開け、家に入る

「ただいまー!!」

光は笑顔で家に帰った、さっそくテレビをつけ、録画したニュース
を見ようとするが

「お帰り……光!! テレビ見る前にお風呂入ってきなさい!!」

「ええー、観た後はいるよ」

「床が汚れてるでしょ!!入ってきなさい」

「はーい」

光の表情は笑顔だった

夜、光はベッドに寝転がり、考えていた

なんでウルトラマンは僕を助けてくれないんだろう、と

時間は少し戻り、朝のGUY S基地では、橘が護にあることを言った

「護、お前は1週間の謹慎だ」

「……………え？」

「聞こえなかったか？謹慎だ」

「いえ、聞こえてます……………えっと1週間ですか？」

「少ないと思うか？」

「正直、もっと重くなると思ってました」

「ああ、私もそう思っていたよ……………!!」

そういう橘の手にはくしゃくしゃになったシリアルの袋が握られていた

橘は笑顔のままいった

「今回の行動が偶然とはいえ、被害を最小に抑え、人々から評価されている、ので!!」

その行動をGUY Sが評価しないわけにもいかない……………

しかし!!命令違反の行為であることを考え、日野護を一週間の謹慎処分にする……………ということだ

護君……………君はどう思うかね」

「えっと……………ラッキー？」

「君は私の処分を聞いてもそう言えるのかね？」

橘は自分の机に置いてある紙飛行機を護の頭に投げた

護はそれを広げると、一気に顔色を悪くさせた

『橘薫 給料を今後3分の1に減給』

その一文だけが書かれた紙だった

「今後だよ今後……!!これからどうやってシリアル食べればいいのかなあ?」

橘は笑顔のまま涙を流していた

それを遠巻きに見ていた他のクルーたちが話していた

「生活じゃなくてシリアルの方を心配するんだ……」

「生活は大丈夫でしょ、ここに住んでるんだから」

「でもシリアルってそんなにおいしいんですか?」

「いや、そんなにおいしくはねえよ」

「子供でも食べやすいし、朝は手軽だよ」

「本当に申し訳ありませんでした……」

護は橘に頭を下げてそう言うが、橘はまるで滝のような量の涙を流し始めた

「本当にそう思うか……?」

涙は床に溜まり始め、どんどん床が涙で浸食されていった

「ちよ、多いおおいおおい!!」

「おおいと驚きを掛けてる?」

「男子共!!ふぎけてる場合じゃないって!!」

「うわ!!靴下にしみ込んできた」

「あんなに涙を出せるんだ……」

「ごめんなさい!!何でもしますから泣きやんでください!!あつたかッ!!」

護は必死に謝るが、橘の涙はより一層流れる量を増やし始めた

「なんでもする……?」

「ちよっと……!!これまずいんじゃないの!?!愛!!扉開けて!!」

「ちよーっと、遅かったかな……」

愛が自動ドアのパネルを操作してるが、すでに扉はただの鉄壁になっちゃったようだ

涙はすでに膝までその水位を上げてきていた

「あ、これもう駄目だね」

「お父さん、俺、涙が原因で朝刊に載るってなんかかつこいい気がしてきた」

「何バカなことやってんの」

「あ、そういえば坂牧さんがいません」

ヒロはメモリーディスプレイで坂牧を呼び出した

「坂牧さん、指令室の扉が開かなくなっちゃったんですけど、そっちらなんとかできますか？」

「……え？迷子？迷子ってなんですか？」

もはや指令室はいろんなことで混乱していた

「焼肉……」

橘は唾液ではなく、口から涙を流しながら、なぜかはつきり聞こえる声でそういった

「え？」

「高級焼肉奢ってくれたら許さないでもない」

「すみません、ちよつと焼肉は……」

「……………」

橘の顔がまるで真実の口のような顔に変わり、その口から勢いよく飛び出した水は護の顔に直撃した

「指令室はこつち？」

白状で床を確かめながら歩く坂牧、心は見えても、無機物だらけの基地内を歩くのは不得意な彼女だ

しばらく歩くとクルーの心が見えた、しかし、少しだけ様子がおかしいと坂牧は感じた

「？……なんでみなさん浮いてるんでしょう？」

坂牧が扉の前に立つても扉が開かないことに少し違和感を覚え、外側からパネルをタツチすると、扉が開いた

大量の涙と一緒に

涙の波は廊下を伝い、水位を下げた

しかし、いまだに涙を流し続けている橘に、護は息切れ混じりに言った

「焼きに……!!焼肉なら行きますから!!もう勘弁……!!」

橘は真実の口の顔をしながら、無機質な動きで、パネルをタッチしたまま固まっている坂牧の手を見た

「坂牧君……!!その手に持っているものは……!!」

「えっと……一応、隊長ですけど……」

橘の顔は今度はお天道さまのようになり、あたりの涙が消えていく「あつつい!!なんかすつごく暑いッ!!」

頭を下げ続けている護は何が起きているかはわからなかった

橘はスキップしながら坂牧に近づき、坂牧からシリアルの袋を貰うと

「じゃあ!!焼肉の件!!覚えといてね!!」

そのままスキップで廊下を去って行った

「なんなんですか……いったい……」

だれもシリアルを好む橘の存在が理解できずにいた

少年はウルトラマン2―負思念体ニセウルトラマン ヒーロー登場―

翌日、自宅謹慎を受けた護は住んでいた家へ帰っていた

これからの1週間をどうしようかを考え、

冷蔵庫になにも食糧が入っていないことを思い出し、近場のスーパーマーケットへ足を運んだ

「とりあえず、一日分つと」

護は肉や野菜などの食料を入れた袋を片手で持ち、自宅に帰ろうとしたが……

護の足は、護の意志とは別にとある場所へと向かっていた

そのことに護が気付いたのはスーパーから出て10分ほどが経過したときだった

地元ではあるため、迷いはしないが、その場所は護の自宅とは反対側の位置に存在する場所だった

「なんで俺（こんなどこ）に……」

護は今まで自分の意識がなかったことを思い出し、自身に何が起こっているかを確かめようとしたが、

その時、近くの公園から何か声が聞こえた

近く……といっても、その公園は背の高いアパートを挟んだ向こう側なのだが、

この時の護はその異常さに気付いてはいなかった

護は公園へ近づいていくとその内容が耳に入ってきた、

どうやら子供たちが遊んでいる声のようだ

しかも、それはウルトラマンごっこのようだ……

護は昔を思い出し、自身も似たようなことをやったことを思い出す
が、公園の少年たちを見た瞬間、

護は眼を疑った……なぜならば、彼らがやっていたのはウルトラマンゴッコではなく、

ただのいじめだったからだ

一人の少年を囲み、殴り、蹴り、髪を引っ張っていた

「お前ら!!何やってんだッ!!」

その様子を流石に見過ごせなかった護は、少年たちに走りながら、声をあげた

「おい、やべえ、逃げようぜ」

「ばれるぞ?」

「大丈夫大丈夫」

少年たちは走り去りながら、そんな言葉を話していた

護としてはそのまま少年たちを追いかけたかったが、いじめられていた少年も見過ごせず、

屈んでいる少年の傍に駆け寄った

「大丈夫?」

少年は顔をあげ、護を見た、その顔は涙でぬれていた

「はい……ありがとうございます」

「立てるかい?」

護は少年の体を持ち上げ、立たせた

少年は何とか立てるようだった……少年は護に頭を下げながら、近くのベンチに置かれている自分のランドセルを取りに行った
護もそれに付き添っていた

ランドセルの側面には少年の名前が書いてあった

「光（ひかり）君?」

「あ、光（ひかる）です……」

「あ、ごめんね光君」

光はそのままランドセルを背負うと、そのまま帰ろうとした
「あ、待って光君!!できれば、これからお話できないかなあ?」

ほら!!ジューズもあるし……ちよつとぬるくなってるけど……」

光は護のテンションに押されてしまい、話をすることになった

護と光はベンチに座って缶ジュースを飲みながら話し始めた

「いつもいじめられてるの?」

「いつもじゃないけど……学校の日だけ……」

「そうか……先生には?言ったの?」

「無駄だよ……先生に言ったって……」

「そうか……お母さんやお父さんには?」

「……」

「やっぱり、言えないのか……」

「え?」

光は何も言っていないことを護にばれていたことを不思議に思った

「いや、俺も昔、いじめられててね……迷惑掛けるんじゃないかって、親には何も言わなかったんだ。

学校の先生も相談には乗ってくれたけど……結局いじめられたしなあ……」

光は一緒……そう思いながら自分とこの人は一緒じゃないと心の中で言い聞かせた

自分のほうが不幸だ……そう言い聞かせないと、自分がみじめに思えるからだ

「ウルトラマンは好きかい?」

そう思っていたときに、護からいじめに関係のない話が飛び出してきた

「なんでですか?」

光としてはどうしてその話をしたのか、反射的にそういった

「俺も、ウルトラマンが好きだったからかな……」

「……僕も好きです、けど……」

「けど、僕を助けに来てはくれない?」

光は言おうとしていたことを言われ、何が何だか分からなくなっていた

「あ、ごめんね、俺もそうだっただけで……何も君が俺と……ああ、いや、なにいつてんだろう俺……」

護は相談に乗ろうと光と話していて、全然相談に乗れていないことに気付き、あわてていた

「えっと……ウルトラマンだと、何が好きですか？」

光は自分から護に対して話しかけた

「何が好き？……今の子が分かるかどうかだけど……メビウスかな？」

「僕はこの前怪獣を倒したウルトラマンです」

「えっと？ヒーローのこと？」

「え？ヒーローって言うんですか？確かまだ名前が決まってない……？」

「あ……いや、僕が名前を勝手につけてるだけでね？」

「かっこいいと思います」

「そ、そう？ありがとうございます」

「ウルトラ5つの誓いって知ってますか？」

「あはは、知ってるよ、ひとつ、腹ペこのまま学校へ行かぬこと」

その後も二人のウルトラマンの話は続き、気付けばジューズはなくなり、空も赤く変わっていた

「あ、そろそろ帰らないと……」

「あ、もうそんな時間か……あ、ごめん!!全然相談に乗れなくて!!」

「大丈夫です!!僕も楽しかったです!!」

また、ウルトラマンについてお話がしたいです!!」

「あ、ごめんね……俺、仕事があつてね……今日も偶然ここに來れたんだ……」

光はがっかりした様子でそうですか……といった

「えっと、ニュースは毎日見てるって言ってたよね」

「はい、見えます」

「じゃあ、次にヒーローが怪獣を倒しに来た時は、怪獣を倒した後に、こうやって」

そういうと、護は右手でピースサインを作った

「絶対にピースしてくれるようにお願いしてあげる」

「え!? どうして!!」

「実はお兄さんはヒーローと友達だったんだ、今まで、君のことに気付いてあげられなかったから、

お兄さんがウルトラマンにお願いしてあげる、だから、ウルトラマンのことを好きでいてくれるかな?」

「うん!! 絶対に嫌いにならないよ!! 何があっても!!」

「うん、じゃあ……またね!!」

「うん!! ばいばい!!」

そう言つて、光と護は別れた……

光のことを見つめている、赤い目の存在に気付かないまま……

その頃、GUY S基地ではちよつとした事件が起こっていた

「なんで坂牧の奴がいないんだ?」

篠崎が坂牧がGUY S基地にいないことに気付き、坂牧を捜しまわっていた

篠崎は指令室に入り、のんびりとお茶を飲んでいるほかのクルーに聞いた

「おい、坂牧を見なかったか?」

全員がほかのクルーを見て、知っているかを聞いていたが、その中で橘が坂牧のことを何か知っていたようだ

「彼女なら体調不良とかで、自室にいるはずだが……何かあったのか?」

その言葉を聞き、ヒロと橘以外が何かに気付いた

「隊長、なんで気付かないんですか?」

「それ嘘ですよ」

「え？嘘？」

「ああ、だからシリアルの袋もっていたのか、休みやすくなるために」
「策士だったんだね坂牧さん」

これに対し、ヒロと橘はまだ何も理解していなかった

「護さん、まだかなあ……」

一方その頃、坂牧はスーパーで買った中食を持って、護の家の扉の前で護を待っていた

その後、護が帰ってきたときに坂牧がいることに驚き、腰を抜かす
10分前の出来事だった

少年はウルトラマン3―負思念体ニセウルトラマン ヒーロー登場―

二人が別れ、しばらくした後、光は自分の部屋で、ヒーローの紙粘土を持って笑っていた

護の言葉が嘘だとわかっていても、光はとても嬉しかった

今まで自分のことを本当に心配してくれる人がいなかったからだ

好きなヒーローについても話せて嬉しかった

また、明日も幸せでいられる……そう思っていた時、外から声が聞こえた

光は人形を置いて、玄関から外へ出た

辺りを見渡し、どこから声が聞こえてくるのかを探す……

光の背後にいる存在に、光は気付かなかった

光の顔に黒い霧が掛かり、光はその場に倒れた

霧をかけた存在は口を歪ませ、笑うとその場を去った

光の家の玄関が開き、光の母が出てきた

「光？晩御飯よ？……光？」

母親が目にしたのは倒れている光の姿だった

「光!!」

外履きも履かず、飛び出した母親は、光を抱き起こすが、その顔には黒い霧が掛かっている

「なによ……これ……!!」

母親は必死に霧を払おうとするが、霧は手をすり抜け、払えない

母親は家にいる父親を呼んだ

家に帰る護は、解体工事の影響で人の少ない道を歩いていた

心の中で光のことを心配しながら……今日過ごした楽しい時間を思い出しながら……

護は住んでいたアパートに着き、階段を一步ずつ登り、自分の部屋のある階にたどり着き、

通路の曲がり角に入ろうとした

「ばああ」

「うわっ!!」

曲がった途端、坂牧が両手を広げて脅かしてきた

「驚きました?」

護は高鳴る心臓を落ち着かせる

「はあ……ふう……腰が抜けるところだったかな?」

「いたずら成功です」

「でも、なんでここに?」

「んー……なんででしょう? 答えはこれです!!」

そう言い、坂牧は隠し持っていた造花を護に差し出した

「この花? あ、花言葉?」

「そうです、私はこれを持って祈っていたんです、早く帰って来ないかなあつて……」

護さん、謹慎なのに全然家に帰ってこないんですもん……」

坂牧はアングレカムの造花を抱き締めそうだった

「あ、ちよつと色々あつて……ごめんなさい」

「ふふ、冗談です!! わかつてますから、人助け……ですよね?」

坂牧は護の心を見つめていた

ヒロと不仲な時、仲直りした時、そして今を見比べ、護の心の輝きはよりきれいなものになっていた

そのことから坂牧は、今日家に帰ってくるまでに何かをしてきたことが丸わかりだった

「あ、ご飯買ってきたんです!! 一緒に食べましょう?」

そう言い、袋に入った幕の内弁当を取り出す坂牧に、理由を知っていても苦笑いをした護だった

護の部屋に入り、電子レンジに弁当を入れ、温めている間に護は坂牧と話していた

「タクシー代出すけど、遅くなったら流石に帰りなよ?」

「……………え？」

「いや、流石にずっと居るとみんなが心配するって」

「……………えい!!」

「痛っ……………」

そういうと、坂牧は持っていたアングレカムの造花を護の顔に押し付けた

「あ……………えっと……………駄目です」

「いやです」

「じゃあ、許可を取ったらいいです、その代わり許可が下りなかったらちゃんと帰るんですよ？」

「いいんですか？」

「え？」

坂牧は笑顔で通信端末を取り出し、G U Y S 基地へ連絡をかけた

『あ、坂牧君!! 今ここにい』

「護さんの所において、今日は泊まります、いいですか？」

『……………坂牧君、護君は謹慎処分を受けている、それがどういうことだか』

「私がG U Y S に入る条件覚えてますよね？」

『……………いつ怪獣が出るかわからないから、できれば基地にいてほしいかな?』

「私はいつでも契約を切ってもらってもいいですけど……………?」

『何泊でしょうか?』

「謹慎がなくなるまでで」

『怪獣が現れたらお願いします』

そして通信が終わった

「おっけーが出ましたよ」

「いや、今の脅迫じゃ……………」

「おっけーはできましたよ？」

「んー、しょうがないか……………はいわかりました」

その時、電子レンジから温め終了の音が鳴った

それと同時に、護と坂牧が電子レンジではなく、窓の外を見た

その方角は光の家の方だった

「ご飯はちよつとお預けかあ……」

「ですね……行くんですか？」

「ははは……行かないわけないでしょ？」

坂牧は少しだけ不安な顔をした後、笑顔で言った

「いってらっしゃい」

「いってきます」

護は素早く家を飛び出していった

同時に坂牧の通信端末に連絡がきた

回線を開くと橘の声が部屋に響いた

『ダークエフェクトの一部の消失が確認された、迎えに行くから作戦に参加してくれ』

「ぶち壊しです……」

坂牧は唇がムズムズしているのを我慢しつつ身支度を始めた

護は光のもとへ走っていた、なぜ光が危ないか、その疑問は今はず、
え、

ただ、ウルトラマンとして、守ると決めた人のもとへ走った

そして、護は光のいる方角に黒い霧が空から集まってきたのを見た

護は一軒家の屋根を飛び越え、一直線に光のもとへ急ぐ

黒い霧が護のよく知る姿へと形を変化させた

その姿はだれが見てもウルトラマンヒーローの姿であった

ニセウルトラマンヒーローは、どこかへ向けて歩き始めた

それを横目に、護は光のいる場所に着地した

そこには光を抱き締める両親の姿があった

光の口からは今までのいじめのこと、それを許せないと言葉が漏れ
出していた

同時に、護が聞きたくなかった言葉が零れた

両親は光が隠していたことに気付かなかったことを謝り続けてい

た

護は両手を固く握り、その場から走り去った

ニセウルトラマンヒーローの近くでは、多くの子供たちや、カメラを構えた人々、テレビの報道人もいた

そして、子供たちの中には、光をいじめていた子供たちもいた

『ウルトラマンは好きか?』

突然、ニセウルトラマンヒーローの近くにいる人たちの耳に声が聞こえた

人々はヒーローがしゃべったように聞こえた

「大好きだー!!」

「いつも守ってくれてありがとう!!」

「これからも平和をよろしくー!!」

人々は感謝をヒーローの姿をしたニセモノに伝えた

ニセウルトラマンヒーローはうなずくと、モードレッドと同じく、右拳を横に伸ばし、ヒーローとは違う黒いエネルギーを溜め始めた
ざわめく人々、逃げる人々……

ニセウルトラマンヒーローはそれらをまとめて葬ろうと、溜めたエネルギーを放とうとする

「止めろー!!止めてくれー!!」

息を切らしながら、ニセウルトラマンヒーローに追いついた護はそう呼び掛ける

ニセモノのヒーローは護の方を向いた

「君ならわかるはずだ!!ウルトラマンが好きな君なら!!」

『嫌いだ』

「え……?」

『ウルトラマンなんて嫌いだ、いじめてくるみんなも嫌いだ。

先生も嫌いだ、クラスのみんなも嫌いだ。

気付いてくれない親も……嘘つきな、お前も』

ニセウルトラマンヒーローは狙いを護に変えた

その手に溜まった黒い光線を護めがけ放った

咄嗟に防ぐ姿勢をとる護だが、光線は青い円盤状の何かに防がれた見渡すと、レッドスパロウ、オオルリが飛んでおり、本物のヒーローも現れていた

護は右手にフュージョミッションを握り、ヒーローに向かって走った

ヒーローも護の方角に向かい走りだし、影を作った

フュージョミッションを掲げ、叫ぶ

「ヒーローーッ!!」

体が光に包まれ、浮き上がる

そのままカラータイマーに入り、ヒーローの体が青から赤に変わる
ヒーローはニセモノのヒーローのつかみかかった

そのまま投げられると思われたが、ヒーローは動かなかった

『光君!!目を覚ますんだ!!』

話しかける護に対し、ニセモノのヒーローは蹴りを繰り返し、ヒーローを突き放す

『君はそんなに弱い子じゃない!!ウルトラマンが好きで、いじめなんか乗り越える強い子だ!!』

『嫌いだ』

『光君!!』

ニセモノがヒーローを殴り、蹴り、投げ飛ばす

しかし、ヒーローは反撃をしようとしな

「おい!!あれやばいんじゃないか?」

レッドスパロウを操縦する篠崎はオオルリと共に、ニセモノだと判明しているヒーローに攻撃を開始した

ニセモノに対し、レーザーやグレネード弾が命中する

ヒーローはその様子を見ると、まるでニセモノを庇うかのように、自分から攻撃に当たりに行く

ヒーローの体に攻撃がさく裂し、またニセモノの蹴りがヒーローに当たった

『ぐッ!!』

『護さん!!なんで攻撃をしないんですか!?!』

「ウルトラマンの野郎……なんであいつを守ってんだ……?」

疑問に思う篠崎に橘から通信が入る

『各機攻撃を中止、警戒状態で待機せよ!!』

「どうしてだ隊長!?!」

『このまま攻撃してもウルトラマンがきつと防ぐ、人間の手でウルトラマンを倒すわけにはいかない』

「……GIG」

護はまだ光に言葉をかけていた

『光君……負けちゃだめだ!!自分に……負けちゃだめだ!!』

『自分に……負ける?』

ニセモノのヒーローは再び、エネルギーを溜め始める、そのエネルギーは護に放った時の比ではない

護は力を抜いて、両手を広げた

「受け止める気か!?!」

『護さん!!何を!!』

護は何も答えない

ヒロは急いでモードを変え、シールドを張ろうとしたが、ヒーローのモードは変わらなかった

ヒーローは、ニセモノの放つ光線を受けた

しかし、ヒーローは姿勢が少し変わった以外では、ほとんど先ほどと同じだった

ただ、受けたダメージにより、カラータイマーがいつもより早く点灯し始める

『護さん……』

『ごめん、ヒロ……もう少しだけ付き合ってくれ』

『……わかりました、護さんを僕は信じます』

『たぶん痛いぞ?』

『がんばります』

ヒーローは姿勢を元に戻し、堂々と手を広げた

カラータイマーが点滅しているのにも拘らず、その姿はまるで本当のヒーローと言えるような姿だった

『さあ来い!!光!!』

ニセウルトラマンヒーローは何かを振り払うように攻撃をし始めた

ヒーローの使ったすべての光線技も、繰り出される技も、何度も食らってもヒーローは一步も動かなかった

ニセウルトラマンヒーローを突如、攻撃を止めた

『なんで……攻撃しない?』

ニセモノはヒーローに聞いた

ヒーローは両手を下ろし、言った

『攻撃したくないから……かな?』

『グツ……なんで……なんで!!』

ニセモノの体から、黒い霧が噴出し、その形が崩れていく

『約束……』

体が消えかける瞬間、光はヒーローに言った

『覚えてるよ』

ヒーローも時間の制限に達し、体が消えていく……

体が消えるその前に、ヒーローは誰かに向けてピースした

1週間後、謹慎処分が解けた護が、指令室に入った

「お久しぶりです!!」

「お、帰ってきたな?」

G U Y Sクルー全員が護を出迎えた

ニセウルトラマンヒーローが出てきた日にG U Y S基地に帰らされた坂牧だけはいまだに顔を膨れさせていたが……

すると、ヒロが手を入れるくらいの穴のあいている大きな箱を持ってきた

「なんですかこれ?」

護が聞くと橘が答えた

「最近現れているウルトラマンの名前の募集はがきだ」

「ここにいるみんなで名前を決めるのはなんか違って、勝手に募集しちゃったって」

「もちろん僕はヒーローがいいって言ってますけどね」

「ジャイアントの何がわるいんだよ」

「いつも言ってるけど、君のセンスはないとおもう」

「なんだよお父さん」

「あはは……で、俺に持ってきたってことは……」

全員がうなずき、護は箱に手を入れる

「これだ!!」

護が引いたはがきにはヒーローと書かれていた

はがきを書いたのは、城南光……ウルトラマンが大好きな少年の名前だった

大研究!! GUY Sの今とこれからの敵!!

GUY S基地、いつもの指令室にGUY Sクルーが全員が集まっていた

「最近、怪獣が頻繁に出現していたからな。

久々に来た休息の時間だが、これまでの出来事をまとめる勉強会をしようと思ってるね」

橘がその手に資料を持ち、ページをめくる

勉強会、そう聞いた篠崎は難色の色を示した

「今さら勉強することなんてないだろ? めんどくせえ……」

「じゃあ、篠崎君、これはどっちが偽物かわかるかい?」

その言葉に橘はにやりと笑うと、篠崎に二つの写真を写しだした

そこにはニセウルトラマンヒーローとウルトラマンヒーローが映っていた

「え? …… 右!!」

「……ということもあるから勉強会を始めようか」

左のヒーローに赤丸が付き、右のヒーローには青バツがついた

橘は大型のディスプレイに怪獣を出した

「随分古い映像だな……」

篠崎は愚痴をこぼすだけだが、三原は冷静にその映像を分析していた

「えっと、ドキュメントSSSPの最初に記録された怪獣、ベムラーの映像ですか?」

「そうだ、これはつい最近出現したダークエフェクトによるベムラーとは出現方法から違う。」

SSSPに記録されているベムラーは湖に出現したとあり、水が大量に必要なのではないかといわれていたが、

私たちが確認したベムラーは街中で突然現れた

突然現れるのは同じだが、ダークエフェクトの影響で出てくる怪獣は街中に出てくるという特徴があるとされる」

屋久島は、ダークエフェクトの怪獣と聞き、一体の怪獣を思い出し

た

「ダークエフェクトといえば……あの怪獣は今までに見たものではなかったわね」

「……勉強会だからね、勝手に発言も許そう……」

「そうだね、この怪獣はドキュメントを探し回ったけど、どこに存在は確認されていない」

「そう言い、橘はとある怪獣をモニターに出した」

「この怪獣はのちに本部からレジストコードが決定した。」

「ダークエフェクトの特性も合わせて、サイコダークと名前が決まった。」

「ダークエフェクトについては、その特性が影響を受けた人の協力により、ある程度わかったらしい」

「でも、本部は本当に性格が悪いと思うんです。」

「愛ちゃんや光君が被害を受けた子だってだけで、無理やり事情を聴きだすなんて……」

「まあ、そのおかげで、特性が判明したんだが……ダークエフェクトの特性はかなり厄介だった」

「ダークエフェクトの特性は、何らかの精神的負担を抱えるものを標的にとりつき、」

「怪獣が同時に出現する……らしい」

「現在の日本だけでも精神的負担の要因は多い……いつ、どこでダークエフェクトの怪獣が現れるかは予測不能だ」

「そういえば、と屋久島は坂牧にひとつ質問をした」

「由依ちゃんのあのゴーグルってどうなってるの?」

「ポインタスコープですか?特に普通の指定機ですよ」

「あ、なんかのメテオールか何かだとおもったわ」

「朱里ちゃん、メテオールは30年前のファイナルメテオールから新規の開発は禁止されているんですよ?」

「そうだったっけ……?」

「橘は待っていましたと、自身の持っていた資料のページをめくり、説明を始めた」

「30年前、ファイナルメテオールが使われた後、メテオールは必要最低限のもの以外は封印処理、

新規開発も同時に凍結したんだ……」

まあ、怪物が現れだしたからメテオールの開発は今後再開されるかもしれないね。

ちょうど、良いからGUY Sの兵器についておさらいしようか、はい篠崎君、レッドスパロウの説明よろしく」

橘は篠崎に説明を投げた

「俺かよ!? ああ……、レッドスパロウはあのGUY Sガンウインガーの後継機で、ガンウインガーよりか強い!!」

なんとたつてガンウインガーより赤くてかっこいいからな!!」

「篠崎君が説明下手ってわかった、次は三原君、オオルリの説明を頼もう」

「G I G、オオルリはレッドスパロウのように、GUY Sガンローダーの後継機として作られました。」

しかし、オオルリはレッドスパロウの支援機としての性能を重視され、

さらに、マニニューバモード時のブリンガーファンの機能がオミットされています。

ただ、ガンローダーよりもすべての性能が向上しており、

レッドスパロウとホワイトホットの両機とも合体できる特徴があります」

「ありがとう、わかりやすい説明だったよ」

篠崎はどこか満足そうに席に座る三原を見ていた

「じゃあ、篠崎君にリベンジをあげよう」

「よっしゃああ!! 来い!!」

橘は最初に見せた二枚のウルトラマンヒーローを見せた

「はい、本物は左だったね? じゃあその見分けができる場所を言ってくれ」

「目つきが悪い!!」

橘は二枚のウルトラマンヒーローをしばらく見つめ、その後篠崎を

見た

ヒロがその沈黙に耐えられず、声をあげた

「あ!!ほら、篠崎さん!!あのウルトラマンは左右の手の色が違うんですよ!!」

偽物のほうは両手とも手が赤いんです!!」

「……そうか!!偽物は両手が赤いんだな!」

「はい!!」

「……やべえ!!カツケえ!!」

「はい!!……ええええええ!!」

「篠崎さん、赤が好きだからね」

勉強会はその後も続き、楽しく笑顔で終わったが、終わった後、一つの疑問を持った坂牧が橘に話をかけてきた

「橘さん、一つだけ何かおかしいなど感じる事があったのですけど……」

「なんだい?」

「ダークエフェクトが発生してから、火星の無人機への通信はできていますね?」

「ああ、スペシウムを回収する無人機との通信のことか、送受信は今でもできているが?」

「インターネットも機能してますよね」

「……しているな」

「……何かおかしいと思いませんか?」

「何かおかしいところはあったか?特にはない気がするが……」

「ダークエフェクトが発生してから、ダークエフェクトの外側へ人工衛星を送る試みは全て失敗しています。」

ダークエフェクトに侵入した時点でその衛星との通信が途切れています。

なのに、もとより外側にある衛星とだけ通信はできるって都合が良
い気がします」

橘は顎に指を当てて、考えていた

確かに何かおかしいと

「ダークエフエクトに触れた途端通信が途切れる、もしくは衛星が故障すると仮定しても、

そこまでの能力があるなら、ただの通信が影響はないっておかしいですよ？」

「確かにそうだ……だが、そんな話、まだ報告すら上がってないぞ？」

「報告は確か一度本部に送られるんですけど……？」

「坂牧君……まさか、本部を疑っていないかい？」

「はい、疑っています」

「どうしてだい？」

「いろいろおかしいですよ？性能が上がっているはずのレッドスパロウもオオルリも、

最近出現した怪獣に手こずっています。

可能性としては、それほど怪獣が強いか……マシンの威力が低いからです。」

「怪獣の強さなんて確かめられないだろう？何かの間違いじゃないか？」

「私の父親はあの二機を作って、本部に送りましたが……私にあの二機のチェックをさせてください

きつと、どこかがおかしくなっているはずですよ」

橘はしばらく悩むと、坂牧と格納庫へ向かった

炎に忍ぶ者達Ⅰ―負思念体ジエロニモン・宇宙忍者バ ルタン星人登場―

橘と坂牧は誰もいない深夜、格納庫でレッドスパロウとオオルリの機体を確認していた

機体に繋いでいる特殊なデバイスで、各種の性能などを確認し、橘に読ませている

「やっぱり……武装はどこるか機体性能まで劣化させられています。

これだとG U Y SガンウインガーやG U Y Sガンローダーの方が性能がいいかも……」

「まさか、ここまでひどいとは……」

「ここまで改変されているのに、それを今日まで感じさせないなんて……」

意図的にやっているのは確かです……」

橘と坂牧が話していると、格納庫に作業着を着た男が近づいてきた「ちよつと!!なにしてるんですか!?!困りますよこの子たちは結構デリケートなんですよ!?!」

男がそう橘と坂牧に声を上げる

坂牧は男をジツと見つめ、何か違和感を感じ、橘の後ろに隠れる

橘は坂牧の持っている力を知っているため、腰につけているトライガーショットに手を置いた

「……その様子じゃあ気付いたようだ、やはり面倒だ坂牧由依、その力は地球人のもものではないな？」

面倒だが、ここで二人とも消えてもらおう、安心したまえ……我々の科学力なら代わりはいくらでも作れ」

男の言葉がすべて言い終わる前に、トライガーショットを抜き、男の肩を撃った

撃たれた男はまるで何かをしたかという顔で橘を見て笑った

「……はははははッ、橘隊長!!トライガーショットの調子はどうですか?」

「今なら威力の調整まで操作できるんですよ!!」

「そう言い、男はポケットから手のひらサイズの機械を取り出した
「さて、そろそろ消えてもらいませう、誰が来るかわからない所です
からねえ」

男はどこから取り出したのか、大きな剣のようなものを、まるで鋏
のようにし、橘たちへ歩き出した

橘が坂牧を自分の後ろに隠し、無駄だとわかりながらトライガー
ショットを向けた

その時、誰かが男が持つ鋏を蹴り飛ばし、男を殴り飛ばした
殴り飛ばされた男は立ち上がり、殴った誰かを見た

「貴様!!……日野護か愚かな地球人め……!!」

「護さん、私を助けに……!!」

「護君、助かった……なぜここに？」

護は男と橘たちの間に構えて立ち、質問に渋々答えた

「いや……深夜に二人見つけて……」

「あ……護君、違うそうということじゃない」

「護さん……」

「ともかく!!これで形勢は逆転したぞ!!お前は一体何者だ!!」

護はその場をぐまかそうと男に聞いた

「つふふふ……はははは!!形勢逆転だと?笑わせる!!」

私を倒したところで状況は何も変わらない、それが分からない貴様
らに未来はないのだ!!」

「どう言うことだ?」

橘が少し前に出て男に聞く

「ふふふ、確か貴様は知っていたな……?まあいい。

「ダークエフェクトが突如発生した原因……それはお前たち人間だ
!!」

「何?」

「愚かな地球人どもめ、私たちが滅びぬように30年も導いてやった
というのに……」

「この美しい星を壊すのが自分たちだと知って絶望するがいい!!」

男はその姿を人間からとある姿に変えた

「!?バルタン星人だど!?」

気付いた時にはもう遅く、バルタン星人は体を薄くさせ、消えていった

そして、護にしか聞こえない声で、とあることを言い残した

『日野護、貴様にだけは教えておこう……』

不完全な同化や、自身の体を光に変換する貴様の体は、すでに限界を迎えている。

いずれ、その成長しすぎた精神に貴様の体は壊されるだろう』

橘たちは廊下から複数の足音がするのが分かった

おそらくトライガーショットの発砲音で誰かが駆けつけたのだろう

「橘隊長、どうしますか?」

「緊急の会議を開く……これは、GUYYSの存亡の危機だ!!」

「マジかよ……」

「上層部も宇宙人の可能性があるなんて……」

GUYYSクルーを集めた会議では全員が困惑していた

GUYYSの内部に宇宙人がおり、また本部の上層部も信用がないというのだから無理もない

「マシンに関してはヒロ君と坂牧君が何とかしてくれるそうだが、それでも整備班の協力も必要だ。

今、我々はかつてない危機にさらされている……だが、人々を救えるのは我々GUYYSしかいないのも事実だ。

こんな状況だが、君たちを信じ、力を借りたい……よろしく頼む」
橘はクルーに頭を下げ、そう言った

クルーの反応は護、ヒロ、坂牧以外は皆不安げだった

炎に忍ぶ者達2―負思念体ジエロニモン・宇宙忍者バ
ルタン星人登場―

翌日になっても、クルーの表情は暗いままだった

今の彼らには、誰が敵で誰が味方か……誰を信じて良いのかも分
らなかつた

そんな彼らのもとに怪獣出現の一方が入る

橘はメモリーディスプレイで格納庫にいるヒロと坂牧に通信を
取った

「2機の調子はどうだ？」

『調整は完了してます、それと、設計図上で確認されていない受信機を
取り外しました。』

たぶんこれが計器異常の原因だと思います』

『武装もチェックは終わっています』

「分かった」

橘は通信を切り、クルーを見る……その顔は戸惑いだった

護は静かに立ち上がると、格納庫に先に向かっていった

護はG U Y Sがどうあろうと人々を守ることに変わりはないと決
めていたからだ

橘は護を見送った後、クルーに向かい、頭を下げた

「信じてくれ」

ただその一言を言った

「今、戦えるのは君たちだけだ。」

その中で、君たちが誰かを信じられないことがあっても……

人々を守りたいという……君たちの気持ちを……」

橘がもう一度、深く頭を下げた

「G I G ツ!!」

一際大きな声が指令室に響いた

篠崎が、橘に微笑みながら少しふぎけながら敬礼していた

「考えてみたら誰が敵ってわからねえってだけで、何も変わってねえじゃねえか。」

敵だつてわかつたらぶん殴るだけじゃねえか、あああ、凹んでたの馬鹿みたいじゃねえか!!」

「……ありがとう」

篠崎をはじめに、他のメンバーも微笑み、言った

「はあ、単純……馬鹿にはなりたくはないから私も行かなきゃ」

屋久島が篠崎を軽く見た後にそう言った

「朱里は放っておけないからね、それに愛ちゃんが入隊したときに先輩できないからね」

三原は屋久島とハイタッチを交わし、そう言った

「みんながそう言うならお父さんも家族を守るために頑張るとしますか」

「お、お父さんが自分でお父さんって言ったぞ!!」

「話の流れから僕の家族のお父さんってことだつてわかつてよ……」

橘は笑いながら、また頭を下げた

「本当にありがとう」

「おいおい隊長、言葉が違うんじゃないか?」

「護君は勝手に行っちゃったけど、みんな橘隊長の号令を待ってるんですよ?」

橘はそうだなと言うと、大きく息を吸って号令をかけた

「GUYS!! s a i l y g o !!」

『G I G !!』

指令室にはこれから人々を守る決意を再びしたクルーの笑顔だけがあつた

「じゃ、今度焼き肉おごりな隊長」

「え？」

「私も」

「え？」

「じゃあ橘隊長、お願いします」

「ええッ!？」

「家族同伴はよろしいでしょうか？」

「ええええええええッ!？」

そんなにおいしい話ではなかったとさ

炎に忍ぶ者達3―負思念体ジエロニモン・宇宙忍者バ
ルタン星人登場―

怪獣が現れる少し前、味のある一軒家で、一人の男性の老人が仏壇
の前で手を合わせていた

仏壇には和菓子が置かれていた

「お前が居なくなってから、もう100年か……」

老人はお供えされている和菓子の中から大福餅を一つ取り、頬張つ
た

食べ終わると、軋む木製の椅子に座り、外を見つめていた

そんな老人の耳に、床の軋む音が聞こえてきた

「誰か居るのか……?」

老人は廊下の方に声をかけた

そこに姿を見せたのは女性だった

「子供かと思っただら……こんな家に何の用で?」

老人は少しだけ警戒しながら何か困っているのかと思い、女性に聞
いた

「……源だ」

「源さん?……ここでは聞かない名字だ、……こちら辺に住んでいる方じゃな
いよ」

女性は手を老人へ向けると、そこから勢いよく黒い霧が飛び出し、

老人の顔にまわりついた

悲鳴を上げる老人を目の前に、舌で唇をなめた

「上質な負の感情を……私のものに……!!」

老人は椅子から転げ落ち、微塵も動かなくなった

そして住宅街には突如、負思念体ジエロニモンが現れた

ジエロニモンは住宅地を進攻し建物や人々を蹂躪していく

ジエロニモンが住宅地を破壊しているその姿を、女性は見つめてい
た

乾いた唇を舌で舐め、何かを待つかのように

ケツアールとナンダがやってきたときには、辺りの住宅からは火の手があがっていた

ケツアールはナンダとの連結を切り離し、その後、レッドスパロウとオオルリに分離した

各機がジェロニモンに攻撃を開始しようとしたとき、篠崎がナンダに通信をした

「おい!!王子と坂牧!!武装の名前勝手に変更すんじゃねえよ!!」

篠崎はレッドスパロウのディスプレイに書かれている武装の名前が変更されていることに気付いた

『しようがないですよ篠崎さん、前の武装は改変されてて名前も変えられていたんですから……』

どっちかという二元に戻ったんです、こっちを使ってください』

「この名前叫ぶと結構恥ずかしいんだがなあ……なあお父さん?」

「じゃあ僕が叫んだら君も叫ぶ?」

「お父さんの熱い姿を見してくれるのかっ!」

篠崎は笑いながら、操縦桿を深く倒した

「しゃッ!!行くぜお父さん!!」

「ウイングレットブラスター!!」

いつもの光粒子エネルギー砲ではなく、使用されるエネルギー量が増えたウイングレットブラスターが、

レッドスパロウから発射された

「朱里!!お願い!!」

「バリアブルパルサー!!」

オオルリからも威力の高い粒子ビームが発射される

2機から発射された攻撃はジェロニモンに命中し爆ぜた

「使えるぜこの新装備!!」

『別に新装備じゃないですけど……』

地上に着陸したナンダはジェロニモンの左側面に着いた

坂牧がナンダを降り、ポインタスコープでジェロニモンの弱点部分を指定していく

指定されたポイントにレッドスパロウとオオルリが的確に攻撃をする

「なあ、ヒロ……今回俺たちじゃないんじゃない……」

「そんなこと言ったらいけませんよ、僕たちも攻撃を開始しましょう」
護たちはポイントを指定し終わった坂牧を乗せ、後退しながらスベシウム反応砲を放った

四方から放たれる攻撃に思うように動けないジェロニモンだったが……

ジェロニモンの体から黒い霧が噴出し、ジェロニモンの隣に別の怪獣が現れた

その怪獣はG U Y Sのクルーたちは見たことがある

「ボガールツ!」

怪獣が一体から二体が増えたことによって、篠崎たちが取っていた先方が通じにくくなった

さらに、護が坂牧にボガールの弱点を指定するように言ったが、坂牧にはボガールが見えていなかった

「見えない!」

「はい……あれは怪獣でもダークエフェクトの怪獣でもありません!!」

「てことはあのボガールは一体……!!」

その時、ジェロニモンが念力を使い、自身の尾にある羽根を飛ばし、3機に放った

ボガールに気を取られていた護たちはジェロニモンが放った羽根の攻撃を食らい、機体のバランスを崩した

3機とも調整をされ機動力も高くなっているはずだが、ジェロニモンの追尾してくる羽根の攻撃に機体性能ではなく、操縦が追いつかなかった

その時、橘から通信が入り、メテオールのししようが解禁された
「行くぜレッドスパロウ!!マニニューバモード!!オンツ!!」

レッドスパロウの翼が開き、そこから金色の粒子があふれ出ていた、

その粒子量は今までのものとは比べモノにならない量だった

「オオルリ!!マニニューバモード!!オンツ!!」

オオルリも両翼が開き、そこから金色の粒子を放出させた

2機は物理学を無視した飛行で羽根の追跡を撒きつつ、ジェロニモンとボガールに攻撃を仕掛ける

ナンダについてきていた羽根がレッドスパロウとオオルリに回つた隙を突き、ナンダは地上に着陸した

ナンダからヒロが飛び降り、体から光を放ち、ウルトラマンへと姿を変えた

ヒロが変身した青いウルトラマンヒーロー、モードスタンダードである

護も、ナンダの操縦をオートに変更し坂牧を気にしながらもナンダから降りた

護はポケットからフュージョミッションを素早く取り出すと、光輝き、

光球となってヒーローのカラータイマーに入ろうとした

しかし、護はカラータイマーに入ることはなく、なぜか弾き飛ばされ、地面にたたきつけられた

驚くヒロ、そして地面に叩き付けられたからか全身に激痛が走り、苦悶の声を出してもがく護

突如現れたウルトラマンに驚きつつも、現れてから何もしない隙の多いヒーローに、ボガールが殴りかかった

殴り飛ばされたヒーローは護の居る場所の近くに倒れた

ヒロは近くにいる護に被害を出さないために、すぐにその場から飛び、移動した

レッドスパロウとオオルリはヒーローの援護をしつつ、

まるで戦闘機のロールのように急上昇し、ケツアールヘッドツキングし、

ロールの頂点で左右に高速移動しつつジェロニモンに対し、メテ

オールエネルギー砲を連続で発射した

ヒーローはヒーロー自身に向かって突進してくるボガールの足元にエフエクト・シヨットを放ち動きを止めた

そのままエフエクト・シールドの動きから頭部に右手を持っていき、エフエクト・スラッガーを放った

放たれた刃状のエネルギーはボガールの体を傷つけ、そのままジェロニモンの方へ向い、

ジェロニモンの生えている羽根を切った

このままなら倒せる、そういう展開なとき、黒い霧が突如集まり、黒いボガールが現れた

黒いボガールに篠崎たちとヒーローが身構えたとき……黒いボガールは高速で動き

もう一体のボガールを捕食した

ジェロニモン達に加勢するのではなく、ボガールを捕食した後、そのまま驚くジェロニモンにも飛びつき、

自身の体でジェロニモンを丸ごと食べてしまった

黒いボガールは体から黒い霧を噴出させ、自身のお腹の部分を叩いた

まるで満腹だと喜んでいるようにも見える

ヒロは黒いボガールに向かい素早く走り、殴りかかったが、黒いボガールは殴りかかってくる腕を片腕で打ち払い、

同じ腕でヒロの胴体を殴り飛ばした

その隙に、メテオールエネルギー砲を発射したケツアールだったが、

黒いボガールはクロスアームガードで耐えきってしまった

同時に、使用制限の1分30秒を超え、マニユバモードが強制解除されてしまう

完全にこの場を黒いボガールに持っていかれてしまった

黒いボガールはまるで笑い声のようなものをその場に残し、消えていった

ヒーローの姿も消え、元の人間体へと戻ったヒロ……急いで護のもとに向かうが……

そこには格納庫に現れたバルタン星人が化けた男が現れた

「すみません!!僕、ちよつと急いでるんです!!」

ヒロはその男が何者であるかを知らなかったため、その横を通り過ぎようとするが、

男はそんなヒロに怒鳴り声をあげた

「愚かな宇宙人めツ!!」

「え?」

ヒロは思わず足を止めた

「貴様がやっていることも知らないのか……?本当に愚かな宇宙人だ。

ははははは……、貴様らウルトラ族の手によって人を殺めた時、

貴様らはヒーローからただの侵略者になるだろう……その時は我々バルタン星人が人類を導く……正しき道へと」

「バルタン星人だと!」

ヒロは構えるが、男は待ったと手を向け、制止を促した

「ふん、復讐の捕食者の人形か」

男が顔を向けた先には、一人の女性が立っていた

「三つ巴か……ここで戦っては我々の願いが叶わぬ、ここは引かせてもらおう」

バルタン星人はその特徴である笑い声のようなものを出しながら姿を消した

ヒロは、今度は女性に構え動きを見つつ言った

「お前がボガールヒューマンか!」

ヒロは光の国にいるとき、ウルトラマンメビウス、そして……ウル

トラマンヒカリから、

ボガールのことを聞いていたのだ

もし、この女性がボガールヒューマンであるのなら、今ここで倒せれば……そうかんがえていた

「ウルトラマン、次は……お前を、食べる。」

その時は暴れる、食べてやる……!!」

ボガールヒューマンも、顔に笑みを作り、唇を舐め、消えていった
新たな敵、バルタン星人の思惑とは……

そして黒いボガールにヒロとGUY Sは勝てるのか
護に起きた異変とは……!!

……物語は加速する

決断と別れ——ラビオル星人・再生同化怪獣ボガール 登場——

医務室のベットのの上に護は寝ていた
その様子をヒロは医務室のドア越しに見ていた

少し前、ヒロと橘は護を精密検査した担当医と話しをしていた
「率直に申し上げますが……彼はもう戦わせてはいけなないと判断いたします」

困惑するヒロに、担当医はカルテを手に状況を説明した
「彼が入隊した時にも精密検査はしましたが、その時よりも免疫力の低下が認められます。」

……ここだけの話ですが、このままだと彼は近い内に死んでしまう
かもしれません」
「そんな……」

「今のうちに本格的な治療ができる機関に彼を移すべきだと……」

「護さん……こうしてしまった僕自身なのが本当だとしたら……」

ヒロは拳を固く握り、その場を後にした

その日の夜、護は目を覚ました

なぜ自分がG.U.Y.Sの医務室にいるのかも分からなかった

「なんで俺、ここにいるんだ……？ ジェロニモンは……？」

護はベットから抜け出し、医務室の扉を開けた

扉を開けると、そこには一人の男性がいた

「!? ……お前はバルタン星人!!」

「ふふふ……随分と自分の体を酷使しているな、日野護君」

バルタン星人の男は警棒のようなものを取り出し、護の腹目掛け、思いつき振り振った

護は避けるどころか、防ぐこともできず、腹を押さえその場に崩れる

「ただの人間如きが対策もせず光になることがどう言う事か考えもしなかったのか？」

お前の体と心は度重なる光化に耐えられずもう限界だ」

「だから……どうした!!俺は……」

「強がるのもいい加減にしろ、私が見たところお前がこれから先ウルトラマンに変身せずとも、

後……持つて1カ月と言ったところか」

護は驚愕した顔でバルタン星人の顔を見上げた

「なんだって……?」

「ウルトラマンに変身するのならば気を付けることだな。

変身するたびに体と心は朽ちていくことだろう……」

護は右手の拳を強く床に叩き付け、悔しみの声を漏らした

その時、バルタン星人の男が何かに気づき、顔を上げた

「悔しがるのも自由だが……決断の時が来たようだ」

GUY Sの基地内に警報が鳴り響き、護は怪獣が出現したことが分かった……が

「さあ、人間……どうするんだ?」

護は目から涙を流していた

宇宙人が現れた場所にすでにケツァールとナンダは到着していた

耳の大きい宇宙人は両腕に装着してある光線銃のようなもので空を飛ぶ2機を攻撃していた

「くそ!!ダークエフェクトがあっても向こうから宇宙人たちは来れるのかよ!!」

篠崎は悪態を付きながら必死に回避運動をとっていた

クルーズモードで戦っているのは埒が明かないと考えた篠崎はケツアールのドッキングを解除し、

橘にメテオール使用の許可を求めた

その時、ナンダに乗っていたヒロは、建物の陰でナンダから降り、宇宙人を見上げていた

同時にバルタン星人に言われたことを思い出した

「護さん……この宇宙人は僕一人で倒してみせる!!」

ヒロの体が光り輝き、その場にウルトラマンヒーローが現れた

宇宙人はヒーローが現れた瞬間、その姿を変化させた

両腕の光線銃が消え、両腕はまるで巨大な岩のような太さに変わった

「また変わりやがった!!」

『今度は何!?』

ヒロはエフェクト・スラッガーを放つが、スラッガーは宇宙人の固い腕に弾かれてしまう

「まじい……隊長!!」

『メテオール解禁!!使用時間は1分30秒!!』

「G I G!!おし!!一気に叩くぞ!!」

2機がマニニューバモードになり、U F O的機動で多方向から宇宙人に攻撃を与えていくが

宇宙人はその体を再び変化させ、その体を透過させた

「中途半端に透明になったってなあ!!」

宇宙人は完全に透明になったわけではなく、うつすらとだがその姿が確認できるぐらいになっただけだった

レッドスパロウとオオルリが同時に攻撃を当てた

その時、放ったエネルギー砲は宇宙人の中で反射し、特徴的な耳から2機とヒーローに発射された

ヒーローはエフェクト・シールドを張り、2機は回避した

『お父さん!!M9グレネード!!』

「あいよ!!」

ビーム系統が効かないならとM9グレネードを発射し、爆発させる

が、M9グレネードはそもそも効果が薄いようだ

「畜生!!あとはメテオールエネルギー砲しかねえぞ!!」

状況が良くないと判断し、ヒーローはエフェクト・シールドを再びスラッガーに変え、放った

しかし、エフェクト・スラッガーも宇宙人の中で反射し、ヒーローに返される

「仕方ねえ!!お父さんゼットンだ!!」

「いやゼットン是人前じゃ使っちゃ……」

「そんなこと言ってる場合かよ!!」

ヒーローは光線技が効かないとみると宇宙人に向かって格闘戦を仕掛け始めた

しかし、ヒロのパワーでは圧倒するどころか、逆に格闘で押しやられ始める

GUY Sも宇宙人が攻撃を反射する能力のせいで手が出せず、メテオールの制限時間が過ぎていく

その様子を少し離れていた場所で護とバルタン星人の男が見ていた

「人間と手を組まなければ満足に人を守れない……何が宇宙警備隊だ」

「ヒロ……みんな……」

護は何回もフュージョミッションを見ては悩んでいた

その時、ヒーローが宇宙人に投げ飛ばされた

その様子を見て、護はフュージョミッションを掲げた

「戦うつもりか?」

「……ああ」

「確実に消えるぞ、お前は」

護は少しうつむき、言った

「怖いんだ……俺は」

「当たり前だ、生物というのはいつか消えるものだ」

「そうじゃない……俺の心が怖いんだ。みんなを見捨てて、消えていくのが……」

それは多分、おかしいことだと思うんだ」

「自分が消えてしまうよりか？」

「ああ!! ヒロだって怖くても逃げないって言ったんだ!! だから俺も!!」

護の体が光り輝き、護はフュージョミッションを上を再び掲げた

「ヒーローーツ!!」

光の球となった護は倒れているヒーローのカラータイマーに同化し、ヒーローの体が赤く輝いた

ヒーローは素早く仰向けになりその状態から宇宙人の胴体に蹴りを入れた

そして起き上がると構えた

『サアアアーツ!!』

その様子をバルタン星人の男は少しだけ嬉しそうに見ていた

「フン……上へ報告しなければならぬな」

そしてバルタン星人の男は笑い声を残してその場から消えた

『護さん!!』

『ヒロ!! 遅くなった!! とにかく早くこいつ倒すぞ!!』

すでにレッドスパロウとオオルリはメテオールの時間制限が切れ、ヒーローもカラータイマーが点滅していた

ヒーローは向かってくる宇宙人に対し拳を叩きこむが、硬い体は拳を弾いた

ヒーローは一端後ろに下がり、腕を交差させ、力の限り力んだ

ヒーローの体が赤く輝き始めたが、その様子をただ見ているだけの宇宙人ではなかった

再びヒーローに向かって攻撃をしようとする宇宙人だったが

……

『サアアアーツ!!』

ヒーローは赤い輝きを炎に変え、渾身の右ストレートを宇宙人に炸裂させた

透過していた宇宙人の体は、拳を当てた場所からひび割れ始めた

そのまま宇宙人は元の両腕に光線銃が付いた状態に戻り、膝を付い

た

「今だ!!お父さん!!朱里!!」

レッドスパロウとオオルリはすべての火器を宇宙人に集中させ、追い詰める

ヒーローは止めを刺そうとレッドパワー・シユートを放とうと溜めの動作から十字を組んだ

……が、レッドパワー・シユートは放てなかった

エネルギーが霧散し、光線にはならなかったのだ

それと同時にヒーローのカラータイマーが激しく点滅する……

もうすぐヒーローの活動できる3分が経とうとしていた

その時、ヒーローの後方から1発の光線が通り過ぎ、宇宙人の体を貫いた

宇宙人はこれまでのダメージが限界を超えたのか、その場で爆発した

光線を打った正体はナンダだった

後部に積んでいるスペシウム反応砲をヒーローが殴った場所に正確に当てたのだ

ここでヒーローの活動限界に達し、その姿が消える

護とヒロが人気のない場所に降り立った

護はヒロに気付かれないよう、心臓の痛みを胸を手でつかみ誤魔化した

「護さん……」

「はは、ごめんな!!ちよつと足引つ張っちゃった……」

ヒロは護が持っているフュージョミッションを取った

「おい、ヒロ……」

ヒロはフュージョミッションを空中に放ると、その手で両断した
「何やってんだよヒロ!!」

護がヒロの肩を掴むとヒロ悲しげな顔をし、言った

「今まで、ありがとうございました……けどもういいんです」

「もういいってなにが!!」

「……これからは人間として、自分を大切にしてください」

ヒロは無理やり手を振り払い、深く頭を下げ、去って行った
何の事だかも分からず、護はその場に立ち尽くした

後日、護はGUY Sから除隊が命じられた

決断と別れ2ーラビオル星人・再生同化怪獣ボガール 登場ー

「え!?護君GUY S辞めちゃうんですか!？」

指令室で三原が橘に聞いた、ほかのクルーも驚愕の表情を浮かべている

「何も驚くことじゃない、度重なる体調不良、そしてこの前の騒ぎで判断した」

篠崎が頭を掻き、自分の席に勢いよく座った

屋久島は周りを見渡し、この場にヒロがないことに気付いた

「隊長、この話は私たちじゃなくて……」

「ヒロ君にはすでに伝えてある、話は以上だ」

橘はそれを伝えると指令室を出て、どこかへと向かった

指令室には何ともいい難い雰囲気染まっていた

GUY Sで護の除隊が報告されているとき、護は病院の自分の病室でベットに横になっていた

「何かあったらナースコールを押ししてくださいね」

薄い桃色のナース服を着た看護師がそう言い去っていく

個室の病室で一人、窓の外を見る護の膝元には、真ん中から二つに切られたフュージョミツションがあった

護は掛け布団の中に隠していた自身の右手を見る……その手は薄っすらと透けてきている

医者に診察された時は偶然にもばれずに済んだが、今後いつ発覚するかもわからない

護は部屋に掛けてある私服に着替え、窓から病室を抜け出した

病院が護が抜け出したことに気付いたのはその1分後のことだった

丁度その頃、ヒロは自室の机に頭を伏せていた
これで良かったんだと自分に言い聞かせながら……

そんな時、ヒロは背後に何かがいることに気づき、顔を向けるとそこにはバルタン星人の男が立っていた

「何しに来たんですか……？」

ヒロがバルタン星人の男にそう聞くと、男は答えた

「笑いに来たんだよ、侵略者の貴様を……な？」

「なんだって？何を言って……」

「仲良くしようじゃないか、侵略者の宇宙人」

「仲良くするつもりはない!!」

ヒロは立ち上がり、男を睨みつけた

「……お前、もしかして何も気付いてないな？」

「気付いてないだつて……？」

「……これは驚きだ、まさか何も知らずにあの人間を突き放したのか？」

だとしたら仲良くなどこつちから願い下げだ……

笑いに来たが、そんな気も起きない……帰らせていただく」

そう言い、男は姿を消そうとしたが……深くため息を吐き、ヒロを見たと一言だけ言い残した

「日野護の命は持って数日だろうな、お前のせいだな」

「!!待ってくれ、一体どういう……!!」

男を掴もうとしたヒロの手は空を切った

もう、そこには男は居なかった

「護さん……!!」

ヒロは自室を飛び出し、護が居るはずの病院に向かった

ヒロがG U Y S基地を飛び出し、時間がたった時、G U Y S J a
PanにG U Y S スペースーから緊急連絡が届いた

「橘隊長!! G U Y S スペースーから緊急連絡です!!」

三原が指令室の大型ディスプレイに映像を出した

『ダークエフェクトが日本上空に集中して……!!そこにボガールが
!!』

「なに……?」

日本上空約100キロ地点で、黒いボガールはダークエフェクトを
吸収していた

地球を覆っていたダークエフェクトをすべて吸収していき、その姿
は元のボガールとは思えないほど黒く、

邪悪に変わった

ボガールが考える事はただ一つ……ウルトラマンを食べること
だった

ボガールはサイコダークと同じように日本のG U Y S基地に向け
急降下を始めた

「居ない!?!」

護が居るはずの病院に着いたヒロだったが、病院は大騒ぎになって
いた

「そうなんです!!、飛び降りられる高さじゃないですし、かといって病
院中探しても居ませんし……!!」

近藤さん!!西棟は探したの!!地下は!?!」

ヒロはあわただしい病院を後にし、心当たりのありそうな場所へ
走った

はるか上空で、自信を狙うものの存在に気付かずに……

護は自分の住んでいるマンションの自室のベッドで消えていく体を見つめていた

自分が消えていくという普通なら冷静でいられない状況で、護はただただ虚無感を感じていた

その虚無感は、護が自身の頬伝うものが何なのかすら気にならないものだった

「明日は何をしよう……」

護の口から言葉が漏れた

護の頭では明日なんてないと答えが出ているのに……

その時、護の部屋のドアポストに何か落ちる音が聞こえた

護は顔だけをドアのほうに向けたが、すぐに興味を無くし、深い眠りに落ちて行った

夢の中、子供が泣いていた

膝を抱え、静かに一人さびしく泣いていた

子供に近づき、誰かが声を掛けた

「大丈夫……？」

子供が顔を上げると、子供は小さい頃の護だった

その場には子供の護と護が居た

「ありがと……」

護が驚いていると、泣いている護がどこかを指差した

護が指を指した方を見ると、そこには何かと戦っている青いウルトラマンが居た

「僕は……大丈夫だから、ウルトラマンを護ってあげて……」

子供の護が頭を下げてお願いをし、護は意識は現実に戻った

護が目を覚ますと、外が騒がしい

慌ててカーテンを開くと、そこには逃げる人々と、黒いボガールがいた……

ウルトラマンヒーローとGUY Sが戦っているのも見えた

護は戦おうと思い、部屋を飛び出そうとするが、自分には何も武器がなく、変身もできないことを思い出した

ただ、それでも見ているだけしかできない事が悔しく感じ、部屋を飛び出す

そして、護が下の階を見ると、何故かナンダが駐車場に停まっっているのが見えた

「……もしかして!!」

護は自室のドアを勢い良く開け、ドアポストを開く

そこにはナンダの鍵があった

黒いボガールと戦う篠崎たちだったが……状況は最悪であった
すでにメテオールの制限時間は切れ、スペシウム弾頭弾は撃ち尽くしたのだ

現時点でのGUY Sが持ちうる手を尽くし、打つ手がない

共に闘うウルトラマンヒーローも打つ手をほぼ使い果たしていた

以前ボガールと戦った時ではGUY Sマシンは出撃しては居なかったが……

その時でさえもギリギリでようやく勝てたのだ

ダークエフェクトを全て吸収し、強化されたボガールに敵うかどうかすらGUY Sにもヒーローにも分からなかった

その時、ボガールがヒーローを建物に向けて投げ飛ばした

ヒーローは建物を壊しながら倒れる

ヒーローのカラータイマーが点滅し始め、制限時間が近い事が分か

る

戦闘でのダメージが大きいのか、身動きが取れずにいた

ヒーローを援護するためにレッドスパロウとオオルリが攻撃をするが、ボガールが火球を放ち、2機を遠ざける

ボガールがヒーローを食べようと体の口を広げた

その時、ボガールの体に光線が直撃した

体の内側に当てられたからか、ボガールは後ずさった

光線を撃つたのは護が乗ったナンダだった

護はナンダを飛び降り、ヒーローの元へ駆け寄り、叫んだ

「バカヤロー……ッ!!それでもウルトラマンかよッ!!何がヒーローだよ!!」

ヒーローは叫ぶ護を見つめた

「ふざけんなよ!!お前はヒーローなんだろ!!だったらヒーローらしく人を救えよ!!」

護はポケットに入れていた二つに切れたフュージヨミツシヨンの片方をヒーローに向かって投げた

「俺が!!ヒーローになってやる!!俺が護ってやる!!」

ヒーローは小さく頷いた

ヒーローは護を掴み、カラータイマーのある胸に押しつけると、赤く光り輝いた

ボガールはまだ体勢を立て直していないヒーローに向かって火球を放つ

が、火球は倒れた状態から放たれるレッドパワー・ショットに相殺された

「次ははずさねえぞ……!!」

その隙を突き、レッドスパロウとオオルリは通り過ぎると同時に、ウイングレットブラスターとバリアブルパルサーをボガールに当てた

それと同時に、ヒーローはモードブルーにモードチェンジした
ボガールが2機を落とそうと火球を放ったが、
火球へ当たりに行ったヒーローはエフェクト・ブルーリアクトで火
球をボガールへと跳ね返した

エフェクト・ブルーリアクトを喰らい、膝をついたボガール
その時、ヒーローのカラータイマーが激しく点滅し始め、時間も
残り少ないとわかり

ヒーローはモードレッドにモードチェンジした

そして、すばやくレッドパワー・シユートを放とうとするが、前と
同じでエネルギーが漏れ出てしまった

それを見てボガールがまるで笑いながら話しかけてきた

『心がバラバラなお前たちが私を倒せると思ったのか……!!』

ボガールはまるでしやく様にヒーローに近づいてくる

その体は護を食べようと、口でもある全身を広げていた

『護さん』

ヒーローの意識空間で、ヒロは護がやろうとしていることを理解
し、ヒロは護に何も言わずただ頷いた

『……護るぞ』

『はーん』

ヒーローは腕を胸の前で交差させ、自身の体を赤く光輝かせた

その光が一層輝いたと思うと、ヒーローの体は炎に包まれた

そして、ヒーローはボガールへと駆け出し……

爆発した……

前に進む者たちⅠ

黒いボガールがウルトラマンヒーローに倒された翌日……

GUY Sクルーは怪獣と戦闘中に行方不明となった朝日ヒロ、病院から姿を消した日野護を捜索していた

しばらくすると、捜索メンバーの一人が護のメモリーディスプレイが残されたナンダを発見した

そして捜索開始から3日が過ぎ、朝日ヒロ、日野護の捜索は一端打ち切られることとなった

「橘隊長!!なんで捜索が打ち切りなんだよ!!」

殴りかかろうという勢いの篠崎を垣山が抑えつつ、その質問に橘はシリアルを食べながら答えた

「じゃあ君は、怪獣が現れたらどうするんだい？」

「そんなの戦うに決まってるじゃねえか!!」

その答えに何も考えてはないことが分かった橘は、深く溜息を吐き、説明をした

「いいか篠崎、怪獣が出た時、僕たちは君の言うとおり戦わなければならぬ……」

けど、怪獣を倒すためにはそれだけ強力な兵器が必要だ。

認めたくはないが、現状怪獣を倒せる兵器はレッドスパロウとオオルリにしか積んでいない。

……それに仲間が生きていると信じるなら、信じて待ってみたらどうだ？」

そう言い、橘は残ったシリアルを食べ始めた

篠崎は強引に垣山の手を振り払い、自分の席に座った

「そうだ……俺達は仲間じゃねえか……」

篠崎は自分の両頬を叩くと、雑誌を一冊取り出し、笑いながら言った

「帰ってくるが遅れた罰で焼き肉とかどうだ？」

クルーたちは思わず笑った

その時、指令室の扉が開き、坂牧と知らない男が入ってきた

「あ、坂牧!!おまえどこ行ってたんだよこの3日間!!」

「というより、後ろの方はどなた?」

坂牧は篠崎にだけ少し不機嫌な顔をし、答えた

「今回のボガールでの苦戦は私たちGUY'Sの力不足が原因です。

私たちはウルトラマンに頼らずとも良いように、強くならなければなりません」

「強くなるっただって……どうやって……」

坂牧が隣にいる男を見ると、男は頷き前に出た

「セリザワだ、娘が世話になっている」

セリザワ カズヤ……それが坂牧の義理の父親の名前だった

ヒロはウルトラマンの姿で目を覚ました

「ここは……光の国のウルトラクリニック……?」

「目が覚めたか?ヒーロー」

ヒロはヒロ自身に話しかけたものの声を聞いて反射的に飛び起きた

「だ、大隊長!!」

ヒロに話しかけたものの正体は宇宙警備隊大隊長……ウルトラの父だった

「あの……申し訳ありませんでした!!僕、敵前逃亡を!!」

ウルトラの父は手で静止を促した

「今はその話するべきではない……それよりお前のパートナー大変だ
ことになっている」

「護さんが!」

「今はマリーが診てくれているが……状況は最悪だ」

ヒロとウルトラの父は護がいる場所へ急いだ

ウルトラの母ことマリ―は今にも消えていなくなりそうな護に手を焼いていた

ウルトラの母が治療をすることができないのは訳があった
そこへウルトラの父とヒーローが駆け付けた

「マリ―、様子はどうだ」

「ケン……この子の治療は……私にはできないわ……」

「治療ができないって……どう言うことなんですか!？」

ウルトラの母はヒーローを見て、説明をした

「あなたとこの子が地球で使ったウルトラダイナマイト……」

確かにウルトラ心臓の力が強ければ爆発した後、復活できます……

しかし、あなたのウルトラ心臓はそこまで強いものではありません

ん」

「じゃあ、どうして……」

「この子……日野護君の体にウルトラ心臓が出来てしまったのです」

「そんな!!護さんは人間ですよ!？」

ウルトラの母は近くに置いておいた何かをヒロへ見せた

「原因はこれです」

「フュージヨミツシオン……?」

「フュージヨミツシオンから放たれる微弱なディファレーター線、

そして無茶な光化が彼の体を作り変えてしまったのです」

ヒロは頭を抱えてしまう

「今、この子が消えるか消えないか瀬戸際にいるのは、人間ともウルトラ族とも言えない体に、

中途半端でいるためです

彼を助けるためには、彼をウルトラ族として目覚めさせるしかありません」

「

ウルトラの父がヒロの方に手を置き、言った

「しかし、我々に彼のこれからを決めることはできない……」

今は停止光線で彼が消えるのを先延ばしにすることくらいだ……

そして、酷かもしれないが、やってもらわねばならないことがある」

ウルトラの父はウルトラの母に後を任せ、ヒロを連れとある場所へ

と連れて行った
その場所は、ウルトラベルを安置する場所……ウルトラタワーだっ
た

前に進む者たち2

停止した時の空間の中、消えかけている護を、ウルトラの母はどうしたものか、考えていた

護にかけた停止光線の効果が無くなるのも、そう長くはないのだ
再び護の時間が動き始めた時、護が消滅することもウルトラの母は理解していた

ウルトラの母は、最後には自分が護の運命を背負おうと決めた
その時、光の粒子がウルトラの母の横を通り過ぎた

光の粒子は護の体に吸い込まれていき、護の体は光に包まれた
ウルトラの母が何事かと思ひ、様子を診ていると……光が収まり、
そこには赤い体のウルトラマンヒーローが居た

赤い体のヒーローはウルトラの母に頭を下げ、どこかへ飛んで行った
た

「誰があの子を……」

ウルトラの母がつぶやいた言葉に答えるものが居た

「彼がウルトラ族になったのは彼自身の意志だ」

光の粒子が声と共に再び現れた、光が集まるとその正体が露わになった

「ウルトラマンキング……!!」

光の国に住むどのウルトラ族とも似つかず、威厳な風格を持つ、ウルトラマンキングだった

「彼は人間として、ウルトラマンとなることを選んだのだ」

ウルトラマンキングはヒーローの飛んで行った方を見つめていた

ウルトラタワーを見下ろすヒロとウルトラの父

「ウルトラベルを鳴らせ……って、ウルトラタワーに入れてことで
すか!?!」

ヒロの言葉に対し、ウルトラの父はそうだとだけ言葉を返した

ウルトラタワー……かつてウルトラ6兄弟が地球包んだ闇を振り払うため鳴らしたウルトラベルがある場所……

光の国の大切なウルトラベルを守るため、

ウルトラ6兄弟が揃わなければ入れない、神秘の炎がウルトラベルを守っているのだ

命の炎、正義の炎……そして平和の炎だ

ウルトラベルを鳴らすにはその炎を潜り抜けなければならないのだ

「これはヒーロー、君の心の強さ、優しさ……そして平和を愛する心を持つているかを試す試練なのだ」

「でも……」

「……この試練は、あのウルトラマンキングが、お前を信じて与えたものだ

私も疑ったが……恐らく、ウルトラマンキングは……お前になら、超えられると信じているのだろう」

「僕が……炎を超えられるってことですか……？」

「でなければ、私やウルトラ兄弟もお前にこんな試練を受けさせはしない

……信じて待っているぞ、光の国にウルトラベルの鐘の音が響くことを……」

そう言うと、ウルトラの父はマントを翻し、飛び去った

ヒロはウルトラタワーから燃え上がる炎を見つめていた

まるで入るものを試すかのようにだ、炎もヒロを見つめているようにヒロは感じていた

「僕に、あの炎を超えるだけの力があるとするなら……!!」

ヒロがウルトラタワーの炎に飛び込もうとしたとき、ヒロを呼ぶ声が聞こえた

「ヒロ!!待ってくれ!!」

そこには青いヒーローとは真逆の赤いヒーローが……ウルトラマンとなった日野護がいた

「護さん!!どうして……いや、どうしてウルトラマンになってるんで

すか!？」

「……俺がウルトラマンになるって決めたから……かな？」

ヒロはうつむき、手を強く握り、頭を下げた

「ごめんなさい!!僕のせいで護さんは人間でなくさせてしまっただ!!」

「いや、違うよ……俺は望んで人間じゃなくてウルトラマンになったんだ」

護はヒロに何があったのかを話し始めた

護は暗い波が溢れている空間で何も出来ずに浮かんでいた

護は何もすることができず、ただ目の前の光景を眺めていた

子供の頃や、ヒロに出会ったこと、GUY'Sに入った時のこと……

今までの記憶が一枚の紙に描かれ、走馬灯のように回転しては変わっていった

「そうか……俺はもう……」

護が目を閉じようとしたとき、護の前に大きな光が現れた

光は収まっていき、そこには護と同じ大きさになったウルトラマン

キングが現れた

「君を消えさせはしない」

ウルトラマンキングは両手を輝かすと、暗い波の空間は明るい金の

波の空間に変わった

護は今まで動かなかった手を見て驚いた

「残念だが、まだ君は生き返ってはいない。

君には聞かなければならない事がある」

「聞かなければ……ならないこと?」

ウルトラマンキングは護の胸に手を触れると、護の胸から赤く光輝く光球が現れ、

ウルトラマンキングの掌の上に浮かんでいた

「君のこれからの話だ……君の体は人間ではなく、ウルトラマンの体へと変わるかもしれない。」

しかし、君を人間に戻すことは出来ないわけではない……
ただ、君のこれからの人生は君自身が決めることだ、君は、人間として生きていきたいか？

それともウルトラマンとして生きていきたいか？」

ウルトラマンキングは護に選択を迫った

しかしウルトラマンキングは護の出す答えを心を声を聞き、知っていた

ではなぜ、ウルトラマンキングが答えを聞いたのか……

それは、ウルトラマンキングが護の言葉で聞きたかったのだ
人が自らウルトラマンになり、人が人を守ると……

「……俺、ウルトラマンになります」

護はしっかりとウルトラマンキングを見つめ、言った

「良いのか？君は素晴らしい人間だ、ウルトラマンにならずとも地球や仲間、人々を守ることができる。」

それでもウルトラマンになりたいと、言うのだな？」

護は少しも後悔もせず、もう一度言った

「俺は、子供の頃からヒーローに憧れてました……

確かに何もウルトラマンにならなくてもみんなを守ることはできる。
る。」

けど、俺はウルトラマンだから守ることのできる何かがあるとも思
います!!

だから人間として……そしてウルトラマンとしてみんなを守りた
いんです!!」

その言葉に嘘はなかった、ウルトラマンキングは心からの声である
と知り、

護から離れても護の心の声に反応して一際輝き始めたウルトラマ
ンの輝きを護に返した

「ならば行くがよい、その力を自分ができることに使うのだ」

護は赤く輝き……その姿を、ウルトラマンヒーローに変えた

「行け、ヒーローの名を持つウルトラマンよ」

護はその言葉を聞き、力強く飛び立った、今助けたいと思っている

者のもとへ

「そんなことが……」

「ああ、だからウルトラマンになったのはお前のせいじゃない、俺が決めたことなんだ」

護はヒロの左手を両手でつかみ、言った

「だからヒロ、一緒に戦おう!!俺たちはいつも一緒に!!」

「……はい!!」

「ところで、お前こんなところで何をやってんだ?」

「あ、忘れてた!!」

ヒロは今、自分がやらねばならない事を護に伝えた

ウルトラタワーの炎を越え、タワーの中にあるというウルトラベルを鳴らさねばならない事を……

「だから僕はウルトラベルを鳴らしてきます」

「おい、あの炎は簡単には越えられないんだろ?」

「でもこれは僕の試練です、ウルトラマンヒーローが越えなければならぬんです」

「そうか……」

「そうです、護さんは待っていてください」

ヒロは一人でウルトラタワーの炎の中へと飛び込んで行った

炎に飛び込むとまるでヒロを試すかのように、炎がヒロを焼き始めた

ヒロは自身の体が焼けていっても構わず炎の奥へと進んでいった

しかし、気合いだけを入れても現状は変わらず、どんどんとヒロの体は炎で焼かれていく

そんな時、不意に炎がヒロの体を焼かず、炎の温かさだけがヒロの

体を包み込んだ

ヒロが不思議に思うと、その理由がすぐそこにあった

「大丈夫か？ヒロ」

そこにはさつき見送ってくれたはずの護がいた

「護さん!? どうして……!!」

「お前が言っただろ!! ウルトラマンヒーローが越えなければならな
いって!!」

だから……一緒に越えなきゃなって思ってた!!」

ヒロは護の言葉に微笑み、覚悟を決めて護とともに炎を進んでい
た

ウルトラベルまで後わずか……

しかし、2人を試す炎は簡単に2人を認めることはない

最後の炎、平和の炎が2人を試した

ヒロも護も平和の炎に焼かれ、前に進めない、それどころか今にも
体を燃えつくされそうに感じてしまう

ウルトラベルは、もうすぐそこにあるというのに……

平和の炎の前に、護はたまらず体制を崩してしまう

平和の炎はそのまま護を焼きつくそうと、勢いを増した

護は身を固め、炎から身を守ろうとした……

しかし、いつまでたつても平和の炎は護を焼くことは出来なかった
なぜなら……その時、ヒロは護の前に立ち、護を炎から守ったのだ
から

ヒロの体は平和の炎に焼かれ、消え始めていた

「ヒロ!!」

「……今まで、僕が……戦えたのは……!! 戦う、勇気をくれたのは……
護さんだから!!」

僕は守りたい!! それが僕だから!!」

ヒロの体が青く輝き、護を守った

「ありがとう、ヒロ……だけど俺も……俺にしか出来ない事を!!」

そして、護の体も赤く輝き始めた

「行くぞヒロ!!こんな炎に負けてたまるか!!」

「はい!!」

護は右拳を前に、ヒロを左拳をウルトラベルのほうへ突き出し、2人は同時にウルトラベルへと突っ込んだ

『うおおおおおおおッ!!』

ウルトラベルと2人の距離は縮まり、赤と青の光が交わった

その時、光の国でとても大きな鐘の音が響いた

第1章―人とウルトラマン―

新たな翼と、新たなヒーロー―再生同化怪獣ボガール・再生同化怪獣ボガールモンズ登場―

黒いボガールがウルトラマンヒーローに倒されてから1カ月……

人によつては短いと感じ、長いとも感じる期間で、人々は怪獣にも宇宙人にも襲われず、束の間休息を得ていた

そんな中、宇宙から地球を見つめる赤い瞳があった

誰にも聞こえない声で、憎しみを訴えていた

赤い瞳と黒い霧は高速で地球に向かった

その時、G U Y S J a p a n基地では宇宙からやってくる何かを探知していた

G U Y Sクルーはその何かに対処するために、格納庫へ急いだ

レッドスパロウ、オオルリ……そしてナンダに各隊員が乗り込んだ

「いいか、今回が新しいG U Y Sの翼のお披露目だ……」

また来たボガールに見せつけてやれ!! G U Y Sの強さを!!」

『G I G I!!』

篠崎と垣山がレッドスパロウで、屋久島と三原がオオルリで……

そして、坂牧とその父、セリザワがナンダで出撃する

しかし、以前と変わった点があった

レッドスパロウとオオルリが出撃したあと、格納庫の下に格納されていた別の機体がリフトアップされた

リフトアップされた機体にナンダがコクピットポッドとしてその機体に取り込んだ

その形はまるで30年前のG U Y Sの高速追跡機、ガンブースターのようなだった

セリザワが機体の計器をチェックし、新たな翼の名を言った

「N（エヌ）ブースター!!システムオールグリーン!!」

「バーナー、オン!!」

坂牧がそう言うと、Nブースターは飛び立った

その時、日本のとある都市では黒い霧が赤い目の体を生成していき、その姿を作り出した

その姿は1カ月前、ウルトラマンヒーローが倒したはずの黒いボガールだった

『どこに隠れているウルトラマン……!!お前を食べるまで私の憎しみが消えることはない!!』

ボガールはウルトラマンを探す為、辺りの建物に火球を放ち始めた
しかし、火球は建物に衝突する前に何かに衝突し、爆ぜた

ボガールは上空からピンポイントで火球を撃ち落としたレッドスパロウの姿を捉えた

『邪魔を……するなァッ!!』

ボガールは、今度はウルトラマンを探す邪魔をするレッドスパロウに対し、火球を放った

レッドスパロウは火球を紙一重で避け、ボガールの真正面で低空飛行で接近し始めた

そのままボガールに衝突するかのように目前まで近付くと一気に急上昇し、上空へ遠ざかる

ボガールがレッドスパロウを攻撃しようと狙った瞬間……

レッドスパロウの陰に隠れていたオオルリがバリアブルパルサーをボガールの体に当て爆ぜた

オオルリも目前で急上昇をし、今度こそ火球をオオルリ……
ではなく、正面から近付いてくるだろうNブースターに向かって放った

しかし、火球は何もない場所をただ通り過ぎて行った

ボガールが不思議に思っていると、背後の道路に着陸していたナン

ダが主砲を向けていた

「スペシウム反応砲!!」

ナンダの光線砲がボガールを背後から撃ちぬいた

ナンダはホバーで飛び上がり、自動制御飛行していたNブースターと再度ドッキングした

篠崎たちはこの1ヶ月間セリザワ教えられた技術を、ちゃんとした形でボガールに当てることができた

それはフォーメーション・ヤマトといわれるものだった

その後もメテオールを使うこともなく、黒いボガールを追い詰めていく篠崎たち

ボガールは不利と感じたのか攻撃をすのをやめ、高速移動で逃げようとした

逃がすまいと屋久島と三原が乗るオオルリが逃げようとするボガールを追おうとした

「罨だ!!避ける!!」

ボガールの動きを不審に思ったセリザワが罨であるとオオルリに伝えるが……少し遅かった

高速で逃げようとした振りをしたボガールはその体内に自身の火球をすでに作っていたのだ

火球を放ち、クルーズモードのオオルリにその火球が迫る

セリザワが何かをしようとした……その時だった

空の彼方から、青い粒子の円盤が高速で接近し火球をオオルリに当たらないように隔てていた

屋久島と三原は今の光景をよく知っていた

「待ってたわよ……ウルトラマン」

空の彼方から青い体の巨人が飛んできた、ヒーローという名前のウルトラマン

ウルトラマンヒーローだ!!

ヒロは地面に着地し、胸を張ってボガールを見つめた

それはかつて初めて地球に降り立ったウルトラマンとウルトラマンメビウスのようにも見えた

しかし、ボガールはヒロを見ると大きな声で笑い始めた

『生きていたかウルトラマン……しかし、地球人は死んだようだな……？』

貴様はいいつがいなければ何も出来ない弱い存在……愚かな奴だ、今から貴様をあの地球人の元へ……

送ってやる!!』

ボガールがヒロへ向かい走り出した、ヒロはエフェクト・スラッガーを作り出すと、

それを投げるのではなく……構えた

『ティアツ……!!』

向かってくるボガールを体捌きでかわし、スラッガーを斬り付けたスラッガーを当てた場所がさく裂した

ボガールが斬りつけられた場所を押さえる

『なに……?!? 貴様……一体何をした!!』

その様子を見ていた屋久島と三原は気付いた

「この1カ月で……強くなって帰ってきた?」

「あの動きは……ウルトラセブンと同じ……」

『こんなことはあり得ない!!あの地球人がいなければ……!!』

『ボガール、君は勘違いしている。』

僕はもう……弱くない、それと……』

ボガールが火球をヒロへ放とうとしたとき……

赤い光と共に、赤い巨人が体を空中回転させ、凄まじいキックをボ

ガールに繰り出した

セリザワはその技を知っていた

「スワローキック……!!タロウか!？」

そう言うセリザワに助手席に座っていた坂牧が首を横に振り、言っ
た

「護さん……赤い、ウルトラマンヒーロー!!」

『サア……!!』

護はタロウやメビウスと同じ構えをとった

『すまないヒロ!!まだ飛ぶのに慣れなくてな……』

『大丈夫です、今度僕も教えますから』

ヒロは護のそばへ近寄り、共に構えた

レッドスパロウに乗っている篠崎と垣山だけでなく、その場にいる全員が驚いた

「ヒーローが2人もいる!？」

「お父さん、驚いてる暇なんてないだろ!!」

俺たちがこの1カ月、ただウルトラマンを待つただけじゃねえだろ!!

セリザワさん!!三原!!頼むぜ!!」

レッドスパロウ、オオルリ、Nブースターが上空に飛び上がった

「三原!!ドツキングだ!!」

『G I G!!』

オオルリの後部にレッドスパロウが接続され、ケツアールへと変わる

「Nブースター、バインドアップ」

セリザワがナンダのギアを操作すると、接続されているNブースターが上下に展開し、

そして、Nブースターがケツアールとなった2機の後部から覆いかぶさるように接続された

「ケツアールバーンティング!!」

レッドスパロウの赤、オオルリの青、Nブースターの黄がまるでゴシキノジコを思わせる姿となった

「橘隊長!!メテオールを!!」

『メテオール解禁!!』

「マニニューバモード!!オン!!」

篠崎がメテオールを使用するレバーを倒すと機体の翼が展開し、金色の粒子が溢れだした

ケツアールバーンティングはバレルロールを行いながら、ボガールに接近した

「俺らが、ウルトラマンと一緒に戦うための!!これが、俺たちの新しい翼だ!!」

「ランチャーアップ!!」

垣山がレバーを操作しケツアールの主砲が上へ移動する

『スペシウム反応砲、接続』

坂牧が助手席に追加されたレバーを操作し、ナンダの主砲を接続する

『β（ベータ）リダブライザー、リフトアップ!!』

屋久島もレバーを操作し、オオルリに内蔵されている円柱型の結晶を主砲の前に設置した

「行くぜ……!! スペシウム光線!! ファイアーーツ!!」

ケツアールバーンティングを包んでいる金色の粒子が青白く輝き、主砲へ集束し放たれた

放たれた光線はβリダブライザーを抜け、そこから放たれる光線は、

名前の通り、ウルトラマンのスペシウム光線のようなだった

ボガールはスペシウム光線を避ける隙もなく、腕を交差させ、防ごうとするが……

スペシウム光線は急に勢いを増し、防御の行為も空しく、その体を貫いた

護とヒロは体に大きく穴の空いたボガールを、見つめていた

「よし!! やったか!」

篠崎がそう言った時、ボガールは黒い霧になり消えた

それと同時に、ケツアールバーンティングはメテオールの制限時間でもないが、

いきなりクルーズモードへと変形した

篠崎のモニターにはenergy emptyと表記されていた

「やっぱり、エネルギーが……」

しかし、それでもボガールを倒したことはない

その時、クルーたちは油断していた

新しい力は通用した……しかし

『消え……ぬッ!!負がある限り……!!』

その声が辺りを響いた時、空が黒く染まった

坂牧が空を見渡し、言った

「負の感情が……集まっていく……」

「大丈夫だ、由依……」

セリザワは坂牧を見て心に決めていることを坂牧に言った

「私は……由依の父であり、勇者であると決めたのだから。」

それに、今の地球には彼らもいる、ウルトラマン……ヒーローが……」

黒い霧は1か所に集まり、もう一度その姿を現した

前よりも禍々しく、恐ろしい姿……ボガールモンスへと……

新たな翼と、新たなヒーロー2——再生同化怪獣ボガール・再生同化怪獣ボガールモンス登場——

黒いボガールは篠崎らが乗るケツアールバーンティングのスペースウム光線に倒された

しかし、ボガールはさらに禍々しい姿、ボガールモンスへと姿を変え、復活した

「誰も下手に攻撃するな!!」

セリザワはボガールモンスを見るや、篠崎たちに攻撃中止を促した『セリザワさん!!どう言うことですか!?』

篠崎がどうしてかとセリザワに聞いた

「あのボガールモンスが、30年前のボガールモンスと同じだとすれば……」

考えも無しに攻撃し、倒した途端……大爆発を起こす。

30年前は電磁フィールドで被害を抑えたが……ここで爆発したら拙い……

攻撃をせず、ヒーローを援護……被害を抑えるぞ」

『GIG!!』

ケツアールバーンティングは3機に分離し、ボガールモンスの気を散らし始めた

その時、ヒロの精神世界に青い光が話しかけてきた

『ヒーロー、久しぶりだな』

ヒロは青い光を見つめ、その正体の名前を言った

『ヒカリ……主任!?』

青い光の中からヒロと同じ、青い体のウルトラマン……ウルトラマンヒカリだった

ヒカリは手を前に出し、待てと言った

『話は後だ……奴の特性は知っているな?どうするつもりだ?』

『……手があります』

『何か、考えがあるんだな?』

『はい……ただ、もしもの時の為に』

『わかっている、もしも時は私がやる』

ヒロは精神世界から現実に戻り、ボガールモンズを見つめる

『ヒロ、話は終わったのか？』

『はい、待たせました』

ボガールモンズは護と3機のGUY'Sマシンにより、攪乱され、思うように動けなかった

しかし、どんなに優勢に見えても、攻撃できず、倒せなければ意味がなかった

ボガールモンズもその事を理解しているのか、攪乱はされつつも、

回避をする様子もなく護や、GUY'Sマシンに攻撃を仕掛けてくる

『行くぞ、ヒロ!!』

『はい!!』

護がボガールモンズから離れ、ヒロの隣で構えた

『バラバラ……餌、増えた……!!食べる……!!』

護と右拳を、ヒロは左拳を前に出し、合わせた

すると、護とヒロの体はそれぞれ赤と青の光に包まれていく

ボガールモンズがその隙を見逃すはずもなく、何かをしようとしている2人に突っ込んでいくが……

ボガールモンズの足元で何かが爆発し、ボガールモンズは足を止める

その爆発の正体は、黒いボガールを背後からナンダが撃った時、

あらかじめ設置しておいた水陸両用感知式爆弾だった

自身を攻撃できないと考えていたボガールモンズに対し、

その心理を読み、威勢を削ぐ為にセリザワが起爆させたのだ

ボガールモンズはならばと、ボガールの時より強力な光弾を連続で放った

その光弾はただ通り過ぎただけで周りの建物を抉っていくほどのものだった

光弾は護とヒロに当たり、爆発した

ボガールモンズは捕食するはずのウルトラマンを誤って消してし

まった

ボガールモンスの目が、爆発の煙を奥を見つめていた

そして……煙が晴れるとそこには護とヒロはいなかった

篠崎たちが息を呑み、ウルトラマンが負けたのかと声に出した

その時……

『上ですッ!!』

坂牧がはるか上空を見つめ、そういつた

篠崎たちと異変に気付いたボガールモンスが上空をみると、そこには赤い光の渦と、青い光の渦が……

そして、2つの渦が一つに交わった……!!

『ティーン……ッサー……ッ!!』

そして、渦の中から新たなウルトラマンヒーローが姿を現した

銀の体に赤と青の線が刻まれた、2人のウルトラマンが融合した姿だ

しかし……

「カラータイマーが……点滅している……」

セリザワはヒーローのカラータイマーが点滅しているのを見抜いた

しかし、おかしい点があった……

それはカラータイマーが赤ではなく、青く点滅しており、またタイマー音もしない点だ

ボガールモンスは笑っていた

一つになったことには驚いたが、結局はピンチには変わりはないからだ

ボガールモンスはどこまでも伸びる尻尾でヒーローを絡め取ると、

そのまま地面にたたき落とされた

しかし、目の前でたたき落とそうとしたヒーローは光球となり、ボガールモンスの背後に現れた、もうひとつの光球からヒーローが姿を現した

「あれは……テレポーターション……か」

セリザワがヒーローが使った技を知っていた

しかし、テレポーターションは莫大なエネルギーを使う

セリザワはヒーローが惜しむことなく、テレポーターションを使うことが不思議だった

ボガールモンスは背後に現れたヒーローに振り向き、今度は光球を放つ

右手を前に出したヒーローは赤と青の渦のシールドを広げ、光球を受け止めた

シールドを消し、素早い動きでボガールモンスの懐深く潜り込んだヒーローは

『ティーンツ!! サアアア!!』

と、気合いの声と同時に、ボガールモンスの胴体にこれでもかと連続で両拳を叩きこむ

ボガールモンスは、たまらず後ろへ、後ろへと後退する

ボガールモンスは拳を叩きこまれた場所を抑え、ヒーローに言った『私を攻撃すれば……!! どうなるかツ!!』

『知ってるさ、だから……お前を倒すのは、ここじゃない』

しかし、護とヒロが一人のウルトラマンになって30秒が経った瞬間、

ヒーローのカラータイマーが青から赤に変わり、カラータイマーが鳴り始めた

護とヒロが融合した新しい姿は、ウルトラホーンも、メビウスブレスのようなものを持たず、

無理やりに融合した姿だったのだ

強力な力を持つ代償は、制限時間1分……融合が解けるまで、後30秒しかない

『次で……終わらせる!!』

ヒーローは構える……が、ボガールモンスは今ここで死ぬ必要はないと、高速移動で逃げようとした

『ハアアアアアッ……!!』

ヒーローは両腰に両手を引き、そのまま横に腕を伸ばすと、

まるでウルトラマンゾフィーのM87光線の動きで赤と青の光線を放った

光線は高速で動いたはずのボガールモンスを貫通し、ボガールモンスの体を空の彼方……宇宙まで光速で飛ばした

ボガールモンスは何とか光線から外れようともがくが、光線はその体を拘束し続けた

『行くぞ!!』

ヒーローは光線を放っている右手を握り、引いた

ヒーローの体が輝き、光線に乗って、光速でボガールモンスへと飛んだ

『ティー……サア……ッ!!』

光速の速度から放たれた右ストレート……ライトニング・フィニッシュがボガールモン스에決まった

体ごと貫通し、ボガールモンスには大きな穴があいた

『は……ははは、私を倒したところで……!!また私は……!!』

そう、地球に負の感情がある限り、またダークエフェクトの怪獣は蘇る

しかし、ヒーローは振り向き、拳を作った両腕を、胸の前に交差させると、

ボガールモンスの体はヒーローのカラータイマーに吸い込まれていった

『次は……ない!!言っただろ、決めるって』

そして、制限時間の1分になり、ヒーローの体は光り輝き……消えた

待機していた篠崎たちに、橘からの通信が入った

『GUYSスペースシーから宇宙空間でウルトラマンがボガールモンスを消滅させたと報告が入った。』

全機帰投、お疲れ様』

『GIG』

篠崎たちはボガールモンスを倒せたことに喜んだ……しかし……

「俺たちは本当に役に立ったのか……?」

篠崎が全機に通信で言った

「たしかにボガールは倒せた、だけど……最後の奴は俺たちじゃ手出しできなかった……」

「これで本当に……!!ウルトラマンと肩を並べたなんて……!!」

その時だった

『大丈夫です!!ちゃんと、ヒーローの力になりましたよ、篠崎さん!!』

「おい……!!今の声って……」

『ヒロ君の声……!!?』

『俺もいます』

「護君まで……!!」

護とヒロは、いつの間にかビルの屋上で全機に向かって、手を振っていた

「只今帰りました!!」

『馬鹿野郎……帰ってきたんなら、帰ってきたって言いやがれ!!』

「ええ!?今言ったじゃないですか!!」

『護君!!体は大丈夫なの!?!』

三原は護にそう聞いたが、護はそれに対して胸を叩き

「見ての通り、元気です!!心配かけました」

「彼らに、体を治してもらったんですよ、ね?」

「そうなんです、本当……彼がいなかったら……」

『待って、彼、彼って親しげに言ってるけど、誰のこと?』

「誰って、みんなも知ってるウルトラマンたちのことですよ」

『ウルトラマン!?!』

クルー全員が、ウルトラマンと聞き、驚いた

「とにかく、遅くなりましたが、またGUY'Sのクルーとして、また戦います」

「よろしくおねがいます!!」

護とヒロがそういった時だった

篠崎が忘れていたと言い、ヒロに言った

『ヒロ、お前今までいなかった分、焼き肉行くぞ』

「え!いいんですか!?!」

『ばか、お前のおごりでだ』

ヒロは一瞬固まり、おごりという言葉を何度も口に出した

「おごり……えええええええ!!?僕だけですか!?!護さんは!?!」

「ヒロ、ごめんな……俺は今日から再入隊だから」

「そんなぁー!!」

「ぷっ……嘘だよ、さあ焼き肉、一緒に食べに行こう」

クルー全員が笑い、クルーたちはいったん基地へと帰った

いろいろな説明

日野 護（ひのまもる）20歳 男性

ヒーローになることを夢に見てた青年

β （ベータ）フュージョミッションを使うことで、ウルトラマンヒーロー・モードレッドに変身する

全ての乗り物の運転、操縦ができるという特技がある

なお、空を飛ぶ乗り物には嫌われているのか、すぐに墜落する

朝日 ヒロ（あさひひろ）20歳程度 男性

護の前に現れた青のウルトラマン

α （アルファ）フュージョミッションを使うことで、ウルトラマンヒーロー・モードブルーに変身する

ウルトラ戦士として未熟だったが、光の国から帰ってきて、どこか頼もしくなった

元宇宙科学技術局の研究員で、フュージョミッションはその時に制作したもの

専攻していたのはディファレーター光線の研究とエフェクト技術だった

橘薫（たちばなかおる）32歳 男性

G U Y S ジャパンの隊長、シリアルが大の好物

ウルトラマンメビウスを直接見たことのある人物

勘が鋭いが、自分でそれを気付くことができない

食べるシリアルの状態によって一日がどのようなになるか、周りが判断できる

ミルクが多い―平和

シリアルそのまま―何らかの危機がある

食べてない―すぐ傍に何かが来ている

自分が隊長として何ができるのかを日々考えている

篠崎力（しのぎきつとむ）22歳 男性

G U Y S ジャパンの中でも一番戦闘機の扱いに長けるエース
熱い心の中に優しい一面もある

人の悩みなどによく気づくが、自身の悩みを打ち明けられない不器用さもある

実は気になる女性もあり、現在恋の悩みがある

最近、疲れがたまると基地を抜け出しているようだ

垣山真司（かきやましんじ）30歳 男性

G U Y S ジャパンの中で唯一の既婚者、小学生の娘がいるお父さん根っからの仕事人間で、G U Y S という仕事に誇りを持つ一方

家庭のことを二の次にしてしまうことがあった

今では家族のことを考えすぎと言われるほどの家族が大好きなお父さん

三原愛（みはらあい）22歳 女性

優れた視力と繊細な機体操縦テクニックを持っており屋久島朱里と昔からの親友

何かと朱里の事を気にかけており、G U Y S に入る朱里を追って自身もG U Y S に入った

性格上、大胆な行動が苦手だが、いざという時想像もできないような大胆さを見せる

朱里以外の親友、辻本愛ができてからは朱里にかけていた過保護さは小さくなった

少女漫画が好きなのが屋久島朱里によって明かされた

屋久島朱里（やくしまじゅり）23歳 女性

クールな一面、実はウルトラマンが大好きな女性、ちなみに一番好きなのはレオらしい

愛を信頼しており、愛の過保護な面を気にしたが、最近は構ってくれなくて少し寂しいらしい

中学生のころ、いじめを受けていた為、女性を理由に何かを言われるのが嫌い

いつの間にか自分より強くなってる護を目標に、最近トレーニングに励んでいる

坂牧由依（さかまきゆい）20歳 女性

先天盲の女性であり、目が全く見えない

しかし、生き物の心を見ることができるようらしく、やさしい心が邪悪な心かを見抜くことも出来る

負思念体ゴモラが出現した際、ウルトラマンヒーローに助けてもらったとき、

護に一目惚れをしてしまった

草花が好きで、触れたことのある花のすべてを造花で持っている

セリザワ カズヤという義理の父親がいる

レッドスパロウ

G U Y Sガンウインガーの後継機であり、メテオールが使用できない場合でも強力な弾頭を使うことができる

G U Y Sガンウインガーのようにマニニューバモードが使用でき、

マニニューバモードのエネルギーを収束させることにより、メテオールエネルギー砲を放つ

製作者は坂牧の義理の父、セリザワ カズヤ

バルタン星人により、本来の性能を発揮できなかったが、現在では解消された

オオルリ

G U Y Sガンローダーの後継機であり、メテオールが使用できない場合でも強力な弾頭を使うことができる

G U Y Sガンローダーのようにのようにマニニューバモードが使用でき、

マニニューバモードのエネルギーを収束させることにより、メテオールエネルギー砲を放つ

製作者はレッドスパロウと同じくセリザワ カズヤ

ほかの機体と違い、機体カラーが青色であることが特徴

バルタン星人により、本来の性能を発揮できなかったが、現在では解消された

ナンダ

陸上からの支援用戦闘車両、大きさは一般的な車と同じ

武装は後部に搭載されているスペシウム反応砲、トランクに水陸両用感知式地雷が搭載されている

ホバーで空を飛ぶことも出来る

名前を決めたのはセリザワではなく坂牧

最大搭乗人数は4人

N（えぬ）ブースター

戦闘車両ナンダをコクピットポッドとして高速追跡機ガンブースターの後継機としてセリザワカズヤが制作した

ケツアールとバインドすることにより、ケツアールバーンテイニングになることができる

N（えぬ）ブースター（ヒロ）、N（なんだ）ブースター（坂牧）、スーパーナンダ（護）と、

いくつかの名前があるが、正式名称はN（えぬ）ブースターであるケツアール

レッドスパロウ、オオルリが合体することにより完成する合体メカ基本はメテオールを使用せず目的地に高速で移動するためだが、メテオールを使用すると

オオルリがスペシウムマイナスエネルギー、レッドスパロウがスペシウムプラスエネルギーを行き来させ

スペシウム光線を放つことができる

のちに開発されたNブースターと合体し、さらに強力なスペシウム光線を放つことも可能

実在する鳥のケツアールにイメージが似ていたため、ケツアールと名前がついた

ケツアールバーンテイニング

ケツアールにN（えぬ）ブースターがバインドした新たな姿

そのカラーリングからゴシキノジコという鳥を思わせる

オオルリに搭載された、スペシウムリダブライザーの小型兵器、β

（ベータ）リダブライザーを使い、

強力なスペシウム光線を発射できる

しかし、発射後にはエネルギーが枯渇するため、強制的にクルーズモードへと移行する諸刃の剣である

フュージヨミツシオン

ウルトラマンヒーローと融合するためのアイテム

護自身の光を為、そのエネルギーで自身を光に変換し、

ヒーローのカラータイマーに入ること融合することができる

光をそのまま放ち、ぶつける事で攻撃に使用もできる

護の身を案じ、ヒロが二つに両断してしまった

α (あるふぁ) フュージヨミツシオン・ β (ベータ) フュージヨミツシオン

二つに切られたフュージヨミツシオンをウルトラの父が、二人の友情の印として、

青のラインが入った α フュージヨミツシオンと、赤のラインが入った β フュージヨミツシオンとして、

作りなおしたもの

大研究その2!! G U Y Sとウルトラマンヒーローに
迫る!! 1―負思念集合体サイコダーク登場―

いつもの指令室……今ここにはセリザワ カズヤ以外のG U Y S
クルー達がここにいた

「という訳で、今度重役の方がこっちに来るとき、現状を報告するため
の情報整理を手伝ってほしい。」

この1カ月でいろいろなことが変わったからね」

橘はそう説明し、何枚かの紙を配り始めた

紙を受け取った篠崎たちだったが、どうにも腑に落ちないところが
あった

「隊長、こういうのって本当に俺達の仕事なんですか?」

「ん?ま、まあいいじゃないか!! 一人一つくらいでいいんだ、ウルトラ
マンヒーローの変わったとこや、

G U Y Sマシンの概要を教えてほしい」

最後に紙を手渡された屋久島が首を傾げ

「なんでその内容で隊長が手間取るんですか……?」

まあ、暇でしたし、楽しそうだからいいですけど……」

と言い、大型ディスプレイに映像を出した

映像はヒロが変身したスタンダードなヒーローの姿が映っていた

「じゃあ、私が調べたモードスタンダードと言われるウルトラマン
ヒーローを……」

映像が再生され、それがこの前のボガールとの戦であることが分か
る

ヒーローはエフェクト・スラッガーを構える

「1か月振りに現れたウルトラマンヒーローは、前の時とは違い、ファ
イティングスタイルも変わっています。」

アイスラッガーの様なものの構え方から、かつて現れたウルトラセ
ブンから、

戦い方を教わっていると私は推測しました」

「ほう……どうしてそう思ったのか、聞いても？」

屋久島はヒロのほうを一度見て、質問に答えた

「ヒロ君と護君の言葉を信じるなら、ヒーローもウルトラの星へ行つてると考えたんです。」

それに私だったら、戦って負けたなら強くなろうと鍛えますから、ヒーローも同じじゃないかなあつて考えました」

橘は何度も頷くと、次と言い三原を指名した

「えつと……朱里が青いヒーローだったので、モードレッドの変化点を……」

映像が切り替わり、今度は護だけが変身したモードレッドの映像だった

「今回ウルトラマンヒーローの一番の変化点は1つの体で2つのモードだったのが、分離したのか……」

2人に増えたことです

元から2人で1つの体になっていたのか、分離したかは不明です……

ですが、それぞれの特徴から少なくとも、同一の意識ではないことがわかります」

映像にスタンダードとモードレッドが表示された

「2体のヒーローが現れた時、明らかにコンタクトをとっていたとされる周波が検知されました。」

何を話していたかは解読されていませんが、

波の送受信していることから、会話をしてコミュニケーションをとっていると考えてもいいと考えられます」

「そういえば、赤いヒーローもほかのウルトラマンの技を使っていたね」

「はい、レジストコードウルトラマンタロウが使用したスワローキックという技に非常に酷似しています。」

朱里と同じく、モードレッドもウルトラマンタロウから戦い方を教わったんじゃないでしょうか？」

「二人ともよくそこまで調べたな」

橘がそういうと、屋久島と三原が少しだけ不機嫌になりつつ

「私たち、ウルトラマンに助けってもらってばかりですから……」

「しかも青い方に」

橘は空気を変えようと篠崎に今度はGUY'Sマシンの概要を聞いた

「隊長、前も篠崎に聞いて失敗しましたよね？」

「お父さん、俺だって進歩したんだぜ？説明ぐらいできるってとこ、見せてやるぜ」

篠崎がコンソールをたたき、レッドスパロウの映っている映像を出した

「レッドスパロウが前と変わった部分はオオルリと合体してケツァールになって、

マニユーバモードを使って、スペシウム光線が撃てることだ。

スペシウム光線は1カ月前から使えたが、使用の許可が下りず、使えなかったが……

ようやく許可が降りて使えるようになった。

スペシウム弾頭弾と違って、機体のエネルギーを使っちゃうが、それほど強力なメテオール兵器だってことだ」

「うん、篠崎にしては頑張ったけど、次はカンペなしでやってみようかな？

お父さんとの約束だ」

「な!?じゃあ、お父さんは説明できんのかよ!!」

垣山は橘隊長に目で伺い、説明の許可が出たため、ディスプレイにオオルリをだした

「じゃあ、オオルリに搭載された新しく開発されたメテオールの説明を……

オオルリの機体上部に格納されたβ（ベータ）リダブライザーは、エンペラー星人と対峙したウルトラマンメビウスの援護となるべく、使用されたファイナルメテオール……

スペシウムリダブライザーの小型機です。

スペシウムの増幅率は大幅に下がりましたが、それでも強力なメテ

オールには変わりません」

垣山が続いてN（えぬ）ブースターの説明をしようとしたとき、坂牧が拳手をし、橘に進言した

「ナンダことなら私のほうが詳しいです」

垣山は坂牧の圧に押され、苦笑いで説明を譲った

坂牧は途端に上機嫌になり、笑顔で説明をし始めた

「ケツアール、そしてナンダのパワーアップとして開発されたN（なんだ）ブースターは、

高速追跡機ガンブースターの後継機として開発されました

その加速度も然ることながら、ナンダと分離しても自動で目標を追跡、攻撃できる点にあります!!

もちろん、マニユールバモードも持ち、ガンブースターと同じようにスパイラルウォールを使用することも!!」

そして、坂牧の説明はそれから護が止めるまで20分間続けられた「坂牧君、説明というものは要点を押さえて簡潔に……

長くても紙1枚にまとめられるようにしたほうが良いんだ

それと、N（なんだ）ブースターじゃなくてN（えぬ）ブースターだろうか？

「正式な名前があるんだから……」

「え？ スーパーナンダって名前じゃ……」

護がそう言うと、

「だから護さん、N（えぬ）ブースターが正式な名前なんですよ!？」

「でもスーパーって感じだろ?」

「護さん!! ほらN（なんだ）ブースターって名前のほうが……」

ナンダに乗る3人組、護、ヒロ、坂牧がN（えぬ）ブースターの名前について言い争いを始め、

クルー全員で止めに入った……

その時、指令室にセリザワが1枚の紙を持って入ってきた

「橘隊長、本部に提出する書類がまだ提出されていないようだか……?」

「ああ!! セリザワさん!! シーツ!! シーツ!!」

橘は人差し指を口に持つてきて、言わないでと合図するが、その様子を見ていたクルー全員が橘を見た後、

セリザワに聞いた

「セリザワさん、一体どんな書類ですか？」

「本部へのGUY'Sマシンの改良後の報告と、ウルトラマンに関する報告書だ。」

橘隊長、私も元GUY'S Japanの隊長として言わせてもらおうが……報告書は余裕を持って作成し、

速やかに届けるのが……」

橘は何度も頭を下げ、謝っていた

「はあ……だから私たちに書類づくりを手伝わせたのね……」

「何……？ 橘隊長、まさかとは思いますが、部下に自分の書類を？」

橘に詰め寄るセリザワだったが、その時GUY'S基地に警報が鳴り響いた

三原がコンソールを操作し、大型モニターに映像をだした

「市街地にサイコダークが!!」

「なに?! ダークエフェクトは消えたんじゃないのか!？」

「いえ、ダークエフェクトは……まだ消えてません」

橘の言葉に答えを返したのはヒロだった

「どう言うことだ!？」

「ダークエフェクトは生き物すべての負の感情なんです。」

この地球から負の感情をどうにかしない限り、それは消えはしないんです」

「橘隊長!! 出撃の許可を!!」

橘はクルーを見渡し、号令をかけた

「GUY'S!! saally go!!」

『G I G!!』

大研究その2!! G U Y Sとウルトラマンヒーローに
迫る!! 2―負思念集合体サイコダーク登場―

篠崎達がサイコダーク迎撃に向かって後のG U Y S基地で、

セリザワと橘はG U Y Sマシンに搭載されている映像出力装置から送られてくる映像を見ながら話していた

「あの……セリザワさん?この任務が終わったら見逃しては……?」

「隊員達と由依からの頼みだ、それに書類を部下に任せたのは私としても頂けない」

それは篠崎達が出撃する直前のことだった

前回の出撃と同じように坂牧と出撃しようとするセリザワだったが、坂牧がセリザワの体を押し、

橘に押しつけた坂牧は……

「お父さんは橘隊長が私達から逃げないように見張っててください」

セリザワから見るととてもいい笑顔で坂牧を待っていた護の元へ駆けて行った

「あ、そうだ!!セリザワさん!!橘隊長が逃げないように見張っててください!!お願いします!!」

篠崎に続き、他の隊員もセリザワに橘を見張るようにとお願いをしていた

しかし、セリザワにとってはそんなことよりも自分より護の元へ駆けて行った坂牧が気になるのだった

そして現在に戻る

セリザワがどう思っているのかはわからないが、

橘はセリザワが自分を見張っているのは単なる八つ当たりと考えた

「セリザワさん、もしかして娘さん……坂牧君から何も聞いていないんですか?」

「ああ、だがあの顔を見れば分かる……護とは話をしなければならぬいな」

橘は面倒なことになったと頭を悩ませ、隙を見せれば逃げると決めていた

……もちろん戦闘が終了した後の話である

その頃、サイコダークのいる地点に到着した篠崎達、すでにケツアールバンテイングの状態で飛行している

「こちら篠崎、サイコダークを目視で確認した!!」

『分かった、全機!!迎撃開始!!』

『G I G!!』

赤い目を鈍く光らせるサイコダークは、金属音のような鳴き声を上げながら球体から人型へ姿を変えた

ヒロは篠崎達に通信を使い、注意を促した

「サイコキネシスを使うサイコダークには攻撃は当たりません!!どうしますか!？」

『はッ!!お前ら2人がいない間、ただただのんびり過ごしてた訳じゃねえんだ!!』

隊長!!メテオール頼むぜ!!』

『いいか、サイコダークはサイコキネシスとサイコビームをどつちか片方しか一度に使えない!!』

サイコビームを使用した瞬間、一気にたたきこめ!!』

ケツアールバンテイングは牽制として、スチームバレットを発射した

サイコダークは以前のようにサイコキネシスを使い、

人口が密集している方角や、建物にスチームバレットを衝突させるが、スチームバレットは煙のように消える

「その使い方はもう知ってたッ!!」

当たっても威力のないスチームバレットのみを使い、サイコダークを威嚇していく

ケツアールバンテイングが、サイコダークの脇を通り抜けた、そ

の時……

サイコダークの目が赤く、禍々しく目を光らせた

「隊長!! いまだ!!」

『メテオール解禁!!』

サイコダークの目からサイコビームが放たれると同時に、

ケツアールバーンテイニングが金色の粒子を放ち、サイコダークの視界から消える

ケツアールバーンテイニングはUFO的超絶飛行により、高速でスプリットSという空中戦闘機動をやつてのけ、

サイコビームの真下を飛行していたのだ

「スペシウム光線……ッ!! ファイアーッ!!」

サイコビームを放っていたサイコダークは、サイコキネシスを使うこともできず、

そのまま胴体をスペシウム光線で貫かれた

サイコダークは力なく倒れ、黒い霧となつて散つて行つた

「しゃあああッ!!」

篠崎はサイコダークを倒し、ガッツポーズを決めた

他のクルーたちもウルトラマンの力を借りずに怪獣を倒したことに喜んだ

篠崎の代のGUYスクルーでは初めてのことであった

サイコダークを倒したことを見届け、帰還の命令を出した橘はセリザワに席を少し外すと言ひ、

御手入れに向かつた

セリザワは護とヒロが帰ってきたら何を話すべきかを考えていた

……その為、橘が逃げだしたことに気づくのが遅れた

『逃げる!! 焼き肉奢らされるなんて御免だ!!』

「……ッ!? 橘隊長!! 待て!!」

橘がセリザワに捕まる30秒ほど前の出来事だった

遠い、遠い……宇宙の果てで……光の国よりも地球から遠い宇宙の
果てで……

今の地球を見つめる何かがそこにはいた

それは手のようなものの上に地球によく似たものを作ると……地
球を黒く染めた……

大研究その2!! GUY Sとウルトラマンヒーローに
迫る!! 3 — 負思念集合体サイコダーク登場 —

サイコダークを倒し、帰還した篠崎達の前に、橘がセリザワの前で
正座している姿が飛び込んだ

「あの……見張るっていつてもなにもここまで……」

篠崎がセリザワにそういうと、セリザワは首を横に振り……

「ここまでしないとすぐに逃げようとするからだ」

と言った

「まあ、橘隊長には書類を手伝った代わりに焼肉でも連れて行っても
らおうか?」

「はい……あの、いつもの食べ放題でいいですよね?」

橘が申し訳なさそうに聞くが……

「逆に高級焼肉でも奢ってくれんのか?」

「いや、厳しいから無理です……」

お礼を言いつつ、頭を下げる橘であった

「今のGUY Sはよく焼肉を食べるな」

「まあ、あれは奢りって言っても奢りじゃありませんし、なにかある度
に焼肉焼肉言ってますから……」

騒ぎたい口実なんですよ」

セリザワの疑問に、護が答えると……セリザワが護の肩に手を置
き、なにかを耳打ちした

そのままセリザワと護が席を少し外すと、指令室を出た

「なんの話でしょう?」

ヒロが少し疑問に思ったが、他のクルーたちは坂牧の父親であるセ
リザワと、

坂牧の思い人である護が同時に退出したのだからと、何を話すの
か、大方分かると扉の向こうを見ていた

護はセリザワに連れられ、セリザワの自室に来ていた

「コーヒーだが……飲むか？」

「あ、いただきます」

護はセリザワにコーヒーの入ったマグカップを貰った

ブラックのコーヒーの味に顔をしかめながら、少しずつ飲んでいく
少し時間が経つと、セリザワは目を瞑り、テレパシーの様なものを
使い、護と精神世界で話し始めた

いきなり周りの光景が変わったことに驚く護を置き、セリザワは話
始めた

『すまない、他の誰かに聞かれては厄介な事になりかねない……』

「この状態で話をさせてくれ」

『は、はい……あのセリザワさんは一体……？』

護がそう言うのと、セリザワは右腕にナイトブレスと呼ばれる神秘の
アイテムを護に見せた

『私の名前は……ヒカリ、ウルトラマンヒカリだ』

『セリザワさんが……あのウルトラマンヒカリ!?』

護が驚いていると、セリザワはその姿をヒロと同じ、青い体のウル
トラマンへと姿を変えた

『なにも驚くことはない、私からすれば、君の方が驚きの対象だ。』

原因がこつちにあるとは言え、地球人で初めて生まれたウルトラ族
だ……

それと、礼を言わなければならない』

『礼……？』

『由依を助けてくれたそうだな？』

『人を助けたときに、偶然一緒に助けられた……それだけのことで』
『君は人を助けるということがどういうことか分かっていないようだ
な……』

まあ、人を助ける意味については後に君も分かるだろう。

……本題だ、由依についてだ』

『坂牧について？』

『これを見てくれ』

ウルトラマンヒカリは手をかざすと、そこにとある光景が現れた。それはかつて、ウルトラマンヒカリが惑星アープという場所に降り立った時の光景だった。

『ここは？』

『惑星アープ……私が心奪われたほどに美しい星……』

その時の光景だ……私はアープを訪れ、このアープの生命と私はコインタクトを取った。

そして、この星が危機に晒されていることを知り、この星を守る勇者になるうとした……

しかし、遅かった……』

光景は一変して、輝く結晶の様なものがボガールに取り込まれていく

『私はボガールと戦ったが、曇った心ではボガールを倒すことは出来ず、逃がしてしまった。』

アープの星の美しい輝きを失った……

しかし、アープは滅んではいなかった……また新たな生命が生まれ、再び輝き始めた』

光景は荒れ果てた星に、少しずつ輝く結晶が生まれていくのを映し出していた

『あの、アープと坂牧と……どんな関係が？』

『由依はアープの因子をその身に宿してしまった人間だ。』

由依が盲目でありながら、心を見る事が出来るのはアープの因子がまだ胎児のときに入ったからだ。

私が由依にあったのは由依がまだ子供だった時だ』

光景がまた変わり、そこには何人かの子供たちと離れて座っていた『由依は児童養護施設に居た、両親が盲目といわれている由依が両親のもとに簡単に駆け寄せられた。』

それを不審に思った両親が由依が目が見えているか確かめた……』

そこには坂牧の事を恐れつつ、物を目の前で投げ、坂牧に当てる坂牧の両親の姿が映っていた

『人は理解できないものを怖がる生き物だ。』

最後には由依を施設に預け、二度と姿を現さなかったようだ』

『それで、セリザワさんが父親代わりとして引き取った……』

光景は再び変わり、坂牧と手を取り、施設を出るセリザワの姿が映っていた

『私は守ると決めた、かつて守れなかった、この子の勇者になると……しかし、私は宇宙警備隊だった……いつまでも地球にとどまる事は出来なかった。』

由依が大人になったら、私は地球を離れなければならなかったのだ。

……そして、地球で人々を見守る役目を他の隊員に任せ、私が地球を離れたとき、ダークエフェクトが……』

『その隊員は……?』

『光の国の防衛をしたため、地球には来れなかった……』

地球はダークエフェクトに包まれ、簡単には入る事が出来なくなっていた。

ベムラーが現れた時には既にダークエフェクトが地球を覆っていたからな……』

幸い、ヒロが地球に来ていた為、何とかなった……』

ウルトラマンヒカリは映していた光景を消し、護と対面した

『君に聞きたい……由依がただの人間ではないと知ってでも、君は由依を……』

『……これから俺達、一緒に焼肉なんです。』

もちろん坂牧も一緒に』

『そうか……』

『GUYSのドキュメントにはこんな言葉があるそうです。』

やさしさを失わないでくれ。

弱いものをいたわり、互いに助け合い、

どこの国の人たちとも友だちになろうとする気持ちを失わないでくれ。

たとえば、その気持ちは何百回裏切られようと。

それがわたしの最後の願いだ……これはウルトラマンAが残して

くれた言葉だと言われています。』

『その言葉は私も知っている、しかしその言葉は……』

『この言葉を伝えられた子供たちはこの言葉をどう思ったかは俺には分かりません……』

けど、思うんです……そんな当たり前な事を俺達人間がこの言葉がなければ出来ない俺は思っています。

だから俺は長い時間がかかるとしても、人とこの宇宙に住むあらゆる生き物が、

手を取って生きていけると信じてます』

ウルトラマンヒカリは精神世界を閉じ、元のセリザワの部屋に戻った

「娘を頼む」

セリザワはそうとだけ答えた

「はい、もちろん……」

じゃあ、俺たちは焼肉行つてきますから」

そう言い、立ち去ろうとする護にセリザワが護に待ったと声をかけた

「俺は焼肉にはいけないのか？」

そう声をかけるセリザワに護は笑いながら

「冗談ですよ!! さあ、早く行きましょう」

セリザワもその言葉に少し微笑み、扉を開けた

『あッ……』

扉を開けたそこには、隊員たちが立っていた

まるで盗み聞きをしていたかのように、顔をそらす隊員たち

「盗み聞きですか？」

護がそう聞くと、篠崎たちは渴いた笑い声を出し、何も言わず外へ向かって歩き出した

誰にも聞こえないよう精神世界で話していたから大丈夫だろうと

思っていた護のもとへ、

坂牧が近寄ってきた、そして誰にも聞こえないよう小さな声で

「……よろしくお願ひします」

と言った

最後の言葉を聞かれたことを気付かない護は、

その後、焼肉屋で他のクルー達の視線が妙に自分に多い理由が分からなかった

G U Y S の怪獣博士1―透明怪獣ネロンガ登場―

ある日、G U Y S 総本部では緊急の会議が行われていた

円卓には大勢の人が座っているが、その中には空席も見える

「サコミズ総監は単なる不在かな？」

初老の男性が空席の一つを見つめそう言った

「仕方ありませんよ、元から彼はそういう人ですからね……」

それよりも深刻な問題がありますでしょうか？」

女性がメモリーディスプレイを操作すると、円卓の中央にG U Y S の上層部のメンバーが多数映っていた

「まさかここまで的人数がバルタン星人だったとは……」

上層部メンバーの画像は黒い画面に変わり、その5分の1がバルタン星人であった事が分かった

「目的すらあまり分かっていない、だが上層のメンバーにここまで空きが出てしまった……」

混乱が目的だという者たちもいる」

「上層やクルーの補充は既に退役している方に声をかけております

流石に新人を多く入れるわけにはいけないでしょう」

「しかし、またも日本か……」

「別に日本だけに怪獣が現れているわけではないでしょう？」

私たちはこれまで以上に怪獣や敵性の宇宙人に対する準備を進めなければなりません。

日本についてはサコミズ総監が当時のG U Y S クルーに声をかけているそうです」

円卓中央のモニターに6人の画像が出されていた

同時刻、G U Y S J a p a n 基地では橘がクルーたちに諸連絡をしていた

「みんなも知っていると思うが、G U Y S 内に忍び込んでいたバルタ

ン星人がこぞってG U Y Sから居なくなつて、
人員に空きができたなりした……そこで人員の補充をする……
それだけではなく、明日、アドバイザーとして元G U Y Sクルーの
一人が訪ねてくださる。

失礼のないように」

『G I G ！』

クルーたちが了解した……その時、G U Y S基地に警報が鳴った
「怪獣かッ!？」

篠崎が張り切っていると、通信を受けていた三原がそれを否定した
「いえ、違います!!エリアの映像を出します!!」

三原が出した映像には至って平穏な街の様子が映っていた

「なんだ……?誤報か……?」

怪獣が現れたと誤報が来ることは実は珍しくはない、
ベムラーが現れてからは極まれに怪獣と何かを見間違え、警報が鳴
る事もあった

「……いえ、違うわ!!あそこ!!」

屋久島がモニターのある一点を指さすと、そこには逃げ惑う人々の
姿があった

「でも怪獣の姿は……?まさか小型の怪獣なのか?」

垣山がそう言った時、近くの建物がいきなり倒壊した

「いや、小型じゃない!!」

クルー全員で現場を調査、以後現状を報告してくれ!!

G U Y S!! s a i l y g o!!」

『G I G ！』

格納庫へ向かったクルーはそこで整備をしていたセリザワと出く
わした

「セリザワさん!!いったい何やっていたんですか!？」

護がセリザワに聞くと、セリザワは小型のディスプレイを取り出

し、クルーたちに説明した

「ケツアール状態でのスペシウム光線がロックの状態だったからな、使えるように再設定し最適化していた。」

威力はバーンティングより落ちるが、十分使えるはずだ」

「ありがとう、お父さん」

セリザワは坂牧に微笑み、やることがあると言い、走って去って行った

「よし、行くぞ!!」

篠崎たちはそれぞれの機体乗り、メモリーディスプレイをセットした

認証が済み、機体が操縦可能になった

「こちら篠崎!!レッドスパロウ、発進するぞ!!」

屋久島、三原もオオルリに搭乗し、メモリーディスプレイをセットした

「こちら三原、スタンバイ完了、発進します」

レッドスパロウとオオルリがゲートAより発進していった

ナンダに乗った護とヒロ、そして坂牧も準備を完了させ、通信を行った

「こちら護!!ナンダ発進します!!」

『了解、ゲートBから発進してください、いいですか?』

「もう前みたいなミスはしませんって……」

護はアクセルを踏み、きちんとゲートBから発進していった

現場に着いた3機は周辺を警戒したが、やはり怪獣の姿は見えない異変も感じられず、リーダーにも映らず、坂牧もなにも見えないと判断したため、既に去ったと判断した

現場の状況を確認、報告し、一時基地に帰還した

帰還するなり、篠崎は悪態をついていた

到着が間に合わなかったこともあったが、相手が何者であるかもわからず、

ただ被害を出しただけで終わったのだからそれも当然である

「ちくしょう!! 一体何だつてんだ!!」

他のクルーも悪態をつくわけではなかったが、暗い雰囲気に含まれていた

そんな中、再び警報が鳴り、先ほどと同じく何かが街を襲っているという情報が伝えられた

出撃の許可が下り、再び出撃する篠崎たち

「今度は間に合えよ……!!」

篠崎たちは最速で現場へ向かったが、結果は先ほどと同じく、何も見えない

辺りをくまなく探すと、坂牧がポインターで何かを指定した

「あそこに何かが居ます」

全員が指定された場所を見ると、そこにはなぜか大きな穴が作られていく様子が見られた

「怪獣か!？」

「潜っていつてます……」

『お父さん!! 屋久島!!』

篠崎が射撃を命じ、穴に向けて攻撃が開始された

しかし、攻撃は命中することなく、逃げられてしまった

結局、その日は姿の見えない怪獣は現れることもなく、時間は過ぎて行った

「あの姿が見えない怪獣について何かわかったか？」

橘が三原に聞くが、三原からはいい返事は聞こえなかった

「姿が見えないという特徴だけじゃ……姿を隠す怪獣なんていっぱいいますし……」

新たな怪獣の可能性も否定できませんし……」

他のクルーもドキュメントを検索したり、怪獣が現れた場所の検証

を行っていた

その時、指令室のドアが開かれ、眼鏡を掛けた男性が入ってきた
「失礼します、アドバイザーとしてやってきたクゼ テツペイです
ど……」

クルーたちはクゼを見つめ、そう言えばアドバイザーが来るということ連絡されていたのを思い出した

護は横目でクゼを1度見てはディスプレイを視線を戻したが、もう一度クゼを見ると冷や汗を流し、机の下に隠れた

橘はクゼの元へ駆け寄り挨拶をした

「お待ちしておりました、すみませんお迎えもできずに……」

「いやいや、良いんですよ!!忙しそうですし……」

昨日現れた怪獣についてですよね……?」

「はい、何しろ情報が少なく、有効な作戦もその怪獣の出現する地点も分からないんです」

「あ、それなんですけどもう目星がつかしました」

その言葉にクルー全員が驚きの声を上げた

クゼは近くの机に手に持っていたカバンの中からノート型のコンピュータを取り出し、起動させた

護と坂牧以外のクルーたちはそばに近寄り、モニターを覗き込んだ
「これまであの姿の見えない怪獣が出現した地点をまとめてみたんです。」

たった2回しか現れてないんで情報が少なかったんですけど、

この二回とも近場に発電所、送電所が存在してます。

そして、近場で小規模ですが電気が使えなくなったという情報がありました。

なので、その情報とドキュメントと重ね合わせると……これです

!!

モニターにはある怪獣が映し出された

「ドキュメントSSSPに記録されている透明怪獣ネロンガです。

高い確率でネロンガだとみていいと思います。

リーダーが反応しないのもネロンガが電波を吸収してしまったん

でしょう」

自分たちが時間を掛けても絞れなかった怪獣の正体を、まだ可能性だが1つに絞ったクゼに対し、

クルーたちが驚嘆した

その時、音を立てずこっそりと指令室から出ようとしている護に坂牧は声を掛けた

「護さん、何をしているんですか？」

護は唇に人差し指を立て、ジェスチャーを行つたが、坂牧には何をしているのか見えず

「どうかしたんですか？」

と再び声をかけ始めた

その声に気付いたクゼは後ろを振り返ると、護と目が合った

「あッ!! ああああ!! 君!!」

護は駆け寄ってくるクゼに顔を手で隠し縮こまった

「ほら隠れない!! 顔を見せなさい!!」

手を払い、そっぽを向く護の顔を正面を向かせた

「日野護君!!」

「勘違いです!! 他人の空似です!!」

ほら、地球には自分にそっくりな人間が3人いるって……」

「馬鹿なことを言わない!! どれだけ心配したと思つたんだ!!」

勝手に病院を抜け出して!!」

「……ごめんなさい先生」

護はクゼに対して頭を下げて謝った

クゼは護が一時入院した時に担当になつた医者であつた

「まあ、とにかく元気そうで良かった……」

後で出来れば容体を確認してもいいかい？」

その時、GUY S 基地に警報が鳴り響いた

G U Y S の怪獣博士2―透明怪獣ネロンガ登場―

怪獣出現の警報が鳴り、クゼは元々考えていた作戦を伝えた

「ネロンガの特徴は電気エネルギーを吸収している際は姿が見える点です。」

ですから、電気エネルギーを直接送れば姿が見えて、攻撃が可能になります」

それを聞いた橘は作戦を考え、

「なるほど、ではオオルリで送電を行い……」

「いやいや、ミクラス居るじゃないですか」

橘が出そうとした作戦にクゼが待ったを掛け、そう言った……だが「すみませんクゼさん……メテオールの封印処置の影響でマケット怪獣はまだそんなに……」

「え……？じゃあウインダムは？」

「ありません」

クゼは頭を抱え、机に突っ伏してしまった

クゼの目の前に垣山がアタッシュケースを開いた

「今あるマケット怪獣はこれだけで……」

そこには以前垣山が使用したゼットンの他に4つのマケットがあつた

クゼがそれを見ると途端にご機嫌になった

「なんだ!! いっぱいあるじゃないかあ!!」

その内の一つを手にとると、作戦を伝えた

怪獣の出現の一報を受けて、護達はネロンガが居るであろう地点に向かっていた

ナンダに乗っている、いつもの3人であつたが……ヒロのみがその手にあるものを持っていた

その時、基地に居るクゼ テツペイからヒロに通信が届いた

『ヒロ君、聞こえるかい？今回の作戦はマケット怪獣を使う君が要だ。坂牧さんはネロンガ居るポイントを指定してヒロ君のサポートをお願いします』

『G I G!!』

『バトルエリアに入りました』

三原が戦闘区域に入ったことを伝え、ナンダは送電所付近の開けた場所にナンダを着陸させ、護達3人は降車した

「坂牧、ネロンガは!？」

坂牧はヘルメットとポインタスコープを接続し、ネロンガが居る地点を指定してく

「よし、ヒロ!!頼むぞ!!」

護がそう言うと、メモリーディスプレイにすでにマケット怪獣をセットしていた

ヒロは指定された方角に狙いをつけ、メモリーディスプレイのトリガーを引いた

『リアライズ』

緑色の粒子が放たれ、その粒子の輪の中からマケット怪獣……エレキングが姿を現した

「エレキング!!君の目の前に怪獣が居る!!放電だ!!」

エレキングは前に走り出し、見えない何かにぶつかる

エレキングが大きく震えると、体からスパークを放った

すると、大きな鳴き声と共に、その巨体が姿を現した……ネロンガだ

『よし!!レッドスパロウ、オオルリ!!マニニューバモードで攻撃開始!!』
『G I G!!』

マケット怪獣の制限時間はエネルギーの問題上1分である

篠崎たちはこの1分間でネロンガを倒さなければならない

マニニューバモードになったレッドスパロウや、オオルリはエレキングを避けつつ、実弾での攻撃を命中させていく

エレキングも一度離れ、その長い尾で再びネロンガを巻き取り、拳をネロンガの顔に当てていく

しかし、ネロンガは触角を鼻先にある角に合わせて、電撃を辺りに放ち始めた

その電撃はマニユーバモードで回避をしていたレッドスパロウに追従し、命中した

レッドスパロウは機体バランスを崩したが、すぐに立て直した

篠崎が操縦席のモニターを見ると、メインのシステムがいくつかレッドになっていた

「お父さん!!サブに切り替えてくれ!!」

「もうやった……!!?機体上部がダメージ大!!」

「冗談だろ!?ネロンガの電撃はそんなに強くないはずだろ!?」

ネロンガは以前現れた時は電撃攻撃はさほど威力の高くないものだと言っていたが……

エレキングの電気エネルギー、そしてネロンガ自身が以前現れた個体よりも強力であるのが原因であった

「早くたおさねえとやべえ……」

すでにメテオールの限界時間はすぐそこだ

ヒロと護はこのままでは不味いと考え、ヒロはエレキングに現状を維持するように言った

ヒロは左手に青いラインの入った α フュージョミッションを、

護は右手に赤いラインの入った β フュージョミッションを持った

「行くぞ!!ヒロ!!」

「はい!!」

二人はフュージョミッションを掲げ、その名を発した

『ヒーローーツ!!』

赤い粒子の渦と青い粒子の渦が二人を包み、赤いウルトラマンヒーロー……モードレッドと、

青いウルトラマンヒーロー、モードブルーが現れた

『ティアツ!!』

『サアーツ!!』

2人のウルトラマンの登場に篠崎たちが驚いていると、ついに……『バニツシュ……』

その音声とともに、エレキングの姿が消えてしまった

それと同時に、ネロンガの姿がどんと透過していく……

その様子をただ見ているだけにも行かず、護は大きくジャンプをし、何度も体を空中で回転させ、キックを放った

ネロンガの巨体は大きく飛ばされたが、透過は収まらず、その姿が消えてしまった

ヒロと護は構えを取り、互いに背後を守るように立った

『ヒロ!!ネロンガの居場所はわかるか!?!』

ヒロは瞳から透視光線と呼ばれるものを照射し、あたりを見渡すが、ネロンガの姿を捉えることはできなかった

『だめです!!』

護とヒロが手出しできずにいると、G U Y S が動き始めた

「坂牧!!ウルトラマン達を援護するぞ!!攻撃ポイントをしてくれ!!」

『G I G G!!』

篠崎は坂牧にネロンガの居場所をしてするように頼み、坂牧はネロンガが居る地点を指定した

そこに向かい、篠崎たちは今度は自分たちが電気エネルギーを送ろうと、レーザーやビームを放つが……

攻撃は当たるだけで少しも姿を見せない……何度も続けて放つが、効果は特に見受けられなかった

そこへ、クゼからの通信が入った

『もうネロンガに電気エネルギーでの効果は期待できない!!』

「どういんだよ!!クゼさん!!」

『1度目に現れた時も、2度目に現れた時も……電気を吸収していたのに姿を現さなかった……』

あのネロンガは吸収する電気を選んでるんだ!!』

「なんだよそれ!?電気に味なんかねえだろ!?全部同じ電気じゃねか!!
……時間がねえ!!スペシウム弾頭を使うぞ!!」

『ちよつと篠崎!!ネロンガの姿が見えないのに当たるわけないでしょ!!』

「このままじゃどの道ジリ貧だろ!?!」

篠崎の出した言葉に屋久島が反対するが、そこに橘が全体へ通信を入れた

『坂牧、ネロンガを位置を指定し続けてくれ!!』

レッドスパロウとオオルリは電磁ネットをネロンガに掛けてやれ!!』

『それです!!ネロンガの体じゃない電磁ネットなら透明化しない……そこを一気に叩けます!!』

『GIG!!』

坂牧はネロンガの位置を指定し続け、レッドスパロウとオオルリは電磁ネットを引っ掛けるため、

低空飛行を続けた

「カウント10!!」

両機のマニューバモードが切れるまで、残り10秒を切った

『ターゲットロック!!』

垣山と屋久島が坂牧の指定したポイントをロックした

残り6秒……

『5……4……3……2……1……』

『ファイアーーツ!!』

コンマ数秒のタイミングで電磁ネットが発射された、

ぎりぎりまで接近し、ぎりぎりのタイミングで両機から発射された

電磁ネットはネロンガに命中し、

姿の見えないネロンガの位置をヒロと護に知らせていた

『今だ!!』

護は右拳を突き出し、ヒロは左拳を突き出し、合わせた

2人の体は赤と青の光の渦に包まれ、一つに重なると、銀の体に赤と青の線が刻まれた、新たなヒーローの姿……

『ライトニングヒーローツ!!』

ウルトラマンヒーロー、ライトニングヒーローが姿を現した

ネロンガはヒーローから発せられるエネルギーを感じたのか、逃げようとするが、

その動きは電磁ネットによって封じられている

ヒーローは両拳を腰に引き、腕を左右に広げた

赤と青の渦が拳に集まり、両手を十字に組んで必殺の構えをとった

『ライトニングシュートッ!!』

右手から放たれた赤と青の混じった光線は、電磁ネットで抑えられているはずのネロンガを、大きく吹き飛ばした

吹き飛ばされたネロンガは、断末魔の叫びをあげ、そのまま爆発した

ヒーローは爆発したネロンガから出てきた大量の電気エネルギーをカラータイマーへ吸収し、空へと消えていった

その後、GUY S基地本部ではネロンガの撃退をクルー全員で喜んでいた

「一時はどうなるかと思ったけど、無事に倒せてよかった……」

クゼがコーヒーを飲み、そつと目を閉じる

彼の脳裏に浮かぶのは30年前一緒に戦った、ある日の出来事だった

青天のドックファイター―負思念体アリゲラ・超空洞人
ヴォイド人登場―

ある日、ニューヨーク沖にあるG U Y S 総本部に一通のビデオレ
ターが送られてきた

送られてきた場所が特定できないことから、何らかのサイバー攻撃
……

そう判断した総本部はビデオレターを解析した

解析すると、中身はただの映像データでしかなかったが、その内容
はただの映像ではなかった

内容を見たG U Y S 総本部のタケナカ元最高総議長ら数名を入れ
た、数時間に及ぶ緊急会議の末、

各C R E W G U Y S に緊急事態宣言がされた

緊急事態宣言が行われ、G U Y S J a p a n でも事態の説明がさ
れていた

「ヴォイド人と名乗る宇宙人が、地球を征服することをG U Y S に宣
告してきた」

そう言う橘の顔は、いつもより何か焦っているようにも見えた

「G U Y S 総本部に直接送られてきたビデオレターを解析した結果、
G U Y S 総本部は緊急事態宣言を発令し、

以後G U Y S はヴォイド人に対しG U Y S 総力を持って備えるこ
とになった」

「そのビデオレターの内容は一体？」

ヒロが橘に言うのと、橘はコンピュータのコンソールを操作し、モニ
ターに映像を出した

そこには黒く人型、肩部に赤く針状の突起を持った宇宙人……ヴォ
イド人が映っていた

『地球に住む生命体、地球人よ……私は宇宙に存在する君たちが超空洞と呼ぶ場所に住む生命体……』

さしずめヴォイド人とでも名乗っておこう。

私が君たちへこの映像を送った理由を早速だが話そうと思う……。

私は君たちが住む地球を含め、その他の星を銀河団ごと消し去りたいと思っっているのだよ、

それが、超空洞に生まれた私の本能だからだ。

しかし、気紛れで見つけた君たちの星……地球には君たち地球人が住んでいるではないか。

私もただ無知な生命体を殺めることはどうとも思わぬが、知能ある生命体を滅ぼすのは心が痛む……。

なので、これから君たちの地球の命運掛けた勝負をしようじゃないか……。

これから私は地球に対し、君たちが恐れる怪獣を送り込む、君たちはそれを倒す、それだけの簡単な遊びだ。

もし、君たちが私が送る怪獣を倒せば君たちの住む銀河を滅ぼさない。

しかし、もし君たちが怪獣に屈し、私が君たちを取るに足らない存在だと思えば……君たちだけではなく、

この銀河ごと君たちを滅ぼす……。

それでは遊びを始めよう、まず始めは君たちがウルトラマンと呼ぶ存在が現れる場所に、

アリゲラを2体、明日12時に送ろう……。』

その後、映像は切れた

「これがその映像ですか？」

ヒロがそう言い、他のクルーたちが不信に思った

「いくらなんでも信じすぎな気がしてならねえ……、総本部はたったこれだけで、

これが本当にそのヴォイド人ってやつが送ってきたって信じたのかよ」

篠崎がそう言うが、他のクルーたちもこれが本当に宇宙人が送って

きたものなのか、

疑わしいものであると考えていた

たとえば、G U Y S 以上に高度な技術を持つ何者かが混乱目的で送り込んできたものだとも考えられる

「総本部も最初は疑っていたが、火星の静止軌道上に存在するのぞみから送られてきた映像には、

正体不明な2つの物体が高速で向かっているとわかった、それが地球に到達するのは明日の正午だ。

このことからヴォイド人が送ってきた映像は本物と判断した。

今後、この二つの物体に対し、G U Y S スペースーによる迎撃作戦が開始され、もし迎撃ができなかった場合、

G U Y S オーション、もしくはG U Y S J a p a n がアリゲラと思われる物体と交戦することになる。

ヴォイド人の送ってきた映像には日本のどこに現れるかはまだわかっていない、

アリゲラが現れる場所が特定され次第、その地域には避難警報が発せられることになっている

もちろん隕石だった場合も考え、軌道修正の準備、そしてメテオールによる作戦も立案された」

護はかつて、サイコダークが隕石のように落下してきた時、電磁ネットで衝撃をなくした作戦を思い出した

「確かに、電磁ネットなら隕石であっても大丈夫ですが、

大きさはどのくらいで、質量がどのくらいかわからないとどうしようもありませんよ?」

そう言うのはこの間、アドバイザーとしてやってきていたクゼテツペイである

もちろんクゼはそのくらいは調べてあるとわかつてはいるが、他のクルーにわかるように質問しただけである

「すでに物体の大きさだけは50メートル程と判定されています、

質量に至っては物質が何かがわかっていないのでわかりませんが……」

その後、綿密な作戦を立て、全GUYSCルーは明日の12時に備えた

その夜、明日に備え、早めの就寝をとっていた護とヒロは、夢の中でウルトラの父と相対していた

『はるか彼方の宇宙にかつてないほどの膨大なダークエフェクトの気配がする、

しかも、そのダークエフェクトは地球に対し、邪悪な感情を向けている……

何か仕掛けてくるかもしれない、二人とも気を付けるんだ』

ヒロと護はそれはヴォイド人だと伝えると、ウルトラの父はなぜそれを知っているのかを聞き、

訳を話した

『なるほど……分かった、こちらはヴォイド人は宇宙警備隊が受け持つ、地球を頼む』

すべての会話が終わり、ウルトラの父はウルトラマンジャック、ウルトラマンA、ウルトラマン80に、

ヴォイド人のいるであろう場所、超空洞に調査を頼み、もしものため、地球にいるウルトラマンヒカリ、

そして万が一の時にはウルトラマンメビウスを向かわせるとヒロと護に言った

ヴォイド人に対する準備は万端だ

これから……ヴォイド人に対する戦いが始まる

晴天のドッグファイト2―負思念体アリゲラ・超空洞人ヴォイド人登場―

ヴォイド人からの予告した正午まであと30分……現在時刻は日本時間にして11時30分である

すでにアリゲラと思われる2つの物体が落下するポイントに待機する護たち

Nブースターには護、ヒロ、坂牧、セリザワが乗車し、

ケツアールにドッキングした2機、レッドスパロウには篠崎と垣山が、

オオルリには屋久島と三原が搭乗して待機している

10数分後、作戦オペレーターから通信が各隊員に送られた

『G U Y S スペーシーが目標を確認、作戦開始、繰り返す作戦開始。

なお、落下してくる物体はレジストコード、アリゲラだと判明、総員、備えよ』

篠崎が大きく深呼吸をした後、操縦管を握りなおす、すでに目標がすぐ近くにまで来ているのだ

G U Y S スペーシーを心の中で応援する各G U Y Sクルーたち

……しかし

『ライトンR30マインが目標と接触……効果なし!!』

シルバーシャークG、発射されました……命中……効果なし!!』

G U Y S スペーシーの迎撃兵器が次々と破られてしまう

『イエローバッジー、ブルーバッジーから報告、アリゲラ2体への周囲に何らかのフィールドが発生しています』

その報告を受けて、G U Y S J a p a n 基地にいるクゼが、護たちにだけ、考え付いた予想を立てた

『恐らく、ヴォイド人が遊びをするために仕掛けたものだろうね、

今日の正午に日本に2体アリゲラを送るってことは、それまでは手をつけさせないために……

ヴォイド人が本当にこの宇宙の超空洞に住む存在ならそれくらい

はできるはず』

このクゼの考えに質問を投げかけたのは三原だった、三原は目をつむり、深く考え、言った

「なんで遊びって言っている物にそんな大層なものをつけるんですか？」

怪獣を簡単に倒せる兵器を何度も防ぐフィールドなんてつけたら……なんかもつたいなくありませんか？」

『宇宙人は遊びが好きなんだ……僕も30年前、とある宇宙人の遊びに付き合わされてね……』

彼らが言う遊びというものは、ルールを遵守するためならなんだってやるんだよ』

クゼは30年前のメフィラスの遊戯と今回のヴォイド人の遊びを重ねて見ていた

最終的にはメフィラスは自分のルールを自身で破り敗れたが、

今回の敵、ヴォイド人は本気で遊びをやるつもりだ、そうクゼは考えた

『ただ、いくら向こうがルールを守るとはいつても、アリゲラを隕石の代わりとして使うかもしれない。』

アリゲラは隕石に比べれば硬度はなくても、その質量は大きい。

加えて地球に向かって垂直に落下してくるんだ、メテオールの電磁ネットの準備は必ずしておかないと』

「GIGII」

三原は返事をした後、珍しく、カロリー補充用のひとかけらの板チョコを食べていた

深呼吸すると、操縦管を握り、気合いを入れなおした

数分後、アリゲラに張られたフィールドにより、兵器が通用しないということが分かっていながらも、

G U Y S J a p a n は基地より、シルバーシャークGによる攻撃

を行っていた

そしてさらに数分後……ついに2体のアリゲラが地表に降ってくる正午まで……1分だ

「目標確認!!あの落下速度なら余裕で修正が効く!!行くぞ!!」

篠崎たちが乗るケツアールがマニューバモードに移行し、

金色の粒子を放ちながらアリゲラ2体の落下ポイントを修正された演算結果に従い動くが、

何やら演算結果がうまく確定結果として報告されない

何度も誤差修正が行われている

「おい!!こんな時に故障かよッ!!冗談じゃねえぞ!!」

地表に対したただ垂直落下してくるだけの物体に演算ができないわけがない

その時、坂牧が通信を通して今わかったことを伝えた

『あれはただの怪獣ではありません!!ダークエフェクトの怪獣です!!』

「なんだとッ!？」

ダークエフェクト……マイナスエネルギーに似たそれから生み出される怪獣はレーザーには映らず、

ダークエフェクトを感知できるのはアープの因子を持つ坂牧だけだ

演算装置は存在しない物体を存在すると仮定し、何度も演算を繰り返し、修正をかけていたのだ

『私が位置を指定します!!』

「おいおい!!それはレーザーにみたいに便利なものじゃないんだぞ!!誤差が……!!」

『……あとは、皆さんの勘です!!』

「……無茶言いやがるぜ」

坂牧が指定したポイントを立て続けにロックし、演算装置がそのポイントから電磁ネットの設置位置を修正し、

篠崎たちはその時を迎えるまで集中した

失敗すればどのような惨事になるか想像もつかない

まだかまだかと、頭の中半分で焦る一方で、もう半分の頭を落ち着かせていた

そして、一瞬……まるで時が止まったかのようにカチリツと何かが噛み合ったのを篠崎たちは感じた

『ファイアツ!!』

ケツアールに乗る4人の声が重なり、電磁ネットは発射された

指定したポイントで電磁ネットは止まり、真上から落ちてくるフィールドを解いたアリゲラ2体を受け止めた

なんとか地表に激突することを防いだ篠崎たちは喜んだが、そこへ橘とセリザワが渴を入れる

まだ、作戦は終わっていない、ただ最悪の結果を凌いただけで、アリゲラ2体はまだ生きている

『作戦をフェイズ2に移行!!』

『G I G!!』

ケツアールとNブースターはかつてのデータをもとに作られた電波を使い、アリゲラを誘導する作戦を開始した

ケツアールが目指すは電磁フィールドの発生装置を設置した陸上

……J-7地区

NブースターはG U Y Sオーシャンが迎撃準備を整えている海上だ

その頃、G U Y Sオーシャン指令本部ブルーウエイルでは昔を懐かしみながらホワイトホッドに乗り込んだ

青天のドッグファイト3―負思念体アリゲラ・超空洞人ヴオイド人登場―

アリゲラをそれぞれ誘導することに成功した護たち
負思念体のアリゲラに対し、以前の作戦が通用するかが不安要素はあつたが、

ここまですれば作戦を押し通せば今回の任務はひとまず終わることができる

場面はアリゲラの数と同じ、2つに分かれる

J―7地区へアリゲラを誘導している篠崎達ケツアールは、すでに最後の手段であるメテオールを使用しているため、マニユーバモードが切れるまでに、

J―7地区へアリゲラを誘導しなければならない

30年前より性能が向上したG U Y Sのマシンだが、それでもメテオールを使用しなければ、

苦戦を強いられる程にアリゲラは強く、通常時のケツアールより早く空を飛ぶ

そんな時、機体からアラートが鳴った

調べると、メテオールの制限時間が迫ってきていた

「三原!! J―7地区には!!」

『ギリギリ間に合いません!!』

篠崎はもう一度モニターに映る制限時間を見て、操縦桿を引いた

ケツアールはほぼ垂直に急上昇し、そのまま宙返り……アリゲラの背後を取った

「ここで倒すぞ!!」

このままではマニユーバモードが切れ、アリゲラが一方的に有利になる可能性が出てきたため、

篠崎はマニユーバモードが使える今、アリゲラを対処しようとしていた

ケツアールの機体上部にはすでにエネルギーを限界まで溜めたス

ペシウム光線の準備が完了していた

「スペシウム光線……ファイアーツ!!」

ケツアールから放たれたスペシウム光線はアリゲラの背中を直撃する……かに思えた

さすがにそう都合よくいかないようで、アリゲラに回避こそされなかったが、

急旋回によりスペシウム光線を直撃ではなく、右翼に当たる程度になっってしまった

しかし、かなりのダメージを与えることにはなつたようで、アリゲラはうまく飛ぶことができず、

陸上に降り立ち、スペシウム光線を放ち、クルーズモードへ移行してしまつたケツアールに、

首の付け根のパルス孔から電磁気光線を放つた

ケツアールは分離することでなんとか回避し、ウイングレットブラスターやバリアブルパルサーを放つが、

その硬い両翼に攻撃を防がれてしまつた

アリゲラが長い尾の先から追尾性の高いビームを2機に放つ

レッドスパロウとオオルリは回避しようと最大速度で振り切ろうとするが、

アリゲラの電磁気光線の追い打ちもかかる

もう2機には電磁気光線、そして追尾性のビームのどちらかしか回避する余裕はない

しかし、両方ともレッドスパロウとオオルリを墜落させるには十分な威力持っている

万事休す……そう思われた時、2機を追尾していたはずのビームが、赤い光弾によつて落とされ、

2機は電磁気光線を回避し、危機を脱出した

そして、篠崎たちはビームを落とすとした赤い光弾を放つた者の姿を見た

そこにいたのは赤いウルトラマンヒーロー、護の姿があつた

実はもしものことを考え、護はセリザワに先にJ-7地区に行くよ

うに言われていたのである

セリザワの予想は的中し、クルーの危機に護はウルトラマンヒーローへと変身したのであった

『サアアーッ!!』

構えを取り、アリゲラへ駆けだす護

いつものように懐に素早く入り込んだ護は連続で拳を叩きこもうとするのだが、

パルス孔から放たれる至近距離での電磁気光線に当たり、行動を止めてしまう

そこへ、アリゲラの両翼を逆に叩き込まれてしまう

このまま押し切られてしまうのか？そんな時、アリゲラの背中に何かが炸裂した

同時にアリゲラの前方へレッドスパロウとオオルリが飛んでいく

アリゲラの注意がそれた瞬間に護は右ストレートによる一撃を叩き込んだ

しかし、先ほどのように至近距離での攻撃は反撃に遭うため、護は一度距離を取り、

先ほどビームを落としたパワーショットをパルス孔目掛け放つが、防御されてしまった

そこへ旋回し戻ってきた2機がアリゲラに攻撃を加えた

強敵のアリゲラに対し数で有利を持っていた護たちだったが、

注意を引きすぎたのか、アリゲラは低い威力の攻撃をしてくる2機に再び、追尾性のビームを放った

レッドスパロウとオオルリに再び迫るアリゲラの攻撃、それは先ほどよりも鋭く2機を狙って来ていた

その頃、GUY Sオーシャンの待つ海域に向かっているNブースターに乗るヒロ達3人も、

アリゲラの追尾性ビームを回避するため、Nブースターのマニュー

バモードを起動しており、

円形のバリアーを形成するスパイラルフォールを使い、ブームを弾いたりして、順調に目標へ向かっていた

そして、もう少しで目標のポイントにつくところであった

しかし、篠崎たちと同じように後少しの所でマニューバモードが切れようとしていた

そこへアリゲラが高速で近づき、そのまま押しつぶさんとしていたその時、急にアリゲラが急停止し、高度を上昇させた

いったい何が起こったのか、ヒロ達が不思議に思っていると

『危機一髪だったな、大丈夫か?』

誰かがヒロ達に通信を取ってきた

「G U Y S オーシヤンか? ポイントまでまだ距離があつたはずだが……」

『何事にも最悪の事態つてのはある、こつちもそつちに向かつて移動しただけだ、ここまでの誘導に感謝する』

「しかし、いったいどうやってアリゲラを……」

そう思うセリザワとヒロは海面から発せられる何かに気づいた

「超音波でアリゲラに地形を誤認させたのか……!!」

『こつからはG U Y S オーシヤンの仕事だ……任せとけ、やつとは戦つたことがあるからな』

すると、Nブースターの正面から1機のホワイトホッドが向かつて来ていた

ホワイトホッドにはG U Y S J a p a n のオレンジ色の服とは違い青色の服を着たある男が乗っていた

その男の名は勇魚（イサナ） 洋（ヒロシ）……

30年前、ウルトラマンメビウスと当時のクルー達とアリゲラと戦つた男だ

「さあ……仕事辞めたとつつあんにわざわざ整備してもらつたんだ、頼むぜ」

勇魚はアリゲラを捕らえている超音波の壁に入ると同時にメテオールを使用、マニューバモードとなり、

一気にアリゲラに接近する

ビークバルカンやウイングレットブラスターを全弾命中させ、アリゲラにダメージを蓄積させていく

アリゲラもこのままやられまいと、反撃しようとするが、

超音波による地形誤認が邪魔をし、接近することすらできない

どう見ても勇魚のほうが優勢……しかしヒロとセリザワはなぜだかアリゲラがこの状態を望んでいるようにも見えた

セリザワはNブースターの通信を切ったのを確認してから、ヒロに準備をしておくように言った

そして、とどめと言わんばかりに、勇魚はアリゲラにスペシウムトライデントを発射しようとした

その時である、アリゲラはホワイトホッドが超音波の壁から出てきた瞬間を狙い、追尾性のビームを放った

アリゲラの反撃により、スペシウムトライデントを放つのをやめ、回避に専念する勇魚、

先ほどと同じように超音波の壁に入り、やり過ぎそうとするが……ビームどころか、アリゲラ自身も構わず超音波の壁に侵入してきた

「もうバレたのか……？」

勇魚がモニターを確認すると、アリゲラから発せられる超音波が、超音波の壁を作りだしている装置の出力を大きく超えたために、

壁がゆがんでしまっていた、壁なんていうものがないことがアリゲラにバレてしまったのだ

アリゲラはワイズ・クルージングで海面に対し、

低高度飛行を行い、いざというときには水中に潜れるようになるが、

アリゲラも低空飛行をし、パルス孔から電磁気光線を放つ

マニニューバモードにより、低高度飛行でも海面に触れずに回避を続けられるが、次第に追い詰められていく

その様子を見ていたヒロはNブースターのドアを開け、飛び降りたホワイトホッド内にメテオールの制限時間残り10秒のカウントダウンが響く

勇魚の脳裏には、30年前のある光景が映し出されていた
そして、その光景と同じく、アリゲラがビームを放ち、ホワイトホツ
トの機体上部に当たる……
巨大な水飛沫、水柱、そして霧が発生した

しかし、その霧の中から黒い鳥のような機体……ホワイトホツトが
飛び出した

それと同時に霧の中から青い粒子のブーメランがアリゲラの体表
面を切り裂いた

アリゲラが霧を追い抜くと、霧をふき飛ばし、アリゲラを追う青い
ウルトラマンヒーローが現れた

『ティアツ!!』

ヒロは高速で飛ぶアリゲラに話されないように飛んでいく
その様子をナンダから見ていたセリザワは微笑みながら

「どうやら、間に合ったみたいだな」

と言った、坂牧もヒロが間に合ったことに胸をなでおろした
そこへ勇魚からの通信が入った

『セリザワ元隊長……あれが?』

「ああ、ウルトラマンヒーローだ」

『そうか……あれが……』

勇魚は先ほどのことを思い出した

い、
メテオールの制限時間が過ぎ、クルーズモードへと移行してしま

る……その前に、
そして、その瞬間を狙ったかのようなアリゲラの攻撃が機体にあた

大きな青い粒子の円盤が、アリゲラのビームを防いでくれた

かつて、ウルトラマンメビウスが助けしてくれた記憶と重なって見えるほど、

その背中を見つめ、勇魚は霧の中を抜けた……

そして、勇魚はアリゲラを追うヒロの姿を見つめ、感謝の気持ち……

そしてまた助けられてしまったことに悔しさの気持ちを胸に抱いた

ヒロとアリゲラは空中戦闘……ドックファイトを続けていた

アリゲラは直線状で逃げ、後ろから着いてくるヒロの飛行速度を超音波で確かめていた

ヒロの飛行速度は自分と同じぐらい、もしくはそれより遅いと分かり、

アリゲラは左右、そして上下と急旋回をして振り切ろうとした

しかし、旋回をするたびにアリゲラとヒロの距離は縮まっていく

超音波で知る限り、ヒロは本当にぴったりとくっついて飛んでいるわけではなく、

アリゲラからすれば奇妙な飛び方をしていた

十分な距離に近づいたヒロは空中で素早く放てる光線技、エフェクト・ショットをチャージの動作をなくし、

さらに素早く何度も繰り出した

エフェクト・ショットがアリゲラに何発か命中し、アリゲラはエフェクト・ショットを回避するために、

位置をずらし、旋回を織り交ぜ行うが、そのたびに距離が縮まる

何故距離が縮まるのか、それはヒロの飛び方に秘密があった

確かに、ヒロの飛行速度はアリゲラよりも若干遅い、本来であれば引き離されるのが普通である

しかし、この速度の問題は戦闘機に使われる飛び方を駆使することで速度をもっと速めることができるのだ

ハイ・ヨー・ヨー、ロー・ヨー・ヨー、スライスバックやシャンデルなどを使いこなせるヒロにとって、

でたために飛ぶアリゲラは簡単に追いつける怪獣だった

アリゲラがヒロとのドッグファイトで勝つためには、ヒロに回避行動を取らせるしかなかった

アリゲラもそれに気付き、後ろから追ってくるヒロに追尾するビームを放つ、

まっすぐ向かってくるビームに対し、ヒロはエフェクト・シールドを海面に対しほぼ平行に張り、

ビームを防ぎ、その爆発した勢いも利用し加速した

とうとう、2体の距離があと少しで体に触れられるほどになった

しかし、接近すれば逆に攻撃は当てにくくなる、ヒロはそんなことをお構いなしでどんどん近づいていく

そして、近付かれたアリゲラがついに急減速をかけ、少し上昇したアリゲラの真下を高速で通り過ぎたヒロ、位置が逆になり速度の勝るアリゲラが有利な戦いが……

……起こることはなかった

ヒロはアリゲラが減速するその時を待っていたのだ

身体を垂直に起こし、身体の前にエフェクト・シールドを展開し、急減速……

そしてそのままエフェクト・シールドを足場に、急減速をし体制を整えていないアリゲラに向かい、飛んだ

ヒロはエフェクト・スラッガーを手につくと、高速で回転し、そのままアリゲラの身体を通り抜けた

ヒロは動きを停止させ、アリゲラのいる背後を振り向き、構える

アリゲラの身体は微塵も動かず、一瞬の間後、海へ自由落下していき、海面で爆発した

ヒロがアリゲラを倒した頃、護たちと戦っているアリゲラは、レッ

ドスパロウ、オオルリに追尾ビームを放った

護はどうにかしてビームを防ごうとしたが、電磁気光線を食らい、妨害されてしまう

『クツ……!!みんなが!!』

守りたいという護の心が身体を動かし、2機に右手を伸ばす……しかし、離れている2機に手が届くわけがなかった

しかし、焦る護とは反対に、篠崎たちは冷静であった

「行くぞ!!合わせる三原!!」

『G I G!!』

レッドスパロウとオオルリは急旋回し、それぞれお互いの機体に向かって加速した

このまま飛べば衝突する……しかし、交差することで衝突を避けた
そして、背後を狙い迫っていたビームはお互いに衝突し、相殺された

「シャツ!!成功だ!!」

そして、そのまま2機はアリゲラの背後から攻撃を加える

その様子を見た護は気持ちを切り替え、右腕を横に伸ばし、エネルギーを溜めた

作られたのは赤い粒子の球体……レッドパワー・ボム、しかしそれを投げず、拳にまとい、右手を腰に引いた

そのままアリゲラに向かい全力で駆ける

アリゲラは電磁気光線を放つが、護は身体に当たってもその足を止めず、アリゲラに近づく

アリゲラもその鋭利な翼で迎え撃つ……そして、アリゲラの翼が護の身体に直撃し、護の動きが止まった……

しかし、じりじりとアリゲラの身体が後ろへと押されていく

まだ護は止まってなどいなかったのだ

身体ごとアリゲラを左腕で押し、その速度はどんどんと加速してく
そして、アリゲラの胴体を防護していた両翼は勢いに押され、防御が外れた

護は身体を大きく捻り、アリゲラの無防備な身体に強烈なアッパー

を当てた

赤い衝撃が広がり、途端にアリゲラは爆発した

爆発の煙が晴れ、護のウルトラマンが姿を現した

すでに胸のカラータイマーは赤く点滅を始めていた

護は空に向けて大きくジャンプすると、そのまま飛び去って行った

G U Y S J a p a n 基地ではクゼが任務の成功に大喜びしていた

あまりのはしやぎ様で、

その激しきで机の上の真・アリゲラ書いてある札を張られたアリゲラのファイギュアが転がり落ちた

挙句の果てにそれを踏みつけてしまい、両翼が外れてしまった

「あああああ!!ごめん!!ごめん!!」

その様子を見ていた橘は乾いた笑いをしたあと、これから先のことを考えつつ、シリアルを皿に出し、

牛乳を入れずにポリポリと食べ始めた

アメイジングトリプルを撃てー負思念体デイガ ルーグ登場ー

ある日、護とクゼの二人は、クゼが暫くGUY Sを離れる間の代わりのアドバイザーを迎えに空港へと向かっていた

ハンドルを握り、車を運転する護は少しだけクゼを見て、クゼに話し掛けた

「もう良い位時間たったじゃないですか……そろそろ今日来るアドバイザーの人を教えてくださいても……」

「ん？駄目だよ、面白くないじゃないか。」

それに僕から聞かなくても空港まで後一時間、まあ楽しみしててよ」

護は本日三回目の問い掛けに待てとの答えに溜め息を吐いたしかし、時間が経てば経つほどに護の期待は膨らんでいった

とある家の一室……一見すれば何も無いかのように見える部屋に、

部屋の外側から声が掛けられた

「祐（ゆう）……？大丈夫……？」

……学校に行けるまで母さん達、待ってるからね」

部屋は静寂だけがあった

「じゃあ、テーブルにお金置いとくから、お腹が減ったらそれで何か勝手食べなさい、良い？」

ちよつとでも良いもの食べてね……？」

部屋は変わらず静寂だけがあった

「……じゃあ母さん達お仕事に行ってくるからね。」

祐、行ってきます」

二人分の足音が部屋から遠ざかり、再び行ってきますと声がすると、家の玄関のドアが開き、その後閉じられた

その数分後、何も無いと思われた部屋に変化があった

ベットの掛け布団が床に落ち、そこには頬を自分の涙で濡らした男の子がいた

祐と呼ばれた男の子は部屋の鍵を開け、リビングに出ると、置いてあるお金に悲しみを持った目を見た後、

朝食にインスタントラーメンを作り始めた

数分後、具材の何も無いラーメンが出来上がった

祐は出来たラーメンをリビングの机に持っていくと両手を合わせた

「いただきます」

そう言い、ラーメンを食べようとした時、祐は机にお金以外に何か置いてあることに気づいた

そこには祐の通う高校のクラスメイト達からの手紙だった

それも一枚二枚ではなく、クラスメイト一人一人からの手紙だった
「どうせ先生が書かせた手紙だろ……？何で俺を虐める奴らが手紙なんか書くんだよ」

祐はその後、ラーメンを食べ終わると洗い物をし、また部屋のベットに潜り込むと、急にベットを叩き始めた

「クソッ!!クソッ!!何で俺がこんな目に遭わなきゃいけないんだよ!!」

何で俺なんだよ!!」

そして祐は再び涙を流し始め、一頻り泣くと眠りに着いていた……

黒い霧が直ぐ側に近づいていたとしても、その心の傷を癒すために深く眠っていた

空港まで車で移動していた護だったが、何かを感じ、急ブレーキを掛けた

何も無い状態での急ブレーキにクゼがどうして急にブレーキを掛けたかを聞くが、護はある方向を向いたまま動かない

「護君、どうしたの本当に……」

クゼがそう言った時である

「来ます!!伏せて!!」

護がクゼに覆い被さると、直ぐ側にあるビルが爆発した
爆発が収まると、護とクゼは車から降りた

車から降りた二人は、ビルを壊したものの正体を見た

「デイガルーグッ!?!」

そこには宇宙量子怪獣デイガルーグがいた

宇宙量子怪獣デイガルーグは30年前に出現した怪獣であり、クゼはその性質を知っている

そしてクゼの想像通り、直ぐ側にもう二体のデイガルーグが、街を破壊しようとしていた

「クゼさんは避難誘導をお願いします!!」

クゼにそう言い、駆け出そうとする護にクゼは手を掴み引き留める
「君はどうするつもりだ!!」

護は振り返り……

「GUY Sとして、人を護りに」

護はクゼの手を振り払い、デイガルーグに駆けていった

クゼから見えなくなった場所で、護はフュージョミツシオンを手に持ち、考えを巡らせていた

『あの状態のデイガルーグには攻撃は通用しない……けど、このままじゃ皆が来る前に人が……!!』

護は空にフュージョミツシオンを掲げ、フュージョミツシオンが赤く輝くと、

赤いウルトラマンヒーローへと変身した

ヒーローはデイガルーグの前に移動すると、構えを取った

三体のデイガルーグは、突然現れたヒーローに驚きながらも、ヒーローに攻撃を始めた

三体から放たれる火炎球をヒーローは、上空に弾き返した

しかし、三体居るとは言え、ヒーローは全く攻撃をしようとしな
次第に劣勢になっていき、遂には弾く前に火炎球をその身体に喰ら
い始めた

胸のカラータイマーが点滅を始めた

そして遂に……ヒーローは倒れた……

地に伏せ、カラータイマーの光は激しい点滅から、完全に光が失われた

ヒーローの身体は粒子となり消えていった

それから直ぐG U Y Sは到着した

そこには報告されていたデイガルーグの姿はなく、また、赤いウルトラマンヒーローの姿もなかった

アメイジングトリプルを撃て2―負思念体デイガ
ル―グ登場―

デイガル―グが出現してから数時間が経った
G U Y S 基地では重い空気が漂っていた……

それもそのはず……現在G U Y S は、怪獣の出現に間に合うどころ
か、

ウルトラマンを助けられない役立たずとさえ言われていた

「ちくしょうッ!!」

篠崎が自分の机を蹴り、怒鳴り声を上げた

その様子を見て、橘は席から立ち上がり、篠崎の傍に近寄り注意を
した

「篠崎、いい加減何かある度に物に当たるのは止めろ」

「でも橘隊長!!」

「苛立つのは分かるが……その怒りで人が救えると思うか……?」

橘の言葉で篠崎は俯き、心の中で怒りを鎮め、自分の席に座った

次に橘は、デイガル―グのドキュメントを調べている三原の傍に近
寄った

「三原くん、何か分かったか?」

三原は頭を軽く押さえ、デイガル―グのドキュメントを調べ、分
かったことについて説明をし始めた

「えっと……宇宙量子怪獣デイガル―グはウルトラマンメビウスの居
た30年前に出現した怪獣です……

体長は54メートル……体重は3万トンで……あの……」

「どうしたんだ?」

「あの……橘隊長はシユレディンガーの猫って話をご存知ですか?」

「どうした急に?えっと……中が見えない箱の中に猫を入れて、そこ
にガス出る装置も一緒に入れて、

猫がガスで死ぬか死なないか分からないって話だったか?」

「えっと、全然違います……」

自分が知っていた情報が間違っていることに若干の気まずさを感じながら、

橘は三原がディスプレイに出した映像を見た

そこには量子力学―シユレディンガーの猫とは―と書かれていた
「長くなるか？」

「……やっぱりやめます、デイガルグのことだけ説明しますね」

ディスプレイにデイガルグのドキュメントが表示され、三原は量子力学を知らない人でも分かるように、

デイガルグのことを説明し始めた

「今回現れたデイガルグは3体居ましたが、その本当に3体存在しているわけではなく、

3体で1体の実体を持っていて3分の1ずつ本物という確率論的存在の怪獣なんです」

橘は首をかしげた

「えっと……ただ攻撃しても意味がないとだけ理解してもらえば……」

三原は30年前、デイガルグが出現した時の映像を橘に見せた

そこにはG U Y S マシンの攻撃がデイガルグをすり抜けている映像が映し出されていた

「攻撃しても意味がない……そんな怪獣をどうやって倒したんだ？」

「ドキュメントには、出現した3体のデイガルグを同時に攻撃すると、

デイガルグが1体に収縮すると残っています……しかし、複数の目標を同時に攻撃することは不可能です……」

出来たのは、当時G U Y S J a p a n の隊員……イカルガ
ジョージさんだけです」

「イカルガ ジョージ……？あつ……!!」

橘が何かに気づいた時、指令室の扉が開けられ、そこからクゼテツペイが現れた

『クゼさん!!』

「クゼさん、ご無事で何よりです!!」

そう言い、橘がクゼに近寄る

クゼは何も言わず、ただ小さく頭を下げた

「護さんは一緒じゃないんですか……?」

ヒロがクゼに詰め寄ると、クゼは護のことについて話し始めた

赤いウルトラマンヒーローが消え、デイガルーグも消えた後、クゼは護を探していた

「護くんツ!!どこだーツ!!」

クゼは今の自分で出せる限界の音量で護を呼んでいた

しかし、帰ってくる声はなく、ただ辺り一面、火の付いた建物の残骸が転がっていた

『護君……一体どこにいるんだ……』

探すこと数分……クゼは瓦礫の上で横たわる護の姿を見つけた

クゼが急いで近付くと、護の身体は大変なことになっていた

「酷い熱傷だ……!!」

護の体は大部分がやけどを負っていた、その酷さからクゼは一瞬だけパニックになるが、

すぐに冷静になり、医者としての責務を果たそうと動いた

クゼは近場に来ていた救助隊と共に護を担送した

「それで護さんは無事なんですかッ!」

ヒロと坂牧がクゼに護の安否を聞くと、クゼは暗い表情のままだった

「まさか……」

クルー全員が固唾を呑んだ……

しかし、クゼはほほ笑むと

「いや、無事だよ……護君は幸い軽度の火傷だったんだ」

と言った

その言葉に坂牧以外のクルー全員がほっとした

クゼは床に置いていた手提げのバックを取り、橘に渡した

「それとデイガルーグのついてですけど……これを坂牧さん以外着て、すぐに第2グラウンドに行ってください」

「あ、そうですよクゼさん!!イカルガさんを迎え行かなければ……!!」

橘がクゼにそういうと、クゼは手で落ち着いてとジェスチャーした
「だから第2グラウンドに行ってほしいんです!!ジョージさん待っているんですから!!」

イカルガ ジョージと言う名を聞いて、垣山が目を大きく開いて驚いた

「スペインリーグの得点王のイカルガ ジョージが来ているのか?!?!」

驚く垣山と違い、屋久島は首を傾げた

「イカルガ ジョージ……って誰?」

「知らないのか?元GUYSKルーで現役時代スペインリーグで毎年得点王だったサッカー選手だぜ?」

確か今はどっかのコーチやってるはずだけだな……」

屋久島に簡単な説明をした篠崎は橘がもらったバックの口の中を見たら

「……おいおい、正気かよ」

「どうしたのよ?」

続いて屋久島がバックの中身から何かを一つ取り出した

緑の蛍光色のそれは無数の穴が開いており、広げると数字が大きく書かれていた

誰がどう見てもそれはスポーツのチーム分けに使われるギプスだった

第2グラウンドではサッカーボールをコーナーキックの地点から

角のゴールポストに当て、

ゴールを決めているイカルガ ジョージの姿があった

そこへ、ギプスを付けずに橘達がやってきた

「イカルガさん!!」

橘がイカルガへ近付くと、イカルガは足元にあつたボールを、橘の胸めがけて軽く蹴った

緩い放物線を描いたボールを橘は慌てながらもキャッチした

すると、甲高いホイッスルの音が響いた

「ハンドだ」

イカルガは橘を指さしそう言った

「イカルガさん!! デイガルーグが現れていることはご存知ですよね!?!」

「それがどうしたんだ? ……まさかとは思うが……」

歳取った俺にデイノゾールを倒すのに銃を握れって言うんじゃないだろうな?」

橘は凶星を突かれるが、引き下がらず、イカルガに頼んだ

「お願いしますイカルガさん!! 協力してください!!」

メテオールショットのアメイジングトリプルを扱えるのはイカルガさんだけなんです!!」

「じゃあ俺がいなかったらどうするんだ隊長さん?

助けを待つ人達に言うかい? イカルガ ジョージさんがいないから倒せませんか?」

イカルガは逆に橘に近付き、睨みながら言った

「怪獣を倒すのはGUY'Sの責任だ、今のお前たちが戦えないとか弱音を吐くんじゃねえ、

いいからさっさとギプスを付けろ」

イカルガは橘から離れ、置いてあつたホワイトボードに何かを書き始めた

一方その頃、指令室の方では坂牧がクゼに護のことを聞いていた
「クゼさん、護さんのこと……本当ですか？」

クゼは先ほどの微笑みから表情を変えていた
その顔は暗い表情ではなく、疑問に満ちたものだ

「いや、本当だよ。」

護君は早ければ数日もかからず帰ってこれるよ」

「そうですか……」

「ちよつと飲み物を持ってくるよ、坂牧さんは何か欲しいものは？」

クゼは立ち上がり、飲み物を取りに指令室を出ようとする

坂牧はそんなクゼに対し、言った

「クゼさん……護さんのことは他の人には内緒にしてあげて下さい」

坂牧は座ったまま頭を下げた

「お願いします」

クゼは小さく笑い

「大丈夫だよ、坂牧さんが言ったことは内緒にしとくよ。」

大事な人のことは気になるものだからね」

そう言い、クゼは指令室を出た

指令室を出たクゼは壁にもたれかかった

「やっぱり護君は……ミライ君と同じ……」

『護君の身体は確かに重度のやけどを負っていた……それも生命に關
わるようなもの……』

けど、救助隊が来た時にはすでに軽度の火傷ほどに治っていた。

そんなことは人間ではありえない……

ありえるとしたらウルトラマンヒーローが護君の身体を治す何か
をしたか……もしくは……』

クゼは目を瞑ると、そこにはある光景が映っていた

30年という年が経つても色褪せない、1人の仲間のことを……

「護君……君はウルトラマンなのか……？」

第2グラウンドではイカルガ、橘、篠崎、垣山、屋久島、三原の6人がサッカーをしていた

ギプスの色で2つのチームに分けられているらしく、

緑のギプスをイカルガ、橘、三原が着用し、赤のギプスを篠崎、垣山、屋久島が着用していた

「なんでこんな緊急時にサッカーなんてッ!!」

橘が愚痴をこぼしながらボールを篠崎にとられないように足でコントロールしていた

そんな橘にイカルガが声を飛ばす

「隊長さん!!きつさとパスしろ!!」

そう言うイカルガはあまり積極的にボールに絡まず、指示を飛ばすだけであった

そして、イカルガはある人物を見つめていた

「朱里ちゃん、イカルガさんマーク!!」

そこにはイカルガのように指示を飛ばす垣山の姿があった

サッカーを始めてから45分……イカルガがホイッスルを吹き、サッカーは終わった

イカルガ以外が肩で呼吸をしていた

「よし、分かった」

そう言うイカルガに橘が呼吸を整えた後、質問をした

「何が、分かったんですか?」

イカルガは垣山に近付き、肩に両手を置き、言った

「デイガルーグを倒せるのはお前だけだぜ、真司」

翌日……デイガルーグ出現のためGUYSは緊急出動した

アメイジングトリプルを撃て3―負思念体デイガ
ルーグ搭乗―

イカルガが橘達とサッカーをした日の夜……

橘達や殆どの作業員が寝静まっている深夜……GUYスクールの
装備を保管している保管庫に人影があった

その人影は、明りが落とされ、暗い保管庫を迷いなく装備の前まで
来ると、

ゆつくりと……まるで懐かしむようにヘルメットに触れた

しかし、その人影の背後から……まるで鞭のような触腕がその人影
の肩に触れようとした

「……驚かしたいなら、もうちよつと静かに動けよ……アミーゴ」

人影……イカルガ ジョージが振り返らずそう言うのと触腕は離れ、
明りが点いた……照明のスイッチの傍に立っていたのはグドンの
ファイギュアを持ったクゼ テツペイであった

「ちえー……ジョージさんったら僕が驚かそうとしていた事気づいて
たのかあ……」

「遊んでいる場合かよ、頼んできたのはちやんとできてるのか？」

「勿論ですよ、でも良いんですか？」

「……まあ、どうにかなるだろ、そうなるように頭を使ったからな。

ケセラセラ（なんとかなる）ってやつだ。

明日も早い……前と同じならデイガルーグは明日に現れる……
じゃあお休み」

「あ……ジョージさん!!」

クゼに呼び止められ、イカルガは振り返った

「うん？」

「……ケ・ドウエルマス・ビエン」

お休みなさい……とクゼがイカルガに言うと、イカルガは口元に笑
顔を見せた

「それ俺の」

そう言い、イカルガは自室に戻った

その頃、護が病院のベッドで目を覚ました

身体を起こし、窓を見ると、そこにはきれいな夜空が見えた

月明かりを頼りに周りを見渡すと、ベッドの傍にあるサイドデスクに何かがあるのが見えた

電気スタンドのスイッチを点けるとそこには便箋が置いてあった
便箋を開き、中に入ってあった手紙を読む

『日野護くんへ』

この手紙を読める位には元気になって良かった。

君が居る病院は、前に君が居た僕の病院です。

本当は君が倒れていた場所の近くの病院に、君を寝かせていたかったけど、

君にとつては都合が悪いと思って僕の病院に勝手に連れてきました。ごめんなさい。

恐らく、君が倒れた次の日にデイガルーグはまた現れます。

その時、君が目を覚ましていたら、戦いに行ってしまうと思います。

その時は部屋の収納に持ち物を仕舞ってあるから、取っていつでもください。

けど、医者である僕からは、あまり無茶をしないでくれると嬉しいです。

クゼ テツペイより

追伸、窓から出ると警報が鳴るので、ナースステーションで一声かけて出入り口から出て下さい。』

護は手紙の内容で少し笑うと、乾いた喉を潤しに自販機へと向かった

翌日の朝……G U Y S 基地に警報が鳴った

市内に再び、デイガルーグが現れたのである

「よし、作戦は確認する!! N ブースターは垣山を乗せ目標ポイントまで移動!!」

レッドスパロウとオオルリは垣山とN ブースターを援護しろ!!

デイガルーグを……絶対に逃がすな!! G U Y S !! s a l l y g
o !!」

『G I G I !!』

応答の音量から、橘はクルー全員のやる気は十分感じた

「よっしゃあああッ!! 今度こそ倒してやるぜッ!!」

ただ一人はやる気に充ち溢れすぎだとも感じたが、

橘は篠崎が本当にやる気に満ちている時、それが空回るような人間であることを知っている

橘は腕を軽く振りまわし駆け足で指令室を出ていく篠崎にほほ笑んだ……しかし

「イカルガさん、この作戦……垣山くんはアメイジングトリプルを撃てるようになったんですか?」

そう、デイガルーグを倒すためには3体のデイガルーグを同時に攻撃をしなければならぬ

その為、イカルガは昨日サッカーを終えた後、垣山を連れて射撃場でメテオールショットの練習をしていた

「昨日は申請できるだけのアメイジングトリプルを撃たせたが……一回も決まらなかったな。」

一番良くても2つの的に当たった程度で精度も低い」

「じゃあデイガルーグはどうするんですか!?!」

「大丈夫だ、必ず成功する」

イカルガは橘の顔を見つめそう断言した

イカルガのその自信に満ち溢れた顔に橘は不安を残しながらも、一応信じてみることにした

「じゃ、アスタ・プロント（またな）」

そう言い、イカルガは指令室から出て行こうとした

「どこ行くんです?」

「ちよつとな……すぐ戻るぜ」

そう言い、イカルガはどこかへ向かった

デイガルーグのいる市街地に到着した篠崎達……

Nブースターの後部座席に乗ってる垣山は手のひらに人の字を書いて呑み込んでいた

助手席に座っている坂牧は、その緊張している心を見たのか、垣山に話しかけた

「緊張してますか?」

「ん?……ははっ、そりやね……みんなにはまだ言っていないけどね、昨日の練習でアメイジングトリプルを成功させてないんだよね……」

その告白でNブースターを操縦しているヒロが身体が浮くほどに吃驚した

「アメイジングトリプル撃てないんですかツ!」

「ははは……頼りないお父さんでごめん……」

ヒロは一瞬だけ考え、目的地……3体のディノゾールの中心地点に着陸し、

垣山法を振り返り、言った

「……えっと、今はGUY Sとして怪獣から人々を守らなきゃいけません。

垣山さん、一発勝負で成功させてください……成功するって信じてます」

「……がんばります」

ドアを開け、Nブースターから降車した

垣山は外していたGUY Sメットを装着した

そしてメテオールショットにメモリーディスプレイを差し込み、ロックを解除した

垣山は昨日、イカルガに言われていた事を思い出していた

『いいか真司、デイガルグを一体にするにはただ同時に攻撃するだけじゃ無理だ。』

やつら三体の光る角に同時に弾を命中させるんだ。

大丈夫だ、“お前ならアメイジングトリプルは撃てる”』

垣山は周りを見渡した……Nブースターが着陸し、注目を集めたため、3体のデイガルグが垣山の方を向いていた

メテオールショットを上空へ向けて構え、目を閉じる

待機しているクルー全員が、垣山がトリガーを引くのを待ち、緊張の瞬間だ

『今ッ!!』

心の中で呟き、目を見開いて指に力を込めた

「アメイジングトリプルッ!!」

メテオールショットの3つの銃口から光弾が発射され、その弾は……

——見事三体の角に命中した……——

離れた場所からデイガルグを観察していた三原が橘へ状況を報告した

「デイガルグ!!1体に収縮していきます!!」

宇宙量子怪獣デイガルグは、3体の光る角を正確に同時に攻撃をすることにより、

波動関数の収縮が起き、その数を1体にするのできるのだ

3体のデイガルグの内、2体がまるで粒子のように分解され、残った1体に集まって行く

『垣山の撤退完了次第、1体になったデイガルグを集中攻撃!!攻撃

開始と同時にメテオールを解禁する!!』

『G I G!!』

『こちら朝日、レッドスパロウの着陸可能なポイントがデイガルーグの攻撃で使用不可です』

『了解した、垣山はそのままNブースターに搭乗、デイガルーグと距離を取った後、マケット怪獣を使用準備、

坂牧は作戦通りに離れた位置からのポイント指定!!』

『G I G!!』

ヒロ、坂牧、垣山が橘から言われた作戦を了承し、

篠崎と三原がメテオールのロック解除カバーを開け、待機した

「ねえ、カ、1人でマニユーバモードでの操縦なんてできるの?」

『何言ってるんだ、出来るに決まってるんだろ?俺はG U Y Sの中で一番操縦が上手な男だぜ?』

「はいはい、自信たっぷりなのは良いけど、護みたいに落っこちないでよね」

『おい!!落ちるってなんだ落ちるって!!』

『デイガルーグ!!波動係数収縮が終了します!!』

『お父さんは!!』

篠崎がNブースターの方を見ると、ヒロ達はすでに垣山を乗せ、飛び立っていた

その時、デイガルーグが完全に1体になり、垣山の乗っているNブースター目掛け、火球を放ち始めた

「くそっ……!!ヒロ達を狙ってやがる!!隊長!!ちよつと早めにメテオール……行くぜ!!」

『よし、メテオール解禁!!』

『G I G!!』

レッドスパロウ、オオルリ、Nブースターが瞬間的にマニユーバモードへ移行し、

その機体から金色の粒子があふれ出る

「スパイラルウォールツ!!」

Nブースターを狙った火球が装甲に当たる直前、Nブースターはバ

リアを張ると同時に高速回転し、

火球を上空高くへとはじき返した

しかし、それでもNブースターを執拗に狙い、

火球を放とうとするデイガルーグの視線をレッドスパロウとオオ
ルリが遮った

デイガルーグは2機をまとめて片付けようと火球を放った

放たれた火球は2機を纏めて塵1つ残さず消してしまった

デイガルーグは逃げてしまったNブースターを探すために周りを
見渡した

前方にはなにもいないようで、後方を見ると

「当たりだぜ」

そこには既にデイガルーグ目掛け、スペシウム弾頭を発射したレ
ッドスパロウとオオルリが居た

デイガルーグは驚く暇も与えられず、スペシウム弾頭の爆発に吞ま
れた

「虚像を使うやつが、虚像に騙される……滑稽だぜ。

一応警戒しとけ、イカルガさんたち先輩らもスペシウム弾頭撃つて
倒せなかったらしい」

『GIG』

篠崎が各隊員に注意を促し、ヒロ達はこの隙に、離れた場所に移動
した

爆風が晴れると、そこにはダメージを負ったようには見えないデイ
ガルーグの姿があった

その頃、護はダークエフェクトの気配を感じ取り、病院を出て現場
に着いていた

たった今、デイガルーグがレッドスパロウとオオルリのフロントムアビエイション……

つまりはただの残像に騙され、スペシウム弾頭を喰らったところだ
「何かあるまで、待機か……」

護はすぐには作戦に参加せず、少し離れたところから様子を見ていた

「ん……？」

すると、護から少し離れた場所をバイクが走り去って行った

「あれは……」

護が考えていると、デイガルーグの方で何か動き起きたらしく、周りが騒がしくなった

ヒロはデイガルーグから離れた場所に着陸し、坂牧と垣山を下ろした

坂牧はポインタスコープを操作し、負思念体の弱点であるダークエフェクトの固まっている場所を指定した

指定された場所はたった1か所、デイガルーグの1番目立つ、光る角である

垣山は専用ホルダーからゼットンのマケットを取りだすと、メモリーディスプレイに装着し、構えた

「こちら垣山!!準備完了!!」

『まだゼットン出さないでよね……ッ!!今混戦になったら角に狙いが付け辛くなる!!』

『朱里!!早くしないと制限時間が!!』

屋久島が機体のモニターを見ると、

そこにはさつき使用したばかりだと思っていたマニニューバモードの残り時間が、あと30秒も無いと伝えていた

メテオールが切れるその前に倒さなければならぬ……

そう思った時、篠崎から通信が入った

『オオルリ!!聞こえるか!!』

「なによ力!!」

『残りのスペシウム弾頭弾……1、2の3で奴の角に打ち込むぞ!!』

「正気ッ!？」

『いいからタイミング合わせろ!!どうせこのままじゃ時間切れだ!!いくぞ!!』

レッドスパロウとオオルリはマニュアルモードによる変則軌道でデイガルグの攻撃をよけ続ける

「行くぞ!!1……2の……!!」

『3!!』

3の声と同時に2機はデイガルグの角の高さと水平にミサイル発射口を合わせ静止し、

残ったペシウム弾頭弾計4発が放たれ、途中でミサイル同士がぶつかる事無くデイガルグの角に命中し、

デイガルグの角は根元から割れ、デイガルグは倒れた

『3……2……1……0』

デイガルグが倒れると同時に、3機のメテオール使用制限、1分30秒が経った

デイガルグが倒れた事、そして機械だよりだとは言え、

難易度の高い1つの目標に複数のミサイルを同時に当てると言う、難しさで言うならば、

アメイジングトリプルにも劣らない行為をやったのけたのだ

それが、一瞬の隙を篠崎達に作ってしまった

『デイガルグはまだ消えてません!!』

目の見えない坂牧がいち早く気付き、慌てて通信をするが、伝えるには遅く、

デイガルグは倒れたまま口から火球を吐き出していた

垣山は大声を出した坂牧の方に一瞬気を取られ、ハツと振り向きな

おし、遅れて叫んだ

「みんなッ!!」

火球は回避行動を取った2機の片翼を損傷させ、機体のコントロールの取れなくなった

橘は状況がかなり不味いと判断し、撤退を命じた

『両機とも早く撤退するんだ!!』

撤退を命令する橘だったが、通信で両機から制御が出来ないと答えが返ってくる

けたたましく警報が鳴り響く中、篠崎と三原達は必死に機体を制御していた

「このままじゃ……!!墜落する!?!」

警報の響くコクピットの中で、叫び声が響いた

護のジレンマー―不思念体デイガルーグ登場―

デイガルーグの火球を直撃し、煙を出しながら高度を落としていく
レッドスパロウとオオルリの2機……

このままでは最悪の事態が起きかねない……

最悪の事態……それがもし、篠崎達の負傷だとすれば、

それは篠崎たちが機体から脱出すれば良いだけの話である。

しかし、緊急脱出に使用するレバーではなく、必死に操縦管を握る
篠崎たちには、

自分たちの身よりも大事なものが、降下する機体のキャノピーから
見えている……

そこには、ビルや住宅などの建物が密集していた。

そう、ここは市街地であり、人が多く存在する……

この何十年で怪物が何度も出現していた為、民間人の避難は迅速に
進められるようになってはいるが、

逃げ遅れている人が居る可能性が無いわけではなく、

さらに、脱出した後、機体が軌道を変え、避難している大勢の人々
向かって落下し始めるかもしれない……

それは最悪の事態としか言いようがない……

そして、そんな最悪な事態を避けるために、篠崎たちは自分たちの
身の危険を顧みず、操縦管を握っている

ついに2機が大きくバランスを崩し、地面に向け急速に落下を始め
た。

しかし、2機が地面に激突することはなかった……

なぜなら、地面に激突する前に赤いウルトラマンヒーロー……護が
2機を両手で受け止めたからである。

「ヒーロー……すまねえ、助かった」

篠崎がそう言うと、護は2機を建物から離れた場所に2機を下し

た。

2機を下した後、護はデイガルグの方を見ると、あれほどの攻撃を食らいながら、

まるで時間が巻き戻ったかの様に、活発に動くデイガルグが居た。

先ほど篠崎たちが壊した角もいつの間にか元に戻っている。

しかし、護が構えると、デイガルグはまた消えて行ってしまった。

護は、しばらくあたりを見渡した後、警戒しているからなのか、放心した様子で、

カラータイマーが点滅するまでその場に立ち尽くしていた。

レッドスパロウとオオルリ2機の回収作業が終了し、G U Y S 基地へと帰還した篠崎たち……

今回は篠崎だけではなく、他の隊員も愚痴を零していた。

特に、今回の作戦で重要な役割を任せられていた垣山は、机に突っ伏している状態だ。

ダークエフエクトそのものを見ることができない坂牧は、橘にデイガルグについて報告をしていた。

「篠崎さん達が最後に攻撃した時、確かにダークエフエクトは霧散し、倒されていました」

「じゃあ、なんで倒した怪獣が攻撃してきたんだよ!!」

そのただ淡々と出された報告に、かつてない程苛立っていた篠崎が大声をあげた

「篠崎っ!!」

橘は、坂牧に八つ当たりをする篠崎に一喝した

篠崎は手で顔を覆った後、坂牧に謝罪した

「……すまねえ、本当に」

「大丈夫ですよ、気持ちわかりますから……ただ、頭を少し冷やして来てください。」

今私たちは、なぜディガルーグが倒されていなかったか、これ以上の被害が出る前に解明しなければならぬんですから」
G U Y Sクルーとしてだけではなく、自分よりも年下の坂牧にそう
言われ、

篠崎は橋に断りを入れて、指令室を出た。

篠崎が指令室を出た時、屋久島が1つ疑問覚えた。

「そう言えば、あの2人は？」

あの2人とは、護とヒロのことであり、回収作業が終わり、基地に
帰還しだい、

セリザワに連れられどこかに行っていた。

セリザワに連れられ人通りもなく、監視用のカメラもない通路に連
れてきた護たち……

セリザワは護に向き合うと、詰め寄った

「なぜもっと早く変身しなかった？」

護は詰め寄られたからか、セリザワから視線を外し、ヒロの方を見
る

しかし、ヒロも護に理由を聞いた

「僕も気になってたんです……」

僕も変身できない状況だったとはいえ、護さんに任せていたのも悪
いですが……

どうしてあの時に変身しなかったんですか？

助かったからよかったですけど、もし……」

助からなかったら、そう言う前に護が拳を強く握りしめ、悔しげに
言った

「ごめん、これは俺のせいだ」

そう言う護にセリザワは、さらに問いかける

「護、今の君が、彼らを助ける瞬間を誤るとは考えられない……何が
あった？」

護は俯き、言った

「あの時、俺には聞こえたんだ……助けを呼ぶ声が……」

デイガルグの角にスペシウム弾頭弾が命中した時、護はもしものことを考え、

いつでも変身できるようにフュージョミッションを手に持って、様子を伺っていた。

そんな時、護の元に声が響いた

『誰か……助け……』

護は直感的に振り返り、遠くの建物を見つめた

前に城南（じょうなん）光（ひかる）を助けた時と似ている感覚を感じた護は、

助けを求める声の元へ駆けだそうとする

しかし、護のメモリーディスプレイから坂牧の声が聞こえる

『デイガルグはまだ消えてません!!』

その声で足を止め、デイガルグの方へと振り返る

そこには今にもレッドスパロウとオオルリに攻撃をしようとしているデイガルグの姿があった

護はすぐにウルトラマンヒーローになろうとするが、再び助けを呼ぶ声が聞こえ、変身に躊躇してしまう。

そして、その一瞬の躊躇により、レッドスパロウとオオルリはデイガルグの攻撃を受けてしまった

護はコントロールを失った2機を見て、ようやく変身した

セリザワは護の言った事最後まで聞き終え、護にそうかと一言だけ言った

「そうかって……」

「護、君はウルトラマン、ウルトラ族がどう言う存在だと考えている……？」

元々君はウルトラ族ではなく、人間だ……

そんな君が、ウルトラマンがまるで神のように思えてしまうかもしれないが、

ウルトラマンは決して神ではない、救えなかった命だってあった。私たちは決してすべての命は救えない、1つでも多くの命を救うためにこの力を使うことしかできない」

護はセリザワの言葉を聞いて、表情を曇らせる

「でも……俺は、守りたいです……1人でも多くじゃなくて……

1人も残さず、守りたいんです!!」

セリザワはそれを聞き……

「護、君には仲間とパートナーが居る、そのことは覚えておけ」

と、一言だけ言い残し、その場を立ち去った

護はウルトラ族になったばかりで、やはりおこがましいことかと思えた

しかし、そばにいるヒロ……そして立ち去ったセリザワの顔は喜びだった

クルー全員は指令室に召集との通信が掛り、全員が指令室に揃った

日野護、朝日ヒロ、篠崎力、垣山真司、三原愛、屋久島樹里、橘薫、

セリザワ カズヤ、

そしてイカルガ ジョージの9人である

「皆を呼んだのは他にもない、デイガルーグが倒されてなかった理由が分かった」

クルー達が驚くのを橘は時間が惜しいため、置いておき映像を大型ディスプレイに映し出す

「原理は話すと長くなる、掻い摘んで説明を……三原」

「G I G」

映像を出している三原は出されている映像の説明をする

「今映像にあるのは過去に使用されたメテオール……マグネリウム・メデイカライザーです。」

このメテオールはかつてウルトラ警備隊がウルトラセブンに使用したエネルギー光線を元に制作され、

レジストコード、グローザムに行動不能にされたウルトラマンメビウスを活動可能状態にしました。」

三原は映像を切り替え、今度はデイガルーグを倒した時の映像を映し出した

「そして、デイガルーグを倒した時の映像です」

クルー達は映像を目を皿にして見るが、何も変わった点は見つからない

倒したはずのデイガルーグが倒されていないかつたというのを除けばの話だが……

しかし、イカルガは映像の異変に気付いた

「何かが一瞬落ちてきているな」

その言葉に三原は思わず口を両手で押さえ、言った

「イカルガさんすごい……!!」

そうです、この煙から現れる前の映像を止めるとわかります」

映像を巻き戻し、異変のあるシーンで停止をかけると、

そこには空から黒い線状の光線が降ってきているのがわかる

「これを精密スキャンしたところ、

機械で解析できるほどに濃縮されたダークエフェクト……だと推測されました。」

そして、その用途は性質はマグネリウム・メデイカライザーと同じ、発信源は宇宙からでその距離は計測不能……つまり」

「つまりは倒される前に再生させたんだ……超空洞人ヴオイド人がね」

三原が結論を言う前に橘が結論を言ってしまう、三原は頬を膨らます

「じゃあどうすればデイガルーグは倒せるんだ？再生させられちゃど

うしようもないだろ？」

頭がなぜか水で濡れている篠崎は文字通り頭が冷えたのか、そう質問すると、

三原がディスプレイの映像を変え、解説をする

「はい、対怪獣対策班が考えた作戦で、デイガルグに対する唯一の作戦です。

簡単に言うと、倒す直前にメテオール、

キャプチャーキューブでデイガルグをエネルギー光線から防ぎ、

キャプチャーキューブの内面反射の性質を使い、攻撃……倒すという作戦です」

「なるほど、復活光線を防いで、防いでる間に倒せば……」

「しかし、問題が1つ……」

オオルリ、レッドスパロウが緊急修理中で搭乗負荷、使えるのはNブースターのみ……

不思念体の怪獣はどこに出現するか判断できないので予め火器を設置することもできません。

Nブースターだけでは火力はぎりぎり……そう判断されました。

この問題をどうにかしないと、デイガルグは倒せません……ただ、逆にいえば……」

「火力さえ補えればデイガルグは倒せるということだ」

またしても橘は三原の言おうとした結論を先に言ってしまう

三原は流石怒ったのか、橘に言った

「隊長……う……そこまでおひとりで言いたいなら解決策を言ってください
いい」

「え？」

その提案はその場にいるクルー全員が大きく頷いた。

結局その日は丸一日火力不足を補うための作戦会議を行った。

旧、G U Y S J a p a n 基地……

そこには右肩に穴の開いた作業着を着た男が1人、目の前にある何かを見ていた。

その男の胸元には末川と縫われていた。

「さて、帰る前にもう一仕事しておこう、日野護……」

男は何かに向けて歩いていく、その男の影は人ではなく、大きなハサミの様な腕をしていた。

『フオ、フオ、フオ、フオ……』

誰もいない空間に笑い声のような音がただただ響いた。

護のジレンマ2―負思念体デイガルーグ登場―

デイガルーグを倒すため、丸一日の時間を掛け会議を行ったGUY Sだったが、

結局、効果的な作戦や解決策が見つからず、気が付けば翌日の朝になっっていた

指令室には、調べることに疲れた護たちが、机に突っ伏して眠っていた

それぞれの机の上には紙の束が乱雑に置かれ、そのすべてにペンで修正を行った跡があった

時刻が朝9時になり、ぐっすりと眠る彼らの耳に、朝になったことを知らせるチャイムが響いた

全員が、そのチャイム音で目が覚め、休まらないまま、再び会議を行うことになった

「結局、なにも打つ手はなしか……」

篠崎は自信が調べた資料を読み返し、そう呟いた

「移動が簡単に出来て、火力があるものだから……その逆は結構あるんだけどねえ……」

篠崎の呟きに反応した屋久島が言った

「現在のGUY Sにある兵器は、殆どが設置を行わないといけないものですから」

三原が持つ資料はシルバーシャークGの資料であった、シルバーシャークGは強力な兵器だが、

GUY S基地から移動できないという点から、今回のデイガルーグ戦では不採用になった

「整備班からのメールが来てます、やっぱりレッドスパロウとオオルリの修理、時間がかかるらしいです」

垣山がそう言うと、一同がさらに暗いムードになった

「あーあ、せめてもう一機、レッドスパロウがありやーな……」

「ないものねだったってしょうがないじゃない、あつたら会議なんてやってないわよ」

「そりやそうか、ないもんはないか」

そして、再び、各自が読んでいないドキュメントからヒントを得ようとしたとき、

先ほどの篠崎と屋久島の会話で何か引っかかる部分があった護が、過去にデイガルーグと戦闘した記録を見た

その時、その引っかかりに気付いた

「あった……ありましたよ!!もう一機!!」

突然立ち上がり、そう言う護に篠崎が言った

「ああ?あるわけねえだろ、基地に配備されてる機体は……」

「レッドスパロウじゃないです!!もちろんオオルリでもありません!!」

護の言ってることにますます疑問が浮かんだ篠崎だったが、護はコンソールを叩き、

大型ディスプレイにその答えを出した

「これです!!」

そこには30年前のGUY Sの機体、クゼ テツペイやイカルガ ジョージの乗っていた……

GUY Sガンフェニックスが映っていた

『これだっ!!』

クルー全員が声を上げ喜ぶ、30年前の機体とはいえ、その性能は今のGUY Sの機体と大きな差はない。

「なんで今まで気付かなかったんだらう?」

「レッドスパロウやオオルリしか使わなかったから……」

と、簡単なことに気付けなかったことに笑うクルーたちだったが
「ところで、30年前の機体の整備ってするんですかね?」

と三原が言った

凍りつくクルーたち

「いやいや、あるんだから整備ぐらいは……するよな……?」

「新人の俺に聞かないで下さいよ!!」

「お前の提案だろ」

「いやいや、元を言えば篠崎さんの発想で……」

篠崎と護との間で醜い争いが始まると、橘が間に割って入った

「まあまあ、とりあえず策が見つかったんだから良かったって考えようか、

確か、G U Y Sガンフェニックスは旧G U Y S J a p a nの基地にあるはずだから……

ヒロ君、ちよつと一緒に付いてきてくれ」

「G I G」

G U Y Sガンフェニックスの仕様書を読み込んでいたヒロは立ち上がり、了解した

少しの時間が経ち、旧G U Y S基地に着いた橘とヒロ

橘は入口の扉に近づくと、ライセンスカードを差し込み、

何回か何らかの動作を行い、扉のロックを解除した

中に入ると、清掃がされていないのか、少し汚れた空気や、埃が被った床などが二人を出迎えた

「年に1度の一般開放日以外は誰も入らないから当然汚れているか

……

格納庫はこつちだよ」

橘はヒロと共にG U Y Sガンフェニックスが置かれている格納庫へ歩いた

格納庫に着いた橘とヒロは信じられない光景を見た

G U Y Sガンフェニックスに見たことのない機器が大量にコードで取り付けられていた

しかし、中央に置かれた機器は現代の地球のP Cであった

ヒロは中央に置かれた機器の画面に映る、実行中のプログラムを見る

「これは……」

「ヒロ君!!これは一体?!」

「見た目は派手ですが、やってることはただのアップデートと調整です……」

「けど、周りにある機器は地球の物じゃないです」

「となると、宇宙人のもの……でも一体何のために?」

「僕にもわかりません……」

橘とヒロが話していると、背後から足跡が聞こえてきた

二人が振り向くとそこには何もなく、不思議に思っていると、

その背後……つまり、もともと正面を向いていたほうから誰かが2人の肩に手を触れた

触れられた途端、驚きこそしたが、振り向きつつ構えを取る2人……その目の前には……

「バルタン星人ツ!!」

前に護たちに姿を現したバルタン星人の人間体であった

「せっかく人と同じ姿で話しているのだから、

バルタン星人ではなく……末川と呼んでほしいところですが……

まあ、いいでしょう……」

「何故G U Y Sガンフェニックスを? 君たちには関係ないことじゃないのか?」

「関係ない? 関係が有るからこうして君たちを手伝っているんじゃないか、

そもそも我が種族がわざわざ人間の体で地球で生活していたのはわけがある」

「訳?」

橘が末川に聞くと、末川は橘に対し呆れた表情を見せた

「橘隊長? 貴方はG U Y Sの隊長さんなんだからわかると思っただけですがね……?」

数年前から計画されている、宇宙進出計画ですよ」

宇宙進出計画とは、G U Y Sが計画した大規模なプロジェクトである

火星でのスペシウム回収作業で得た技術を生かし、ほかの星に存在する豊富な資源を回収する組織に人員、宇宙船の製造を含めた計画のことだ

「でもそれは出来たとしても何年も先で、少なくとも数千年も先の計画の話だ」

「確かにそうだ、しかし君たちにとっては数千年と大きな数字だが、われわれにとってはすぐのことだ。

宇宙に進出したからには我々やほかの宇宙人と必ず関わることになる。

そして、我が種族は君たち人類がその数千年先の未来でただの脅威で有ると判断した」

「何をもって脅威と？」

「君たち人類が生み出すダークエフェクトだ」

末川は簡潔に言った

「地球に住む人類の心というものは、まだ宇宙に進出するには完璧ではない。

我々は人類が宇宙に進出し、我々やほかの種族に敵対するのではないか？そう考えた。

そして、そうさせない為には人類の思想、技術を長期に渡り操作すればいいと」

「それが、君が言った人類を導くということか？」

ヒロが末川に聞いた

「そうだ、人類は人類同士での争いが絶えない、それで生まれる負の感情……

それがダークエフェクトとなっている今、

負の感情をどうにかできなければ、人類は宇宙には行かせるべきではない」

その時、PCから電子音が聞こえた

「どうやら、我々ができる最後の仕事が終わったようだ。

我々は今から完全に地球から去る……再び人類と出会うときどうなるか……

楽しみにさせてもらう」

そう言い、末川が去ろうとしたとき、橘は静止の声をあげた

末川は振り返ると、橘は言った

「キエテ、コシ、キレキレテ……君たちバルタン星人に昔、科学特捜隊の隊員が言いたかった言葉だ」

「……わかった、ではさようならだ」

末川の姿がゆがんだと思うと、その場から消えていなくなった

「ガンフェニックスを運び出そう……ヒロくん、基地に連絡を」

「GIG」

G U Y Sガンフェニックスが使えることになり、問題を解決したG U Y Sは、

デイガルーグが現れるまで、待機することになった……

しかし、G U Y Sガンフェニックスを受け入れ完了した翌日、

護は助けを呼ぶ声の聞こえた場所に内緒で来ていた

その場所はごく一般的な一軒家が立ち並ぶ住宅地だ

護は住宅地に入ってから、以前の城南光と同じような感覚がする一軒家の前にまで来た

護がインターフォンを鳴らすと、すぐに家の住人である女性が応答した

『はい……?』

「あ、すみませんG U Y Sの日野護という者ですが……」

『えッ!?あの、何か……?』

「いえ、少しお話をしたい方が……」

護は玄関に設置してあるポストに書かれた名前を確認した

「祐くん……いらっしやいますか?」

『……すみません、祐はちよつとしゃべれる状態でなくて……』

「……そうでしたか、すみません後日再びお伺いします」

『はい、すみません……』

そう女性が言うと、音声途切れた

護は辺りを見渡し、付近に誰もいないことを確認すると、先ほどから感じている負の感情の出所……

2階の一室、その窓に跳躍した

カーテンにより室内は見えなかったが、偶然にも鍵が開いており、窓を開ける

そこには、護の予想した通り、ダークエフェクトの黒い霧がベッドで眠る祐という男の子に取り付いていた

「助けに来たよ、祐君」

護は祐という少年の手を握り、強く念じると彼の精神世界へと移動した

そこは学校の教室だった、誰もいない教室の中、一人でポツリと座っている少年がいた

「祐君?」

「誰ですか?」

少年は顔だけを動かし、そう言った

護は少し困った顔を見ると、少年……祐の目の前の席の椅子に腰かけた

「……君を助けに来た」

護がそう言うと、祐は表情から見てもわかる通りに怒りを露わにした

「助けに来た……?知らない人にそんなことを言われても何もうれしくないですけど?」

「はは……まあ、知らない人ではあるけど、赤の他人ってわけでもないよ」

「ああ、GUY Sだから?」

「……君の助けてって声が聞こえたから……かな?」

「そんなヒーローみたいなこと……」

「そうだね、でも……話してくれないかな?なんで助けを呼んだのか」
祐はため息を吐き、仕方がないと話し始めた

自分が学校でいじめにあっていたこと……

それを相談できず、悩んでいたこと……

そして、不登校になり、両親に対しても申し訳が立たない

そのことを、次第に感情的になり、涙を流しながら話した祐

護はただその話にも言わず、聞いていた

話が終わると、護は立ち上がり、多少乱暴に泣いている祐の頭をなでた

「ちゃんと話せた……俺にも話せたんだから、親や先生にも同じことをすれば良いだけだよ。」

すぐには解決しないし、難しい問題だけど……大丈夫、きっと今ままでよりも良くなるはずだよ」

護は頭から手を離すと、背を向け教室を出ようとした

「どこに行くんですか……？」

祐はそんな護に涙声ながらに聞いた

「ごめんね、仕事をしなくちゃならなくてね……」

大丈夫、また会えるよ」

そう言い、護は現実に戻った

そして、胸ポケットで鳴り続けるメモリーディスプレイを取り出し、

ヒロからデイガルーグ出現の報告を受け、窓から飛び出した

護のジレンマ3―負思念体デイガルグ登場―

G―9エリア……先日デイガルグが現れ、被害を受けた住宅地が存在するエリアである

そこへ再び、観測できる濃度のダークエフェクトが確認された

まだデイガルグが出現したとの報告は受けてはいないが、ダークエフェクトが発生している点と、

これ以上の被害を増やさないために、G U Y S Japanに出動命令が下された

G―9エリアへ向かう航路にNブースターともう一機、橘が回収した機体が飛んでいた

今日、日本の空に飛ぶのは赤と青、2色の色を持つ鳥を思わせる機体……ケツアールではなく、

今、空を翔けているのは炎の鳥……不死鳥『G U Y Sガンフェニックス』である

G U Y Sガンフェニックス……30年前、ウルトラマンメビウスと共に戦った当時のG U Y S最新鋭の戦闘機である

のちに数機量産されたこの機体……だが、その中でもファイアーシンボルが機体上部に描かれたものは、

『俺たちの翼』とG U Y Sの中で伝説となっている

その伝説の機体に、篠崎たちは乗っていた

ただ、今回はG U Y Sガンフェニックスを熟知しているセリザワが、垣山の代わりに搭乗している

G U Y Sガンフェニックスはケツアールと同じく2機のG U Y Sマシンが合体しているもので、

機体前部にG U Y Sガンウィンガー、機体後部にG U Y Sガンローダーが合体してG U Y Sガンフェニックスとなる

今、G U Y Sガンウィンガーにはセリザワと篠崎が搭乗しており、G U Y Sガンローダーには三原、屋久島のペアだ

「ヒロ君、まだ護君とは連絡がつかない？」

ダークエフェクトが発生しているG―9エリアとの距離を確認し

つつ、

三原はNブースターに搭乗しているヒロに確認を取った

『……まだ応答はありません』

この時、護はタイミング悪く、祐という少年に会いに行っており、精神世界に入り通信に気付くのは少し先のことだ

ヒロも護に対し、メモリーディスプレイの通信だけではなく、念話を行ってはいいるが、

護が集中しており、念話にも応答がない

「……応答がないなら護抜きで作戦を実行するしかないだろう」

セリザワが各員にそう伝える

セリザワやヒロ、坂牧は護の事情を少なからず知っているため、不満はないが……

事情を知らない他のクルーは不満を募らせた

「G-9エリアに進入」

セリザワがG-9エリアに入るなりそう言うと、他のクルーたちも気持ちを入れ替え、周囲を警戒した

しかし、そこにデイガルーグの姿はなく、代わりにダークエフェクトの発生により、

避難させられている人々の姿だった

「いくらダークエフェクトが発生しているとはいえ、見えもしないものから逃げることになるなんて……」

いやな気持ちになるでしょうね……」

屋久島がそう言うと、モニターに表示されていたダークエフェクトの濃度が低下した

「ダークエフェクトの濃度が低下!!」

屋久島が現状を報告するが、ダークエフェクトの濃度はみるみる低下し、ついには測定不能になった

「反応、消えました」

『……各員、周囲警戒後異常がなければ帰還』

『GIG』

報告を聞いた橘が帰還命令を出し、『俺たちの翼』を持ち出してまで

行おうとした作戦は、
使うこともなく終了するものになった……

そうクルー達が思ったその時だった

『下ですッ!!避けて!!』

ヒロの声が通信で響き、機体の操縦をしていた篠崎は、反射的に回避行動をとった

そして、G U Y Sガンフェニックスが元いた場所に、鋭い槍のようなものが突き抜けていった

距離を取った篠崎たちが見たのは、

道路のアスファルトを突き破り、地表に這い出たデイガルーグの姿だった

「あいつ……ッ!!地面に潜ってやがったのか!!」

篠崎が悪態をつくが、セリザワがデイガルーグの周囲を確認した

「橘隊長!!デイガルーグが避難集合場所に近すぎる!!」

『こっちでも確認している、各員まずはデイガルーグを避難場所から離すんだ!!』

『G I G!!』

「あいつの注意を引き付けるぞ!!」

ガンフェニックス!!スプリット!!」

G U Y SガンフェニックスはG U Y SガンウインガーとG U Y Sガンローダーの2機に分離し、

あえてデイガルーグに接近し離れた

「ビークバルカン!!」

「ダブルガンランチャー!!」

デイガルーグの背後から攻撃を当て、注意を引き付けようとする

が、

デイガルグは一向にその場から離れようとしな

「ゼットンを使って離しますか!？」

その様子を見ていた垣山がマケツトを取り出し言うが……

『駄目だ!!人が多すぎる!!それにゼットンを使えば人がさらに混乱するぞ!!』

ブリーフィング通り、万一に備えて待機している!!』

垣山はほかのマケツトを見るが、

その中では3万トンもの重さのデイガルグを移動させられるほどのパワーを持った怪獣はいなかった

セリザワは攻撃を続けても未だに追ってこないデイガルグを見て、考えを口に出した

「こちらの動きを待っているのか……?」

超絶科学……メテオールは強力なものだ、

それこそ、戦闘機単体で怪獣を倒せてしまえるようになるほどだ

しかし、メテオールは未知の宇宙人の技術を使用したものであり、制限時間が存在する

メテオールは切り札であると同時に、つかったら必ず倒さなければならぬものもあるのだ

機体内にアラートが鳴り、戦闘に介入していないヒロがモニターを見ると、

ダークエフェクトの濃度が再び上昇していた

「やっぱり……!!」

デイガルグは攻撃されるたびにダークエフェクトでダメージを回復しているんです!!

このままじゃこつちが体力切れになります!!」

その時、デイガルグは避難所から逃げている人々に体を向けた
「まさか!!」

篠崎が声をあげたとき、デイガルグは火球人々に向けて放っていた

どうにかしようとしても篠崎達からは遠く、

万一に備えて待機していたヒロ達からも間に合わない程だった
火球が爆発し、何も見えなくなる

クルーたち全員が最悪の事態を想定し、声も出なかった……
しかし、坂牧が

「……大丈夫です、来てくれました!!」

爆炎を赤く輝く光が晴らし、その中から赤い体のウルトラマンヒーローが現れた

ディガルーグは一度大きく雄たけびを上げると、再び火球を放った
ヒーローは右手の手のひらを前に出し、火球を受け止めた

それを見たディガルーグは連続で火球を放ち始めた

今度は両腕を力を入れ、両腕を赤く発光させた瞬間、発火させ、
火球を殴り相殺していった

「すいません!!後お願いします!!」

そう言うと、ヒロはNブースターを学校の校庭に着陸させ、飛び降りていった

「おいおい!!どこ行くんだいヒロ君!!」

それに着いていこうとNブースターを降りようとする垣山だったが、

後部座席に座っていた坂牧が後ろから腕を叩き、言った

「あの、私を一人にされると困ります……」

ヒロが勝手にどこかに走っていったことも放っては置けない垣山だったが、

目が見えない坂牧を置いて行くことはできなかった

「橘隊長、ヒロがナンダから飛び出して行きました。」

メテオールショットひとつでは……」

『大丈夫だ、垣山はそのまま作戦を続行、

今そつちにイカルガさんが向かっている、合流して作戦に当たってくれ』

G I Gと返事を返した垣山だったが、明らかに焦りの表情を出した
「向かってるたって……」

G U Y S J a p a n 基地からG-9エリアまでそんなに距離は

ない

数分前に基地から出たとしたら、今到着してもいい位の距離だ

「が……それは航空機だった場合の話だ

障害物もなく、最短距離を飛んで移動できる航空機なら当然だが早い、

しかし、垣山が知る限り、G U Y S J a p a n に存在する航空機は、

ヘリや、昔に開発された戦闘機が片手で数える程度である

ヘリは出せる速度に限界があり、デイガルグの攻撃が当たってしまいう可能性がある

戦闘機ならばデイガルグの攻撃を避けるだけの速度、機動性はあ
る……

しかし、垂直離着陸機は1機も所有してはおらず、

付近に最低限の長さの滑走路の代わりになるものも無い

となれば基地から一番近い他の基地などから借りるという手もあるが、

それだと時間がかかりすぎるのだ

となれば、残る手段は陸路である

しかし、どれだけ急いだとしても数分や10数分でつくような距離ではない

そう考えた垣山だったが……

突如、校庭の中央に、1台のバイクが学校のフェンスを30mほど飛び越え、垣山の目の前に着地した

バイクに乗った人物はG U Y Sメットこそすれ、服装は私服であった

バイクに乗った人物はバイクから降りると、メットを取った

「イカルガさんッ!?!」

メットを取った人物……イカルガはメットを垣山に放り投げ、言った

「真司、自分のメットと他人のメットを間違えて持っていくなよ。

もし俺が持ってこなかったらメテオールショットが変な方向に飛

んでくところだぞ?」

「え?」

垣山は自分がかぶっているメットを取り、裏を見た

そこには自分のメットには書いてあるはずのSHINZIの文字はなく

JORGEの文字があった

「あえ……?おかしいな……確かに自分の棚から……」

「おい、ボーツとすんな、早く乗れ」

垣山が考え事をしている間に助手席に乗り込んだイカルガが垣山を呼んでいた

人気のない通りに来たヒロは、素早くジャケットの内側に隠しているαフュージヨミツシオン取りだし……

「ヒーローーツ!!」

上に掲げ、変身した

「……………」

しかし、ヒロは1人……その様子を偶然見ていた者に気付けなかった

いつもなら見ている気配など察せるはずのヒロだったが、その人物だけは気付けなかった

「とんだ特ダネだな……」

クゼ テツペイやイカルガ ジョージと同じ年齢に見える男性は、変身する瞬間を捉えた、改造カメラを手にそう呟くと、ニヤリと笑い、どこかへ消えていった

火球を全て相殺していた護だったが、流石に体力が続かず、1発……もう1発と、火球が体に当たった

篠崎たちG U Y Sマシン2機もディガルーグに必死に攻撃するが、2機の攻撃は完全に無視されていた

そして、護の体に4発目の火球が当たると同時に、護は遂に膝を付き、

腕の発火も消えてしまった

すると、胸のカラータイマーが赤く点滅し始める

ディガルーグはそれを好機と見るや、先ほどの火球の数倍の大きさの火球を放った

咄嗟に腕をクロスさせ、防御の姿勢を取るが……

力及ばず、うつ伏せに倒れてしまう

そして止めの一撃と言わんばかりに、再び火球が放たれた

その火球が倒れている護に当たる直前……青い体の巨人が火球と護の間に割って入った

『ウルトラバリヤーッ!!』

巨人の目の前に光の壁が現れ、火球を防いだ

『護さん、すみません遅れました!!』

青い巨人……ヒロはなんとか体制を立て直そうとする護の手を引き、立ち上がらせた

『いや……ナイスタイミングだ、欲を言えばもっと早く助けてほしかったけどな』

護が冗談半分にそう言うと、ヒロも冗談口を叩いた

『じゃあ一人で戦いますか?』

『今はやめとく』

そして、二人はディガルーグのほうへ体を向けた

『僕たちの攻撃は多分効きません……どうしますか?』

『それは当然……チームプレーで』

ヒロと護は互いの拳を合わせ、上に掲げた

光り輝く赤と青の二つの粒子が合わさり、

ウルトラマンヒーロー・ライトニングヒーローが現れた

『ティー……サッ!!』

ヒーローはいつものファイティングポーズを取った

一つになったヒーローのエネルギーを感じ取ったのか、大きく雄たけびを上げ、再び火球を放った

しかし、今度は避難所の人々ではなくヒーローに向けて放たれた放たれた火球に対し、ヒーローは防ぐでも避けるでもなく、火球に向かつて駆けた

そして、火球に対しダイビングボレーシュート……イカルガジョージの流星シュートをした

火球は爆発せず、デイガルグに向かつて高速で跳ね返され、その衝撃でデイガルグを後ろに倒れさせた

ヒーローは両腰に両手を引き、そのまま横に腕を伸ばすと、M87光線と同じ動作を行い、光線を放った

『ライトニングロード!!』
ライトニングロード名付けられた光線はデイガルグを貫通した後、デイガルグを光に変換し、

近くの避難完了済みである広い場所へ強制転位させ、そのまま拘束した

「橘隊長!!メテオールを!!」

セリザワが橘にそう言うと、橘も今が好機と見た

『メテオール解禁!!』

『G I G!!パーミッシェントウーシフト……マニユーバ!!』

G U Y Sガンウインガー、G U Y Sガンローダー、Nブースターの3機から金色の粒子があふれ出し、

デイガルグ目掛けて高速で接近した

「ガンウインガー、ポイント到達!!」

「ガンローダー、ポイント到達!!お父さん!!」

「マニユーバモード、強制停止!!」

垣山がマニユーバに移行するレバーを逆に引きくと、Nブースターのモニターに表示されているメテオールの制限時間が強制的に0カウントになり、

マニユーバモードからクルーズモードへ移行した

垣山とイカルガは素早くメテオールショットを取りだし、

垣山はメモリーディスプレイをナンダから強制排出、メテオールショットに差し込んだ

「いいか？チャンスは一回、ミスするなよ」

「G I G……!!」

二人はサイドガラスを開け、身を乗り出した

「カウント!!3、2、1……ファイア!!」

2機のG U Y Sマシンからペシウム弾頭弾が全弾発射され、

ほぼ同時にメテオールショットからキャプチャーキューブが発射された

そのままスペシウム弾頭弾が当たると同時にキャプチャーキューブがデイガルグを囲むように展開された

爆発……しばしの沈黙が流れた

キャプチャーキューブの中は煙で何も視認できない

その時、3機のG U Y Sマシンに電子音が鳴る

もしや、失敗したのか……？そんな考えが誰の頭にも浮かんだが、それはモニターに表示されているあるもので答えが出た

「あ……ダークエフェクト、計測不能数値にまで低下……」

三原がモニターに映っている表示を見つめ報告した

全員がそれを見た後、キャプチャーキューブの中を見つめた

煙が薄れたキューブの中には、デイガルグは存在していなかった
坂牧が念のため、まわりを見渡すが、坂牧の瞳には、ダークエフェクトはなかった

「デイガルグ……消滅しました!!」

作戦完了……そうわかった瞬間、全員が喜びの声をあげた

ヒーローは戦いが終わったことを知ると、空高くへと飛んで消えていった

「今度こそ、アディオス……デイガルグ」

作戦終了後、指令室には……2名の隊員が正座で座らされていた

「おい、流石に今回は焼肉じゃすまないと思わないか？」

篠崎が2名の隊員……護とヒロに言う

「はい……申し訳ありませんでした……」

「申し訳ありませんでした……」

2人が頭を下げ、謝る……が、当然それでは許されることはなかった

すると、頭を下げていた2人の目の前に独特な香りを放つ、バケツのようなものを置かれた

2人は頭をあげ、それを見ると……

そこにはG U Y Sファイアーレッド20Lと書かれたバケツが置いてあった

「昔からの伝統だ、頑張って2人で俺たちの翼を塗りなおしておけよ？」

2人がみたまみんなの顔は不満は少し残しつつも、いつもの顔に戻っていた

護とヒロは真剣な顔で立ち上がり言った

『G I G I!』

その日の夜、ようやくG U Y Sガンフェニックスの再塗装を終えた

2人の元に、イカルガ ジョージが現れた

「あ、イカルガさん……どうしたんですか？」

イカルガは2人を手招きし、小さな声で聞いた

「お前ら、ウルトラマンだな？」

その言葉に、2人に緊張が走る

「まあ、何も言わなくていい、間違ってたら俺の勘違いってだけだからな……」

俺がG U Y Sに来る前の話だ……

俺はサッカーの試合で、自分にしか見えないものを、周りから信じてもらえなくてな？

だから、俺は昔、スタンドプレーしか出来なかった。

人と人でさえこうなんだ、

ウルトラマンには見えても人には見えないものだっただってあるんじゃないかと思っている

けど、俺はウルトラマンがずっとスタンドプレーヤーだと思ったことはないな。

ウルトラマンの周りにはいつもチーム……仲間がいる……

だからお前らも、自分に一人でどうかしようと思わず、まわりの仲間を頼れよ」

イカルガはチャオと軽く挨拶をして自分の部屋へ戻ろうとした

「あの!!」

「なんだ? 護」

「……3つの角へのアメイジングトリプル、お見事でした」

イカルガはその言葉に少し微笑み

「てか、基本な?」

30年前と同じく、そう答えた

救いの後で——負思念体インペライザー・負思念機械生命体ジー・エンド登場——

G U Y Sとウルトラマンヒーローにより、

祐という少年の負の感情をもとに作られたディガルーグが倒されたその日の夜

ダークエフエクトの影響が消えた祐少年は目を覚まし、

両親が家にいるときは決して開けなかった部屋のドアを開け、

自身のことで話し合いをしている両親の前に立った

「父さん、母さん……話、してもいい？」

祐少年の両親は、不登校になってから今まで話をしてくれなかった祐少年が、

自分から話しかけてくれたことに驚きつつ、リビングのテーブルにそれぞれ対面で座った

祐少年の両親は優しいまなざしを向けながら、祐少年が話してくれるのを待った

祐少年は夢のような空間で護と話したように、自身がどうして不登校になったのかを話した

祐少年の両親は話に割り込むことなく、すべてを話し終えるまで祐少年の言葉を聞いていた

護と話したときと同じく、話の中盤から涙を流し始め、そこから話し終えるまで、涙声で話した

話が終わると、祐少年の両親は祐少年に頭を下げて謝った

祐少年の父は話し始めた

「俺たちは今日まで、祐が不登校になった理由が、俺たちが祐に構ってやれてないからだと思った。

……前に学校での生活を聞いた時、楽しいって言っていたのを聞いて安心してきっていた。

いじめを受けていたのに気付かず、辛い思いさせてすまなかった。」それから祐少年と両親の会話はゆっくりながらも続いた

すると、祐少年は無事両親に話せた安心感からか、不登校になった日からの小食が続いたからか、

祐少年の腹の音が鳴った

祐少年の父は壁掛けの時計を見ると、すでに夕食というには少し遅い時間であった

祐少年の両親はキッチンに向かい、少し話し合うと、祐少年に言った

「祐、今日はどこか外で食べに行こうか」

祐少年とその両親は、デイガールグが現れ、臨時休業を出す店が多い中、一軒の焼き肉店へ向かい、

祐少年は、そこで、明日から学校に行ってみると両親に相談した

両親からは無理に学校に行く必要はない、勉強だけならどこでもできるんだと一応言っておくが、

頑張ってみる、と言い登校の意を決した

翌日、祐少年が前に学校に行っていた時間にはまだ少し早い時間に、家の呼び鈴が鳴った

しかし、祐少年とその両親は呼び鈴を押した人物、それが誰であるかを知っており、

まだ準備が終わっていない祐少年に、支度を急がせた

「おはようございます先生、今日は祐をよろしくお願いします」

祐少年の母が玄関の扉を開け、そう言った

そこには今朝、祐少年の両親が電話をした、祐の担任である松山という若い男性がいた

「おはようございます、祐もおはよう……ちよつと雰囲気が変わったかな？」

「おはようございます先生」

ちよつと、学生服を着て、学生鞆を持った祐少年が松山の前に現れた

「それじゃあ、行こうか」

「父さん、母さん、行つてきます」

祐少年の両親は祐へ応援を、担任の松山にはよろしくお願いします
と言ひ、二人を送り出した

松山は、学校へ行く途中の道で祐少年とのコミュニケーションを取るため、

今日一番のニュースを祐少年に言った

「実は今日、学校にG U Y Sの隊員がきて、G U Y Sの仕事は何かを教えてくださいることになったんだ。」

ちよつと前は怪獣があまり表れていなかったからこういう学校訪問はあつたけど、

怪獣がまた現れるようになってからは初めてのことだから参加できずにいるのはもつたないって、

そう思つていたんだよ」

「そうですか……G U Y Sが来るんですか」

祐少年は心の中で、忙しい中、学校訪問などをこなさないとイケないG U Y Sを褒めた

しばらく松山と会話を交わしつつ、昨日デイガルーグが現れたエリアとは反対方向のエリアにある学校……

八重桜中学校の校門前までやってきた

校門前では数十人単位の人ばかりができており、その中には祐少年の見知つたクラスメイトの姿も居た

緊張し始めた祐少年だったが、勇気を出して、学校に入る

すると、祐少年は人だかりの意味が分かつた

グランドのほうを見ると、そこにはG U Y S J a p a nのシンボルであるオレンジ系の服を着た数名がおり、

複数台の車も見えた、しかもその内の一台は、空飛ぶ車で有名なナンドもあつたのだ

今を活躍するG U Y Sの、しかも本物の野の戦闘車両を見れるということであれば、この人だかりは当然だった

しかし、祐は自身の教室ではなく、職員室に行き、軽く相談を受けなければならぬため、

G U Y Sの戦闘車両やG U Y Sの隊員をじっくり見ることはできない

松山も祐にそのことを謝り、教員玄関に向かい一緒に歩き始めた

祐はちよつとでも見ておこうと、G U Y Sの隊員がいる方へと顔を向けていた

すると、学校の生徒の声に混じり、小さな声が聞こえてきた

なぜ、ほかのクラスメイト達の大きな声ではなく、小さな声が聞こえてきたかは分からなかったが、

祐の耳にはその声がくつきりと聞こえた

「イカルガさんも結構抜けていることあるんですね、学校にバイク忘れているなんて」

祐は声の聞こえた方を注意深く見た

そこにはまるでデジャヴのような感覚を感じる男性が立っていた

なぜか、祐はその男性に見覚えがあった、それもすぐ最近だ

そのデジャヴに似た感覚を確かめるため、ついには職員玄関に向かう足を止めその男性を見つめた

そして、その男性が祐の視線に気づき、顔をこちらへ向けた瞬間、まるで電流が走ったかのように、

祐は衝撃を受けた

「昨日の……夢の中の人だ」

自分に話す勇気と、学校へ行こうという気持ちを起こさせてくれた、夢のなかでであった人物、

そのままの姿がそこにはあった

その人物、日野護は祐に手を軽く振ると、作業を始めていた

職員室に通され、少しの相談を行った後、今日はグラウンドでGUY Sの隊員と話をするのだという話をされた

今回はクラスの列に並ばず、職員の並ぶ、横の列でそれを見ることから始めるらしい

そこまで説明されていた祐だったが、頭の中は護のことでいっぱいだった

偶然似た人、というには説明できないほどそのままの人物が出てきて動揺を隠せない

そこで、祐は担任に変わり学年主任である先生に言った

「先生……、GUY Sの方とお話するのはできますか？」

夢の中のことを信用しすぎているわけではないが、自分が何かにとらえられていることは覚えていた祐は、

もしかしたら夢の中の人物が護本人ではないかと思い、内容は言わず、話してみたいといった

その時、まるで30年前、

マイナスエネルギーがある学校に現れるかのように、八重桜中学校に集まろうとしていた

救いの後で2―負思念体インペライザー・負思念機械 生命体ジー・エンド登場―

八重桜中学校の1時限目と2時限目は、急遽グラウンドでG U Y Sの話を書くことになった

教員と同じく、横に護たちも整列している

祐は自分のクラスの列……ではなく、全校生徒の列から少し離れたところに学年主任の教員と居た

全校生徒がグラウンドに集められ、校長先生である石井 健一の話を立て聞いていた

声がきちんと聞こえるようにマイクを使ってでの話は、時折ハウリング発していた

「現在はG U Y Sの広報活動に力を注いでいるトリヤマ ジュウキチさんと私は仲が良く、

今回は特別にお忙しい中、G U Y Sの、それも怪獣や侵略宇宙人と実際に戦っている方たちが着てくれました

みなさん失礼のないようお願いします」

石井校長がよろしくお願いします、と事前に壇上に上がり、話をすることに決まっていた護にマイクを渡した

マイクを受け取った護は壇上に上がるとマイクの表面を軽く叩き、音が入っているか確かめ、

まだ立って話を聞いている生徒たちに対し、座ってもいいですよと言い、生徒たちが座り終わった後、

あいさつをした

「みなさんおはようございます。」

それと、初めましてG U Y Sの日野護です。

今日は、皆さんの勉強の時間を少しお借りして、G U Y Sの活動や、生徒の皆さんの疑問に思ったことに、

できる限りお答えしようと思います、生徒の皆さんも、

これを機会にG U Y Sのことを少しでも知っていただけたらと

思っています。」

そこからG U Y Sのことについての説明を説明上手な三原に任せ、護は元の位置に戻った

三原はインターネットやG U Y Sの広報誌などで知られている情報に、

知られていない部分を少し足した説明を行った後、マイクを篠崎に渡した

篠崎はG U Y Sの出動や、以前説明が下手だったという理由でG U Y Sマシンの説明を担当させられた

しかし、篠崎はきちんと誰が聞いても分かりやすいようにG U Y Sマシンのことを説明していた

ただ、言葉づかいが汚いことを除けばの話である

しばらく話し、G U Y Sの活動等を話し終え、学校側から与えられた時間にはまだ余りがあった

なので最初に護が言った通り、生徒の質問に答えることになった

当然、全校生徒全員から話を聞くことは、与えられた時間では無理なので、挙手してもらい、

時間の限り、質問に答えることになった

質問内容をどうするか、誰が手を上げるかを仲のいいクラスメイト達が話し合い、

ざわざわとしてきた中、最初に手を挙げた女子生徒がいた

再びマイクを渡されていた護はその女子生徒近くまで行き、マイクを渡した

女子生徒は緊張しながらも気になったことをマイクを通して言った

「えっと、隊員さんの中に白杖をもった女性の隊員さんがいますけど……あの……」

そこまで言われて、護は質問内容に気付き、女子生徒に小声で質問内容を聞いた

質問の内容は目が不自由でもG U Y Sの隊員になれるのか……というものだった

護は坂牧の方へ視線を向ける

坂牧は、隣で立っているセリザワに耳打ちをしており、セリザワは護にOKのジェスチャーを伝えた

護は女子生徒からマイクを返してもらい、坂牧の方へ向かい、坂牧にマイクを渡した

「八重桜中学校の生徒さん、聞き辛いことを質問させてしまい申し訳ありません。

私は見ての通り、目が不自由……先天盲という物心ついたときから目が見えません。

そんな障がいがある私がG U Y Sの、それも怪獣や侵略目的の宇宙人と戦っています。

といっても、目が見えないので銃を撃つたりすることはできません。

現場でのアシスタント……みたいなものをさせてもらっています。

実際、体が思うように動かないなどの障がいを抱えている方も、社会の中で働いている方もたくさんいらっしゃいます。

なので障がいがあっても、自分にできることを探して、私にできることをG U Y Sで仕事をしています。

大切なのは自分ができることを探し続けて体験することです。障がいを持っている私とは違い、皆さんには何不自由なく好きなことができます。

なので、みなさん、将来の職業や夢にできないと決めつけて悩まず、好きな職業や夢に向けて頑張ってください。」

最後にありがとうございますと、と坂牧は頭を下げると生徒と教員から拍手が送られた

再度、頭を下げ、坂牧はマイクを護に返した

護は時間を確認し、まだ時間があることを確認し、他に質問がないかを聞いた

それから何度かの質問、それに対しての返答が行われ、話が終わった

これから生徒たちは教室に戻り、今回の話に対し、作文を書くこと

になった

生徒たちが順番に教室に戻る中、学年主任の教員が護に話しかけてきた

「お忙しい中すみません、ちょっとお願いがありました……」

「お願い……ですか？」

「はい、できればでよろしいので、生徒と話してもらっても……」

そう言い、教員は祐のいる方に視線を向けた

「あ、大丈夫ですよ」

「本当ですか？ありがとうございます」

護は教員からのお願いに二つ返事で快諾した

その後ろでは、後片付けをしているヒロが、本来であれば護がするはずの仕事分を垣山から任せられていた

教員に連れられ、祐と職員室にパーテーションで区切られ作られた応接間に来た護

教員は少し用事があり、席を外した

「えっと、話が見たいんだっけ？」

護が応接間に来てから一言も喋らない祐にそう切り出した
すると、祐は恐る恐る聞いてきた

「あの、昨日のことなんですけど……」

昨日のこと、それは祐にとっては精神世界での護とのやり取りのことであったが、

さすがに護自身がそのことを言ってしまうと、色々面倒なことになるかねないので、

「えっと、君の家に尋ねに行ったこと……かな？」

ごめんね、実は君の家の近くから何かの反応があっただけ、もう反応はないから安心して……」

「違います!!」

なんとかごまかそうとすると、祐が話を切った

「そうじゃなくて、昨日僕の話聞いてくれた時のことです」

「そっちのこと……だよ……」

「やっぱり、あなただったんですね」

すると祐は頭を下げ、護にお礼を言った

「ありがとうございます、あなたのおかげで家族との誤解も解けて、まだ教室には行けないけど、学校に来ることができました」

「頭なんて下げないでいいよ、俺は話を聞いてあげただけだし、学校に来るのだから君が君の意思で来たんだし……」

それからしばらく話をしていると、祐は一つ疑問に思った

「あれ……でもどうやってあの時僕たち話したんですか？」

「……あ」

しばらくの無音……その無音の間が、祐は聞いてはいけないことを聞いてしまったと察し、

護は自分のやってしまったことの意味を察した

「えっと、祐君は寝ぼけていたようで!!その……普通に玄関から入れてもらって君の部屋で……!!」

「えっと……お母さんは護さんは家に入れてないって昨日聞いたんですけど……」

それに僕の部屋鍵がかかっていたはずなんですけど……」

「え……う？じゃ、じゃあ!!2階にジャンプして窓から部屋に!!」

「それは……いけないでしょ……」

「……はい」

その頃、祐の学年のクラスでは、担任の松山から作文を渡された後、業務により一時的に教室を後にした

「ていうより作文だるくない？本当だったら私たち体育の授業だったじゃん。」

しかも、授業が変わるって言ってなかったじゃん、マジ校長くそ……」

「それよりもさ、なんで障がい者がGUY Sなんてやってんだよ」

「知ってる？GUY Sって目茶苦茶入るの楽なんだぜ？」

GUY Sのライセンスもってりゃ入れてな、実は俺の父さんも持つ

てんの、笑えね？」

「なあなあなあ、今日あいつ居たの見た？」

「見た見た、あいつ学校来ねえって思ってたのにきもくね？」

「なあ因幡、もしあいつが教室来たらどうする？」

因幡と呼ばれた男子は話しかけてきた男子に戸惑いながら聞き返した

「どうするって……？」

「えー、決まってるじゃん」

「因幡あいつの後ろだろ？背中にコンパス刺してやろうぜ」

「……んだよだりい」

そう言い、因幡は祐が教室に来ないように願いつつ、自分のペンケースのチャックを開いた

そこには黒い霧のような何かが文具の代わりに大量に詰まっていた

「は……？」

次の瞬間、黒い霧は目にもとまらない速さで因幡の顔に張り付いたその様子を目にしたクラスメイトが一人、

大きな悲鳴を上げると、それは伝播し、クラスの全員が悲鳴を上げた

救いの後で3―負思念体インペライザー・負思念機械生命体ジー・エンド登場―

職員室で祐少年と話していた護は、背中に悪寒を感じた。反射的に職員室の窓……、学校のグラウンドが見える方へ駆けた。そこには鋼の巨体がそこには居た。

「あれは……インペライザー!!」
インペライザー、30年前にウルトラマンタロウ、ウルトラマンメビウスが苦戦したロボット兵器だ。

ウルトラマンメビウスが光の国に帰った後でも、何度か地球に現れている。

突然現れたインペライザーに職員たちはざわめき始めた。

「先生達は生徒の避難指示を!!」

そう言い、護は職員室を飛び出し、人目のつかない場所へ走り出した。

階段を素早く上ると、屋上へ続く扉に手を掛けた。

しかし、ドアは施錠されており、開けることは出来なかった。

仕方なく、その場でβフュージョミッションを取り出した。

が、祐少年が現れ、慌ててβフュージョミッションを仕舞う。

「護さん!!」

「祐君!!なんで付いて来て……!!」

「あ、ごめんなさい……」

祐少年は飛び出していった護を、ただ反射的に追いかけてしまったのだ。

仕方なく、護はβフュージョミッションを取り出した。

「祐君、この事は誰にも内緒に……」

護は、βフュージョミッションに光のエネルギーを集め、そのまま上へ掲げた。

「ヒーローーツ!!」

護の姿は、光に包まれ、その光が消えた時には、すでに護は消えて

いた

祐は護がどこに消えたのか辺りを見渡したが、次の瞬間、まるで地震のような揺れから、まずは避難を優先した。護が職員室を飛び出した時、職員室に居た教職員達も動揺しつつも、生徒の為に動き始めていた。

幸いにも、今は授業中で、大半の教職員は自分の担当している教室に居る。

その為、怪獣が出現した際に鳴らされる緊急避難指示のアラームをならせば、

各教職員と全校生徒は、避難訓練通りに行動することができる。

しかし、祐の所属しているクラスは担任の松山は、次の授業に使用する教材のコピーの為に、

職員室横の印刷室に来ていた。

切羽詰まった状況に、松山は近くの教職員に詰め寄った。

「自分のクラスの確認に行きます!!」

松山はそれだけ伝えようと、職員室を飛び出した。

緊急避難指示が鳴り響く中、松山が自身の担当するクラスがある校舎に着くと、

そこでは大パニックが起こっていた。

廊下には、我先にと逃げ出す生徒が溢れ、

教室にはパニックになる生徒や……恐怖で動けなくなる生徒もあり、冷静な生徒や教員も手一杯だ

それもそのはず、いくら避難訓練を受けているとは言っても、

いきなり目の前のグラウンドに現れるのは想定外、早く逃げなければ、校舎ごとつぶされる可能性もある。

松山は偶然近くに居た学級委員に話しかけた。

「クラスのみんなは!？」

「みんな逃げてます!!でも因幡が……!!」

「因幡がどうした!？」

「変な黒いのが顔について……まだ教室に!!」

「分かった!!他の先生の指示に従って避難してろ!!」

松山は生徒たちの波に逆らい、自分の教室を目指した。

篠崎達は突如現れたインペライザーに驚いていた。

すぐさま坂牧とヒロはインペライザーの正体に気付いた。

「負思念体です!!」

「あれはインペライザー!!」

セリザワはすぐに連絡を取れない橘の代わりに、篠崎達に命令を出した。

「篠崎、垣山、三原、屋久島はここでインペライザーの注意を引け、校舎にこれ以上近づけるな!!」

由依は俺とナンダに乗って攻撃、ヒロは避難補助!!」

『GIG!!』

篠崎たちはトライガーショットを抜き、走り出し、ヒロも校舎へ走り出した。

セリザワは坂牧を連れ、ナンダに乗車した。

「由依、橘隊長に現状報告とメテオール使用許可の申請、あとケツァールとブースターの自動離陸の申請!!」

「GIG……橘隊長、こちら坂牧……」

セリザワはナンダを離陸させ、校舎の方を向いているインペライザーの左側から、

両肩にスペシウム反応砲を発射した。

インペライザーは、両肩に自身が破壊された場合の自動修復器官を持つていることが、

30年前に分かっており、そこを攻撃し、破壊することが有効であると確認されている。

しかし、当然だが自動修復器官を破壊するだけではインペライザーは倒すことは出来ず、

自動修復器官を破壊後、強靱な装甲を誇るインペライザー本体を破壊しなければならぬ。

「こちらセリザワ、インペライザーの自動修復器官の破壊を確認」

セリザワはインペライザーの自動修復装置を破壊したのを確認、橘と篠崎達に報告し

そのまま注意を引く為に、インペライザーの近くを停止飛行した。同時に橋からメテオールの使用の解禁を坂牧が各院へ報告。

インペライザーはナンダの方へ上半身だけを回転させ、肩からビームを放つと、

上半身はナンダの方へ向き続けながら攻撃を続け、校舎の方へ歩き始めた。

セリザワは校舎へ歩き始めたインペライザーにすぐさま対応した。「篠崎、陽動攻撃開始、インペライザーは重心が高く、重量がある、あの重量を支えている足を狙え」

『GIGII!』

篠崎たちはトライガーショットをインペライザーの左足に向け、アキユートアローを連続で撃った。

一点集中の攻撃に、流石のインペライザーも動きを止めた。すると、インペライザーの上半身が高速で回転を始める。

インペライザーは上半身を高速で回転させつつ、両肩からビームを連続で発射させることで、

無差別で広範囲の破壊攻撃が出来る。

インペライザーの両肩からビームが連続で発射された。

周辺の建物が破壊され、爆発が起こる……。

しかし、それはインペライザーがきちんと立っていればという事だった。

インペライザーがビームを放つ直前、足元から現れた、赤いウルトラマンヒーローが、

そのままインペライザーの足を持ち上げ、転倒させたのだ。しかし、倒れながらもインペライザーはビームを放つ。

ビームはインペライザーの転倒により、放たれる方向が地面に対し水平にだったものが、

地面に対しほぼ垂直に変わった。

そこへ、青いウルトラマンヒーローが現れ、高速でエフェクト・シールドを作り出し、

一方の建物に影響のある角度のビームを防ぎ、

もう一方を、赤いヒーローが体に赤いエネルギーを纏い防いだ。それによって、地面と空中以外にビームは飛んで行かず、被害を抑えたのである。

自身の攻撃に失敗したと気付いたインペライザーは、別の場所にテレポーターションし、体制を立て直した。

『ティアツ!!』

『サーーッ!!』

ウルトラマンヒーロー達が現れたことに、避難していた生徒や教職員達が、大声で叫んだ。

「ウルトラマンサーッ!!頑張ってくれー!!」

頑張れ、頑張れの応援の声は、2人のウルトラマンヒーローの心に響いき、勇気と力を与えていた。

離れたインペライザーに対し、ウルトラマンに変身した護とヒロは、構えを取り、警戒をする……

2人は、それぞれ別の時間ではあるが、光の国に居た時、ウルトラマンメビウスとウルトラマンタロウに、インペライザーの脅威を聞いている。

2人の心には、師である人たちの言葉が思い出されていた。

『インペライザーは恐ろしい相手です、1人だけの力じゃ勝てません』
『奴と戦うときは、護とヒロ……2人の力を合わせて戦うのだ』

護とヒロは、心の中の師の言葉に頷いた。

『護さん、2人の力を!!』

『合わせて……いくぞ!!』

護は右手を、ヒロは左手を前に出し、それぞれ合わせると、赤と青の粒子が光り輝き、二人の拳に集まった。

2人のウルトラマンは粒子の渦になり、合わさると、そこからウルトラマンヒーロー・ライトニングヒーローが現れた。

『ティー……サーーッ!!』

赤、青のラインが光り輝く……インペライザーはヒーローのエネルギーを感じ取ったのか、

または何かを察したのか、頭部に3連ガトリングガンから無数の光

弾をヒーロー目掛け、放った。

ヒーローの後ろにはたくさん建物と、命がある、避けるわけにはいかない。

ヒーローは右の掌を前に出し、赤と青の粒子発生させ、高速で回転することで、目の前に盾のように展開させた。

しかし、インペライザーの光弾の威力は凄まじく、ライトニングヒーローとなったヒーローでも、

徐々に後ろへと押しやられている。

インペライザーは形勢を優位にしようと、そのままヒーローへ近づいていく……

そこへ、インペライザーの背後から多数のレーザーが突き刺さった。

衝撃で、体制を崩すインペライザーの横を、ケツアールバーンティングが飛び去る。

ケツアールバーンティングには篠崎達が搭乗しており、

キャノピー越しに、篠崎がサムズアップのジェスチャーをヒーローへくれた。

ヒーローはサムズアップを返し、インペライザーに向きかえ、構えを取った。

ライトニングヒーローになり、そろそろ限界時間の30秒になる、決着をつけるには体制を崩した今が好機であった。

ヒーローは両腕を腰に引き、そのまま左右に伸ばした……

そして、M87光線と同じ動作をし……

『ライトニングロードッ!!』

ライトニングロードと掛け声を出し、光線を発射した。

光線はインペライザーを貫き、上空へと運び、拘束した。

「行くぞ、マニューバモード、オン!!」

篠崎達がコクピットのセーフティレバーを操作し、マニューバモードをオン、

ケツアールバーンティングは、金色の粒子に包まれ、残像を残しつつ、

拘束されたインペライザーの高度で、静止する。

ヒーローはライトニングロードを出している右手で拳を作り、大きく後ろに拳を引いた。

『ライトニング……ファイニッシャーシュツ!!』

その掛け声と共に、光になったヒーローは、インペライザーへ光速で突き抜けた。

「スペシウム光線、ファイアーーツ!!」

ヒーローがインペライザーを突き抜けた瞬間、スペシウム光線をケツァールバーンティングが、

インペライザー目掛け、放った。

インペライザーの体は、内側から弾けると同時に外側からかけらも残さず、消えていった。

「やったー!!」

「ありがとー!!ウルトラマーン!!」

学校の生徒や教職員が大きく手を振り、感謝の気持ちを、声にして表した。

ヒーローは、空へと飛んでいき、消えていった。

一歩何かが違えば大惨事になっていた今回のインペライザーの出現……。

しかし、結果は道路などの破損などの被害だけで終わった。

そう……この結果が全て仕組まれていた事であり、ただの準備だった……。

そして、この後に待っているものがあつた……ということを除けば……。

教室には未だダークエフェクトの霧が顔にある生徒が1人いるのだった……。

最悪の1——負思念機械生命体ジー・エンド登場——

八重桜中学校にインペライザーが出現してから1週間が経った。当初、G U Y Sが居ながらもインペライザー出現を予期出来なかったのは何故と、

ダークエフェクトの特性を理解出来ない一部のメディアが騒ぎ立てていたが、それも静まりを見せていた。

しかし、それは表面上だけの話だった。

インペライザーがヒーローに倒された後、すぐに教職員である松山が篠崎達に駆け寄ってきた。

松山は篠崎達をダークエフェクトの影響を受けた因幡という少年の元へ連れて行った。

インペライザーがウルトラマンヒーローに倒されたにも拘わらず、因幡という少年はいまだダークエフェクトの影響下にさらされていた。

G U Y Sはかつて、ダークエフェクトの影響を受けた愛という少女と同じ現象と考え、

因幡少年をG U Y S専用の病院へと運び込んだ。

当然G U Y Sは、報道や因幡少年を目撃した学校生徒たちにも規制の働きを掛けた。

しかし、報道に関してはどうかできても、目の前で因幡少年を見ってしまった生徒たちに関しては、

恐怖や不安と言った負の感情は抑えきれず、噂は広がっていった。

2日連続で怪獣が現れ、臨時休業していた八重桜中学校も、

1週間が経過した為、経営を再開した。

祐少年や因幡少年が所属しているクラスでは、入院している因幡少年への誹謗や中傷が行われていた。

誰であろうと、心を傷つける言葉を望む者はいない……。

しかし、この世はそんな心を傷つける言葉と負の感情に溢れている。

その言葉と感情を望むもの……それは彼らがもっと深い負の感情

になるべく待っていた。

祐少年は、因幡少年がG U Y Sに連れ攫われたという、噂を聞き、事情を聴いた担任の松山と共に、

因幡少年のいる、G U Y Sの特別病院へと向かった。

そこにはG U Y Sの研究者と共に護、ヒロ、坂牧が病室をシヨウウインドウ越しに因幡少年を見つめていた。

「護さん!!」

祐少年が護の名を呼び駆け寄ると、護は振り返り、少し困った顔を見せた。

「祐君……それに松山さん……すみません。」

まだ因幡君がダークエフェクトの影響を受けている原因がわかっていません」

護が頭を下げ、そう言うのと松山も頭を下げ、原因究明に努めている事に礼を送った。

シヨウウインドウ越しに祐少年は、顔に黒い霧の掛かった因幡少年を見つめた。

その様子を見つめていたヒロが祐少年に話しかけた。

「君の……友人？」

恐る恐る聞いたヒロに、祐少年は目を因幡少年から離さず、答えた。

「幼馴染で……大切な友達……だった」

「大切な友達……だった？」

ヒロは祐少年が友達だったと過去形で答えた事を不思議に思った。

祐少年が言った言葉に、護や松山、坂牧も祐少年の方を見た。

「中学生になってから、クラスの奴等に脅されて俺の事をいじめ始めたんだ。」

「友達なもんか……」

祐少年はそれだけ言い、病室を出ていった。

それを追い、松山も礼をし病室を出る。

2人が病室を出た後、ヒロは顎に手を当て、考えを口に出した。

「護さん!!もしかしたら因幡君はただの前準備かもしれません!!」

「え?前準備……?」

「恐らく、今までのダークエフェクトは、

地球では1人の負の感情を対象に怪獣を生み出していました。

けど、ダークエフェクトは複数の負の感情を対象にできるとしたら
!!」

「てことは、狙いは因幡君じゃなくて他に……!?!」

「でも負思念体が発生する直前ならわかりますけど、その前だと私も探しようがないです。」

坂牧が申し訳なさそうにそう言う、これに関しては護やヒロも検討がつかなかった。

怪獣や侵略宇宙人などに恐怖する人間はどこにでもいる。

ヒロの言うように特定の誰かを狙うことなど可能なのか?

ヒロ自身もその可能性を考えていたとき、病院内に怪獣出現の警報が鳴る。

護たちは素早く病院の外に待機させていたナンダに乗車した。

G U Y S 基地にいない護たちは基地からの報告をナンダで受けた。恐れていたことが起きてしまったのだ……

八重桜中学校にて、28名がダークエフェクトの影響を受けてしまった。

ダークエフェクトが狙っていたのは祐少年や因幡少年のクラス全員だったのだ。

八重桜中学校につくと、そこには一体の人型の巨大ロボットがいた。

体表は黒く、銀のラインが入り、顔は一面レンズで覆われており、時折黄色の電流がほとぼしる。

腕は肘から手にあたる部分にかけ、大きな砲塔になっていた。

頭部にある角やその風格から、その姿は一体の怪獣を彷彿とさせた。

その怪獣は宇宙恐竜ゼットン。

かつてウルトラマンを倒した最強の怪獣だ。

目の前にいるロボットは機械のゼットンというべき姿をしていた。

名付けるなら、Zの代わりであったG、終わりの文字としてEND。

負思念機械生命体ジー・エンドが現れてしまった。

「護さん!!僕が行きます!!校舎内に残ってる人たちの避難を!!」

「わかった!!」

ゼットンの脅威を知っているヒロは護にそう伝え、ウルトラマンヒーローへと変身した。

ヒロはジー・エンドの背後の空中からエフェクト・スラッシュを牽制として放った。

しかし、ジー・エンドは腰部を反対に回転させると、エフェクト・スラッシュを腕の砲塔で叩き潰してしまった。牽制のつもりで放ったとはいえ、ダメージを期待したヒロの頭に不安がよぎる。

電子音を鳴き声代わりに響かせ、ジー・エンドは砲塔から火球をヒロに放つ。

すぐさまエフェクト・シールドで火球を防ぐと、着地と同時にシールドをエフェクト・スラッガーに変形させて放った。

しかし、この攻撃もジー・エンドは真正面からスラッガーを叩き、はじき返した。

弾かれたスラッガーを跳躍しキャッチすると、そのまま回転し、ジー・エンドに切りつけた。

スラッガーが肘の関節部を完全に捉え、切り裂いた。ヒロはどれだけのダメージを与えられたかを確かめるために切った腕を見るが、

ヒロの目の前には、ジェット噴射をしながら肘から切り離されていた腕がヒロ目掛け飛んできていた。

飛んできていた腕に突っ込まれ、ヒロは腕もろとも吹き飛ばされた。

「ヒロッ!!」

その様子を他の教職員とダークエフェクトの影響を受けた生徒を運んでいた護が見た。

「すみません!!あとはお願いします!!」

護はその場にいる教職員に後を任せ、物陰へと駆け出す。

懐からβフュージョミツションを取り出すと、護もウルトラマンヒーローへと変身した。

変身するとすぐさま、ジー・エンドにスワローキックを繰り出すのが、顔から発射された光弾を食らい、地面に落とされる。

ヒロに放った腕が、ジー・エンドの肘に再び合体し、ジー・エンドは護に構えた。

護は焦りから、レッドパワー・シユートを放とうとするが、相手がゼットンの様な能力を持つていた場合、

放った光線が自分への致命傷になることを思い出した。

護は考えを変え、ためたパワーをレッドパワー・バーチカルギロチンに変えて繰り出した。

赤い光の刃がジー・エンドにあたる直前、ジー・エンドは両腕を上
に構え、バリアーを張った。

バリアーと刃が競り合い、光の刃は粒子となって砕け散った。

『これは……！ライトニングになるしかない、ヒロ!!』

倒れていたヒロの方を護が見ると、ようやくダメージから復帰したヒロが頷いた。

二人がライトニングへとなる為、近付こうと駆け出した。

ジー・エンドはそんな二人の首にそれぞれ腕を発射した。

あと一歩……ともいえない距離で、

二人のウルトラマンは発射された腕……その砲塔の中の手に首をつかまれた。

空中へと持ち上げられ、もがく護とヒロ。

首を掴む力はとも強く、離れそうにない。

護は赤い光の力を体に走らせ、力づくで腕を振りほどこうとするが、

その様子を見ていたジー・エンドは護の体に何度も光弾を放つ。

10発を超えると、護を包んでいた赤い光は消え、力なく体をぶら下げていた。

そこへ、止めと言わんばかりに砲塔から火球が発射され、二人は吹

き飛ばされてしまった。

カラータイマーは二人とも点滅しており、護は動く気配すらない。

「篠崎さん!!到着はまだですか!!」

心の目で、その様子を見ていた坂牧はいまだ来ない篠崎達に救援を呼ぶ。

しかし、篠崎たちからの返信はなく、

メモリーディスプレイのコンピュータ音声報告では戦闘中との報告だけがなっていた。

最悪の日2―負思念機械生命体ジー・エンド登場―

ジー・エンドが出現した直後、スクランブル要請により、

G U Y S J a p a n 基地から緊急発進した篠崎達ケツアールだったが、発進後直ぐに、謎の飛行物体に襲われていた。

二枚貝のような形状をする機械でできた未確認飛行物体は、貝でいう殻の間から2本の砲塔が顔を覗かせ、

追跡から逃れようとしているケツアールへレーザーを発射する。

ケツアールを操縦している篠崎は悪態を吐きながら、急旋回でレーザーを回避する。

早くジー・エンドの元へ向かいたい篠崎達だったが、背後から迫る未確認飛行物体をどうにかしないとならない。

G U Y S の規約である、宇宙人、宇宙船に対しての宇宙語での通信も行ったが、応答がない。

「橘隊長!!未確認飛行物体から攻撃されました!!判断を!!」

手の空いている三原が橘に判断を仰ぐと、数秒もしないうちに判断が下った。

「未確認飛行物体を攻撃対象に指定する!!メテオール解禁!!」

『G I G !!』

マニニューバモードを起動し、金色の粒子を纏うとU F O 的機動で未確認飛行物体に反転。

ウイングレットブラスターを放つと未確認飛行物体は高速で回転しレーザーを弾く。

「ウイングレットブラスターを弾きやがった!?!」

篠崎は驚くが、すぐさまスペシウム弾頭弾のロックを解除、近接信管にセットし、発射した。

放たれた4発のスペシウム弾頭弾は未確認飛行物体に命中する直前で爆発する。

「やったか!?!」

垣山が爆風の先を見ると、

そこにはまるでゼットンのようにバリアを張り一切傷を負っていない

ない未確認飛行物体の姿があった。

「スペシウム弾頭弾が効かない!？」

屋久島が他の装備を試そうとするが、近接信管に変更できるスペシウム弾頭弾以外のレーザーやビームが、

先ほどのように弾かれた場合、市街地に影響が出る恐れがあるため使用できない。

唯一効果がありそうなスペシウム弾頭弾も残り4発しかなく、スペシウム弾頭弾自体も1発ずつでは効果を期待できない。

再び未確認飛行物体の砲塔からケツアールヘレーザーが発射される。

「セパレートツ!!」

篠崎が分離の合図を出し、ケツアールがレッドスパロウとオオルリに分離する。

当然まだマニューバモードの使用時間は過ぎていない。

しかし、分離と同時に使用制限時間が残り30秒を切ってしまった。いた。

「攻撃が効かないなんて、どうすればいいのよ!!」

『落ち着け!!なんかあるはずだ!!隊長!!そっちで何か分かってることは!?!』

屋久島の口から飛び出した言葉に篠崎が喝を入れ、状況を離れたところから見ている橘に対処法を聞く。

「こっちでもいろいろ探ってはいるが、解析班でも未確認飛行物体の正体がかめていない!!」

全員、市街地へ被害を出さぬよう、未確認飛行物体を食い止めてくれ!!

応援を要請する、それまで持ちこたえてくれ!!」

『G I G I!!』

橘はさすがに分が悪いと判断し、直ぐに応援に来れるG U Y S オーシャンに応援要請を出し、

解析班にも、未確認飛行物体の解析を急がせた。

すると同時に、坂牧から通信が橘に入った。

「どうした坂牧!!」

『ま……ッ!!橘隊長!!ウルトラマン達が負思念体と戦闘中、苦戦しているんです!!』

篠崎さんたちの到着は!!』

「篠崎達は未確認飛行物体と戦闘中だ、しばらくそつちに応援は回せない!!」

市街地ではジー・エンドとウルトラマンヒーローが戦闘し苦戦中、道中の空では未確認飛行物体とケツアールが戦闘し苦戦中という最悪の事態。

橘がどうしようか考えていた時、またしても橘に通信が入った。

今度はなんだと思いつながら橘が通信に出ると、そこには隊服を着こんだセリザワが出た。

「セリザワさん!?!」

『橘隊長、ガンフェニックスで出撃し、ウルトラマンヒーローの援護に行きます。』

緊急時なので詳しい手続きは後でお願いします。』

「お願いします。」

『G I G。ガンフェニックス、バーナーオン』

セリザワの乗ったガンフェニックスが基地を飛び立ち、ウルトラマンヒーローのもとへ向かう。

セリザワはガンフェニックスを操縦しながら、冷静に事態を分析していた。

ウルトラ族は地球上ではおよそ3分間しかその力を維持できない……。

護とヒロはすでにウルトラマンに変身してから随分と時間がたっている。

どんなに急いだとしても、セリザワがどんなに急いで向かったとしても現場に到着する頃には、

その力は維持できず、人の姿に戻っているだろう。

「私が出るしかないのか……?」

セリザワは右腕についているブレスレット……ナイトブレスを見

ながらつぶやいた。

最悪の日3―負思念機械生命体ジー・エンド登場―

ジー・エンドの攻撃により、吹き飛ばされてしまった護とヒロ。互いにカラータイマーが点滅し、護は立ち上がることも出来ず、ヒロもダメージ大ききから戦うほどの力は残されてはいなかった。ジー・エンドは不規則な電子音を響かせ、護とヒロに背中を向けると、

再び両腕に砲塔を着けると、市街地への砲撃を行い始めた。

その様子を見たヒロは、よろよろと立ち上がる。

が……ヒロは攻撃をする訳ではなかった。

ヒロは倒れた護を見つめると、この状況を打開するため、ある行動に出た。

『護さん……僕のカじや恐らくあのロボットには勝てません。

でも護さんなら、きつと止められるはずです!!』

ヒロは護のカラータイマーに手を当てると、自分を青い光の粒子に変え、護のカラータイマーに吸収された。

護のカラータイマーは赤く点滅したままだが、護は息を吹き返し……起き上がる。

『ヒロ、お前……』

護は青く色のついた左手を見てそう言った。

護は立ち上がり、背中を向けているジー・エンドに向け、容赦なくレッドパワー・バーチカルギロチンを放つ。

しかし、ジー・エンドは首を180度回転させ振り返ると、両腕を護のいる方へ構え、シールドを張った。

シールドと斬撃がぶつかり合う……そこへ護は強引にシールドを破るため、レッドパワー・シユートを放った。

バーチカルギロチンが消えると同時に光線を放たれ、シールドに罅が入り始める。

勢いを変えず、赤色の光線がシールドを削り続け……。

遂にジー・エンドのシールドを破り、その体に光線が命中した。

光線が当たること数秒後、背中的一部分が爆発を起こした。

護のエネルギーも限界なのか、片膝付き、肩で息をする。
ジー・エンドはその場で静止すると、再び電子音を響かせた。

未確認飛行物体と交戦している篠崎達。

すでにメテオールの使用制限時間を超え、機体もマニューバモードからクルーズモードへ移行していた。

応援が来るまで何とか凌いでいたが、突然未確認飛行物体がその場で静止した。

「撃つな、様子がおかしい!!」

篠崎が他のクルーにそう命令を出し、様子を見る。

しばらくすると未確認飛行物体はジー・エンドのいる方角へ移動を始めた。

「橘隊長、円盤が移動を再開した!!」

『ごつちでも確認している、その方角にはジー・エンドがいる!!』

「ジー・エンド?」

『先ほど決まったレジストコードだ、円盤をジー・エンドと合流させるな』

『G I G!!』

「三原、なにか方法はあるか!」

『あるなら報告してます!!』

現状、あの円盤に通常兵器は通用しません!!

メテオールの使用制限が切れた今、私たちには手はありません。』

『とにかく被害を抑えるために追尾するしかないでしょ?』

篠崎達はG U Y Sとしての最低限の仕事をするために、未確認飛行物体を追尾していく。

ジー・エンドのいるポイントへ着いたセリザワは、

変身してから3分以上が経過したはずの護が、何故まだ姿を残しているのか疑問に思っていた。

ウルトラマンタロウもエネルギーを消費しない様に戦い、3分以上姿を残していたこともあったが、

その時と同じだろうか？

そう考えるセリザワだったが、護の左手を見て理由に気付いた。

「ヒロ……自分の生体エネルギーを護に渡したのか……？」

直後、ヒーローは粒子となって消え、元の人の姿へと変換されていった。

元に戻った護を確認すると、セリザワは静止しているジー・エンドへ攻撃を開始した。

ガンフェニックスから放たれたビームやレーザーを、ジー・エンドは防ぐこともなく受け続けた。

しかし、攻撃に効果がないわけではなく、ジー・エンドに確実にダメージを与えている。

「なぜ無抵抗にやられている……？」

セリザワがその理由を考えていると、メモリーディスプレイに篠崎から通信入る。

『セリザワさん、そっちに円盤が向かってる!!』

「そっちで交戦していたやつか……？」

目視で確認しようと篠崎達のいるほうへ注視すると、確かに円盤のようなものが向かってきているのが分かった。

『お父さん!!』

『どうした由依』

『空を飛んでいるのは負思念体です!!』

「なにッ!？」

未確認飛行物体は篠崎達の攻撃を躲しつつ、ジー・エンドに接近すると、

真ん中から二つに割れ、ジー・エンドの背中に装着された。

「合体した!？」

屋久島が驚きの声を上げるが、直ぐに3機がジー・エンドへ射撃を

開始した。

しかし、ジー・エンドは周りに展開し全弾を防ぐと、シールドを張ったまま活動を停止した。

ジー・エンドがシールドを展開し活動停止してから1時間が経過していた。

G U Y S 総本部は、シールドを破りジー・エンド本体にダメージを与えるには現状では不可能という判断を下し、

篠崎達は一度基地へ帰還し、ジー・エンドが活動再開するまでにマシンの整備を行うことになった。

「じゃあジー・エンドが夜まで動く可能性はないわけだな？」

指令室に戻ってきた篠崎達は休むことなくミーティングを行っていた。

橘の質問に答えたのは解析班からデータをもらった三原であった。

「はい、今回出現したレジストコード、ジー・エンドはダークエフェクトの力が大きく、

測定器での観測が可能でした。

そして、現在のジー・エンドの状態がこれです。」

コンソールを叩き、中央の大型スクリーンにジー・エンドの青い透過シルエツトとして映し出された。

「そして、これが約1時間前の状態です。」

もう一体、赤い透過シルエツトが現れ、重なった。

「このように、現在ジー・エンドはウルトラマンヒーローに与えられた損傷を回復中です。

その回復速度から、再び活動を再開するのは21時丁度です」

「それまでに手を打たないと……」

「その前にこの人数でどうにかできるの……?」

垣山の言葉に屋久島が言葉を漏らした。

「護は避難活動中に負傷、ヒロは行方不明……戦力が足りない……」

屋久島が現状を再確認し、頭を押える。

「足りなくてもやるしかないだろ、俺たちはG U Y S だ」

「こんな時にかっこつけてもアンタの印象は変わらないわよ?」

篠崎に対し、おどけた表情で屋久島が答えるとクルー達はジー・エ
ンドに対しての作戦会議を続行した。

全力の激闘1―負思念機械生命体ジー・エンド登場―

午後6時……夕日が窓から差し込む中、護はGUY'Sの病院のベッドで目が覚めた。

腹部に走る激痛に顔を歪ませながら、ゆっくり体を起こすと、自分の右手を握り、ベッドにうつ伏せで寝ている坂牧の姿があった。

「心配して見てくれたのか……」

護は坂牧の頭を左手で数回撫でる。

「目覚めたようだな」

と聞き覚えのある声に体を震わせ、声のする方へ視線を向けると、

セリザワ カズヤ……坂牧由依の父親が護の様子を見ていた。

「セリザワさん、これはその……」

「撫でておいてくれないか？」

セリザワの言葉に一瞬思考が停止した護

「え……いいんですか？」

「由依は君のことをずっと心配していた、それくらいやってやれ」

セリザワの言葉に護は胸を撫で下ろすと、再び坂牧の頭を撫で始めた。

「そのままでもいいから教えてくれ、ヒロは今どこにいる？」

「ヒロは……フュージョミツシヨンの中にいます」

「そうか、やはりあいつは頭が切れるな。」

俺が出るまでもないようだ」

「セリザワさん……いや、ウルトラマンヒカリ……」

俺はあいつに勝てるのでしょうか？」

「なに……？」

「俺とヒロ、二人掛かりでも敵わなかった。」

ヒロがエネルギーを分けてくれなかったら……あいつの隙を見つけなかったら……。

そう考えると、次にあいつと戦うとき……俺はあいつに勝てるのか」

「自惚れるな護」

セリザワの声に護は伏せていた顔を上げる。

「俺たちウルトラマンが、自分一人の力だけで強敵に敵うと……、戦わなければならぬと思っていないと思っているなら、それは自惚れだ。」

ヒロはそれを理解しているからこそ、お前にエネルギーを渡した」
セリザワはフュージョミツションを手に取ると、護に手渡した。

「お前の周りにはGUY'Sの仲間たちや、俺がついている……当然ヒロもな。」

それが分からないなら、ジー・エンドには勝てない」

「ジー・エンド……?」

「やつのレジストコードだ、ジー・エンドはあと3時間で活動を再開する。」

お前は仲間たちとできることをしろ、俺もウルトラマンとしてできることをする」

セリザワは右腕にナイトブレスを出現させると、青く輝く石から光を放った。

光はフュージョミツションをしばらく照らすと、フュージョミツションに光が収まった。

「俺のエネルギーをフュージョミツションにいるヒロに与えた。」

これで俺はしばらく変身して戦うことはできない。」

ナイトブレスが消えると、セリザワは坂牧の肩を叩き、優しく起こした。

「由依、私たちは基地に戻ろう」

「……もう少しだけ居させてください」

「次の出撃で護たちを守らなくてはならないんだ。」

戻って準備しないといけない」

「……はい」

坂牧は名残惜しそうに立ち上がると、フュージョミツションを持つ手を両手で包み言った。

「護さん、自信を持ってください。」

護さんとヒロさんは今まで地球を、ダークエフエクトに侵された人々の心を守ってきたんです。

技術や実力なんか関係ありません。

誰かを思いやる心を持っているお二人が力を合わせれば……。」

「ありがとう、大丈夫……今度は負けない」

護は坂牧の目を見つめ、そう言った。

坂牧はセリザワに手を引かれ、病室を後にした。

セリザワと坂牧は病室出て、病院の出入り口へ向かおうと体を方向転換させた。

しかし、周りに注意していなかったせいか、通行人の男性と肩がぶつかりそうになってしまった。

「申し訳ない、周りを見ていなかったもので……」

セリザワはぶつかりそうになった男性に頭を下げた。

「いえいえ、こちらも急いでいたもので……」

男性は頭を下げ、病院の奥の方へと歩いて行った。

セリザワは男性が見えなくなるのを確認すると、背中で隠れていた坂牧の頭を撫でた。

「由依、もう大丈夫だ」

そう言うと、坂牧は病院の奥を見つめてつぶやいた。

「可哀想な人……」

「病室の確認は出来た……。あとはその瞬間を納めるだけだな」

病院の食堂で、先ほどの男性が缶コーヒーを飲み、笑みを浮かべている。

「あと一人は一体どこにいるんだ……?」

男性は首に掛けてある十字架のネックレスを弄ると、再び笑みを浮かべた。

隣の席に置いてあるバッグの中には大きなカメラが入っていた。

同時刻、指令室に集まっていた橘、篠崎、垣山、屋久島、三原は現段階で確認できている情報から、

ジー・エンドの倒し方を模索していた。

「現地の解析班から送られてきている情報です」

三原は大型モニターにあるデータ情報を映し出した。

「ジー・エンドが今も展開しているシールドのエネルギー量ですが、元がダークエフェクトという、観測が困難なものなので予測ですけど……。」

このシールドを破るためには、ケツアールバーンティングのスペシウム光線をシールドの一点に集中させないといけません」

篠崎がその言葉に対し、普段は見せない真面目な顔で答える。

「けど、スペシウム光線を撃ったらメテオールのエネルギーが尽きる。撃つんなら、シールドなんかじゃなくてジー・エンドだ」

ケツアールバーンティングの最強の攻撃……。」

スペシウム光線は、GUY'Sマシン内のメテオールエネルギーをほとんど使う諸刃の剣である。

頭を押さえ、考えていた屋久島は思いついたことを口に出した。

「……キャプチャーキューブを使ってシールドに穴を開けられない？」

エネルギー量がわかってるなら出来そう……、と思うけど……。」

全員が屋久島の意見に驚いていた表情をしていた。

「あ、やっぱり無理だよね……う……。」

橘は屋久島が出した意見に頷き、三原に指示を飛ばした。

「いや、出来るかも知れない。三原、データをメテオール研究室へ送ってくれ」

「GIGI:」

その数分後、研究室からジー・エンド用のメテオールの開発が可能と報告が上がってきた。

「よし、これでシールドは何とかなった……、けどあの円盤はどうしま

す?」

垣山がそう言うとき……。

「あの円盤ならもう敵じゃねえ」

篠崎が真面目な顔つきから一転、不敵に笑った。

「敵じゃないってどういうことよ。現に私たちダメージを与えられてないのよ?」

屋久島がそう言うとき、篠崎は席を立ち、得意げに言った。

「あの円盤がシールドを出している時の上部と下部が丸腰だ。

レッドスパロウとオオルリ、Nブースターの3機で、

シールドを張っている円盤の上、真ん中、下を狙って攻撃する。」

「あんたそれわかって言ってる?縦横じゃなくて上下に陣形取れって言ってるの?」

「なんだよ、出来ないのか?」

「操縦するのは私じゃないわ……。愛、出来る?」

「大丈夫です。ただ、その方法と円盤のサイズを考えると、

メテオールを使っても私たち同士がクラッシュする可能性が……。」

「安心しろ、もしそっちがダメそうなら俺とセリザワさんがフォローする。」

そっちは円盤にぶつからないように操縦しろ」

篠崎は自分の胸を叩きそう言うとき、屋久島は感嘆の声を漏らした。

「頼もしいじゃない、じゃあ今回は頼んだわよ」

「あとはジー・エンド本体ね……。」

「重力偏光板は空間転移を使われる可能性があります」

その時、橘が待ったを掛けた。

「ジー・エンドは垣山がマケット怪獣で足止めを掛け、円盤を対処した後、3機で対処する」

その指示に三原が返答を求めた。

「え、でもそれじゃあレッドスパロウの火器は……。」

「私が担当する。本来なら私が足止めを担当したいが……。」

マケット怪獣の経験やメテオールショットを扱える垣山が適任だ」

G U Y S J a p a nの隊長として、G U Y Sマシンはすべて使える橘だったが、

今まで現場へ赴いたことはボガールの時だけだ。

ほかの隊員も出来るのなら……と、とりあえずは納得した。

「じゃあ、マケット怪獣はどの怪獣が……」

「ゼットンを使用する」

垣山が意見を言う前に橘が指示を出した。

「街中でゼットンを使うんですか!? パニックになりますよ!?!」

「どの道、他の怪獣だとパワー不足だ。市民には報告をしておく」

ゼットンはあのウルトラマンを倒した怪獣として市民には広く伝わっている。

そんな怪獣が、例えマケット怪獣だとしても、不安を感じるだろう。

「ジー・エンドは強敵だ、ウルトラマンだけでは敵わないかも知れない。い。

もしかしたらウルトラマンが来ないかもしれない。

よって、G U Y Sの全力で迎え撃つ。」

『G I G I!』

こうしてG U Y Sは着々とジー・エンドへの対策を固めていった。

病室で一人となった護はベッドに横になり、フュージョミッションを見つめた。

「俺とヒロ、力を合わせれば……」

フュージョミッションは返事をしたように、薄く青い輝きを放っていた。

全力の激闘2―負思念機械生命体ジー・エンド登場―

ジー・エンド起動まで残り1時間……。

指令室で出撃の時まで指令室で待機している篠崎たちに内線通信が届いた。

「セリザワさん達、あと少してGUY'Sマシンの調整が終わるそうです。」

それと、メテオール研究所からフジサワ アサミ室長がやってくるそうです」

三原が橘にそのことを伝えると、橘は再確認した。

「フジサワ室長が、ここに来ると?……いつ?」

「えつと、もうエントランスに来ているそうです」

それを聞くと橘は大きくため息を吐き、頭を抱えた。

「あー……みんなは飲まないと思うから大丈夫だと思うけど、絶対コーヒーを淹れないように」

「フジサワさんか……」

「何、お父さん知ってるの?」

資料を読んでいながらも、屋久島がため息交じりに呟いた垣山の言葉が耳にし、垣山に聞いた。

「イカルガさんにメテオールショットの訓練を受けてる時に知り合ってたね。」

僕の倍以上のお年だけど、色々すごい女性だよ。初めて会うんだったら衝撃受けると思うよ」

「衝撃的ねえ……?」

作戦の資料を読んでいた屋久島は、垣山の話の話を軽く聞き流していた。

それから五分後、指令室に繋がるドアの向こうから、軽快な音楽が聞こえてきた。

その音量は防音ではないにしても、堅牢な造りがされている指令室内に聞こえてくるほどだった。

「なにこの音楽?」

「ああ……来てしまった」

自動ドアが開かれると、派手な衣装に身を包んだ一人の女性が音楽に合わせ、

靴の音を鳴らし、フラメンコを踊りだした。

どこからか流れてくるギターやカスタネット、手拍子の音……。

それとフラメンコを踊る女性に橘と垣山以外の一同が驚く。

女性は踊りながら徐々に指令室の奥に歩み寄り、曲はラストスパートを迎える。

曲が終わると同時に最後の決めポーズが決まった。

橘は曲が終わると席を立ちあがり、拍手を送ると、全員同じように拍手を送った。

女性は一礼すると、橘のいる席へ近寄った。

「フジサワ室長……いえ、G U Y S J a p a nメテオール開発室長、お待ちしております」

「久しぶりね橘ちゃん」

橘はやってきた女性、フジサワ アサミに歓迎の言葉を言い、頭を下げた。

「え、この人がフジサワさん!?若ッ!」

事前に垣山からフジサワの年齢を聞いていた屋久島は、

想像していたものより若々しい見た目のフジサワに驚いていた。

「朱里、失礼だよ……」

三原が屋久島にそう言うが、フジサワは笑いながら三原を制した。

「言われ慣れてるしいいのよ、あなたもフラメンコしてみる?若々しくなるわよ?」

あ、しんちゃんも久しぶりー、元気してた?」

しんちゃんと呼ばれた垣山は、苦笑いの表情をしたが、元気ですと答え、フジサワに頭を下げた。

「ところでフジサワ室長、何の御用で?」

「えー……、私がこのタイミングで来たならメテオール関連に決まってるじゃない。」

ジー・エンドのバリアー用メテオールを届けに来たのよ」

そう言うと、フジサワは手を叩き、全員を注目させる。

「さて、いきなりですがここで問題です。」

私が踊っていたときの音楽、あれは一体どこから流れていたでしょうか。

はい、シンキングタイムは1分、回答は全員合わせて1回ね」

全員がまじめに考え始めた中、篠崎が特に考えず答えた。

「んなもん廊下からだろ」

「ブツブツ、残念……熱血くんはずれー。」

正解はメテオール開発室の私の部屋からでした」

「え、ここからメテオール開発室まで直線距離でも数キロ……ですけどどうやって？」

三原だけじゃなくクルー全員が驚いている中、フジサワは解説を始めた。

「実はジー・エンドに使う技術を使ったのよ。」

もちろんメテオールではなく純粋な技術だから安心してね」

フジサワは廊下に置いておいたGUY S タフブックとアタツシユケースを持ってきてコンソールを叩くと、

空中に映像が投影された。

「今回バリアーの対策として使った技術はトンネル効果を利用したワープの技術なの。」

さすがにまだまだ不安定でジー・エンドのバリアーに使うならメテオールのエネルギーが必要よ。

それとリフレクト星人から得た誘電体多層膜の応用を、キャプチャーキューブに付与して使うことで、

対ジー・エンドバリアー用メテオールが完成したの。

メテオールショット専用メテオール、名付けてイリジュージョン・コンダクター」

フジサワがアタツシユケースをあけると、

メテオールがインストールされたメモリーディスプレイが入れられていた。

「宇宙航行用に研究してたワープ技術が、戦闘で使われるなんて考え

てもいなかっただけどね」

そしてそのメモリーディスプレイをメテオールショットを使用する垣山に渡すと、

指令室に居る人数を数え始めた。

「あれ？1、2、3……人、少なくない？」

「今、セリザワさんとその娘の坂牧さんは格納庫で最終調整を……」

あとの二人は……」

指令室にフジサワがやってきていた頃、格納庫で調整作業をしていたセリザワと坂牧。

しかし、作業に集中しているからか、口数は少ない。

そんな時、坂牧は作業をしている手を止め、セリザワに話しかけた。

「お父さん、どうしてウルトラマンヒーローがピンチの時、

ほかのウルトラマンは助けにきてくれないんですか？

たとえば、ウルトラマンヒカリが助けに来てくれればあんなに傷付くことだって……」

坂牧はジー・エンドとの戦いで傷付いた護の姿を見たからか、自身の父親であるセリザワに……。

ウルトラマンヒカリにその訳を聞いた。

その言葉はセリザワがウルトラマンヒカリだと知っている人が居たら、間違いなく嫌味に聞こえるだろう。

しかし、言われた本人のヒカリは優しげな顔を坂牧に向け、こう言った。

「……由依はどうしてだと思っ？」

ウルトラマンがピンチの時、それも今にも倒れてしまいそうな時、なぜほかのウルトラマンが来ないのか」

しばらくの沈黙の後、坂牧は答えた。

「わからないです……」

「それじゃあヒントをあげよう。」

ウルトラマンヒーローが強い怪獣や宇宙人と戦ったとして、由依はどっちが勝つと思う?」

「それはもちろんまも……ウルトラマンヒーローです」

「ならもう答えを由依は知っている、人々がウルトラマンヒーローの勝利を信じるように、

他のウルトラマンも勝利を信じているんだ。

どんな強敵と戦って、傷付いても……立ちあがって地球を守る、ヒーローの勝利を」

セリザワの心を見つめる坂牧は、その言葉が心の底から言っているものだと分かり、小さく頷いた。

「よし、調整は終わった。

後は作戦がうまく行くように頑張ろう」

「はい、お父さん」

ジー・エンド起動まで残り30分。

病院にいたはずの護は、またもや病室を抜け出し、

傷付いた体を引きづり、G U Y Sの特別病院へと足を運んでいた。

ウルトラマンとしての心が体を動かしたのか、G U Y Sとしての思いが動かしたのか。

なぜ、病院にやってきたのか、その理由を護自身気付かずにした。

そこには、ダークエフエクトの影響で寝たきりとなった約30人の生徒たちが運ばれ、

その親族も病室の前で自分の子の身を案じていた。

護は病室を通り過ぎる度に、苦しい表情を強めていった。

ある病室を通り過ぎようとした時、突然男性が護の肩を掴みかかり、怒りの表情でどなり声をあげた。

「おい!!あんたG U Y Sなんだろうッ!」

どうにかしてくれよ!!うちの息子が何やったってんだ……ッ!!」

その怒鳴り声に周りの親族も護の存在に気付き、近寄り、怒声を浴

びせた。

その怒声は、GUY S 隊員でもあり、ウルトラマンでもある護の胸に……心に、深く刺さって行った。

護は涙を堪え、何かを言われる度に、謝罪を返すしかできずにいた。その時、怒声の中を一人の声が響いた。

どんな言葉を言ったか、護は聞き取れなかったが、全員がその声のした方へ顔を向けた。

そこには祐少年が居た。

「でも、その人が助けてくれたんだ。

だからその人を、悪く言わないでください……!!お願いします!!」

祐少年は深く頭を下げた、下げた頭の下には涙が零れ落ちていた。

護は祐少年に駆け寄り、顔を近付けた。

「祐君、悲しい思いをさせてごめん……。」

必ずクラスのみんなと、因幡君も、君も……笑顔にして見せる」

護は祐少年の頭を撫でると、振り返った。

「大丈夫です!!皆さんのお子さんは、必ず助けます!!」

そう言い、親族たちの間を駆けて行った。

ジー・エンド起動まで……あと10分。

全力の激闘3―負思念機械生命体ジー・エンド登場―

ジー・エンド起動まで約3分。

未だにジー・エンドはバリアーを張り続け、微動だにしない。

垣山はクラウンヘロンFというバイクに乗り、所定の位置についていた。

クラウンヘロンFは以前イカルガ ジョージが使っていたGUY Sの特殊バイクである。

メテオールを搭載はしていないが、最高速度600キロの速度で走ることもでき、

スプリングなどに特殊加工がされており、30メートル程の跳躍も可能になっている。

跳躍する際の姿を見た開発者がまるでカグーのようだと言ったため、

クラウンヘロンという名前がつけられた。

「橘隊長、こちら垣山、ポイントに到着しました。

作業員も作業が終了、セーフティエリアに避難完了です」

垣山がメモリーディスプレイで橘に連絡を取ると、垣山がいるポイントから少し離れた上空に、

レッドスパロウ、オオルリ、Nブースターが静止した。

『よし、作戦開始まで待機』

「G I G !!」

ジー・エンド起動まで2分。

ジー・エンドが見える場所まで、護も来ていた。

先頭に巻き込まれないように、すでに町中から人はいなかった。

「ヒロ、そろそろだぞ」

右手にはフュージョミッションβを握りしめている。

護の問いかけに答えるようにフュージョミッションは青く一瞬輝いた。

『はい、ジー・エンドを倒して子供たちを……!!』

「そうだな、子供たちを助けないと……」

護はまだ遠くにいるジー・エンドを見つめると、再び駈け出した。その数10メートル後ろから、一人の男性が護の後を着けていた。「全く、最初から目星つけててもあの足の速さじゃ無意味じゃねえか」男の手には望遠レンズを取り付けたカメラが握られていた。人間離れた速さで走る護を必死に追いかける。そしてその時は訪れた……。

—— ジー・エンド起動 ——

ジー・エンドは起動すると同時にシールドを解除し、顔のレンズ体から光弾、腕の砲塔から火球をセーフティエリアに建てられたGUY'Sの拠点へ放ち始めた。

「作戦開始ッ!!」

『G I G!!』

『防御シャッター起動します!!』

ジー・エンドの放った攻撃が拠点のテントに当たる瞬間、テントを包むように青いフィールドが現れ、

ジー・エンドの攻撃を完璧に遮断した。

『シンクロンTeV起動!!』

ジー・エンドを囲むように設置された無数の回転式砲塔が起動し、攻撃を開始した。

過去に使われたシンクロン砲の改良型である

ジー・エンドは両腕を構え、再びシールドを展開することで砲撃を防いでいる。

「全機、発進!!」

ジー・エンドがシールドを展開すると同時にケツァールバーンティング、

そして垣山の乗ったクラウンヘロンFがジー・エンドへ接近する。GUY Sマシンが接近すると、ジー・エンドは一瞬だけシールドを解くと、

合体している背部の羽を切り離し、ケツアールバーンティングの迎撃へと向かわせた。

羽は二枚貝のような形に変形、そして砲塔からレーザーを発射した。

「よっしゃッ!!行くぜ、ケツアールバーンティング……セパレート!!」
篠崎が分離用レバーを操作し、ケツアールバーンティングは3機に分離した。

3機それぞれが高度な空中戦闘軌道を取り、バラバラに散る。

当然、レーザーはかわされ、空を切っていった

ジー・エンドが何かを察したのか、シールドを解き、

周りの砲台を腰部を回転させながら放つ光弾で一掃し円盤の援護へ向かう。

「そうはさせない……橘隊長!!」

『よし、メテオール解禁!!』

「G I G!!頼むぞゼットン!!」

垣山はメモリーディスプレイにマケット怪獣ゼットンのマケットカプセルを装着。

メモリーディスプレイのトリガーを引いた。

『Realize《リアライズ》』

その音声と同時にジー・エンドの目の前にマケット怪獣ゼットンが召喚された。

「頼むぞ、ゼットン!!攻撃だ!!」

ゼットンは特徴的な鳴き声を上げると、すさまじい速度でジー・エンドへ向かう。

ゼットンに応戦するジー・エンドだったが、攻撃の速度でゼットンが勝っており、

防戦を強いられていた。

「今です、みんな!!」

「フォーメーション・ヤマトだ!!」

篠崎がそういうと、円盤から回避機動を取っていた3機のGUY Sマシンが、上下に編隊を組んだ。

「3・2・1……全機メテオール解禁!!」

『マニューバモード、オン!!』

金色の粒子を纏い、マニューバモードに変形した3機、

編隊の上であるレッドスパロウと下のNブースターが加速、中段にいるオオルリも円盤めがけ加速した。

「うおおおおお!! スペシウム弾頭弾、ファイアーツ!!」

3機からスペシウム弾頭弾が放たれ、

円盤はバリアーをレッドスパロウとNブースターのいる上部と下部へ張った。

2機のスペシウム弾頭弾は防がれる……しかし、オオルリの放ったスペシウム弾頭弾は直撃。

すさまじい爆音と共に、円盤はその場で爆発する。

「セリザワさん!!」

「篠崎!!」

そして、円盤へ向かって多方向から加速している3機はそれぞれの機体に衝突しないよう、

機体を限界まで反らす。

円盤が爆発した爆風の中から、3機がほぼぎりぎりを掠めて飛び出した。

「よし、やった!! あとはジー・エンドだけだ!!」

『お父さん!! 準備してくれ!! スペシウム光線を撃つ!!』

「G I G !!」

垣山はメテオールショットをゼットンと交戦しているジー・エンドへと向けた。

「ドッキングするぞ!!」

3機のGUY Sマシンはマニューバモードのままドッキングし、再びケツアールバウンディングとなった。

「ゼットン、横に避ける!!」

垣山の指示を聞き、ゼットンには横へ転がり、ケツアールバーンティングの射線を開けた。

『バニッシュ』

丁度、ゼットンを召喚してから1分が経過したため、ゼットンは霧散した。

ジー・エンドの前方には、

すでにスペシウム光線の発射準備が完了しているケツアールバーンティングがいた。

『スペシウム光線!!』

ケツアールバーンティングの上部に設置されたβリダブライザーからスペシウム光線が発射される。

そして、作戦通りにジー・エンドがシールドを展開させた。

「イリユージョン・コンダクター!!」

垣山はシールドへ目掛け、対ジー・エンド専用メテオール、イリユージョン・コンダクターを放った。

三つの金色の光線がシールドに当たると、その部分から大きな穴がシールドに空いた。

そして、篠崎たちの作戦通りスペシウム光線がジー・エンドを直撃……。

するはずだった……。

ジー・エンドはすぐさまシールドを解除すると両腕を分離、その強固な両腕を重ね、盾にしたのだ。

両腕が壊される一瞬の隙に、その場から移動しスペシウム光線を回避してしまっただのだ。

「避けられた……!?!」

そして肘の部分からゼットンの腕と形状のよく似た腕を形成した。スペシウム光線を使ってしまったため、ケツアールバウンディングは強制的にマニューバモードが解除されてしまった。

「くそっ!!最後の最後で!!」

「みんな諦めるな!!最後まで戦うぞ!!」

全武装をオープンし、ジー・エンドへ攻撃するが、両腕に防がれ、大したダメージを負わせられない。

顔のレンズ体から再び光弾が放たれ、回避行動をとっているケツアールバウンディングが被弾する。

「このままじゃ……!!」

そんな危機的状况で、坂牧は言った。

「来ました……ヒーローが!!」

篠崎たちが辺りを見渡すと、そこには赤いウルトラマンヒーロー

……日野 護が立っていた。

『ハア……!!サーーーッ!!』

護はジー・エンドへ構えると、駆け出した。

ジー・エンドが再び光弾を護へ放つが、護は光弾を右手を前に突き出し防ぎ、

青い左手を右手とスラッシュさせ、

レッドパワー・スラッシュを逆にジー・エンドの顔のレンズ体に当てた。

そして、ジー・エンドに肉薄すると両拳を握り、右腕を腰に、左腕を左に伸ばし青い粒子に包まれた。

『ティアッ!!』

そして青い粒子の中から青いウルトラマンヒーロー、朝日 ヒロが現れた。

ヒロはモードチェンジした粒子を集め、左手にエフェクト・スラッガーを作るとそのままの勢いで、

ジー・エンドを切った。

しかし、ジー・エンドはやはり固く、傷はついたが大きなダメージ

はない。

ヒロはエフェクト・スラッガーを粒子に戻し、そのままエフェクト・スラッシュとして傷へ撃ち出した。

流石に傷が付いている部分への攻撃にジー・エンドは怯む。

ヒロはジー・エンドがひるんだ隙に両拳作り、左腕を腰に、右腕を左に伸ばし、

赤い粒子を右隣りに出した。

そこには護が現れる。

二人のウルトラマンはそれぞれ右拳、左拳を合わせた。

『ヒーローーっ!!』

赤と青の粒子が合わさり、ウルトラマンヒーロー・ライトニングヒーローが現れた。

『ティ……サーーっ!!』

ヒーローは粒子を溜めると、そのまま光線を放つ。

『ライトニング・ロード!!』

シールドで防ごうとするジー・エンドだったが、

光線はシールドを貫通し、ジー・エンドを空中で拘束した。

そのままヒーローはライトニングロードの光線を引っ張り……。

『ライトニング・フィニッシューっ!!』

光となり、ジー・エンドを貫通した。

『ゼ……トン……』

最後にジー・エンドは断末魔を上げ、爆散した。

超空洞の宇宙人―負思念体ベムスター・超空洞人ヴオイド人登場―

ジー・エンドが爆発し、その身体は黒い霧……ダークエフェクトとしてその場に残った。

『よし、吸収を!!』

護とヒロはいつもと同じように、腕を胸の前で交差させ、ダークエフェクトを吸収しようとしたが、

突如、空に描かれた光の文字を見て、行動を止めてしまう。

『あれは……ジャック兄さん達のウルトラサイン!』

「各員警戒しろ!!」

護たちと同じように、空に描かれた光の文字、ウルトラサインを見たセリザワは、無線を使い篠崎たちに警戒を促す。

『どうしたんですかセリザワさん!!』

警戒を促された意味を篠崎はセリザワに聞いた。

「……奴が来る」

その瞬間、機体にアラートオンが響き渡ると、上空から黒い光弾がいくつも降り注いだ。

「回避運動!!」

篠崎は何とか上空から迫りくる光弾を回避しようと、機体を操作するが、

夜の暗さと、その数、光弾の速度から完全に回避するのは難しく、光弾は機体の後部を掠ってしまう。

『ティ……サッ!!』

ヒーローは即座に赤と青の粒子の渦を作り出すと、ケツアールバーンティングの上部に投げ飛ばした。

粒子の渦に光弾が当たり、ケツアールバーンティングに光弾が直撃することはなかった。

それを確認すると、ヒーローは生身で光弾から逃げている垣山に覆いかぶさり、光弾から身を守った。

光弾が収まるころには、辺りの建物が壊れる大きな被害を出していた。

幸運だったのは、ジー・エンドとの戦闘を考え、周辺の住民を避難させていたことにより、人的被害がないことだろう。

しかし、ケツアールバーンティングを守っていた粒子の渦は消失。ヒーローも、カラータイマーは既に赤く点滅を始めていた。

何とかヒーローは光弾が降ってきた方角へ視線を送ると、不自然にも雲が集まり……。

——その中心から、何かが降ってきた。——

黒い鎧、肩に赤く針状の突起、ウルトラマンと同じ大きさの人型……。

エンペラー星人に酷似したその姿は……。

「ヴォイド人……!!」

セリザワは前にG.U.Y.S.総本部に送られてきた映像に映っていたヴォイド人を見つめ、そう言った。

『人類よ、今まで私の挑戦を耐えたことを賞賛し、直接挨拶に来た。』

私はヴォイド人、この宇宙に存在する超空洞の支配者だ』

『ヴォイド人……っ!!』

ヒーローはよろよろと立ち上がり、ヴォイド人へ構えると、ヴォイド人もヒーローの方に顔を向けた。

『ほう……その程度の強さでそれほどの光を抱え込むか。』

だが、所詮は人間とウルトラマンがただ不完全に融合しただけの姿』

ヒーローはヴォイド人へライトニング・ロードを放ち、

そのまま右拳を腰に引くと、ライトニング・フィンツシュを放つため、光となつてヴォイド人へ迫った。

しかし、本来であればヴォイド人を貫通し、対象の後方に現れるはずのヒーローは、

ヴォイド人の手で押さえられ、元の身体に戻っていた。

『光は闇を強くするように、光と闇は表裏一体だ。』

私を今までの怪獣たちと同じように光で倒すのは不可能だ。

光と闇、同じ力である以上……いや、貴様の光は私と対等の強さではないな』

ヴォイド人はそのままヒーローを投げ飛ばすと、

自身を貫いているライトニング・ロードを指で弾き、叩き割った。

『安心しろ、私は何も地球を壊しに来たわけではない』

そう言うと、ヴォイド人は未だ漂っているジー・エンドのダークエフェクトを、掌をかざし、吸収した。

『はー……負をこの身に感じるぞ……ふふ、挨拶はついでだ、ご苦労だったな。』

さあ？その状態で貴様らはどう戦うか、見させてもらおうぞ』

ヴォイド人の両目が赤く光ると、その横に黒い霧が集まり、ある形を形成した。

五角形のような正面からの姿、頭の角、鋭い嘴、腹部にある独特の模様。

宇宙大怪獣ベムスターの負思念体である。

『さあ、この負をどう乗り越える？』

その言葉だけを残し、ヴォイド人はまるで最初からそこに居なかったように透け、消えてしまった。

『拙い、ヒーローは既に限界だ!!援護するぞ!!』

『G I G I!!』

『G I G I!!』

セリザワの指示に篠崎達、そして垣山が了解する。

しかし……。

『エンジンに異常、推力低下!!機体が安定しない!!』

三原がコンソールパネルを操作し、どうにか機体を安定させようとするが、

ケツアールバーンティングの後部から煙が吹き始めていた。

『エンジンの緊急排出!!』

「……だめです!!装置が起動しません!!」

ケツアールバーンティングのエンジン部は先ほどの光弾によって溶けてしまい、

緊急排出装置もエンジンと溶け、固まってしまい作動しなくなっていた。

「セパレートを!!」

『駄目よ、エンジンが逝ってるのにセパレートしたら墜落しちゃう!!』篠崎がセパレートしようとするが、屋久島がそれを制止する。

ケツアールバーンティングは飛行が不安定であり、戦闘ができない。

護やヒロ、ウルトラマンヒーローは戦う力が残されておらず、また時間制限間近。

ウルトラマンヒカリであるセリザワも、ヒロに渡したエネルギーが戻っておらず、変身ができない。

垣山1人の攻撃威力では、逆に垣山自身を危険にさらしてしまう可能性が高まってしまう。

つまり、現状で戦力といえるものはGUY Sには存在していなかった。

ベムスターの頭部の角があやしく輝き、光線を篠崎たちへ放った。

光線は幸い直撃しなかったが、飛行状態が不安定な機体に攻撃が当たったことで、

バランスを崩してしまう。

機体はよろよろと傾きながら、大きな道路へ滑るように胴体着陸していった。

護とヒロは、それを見ることしかできず、機体へ手を伸ばすが、身体を起こすこともできず、

ついにベムスターはヒーローへ光線を放った。

光線はヒーローの身体へ当たり、爆発……したように見えた。

衝撃による煙が立ち込めている中、煙の中に輝く赤い輝きが見え隠れしている。

煙が晴れるにつれ、それが赤い光のシールドの様なものと見える。

不時着したのち、機体から脱出した篠崎たちは、そのシールドの奥に立つ、それを見た。

「おい、あれは……」

「まさか……」

「メビウス……!!」

地球を救った若き英雄……ウルトラマンメビウスがそこには居た。

超空洞の宇宙人―負思念体ベムスター・超空洞人ヴオ
イド人登場―

ヒーローの前に現れたウルトラマンメビウスは、メビウスデイフェンサークルと言われるエネルギーのシールドを解くと、

ヒーローに視線を向け頷いた。

メビウスはベムスターへ向き、構えなおす。

ベムスターはメビウスが現れたからか、

それとも自身の光線を防がれたからか、両腕を荒々しく振り回す。

再びベムスターの角が発光すると、メビウスが高く跳躍する。

ベムスターはメビウスを狙うが、メビウスの動きに着いては行けず、

スワローキックを頭部へ受け、うつ伏せに倒れてしまう。

ベムスターの背後に着地したメビウスは倒れたベムスターへ振り返る。

「危ないっ！」

三原愛がベムスターの僅かな動きを察知するが、メビウスは気が付かず、

倒れたままのベムスターがメビウスへ飛行し、体当たりを直撃されてしまう。

今度は逆にメビウスが地面に倒れてしまう。

ベムスターはメビウスの周囲を飛び回り、角から先程の威力は無いものの、

広範囲に電撃を放ち始めた。

電撃は垣山真司をその身で守るヒーロー、

そして道路へ不時着していた篠崎達、ケツアールバーンディングを襲う。

ヒーローは右手で電撃を防ぎ、垣山を守るが、今のヒーローには篠崎達を守る余力は無かった。

しかし、電撃が機体に当たる瞬間、まるで壁になる様に、光刃が機

体を守った。

ヒーローが光刃が来た方を見ると、膝立ちのメビウスがメビウムスラッシュを放ち、

ケツアールを守ったのだった。

メビウスはそのままメビウムスラッシュを、上空を旋回してるベムスターへ放つ。

光刃はカーブしながらベムスターの翼へ2発当たり、地面へバランスを崩しながら着地する。

その隙を狙い、ベムスターへ光線、メビウムシユートを放った。

光線はベムスターへ命中する、はずであったが……。

『防がれた……!?!』

ベムスターは腹部にある口を開け、光線を吸収していた。

『ベムスターは腹部の口から光線を吸収してしまうんです！』

正面からの光線での攻撃は……!』

護にヒロはベムスターのことを話すが、話している途中であることに気付く。

『そのことをメビウスさんも知っているはずなのに……』

そう、ウルトラマンメビウスは過去にベムスターと戦い、その性質、能力を知っている。

いくらベムスターに隙あったとしても、光線技は慎重に放つべきである。

『ハッ……』

しかし、メビウスは正面から光線の利かないベムスターにもう一度、

メビウムシユートの放つため、エネルギーを溜め始めた。

ベムスターは再び腹部の口を開け、メビウスの光線を待った。

しかし、急にベムスターの背後が数度、爆発する。

背中を見せたベムスターへ、ヒーローがエフェクト・スラッシュを……。

垣山がメテオールショットをベムスターへ撃つたのだ。

ベムスターは腹部の口を閉じ、ヒーローへ向きつつ電撃を放つ。

防御のために、右手を前に出すヒーローだったが、先程のエフエクト・スラッシュで力を使い切ったのか、光の粒子となくなってしまおう。

その結果、背後のビルの上部が電撃で碎け散る。

そして、何かに気付いたのか再びメビウスへと振り返るベムスターだったが、

既にゼロ距離にまで接近していたメビウスは、ライトニングカウンター・ゼロと呼ばれる、

エネルギーを纏った拳を腹部へ叩きつけたのだった。

遅れてベムスターの腹部の口が開き……ベムスターは爆発したのだった。

ベムスターの腹部の口はウルトラマンの必殺技である光線を吸収してしまう。

メビウスもそのことは当然忘れてはいなかった。

メビウスが光線を放ったのは、ベムスターの隙衝いた瞬間を狙うためではなく、

光線技を敢えて見せ、ヒーロー達から意識を自身に向けるためだった。

爆発した後、黒い粒子が空へ登っていくのを見届けると、メビウスもその姿を消した。

ベムスターが爆発した場所から少し離れた場所に、護とヒロの二人は疲弊した状態で現れた。

当然、メビウスがベムスターを倒す瞬間を二人はその目で見ていた。

「……やったな」

「はい、へとへとですけどね」

二人は辛勝であつとしても、勝ったことを喜び、互いの拳を合わせた。

「お二人とも、助かりました」

そこへ、後ろから二人へ声が掛かる。

二人が振り向くと、そこにはGUY Sの隊服を着た男性……。

「メビウスさん……!」

「ミライさん!」

ウルトラマンメビウスの人としての姿である、ヒビノミライが立っていた。

「ミライさん、こちらこそ、助かりました!」

「でも、なんで地球に?」

ヒロがミライに地球に来た意味を聞く。

「それは……。落ち着いて聞いて下さい」

ミライは神妙な顔つきで二人へ言った。

「ヴォイド星人が軍勢を率いて、光の国へ侵攻を開始しました」

「あいつが!?でもさつきまで……!」

「落ち着いて下さい、侵攻を開始したとは言え、光の国に辿り着くまでにはまだ時間があります」

「……どのくらい時間が」

「こっちの時間で約1ヶ月、時間はあまりありません、護さんは僕と一緒に……」

ミライが言葉の続きを言う瞬間、護たちの通信機に通信が入った。

——垣山真司、意識不明の重体——

K76星……、その星の一番高い山の頂上にて、ウルトラマンキングは待っていた。

強い嵐の風が、キングのマントを揺らす中、

目の前で球状のシールドに封じ込めている何かの黒い破片を見つめながら。

「彼らならば、この力を……でなければ……」

静かに脈動する破片……アーマードダークネス、これはその破片で

ある。

キングは未来をその目で見ていた、最悪の未来を。